

荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

歴史時代後半期の調査

《本文・図版編》

1 9 9 7

群 馬 県 教 育 委 員 会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

文化財
団保管
資
No. 97-2685 平成 9 年 12 月 17 日

01-353
628
1(5)

荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ

昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

歴史時代後半期の調査

《本文・図版編》

1 9 9 7

群馬県教育委員会
財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団



1区9号住居出土紡繰車 (S 143)



2区99号住居出土紡繰車 (S 186)



1区15号住居出土紡繰車 (S 150)



同上

瓦紙上ノ坊遺跡では、土製紡繰車1点、石製紡繰車6点が出土した。このうち、3点の紡繰車に刻書がみられた。これらを出土した住居はいずれも9世紀後半である。



同上

序

前橋市の旧荒砥村地区で行われた県営荒砥北部圃場整備事業は、広大な面積が圃場整備の対象となり、併せて数多くの埋蔵文化財の発掘調査も行われました。昭和57年度に当事業団が調査した、二之宮・荒子地区に所在する荒砥上ノ坊遺跡もその一つですが、本遺跡は縄文時代から中世にかけての複合遺跡で調査面積は、42,000㎡に及びました。また、本遺跡から出土した遺構・遺物は膨大な量でした。

諸般の事情で調査報告書の刊行が遅れていましたが、関係者の努力により、平成6年度より4年計画で本遺跡の整理業務を始め、既に、2冊の調査報告書を刊行いたしました。この度、本遺跡の9世紀後半から11世紀を中心とした、遺構・遺物の整理が終了しましたので、ここに、本遺跡の3冊目の調査報告書である「荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ」を上梓したく存じます。

発掘調査から調査報告書刊行に至るまで、群馬県農政部土地改良課、前橋土地改良事務所、群馬県教育委員会文化財保護課、前橋市教育委員会、地元関係者には、種々ご指導、ご協力を賜りました。これら関係者の皆様に衷心より感謝の意を表し、併せて本報告書が群馬県の歴史を解明するために大いに活用されることを願い序とします。

平成9年3月25日

財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団

理事長

小寺弘之

例 言

1. 本書は、昭和57年度県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書の3集「荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ」である。荒砥上ノ坊遺跡は荒砥北部圃場整備事業区域内の遺跡群のひとつで、昭和57年度に発掘調査された、縄文時代から中世の複合遺跡である。報告書は、時期別に全4分冊で構成した。本書第Ⅲ分冊では、歴史時代後半期(概ね平安時代中期から後期)の遺構・遺物を報告する。既に縄文時代から古墳時代の遺構・遺物については第Ⅰ分冊、歴史時代前半期の遺構・遺物については第Ⅱ分冊で報告した。今後は、第Ⅳ分冊で中世以降と時期不明の遺構・遺物を順次報告する予定である。

なお、遺跡内に存在した「女堀」についても調査を実施したが、他の各調査地点とともに昭和59年3月に刊行された「県営圃場整備事業荒砥南部・北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書女堀」で既に報告している。

2. 荒砥上ノ坊遺跡は、群馬県前橋市二之宮町406・408・409番地他、荒子町750・758・1080番地他に所在する。遺跡名は、遺跡のある地域の旧村名である「荒砥(あらと)」に、発掘区内で最も広い小字である「上ノ坊(かみのぼう)」を付した。発掘調査当時は、「うえのぼう」と呼称していたが、その後の調査で「かみのぼう」であることが判明したので、報告書刊行を契機に訂正した。
3. 発掘調査は、群馬県農政部・前橋土地改良事務所・群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。発掘調査の期間・体制は次の通りである。

期 間 昭和57年7月1日～昭和58年1月25日

事務担当 小林起久治、白石保三郎、松本浩一、細野雅男、近藤平志、国定 均、笠原秀樹、山本朋子、吉田有光、柳岡良宏 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)
野島のお江、吉田恵子、吉田笑子、並木綾子、今井もと子 (同 補助員)

調査担当 鹿田雄三、小島敦子、斎藤利昭 (同 調査研究員)

4. 発掘資料の整理および報告書の作成は、群馬県教育委員会の委託により、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理・報告書作成の期間・体制は次の通りである。

期 間 平成8年4月1日～平成9年3月31日

事 務 菅野 清、原田恒弘、蜂須 実、神保侑史、小淵 淳、佐藤明人、国定 均、笠原英樹、須田朋子、吉田有光、柳岡良宏、宮崎忠司 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団職員)
大沢友治 (同 嘱託)、吉田恵子、松井美智代、内山圭子、星野美智子、羽鳥京子、菅原淑子、若田 誠、山口陽子 (同 補助員)

編 集 小島敦子 (同 専門員)

本文執筆 小島敦子

遺構写真 鹿田雄三 (現 県立伊勢崎東高校教諭)、小島敦子、斎藤利昭 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団専門員)

遺物写真 佐藤元彦 (同 主任技師)

遺物観察 小島敦子

金属器保存処理 関邦一(同 主任技師)、土橋まり子(同 非常勤嘱託)、小材浩一、萩原妙子(同 整理補助員)

遺物および図面整理 下境マサ江、高橋優子、高梨房江、長岡美和子、羽島望東子、田子弘子、高橋柱子、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団整理補助員)

出土鉄分析研究委託 (財)岩手県文化振興事業団

5. 出土鉄器および鉄生産関連遺物については、赤沼英男氏(岩手県立博物館)に玉篋を賜った。また、石材同定については、飯島静雄氏(群馬県地質研究会会員)の手を煩わせた。
6. 発掘調査および本書の作成にあたり、下記の諸氏よりご助言、ご協力を得た。記して感謝の意を表したい。(敬称略・五十音順)

赤沼英男 田口一郎 前原 豊 増田 修

7. 出土遺物は一括して群馬県埋蔵文化財センターおよび(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が保管している。

凡 例

1. 本調査の記録に用いたグリッドは5m四方で、北西交点をその呼称としている。調査当時、グリッド杭は各調査区の圃場整備工用線の杭を基準に打っており、調査区ごとの関係は不明であった。そこで整理時に、国家座標値を調査し、各調査区の絶対的位置を確認した。工用杭を基準にしたグリッドの南北ラインは、1~10区が西へ1°4'16"、11区が西へ4'偏っている。なお、座標は第IV系にある。
2. 本書における遺構番号は、調査時に付されたものをそのまま使用している。このため欠番が生じている。
3. 遺構図中の北方位は座標北を示す。
4. 遺構図で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。部分的に異なる場合があるが、その際はその旨凡例を示した。

地山  浅間C軽石  浅間Bテフラ  焼土・灰 

6. 本書で使用した遺物の番号は、種類毎の通し番号であり、種類の略号は以下の通りである。平面図に付した番号は、遺物実測図に付した番号に対応している。

土器(略号無し) 石器 S 金属器 M

7. 遺構図・遺物図の縮尺は、原則として以下の通りである。縮尺の異なるものが併載される場合は、それぞれにスケールを付した。

遺構図 1:80

遺物図 1:4(鉄器および小形遺物に1:2、大形遺物に1:8のものがある。)

8. 遺物実測図中で使用したスクリーントーンは以下のとおりである。

土器 黒色処理  灰軸陶器  緑軸陶器  ス付着部分 
石器 磨り面 

9. 遺物写真図版の倍率は、土器・木器は原則として1/4、大型品は1/6に近づけるようにした。石器は、原則として標は1/4、剥片石器は1/2、石鏃などの小型のものは1/1に近づけるようにした。また、部分的に特徴のある遺物については、近接写真を撮影した。

10. 本文は以下のような点に留意して記述した。

1) 「第1章 調査の経過と遺跡の概要」は、すでに「荒砥上ノ坊遺跡1」で述べているが、本書でも略述した。

2) 各遺構の記述にあたっては下記に留意した。

住居 位置は、その遺構が含まれるグリッドをすべて記載した。重複は、重複する遺構とその新旧関係を述べた。形状は、方形・長方形・隅丸方形・隅丸長方形にほぼ分類して記載した。規模は、遺構確認面での上場で計測した。なお、竈付住居では竈の部分を含んでいない。面積は、床の面積と考え、住居の下場でプランメーターの3回平均値を計測した。方位は、北方向に最も近い壁の方向を計測した。床面は、傾斜や凹凸の有無、硬化面の残存状況を記述した。埋没土は、埋没土の全体的傾向や特徴的な埋没土について記述した。炉・竈は、それぞれの位置と規模を記載し、遺存状態を述べた。周溝・柱穴・貯蔵穴等の住居施設については、検出された位置・規模・遺存状態を記述した。遺物は、住居全体の遺物の出土状態と、特徴的な遺物について記述した。備考では、各住居の調査から考えられることがらがあれば記述した。時期は出土遺物・重複関係等から、遺構の時期を記載した。

土坑 住居に準じる。

目 次

口 絵
序
例 言
凡 例

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1. 調査に至る経過…………… 1
2. 遺跡周辺の地形と遺跡分布…………… 3
3. 発掘調査の方法と経過…………… 8

第2章 歴史時代前半期の遺構と遺物

(第II分冊補遺) ……10

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物

1. 概 要……………12
2. 1・2区の遺構……………15
3. 5区の遺構 ……111
4. 6区の遺構 ……116
5. 7区の遺構 ……124
6. 8区の遺構 ……128
7. 9区の遺構 ……141
8. 11区の遺構 ……146

第4章 調査の成果と課題

1. 調査の成果 ……150
2. 住居出土土器の変遷 ……150
3. 居住域の変遷と集落の動向 ……156
4. 群馬県における集落出土の馬具 ……158

荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の

金属学的解析(2) 赤沼英男……165

写真図版

報告書抄録

既 刊

荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ 縄文時代～古墳時代の調査

荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ 歴史時代前半期の調査

続 刊

荒砥上ノ坊遺跡Ⅳ 中世・その他の調査

挿 図 目 次

第 1 図 群馬県中央部の地勢と遺跡の位置 …………… 1	第 40 図 1 区45号住居と出土遺物 ……………45
第 2 図 岡場整備地域(上)と昭和57年度調査区 …… 2	第 41 図 1 区46号住居と出土遺物 ……………46
第 3 図 群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡 …… 3	第 42 図 1 区53号住居と出土遺物 ……………47
第 4 図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の地形 …………… 4	第 43 図 1 区54号住居と出土遺物 ……………48
第 5 図 荒砥地域の歴史時代の遺跡分布 …………… 6	第 44 図 1 区56号住居と出土遺物 ……………49
第 6 図 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区 …………… 9	第 45 図 1 区59号住居 ……………50
第 7 図 2 区10号住居と出土遺物 ……………10	第 46 図 1 区59号住居出土遺物 ……………51
第 8 図 2 区28号住居と出土遺物 ……………11	第 47 図 1 区62号住居と出土遺物 ……………52
第 9 図 歴史時代後半期の遺構分布 ……………13	第 48 図 1 区67号住居・73号住居 ……………53
第 10 図 1 区3号住居 ……………15	第 49 図 1 区67号住居出土遺物 ……………54
第 11 図 1 区3号住居出土遺物 ……………16	第 50 図 1 区73号住居出土遺物 ……………54
第 12 図 1 区4号住居 ……………17	第 51 図 1 区74号住居と出土遺物 ……………55
第 13 図 1 区4号住居出土遺物 ……………18	第 52 図 1 区5号土坑と出土遺物 ……………56
第 14 図 1 区5号住居と出土遺物 ……………19	第 53 図 1 区39号土坑と出土遺物 ……………56
第 15 図 1 区9号住居 ……………21	第 54 図 1 区10号土坑と出土遺物 ……………57
第 16 図 1 区9号住居出土遺物(1) ……………22	第 55 図 1 区51号土坑 ……………57
第 17 図 1 区9号住居出土遺物(2) ……………23	第 56 図 2 区2号住居と出土遺物 ……………58
第 18 図 1 区9号住居出土遺物(3) ……………24	第 57 図 2 区5号住居 ……………59
第 19 図 1 区11号住居と出土遺物 ……………25	第 58 図 2 区5号住居出土遺物 ……………60
第 20 図 1 区12号住居 ……………26	第 59 図 2 区8号住居 ……………61
第 21 図 1 区12号住居出土遺物 ……………27	第 60 図 2 区8号住居出土遺物 ……………62
第 22 図 1 区14号住居 ……………27	第 61 図 2 区9号住居と出土遺物 ……………63
第 23 図 1 区14号住居出土遺物 ……………28	第 62 図 2 区13号住居と出土遺物 ……………64
第 24 図 1 区15号住居出土遺物(1) ……………28	第 63 図 2 区14号住居 ……………65
第 25 図 1 区15号住居と出土遺物(2) ……………29	第 64 図 2 区14号住居出土遺物 ……………66
第 26 図 1 区16号住居と出土遺物 ……………30	第 65 図 2 区15号住居と出土遺物 ……………67
第 27 図 1 区17号住居・76号住居 ……………32	第 66 図 2 区16号住居と出土遺物 ……………68
第 28 図 1 区17号住居出土遺物 ……………33	第 67 図 2 区18号住居と出土遺物 ……………69
第 29 図 1 区18号住居 ……………34	第 68 図 2 区21号住居 ……………70
第 30 図 1 区18号住居出土遺物 ……………35	第 69 図 2 区25号住居と出土遺物 ……………71
第 31 図 1 区28号住居と出土遺物 ……………36	第 70 図 2 区27号住居 ……………72
第 32 図 1 区31号住居と出土遺物 ……………37	第 71 図 2 区27号住居出土遺物 ……………73
第 33 図 1 区32号住居と出土遺物 ……………38	第 72 図 2 区29号住居と出土遺物 ……………74
第 34 図 1 区33号住居 ……………39	第 73 図 2 区35号住居と出土遺物 ……………75
第 35 図 1 区33号住居出土遺物 ……………40	第 74 図 2 区40号住居と出土遺物 ……………76
第 36 図 1 区35号住居と出土遺物 ……………41	第 75 図 2 区42号住居と出土遺物 ……………77
第 37 図 1 区36号住居と出土遺物 ……………42	第 76 図 2 区43号住居と出土遺物 ……………78
第 38 図 1 区38号住居と出土遺物 ……………43	第 77 図 2 区44号住居と出土遺物 ……………79
第 39 図 1 区39号住居と出土遺物 ……………44	第 78 図 2 区46号住居 ……………80

第79図	2区46号住居出土遺物	81	第118図	6区8号住居	118
第80図	2区51号住居	82	第119図	6区8号住居出土遺物(1)	119
第81図	2区51号住居出土遺物	83	第120図	6区8号住居出土遺物(2)	120
第82図	2区58号住居と出土遺物	84	第121図	6区9号住居と出土遺物	121
第83図	2区66号住居と出土遺物	85	第122図	6区10号住居と出土遺物	122
第84図	2区61号住居と出土遺物	86	第123図	6区15号住居と出土遺物	123
第85図	2区70号住居と出土遺物	87	第124図	7区1号住居と出土遺物	124
第86図	2区71号住居と出土遺物	88	第125図	7区2号住居と出土遺物	125
第87図	2区72号住居と出土遺物	89	第126図	7区5号住居と出土遺物	126
第88図	2区74号住居と出土遺物	90	第127図	7区9号住居と出土遺物	127
第89図	2区75号住居	91	第128図	8区1号住居	128
第90図	2区75号住居出土遺物	92	第129図	8区1号住居出土遺物	129
第91図	2区76号住居と出土遺物	93	第130図	8区2号住居と出土遺物	130
第92図	2区80号住居出土遺物(1)	94	第131図	8区3号住居と出土遺物	131
第93図	2区80号住居と出土遺物(2)	95	第132図	8区8号住居	132
第94図	2区86号住居出土遺物	96	第133図	8区8号住居出土遺物	133
第95図	2区86号住居	97	第134図	8区9号住居	134
第96図	2区87号住居と出土遺物	98	第135図	8区9号住居・10号住居出土遺物	135
第97図	2区92号住居	97	第136図	8区10号住居	136
第98図	2区92号住居・93号住居出土遺物	99	第137図	8区12号住居と出土遺物	138
第99図	2区93号住居	100	第138図	8区2号独立柱建物と出土遺物	139
第100図	2区96号住居	101	第139図	8区3号独立柱建物	140
第101図	2区96号住居出土遺物	102	第140図	9区1号住居と出土遺物	141
第102図	2区98号住居出土遺物	102	第141図	9区2号住居	142
第103図	2区98号住居	103	第142図	9区2号住居出土遺物	143
第104図	2区99号住居と出土遺物(1)	104	第143図	9区4号住居と出土遺物	144
第105図	2区99号住居出土遺物(2)	105	第144図	9区5号住居・6号住居と出土遺物	145
第106図	2区100号住居	106	第145図	11区1号住居	146
第107図	2区100号住居出土遺物	107	第146図	11区1号住居出土遺物	147
第108図	2区101号住居と出土遺物	108	第147図	11区2号住居と出土遺物	148
第109図	2区103号住居と出土遺物	109	第148図	11区方形遺構	149
第110図	2区1号竪穴と出土遺物	110	第149図	住居出土土器の変遷(1)	152
第111図	5区1号住居	111	第150図	住居出土土器の変遷(2)	153
第112図	5区1号住居出土遺物	112	第151図	住居出土土器の変遷(3)	155
第113図	5区6号住居と出土遺物	113	第152図	荒砥上ノ坊遺跡の居住域の変遷	157
第114図	5区9号住居と出土遺物	114	第153図	荒砥上ノ坊遺跡周辺の遺跡群	158
第115図	5区11号住居と出土遺物	115	第154図	群馬県の馬具出土遺跡の分布	161
第116図	6区3号住居	116	第155図	歴史時代後半期の遺構の位置	163
第117図	6区3号住居出土遺物	117			

表 目 次

第1表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代から 歴史時代前半期の遺構一覧表……………12	第3表 群馬県における集落遺跡出土の馬具一覧表 ……………160
第2表 荒砥上ノ坊遺跡の検出土構一覧表 ……156	

第4章 図表目次

表1 分析資料	図6 No.4 刀子に見いだされた非金属介在物のE PMA による分析結果
表2 鉄器の分析	図7 No.8 鉄塊系遺物の外観と組織観察結果
表3 No.8、No.9 鉄塊系遺物の化学組成(%)	図8 No.9 鉄塊系遺物の外観と組織観察結果
表4 No.10 鉄滓の分析結果	図9 No.10 鉄滓の外観と組織観察結果
図1 分析を行った鉄器の実測図	図10 推定される鋼の製造法
図2 No.2、No.3 馬具のマクロ・ミクロ組織	図11 荒砥上ノ坊、中江田八ツ縄、上野国分僧寺・尼寺 中間地域出土鉄器の化学成分と非金属介在物組成 の関係
図3 鉄器から抽出した試料片のマクロ組織	図12 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する主な鉄鉱山
図4 No.1 鎌に見いだされた非金属介在物のE PMA による分析結果	
図5 No.2、No.3 馬具に見いだされた非金属介在物のE PMAによる分析結果	

写真図版目次

PL 1、1、1 区3号住居全景(北西から)	4、同 出土遺物
2、同 竈全景(北西から)	PL 4、1、1 区9号住居全景(西から)
3、同 貯蔵穴全景(南から)	2、同 竈全景(西から)
4、同 出土遺物	3、同 土層断面A-A'(西から)
PL 2、1、1 区4号住居全景(北西から)	4、同 竈右脇遺物出土状態(西から)
2、同 床面の状態(北西から)	5、同 竈遺物出土状態(北西から)
3、同 竈全景(北西から)	6、同 貯蔵穴遺物出土状態(南西から)
4、同 土層断面(北西から)	7、同 遺物出土状態(1464)
5、同 遺物出土状態(1455・1458・南西から)	8、同 遺物出土状態(1467)
6、同 遺物出土状態(1456・南から)	PL 5、1、1 区9号住居遺物出土状態(1478)
7、同 出土遺物	2、同 遺物出土状態(1480)
PL 3、1、1 区5号住居全景(北西から)	3、同 遺物出土状態(1477)
2、同 竈全景(北西から)	4、同 遺物出土状態(1468・1479)
3、同 土層断面(北西から)	5、同 出土遺物

- P L 6. 1. 1区9号住居出土遺物
 P L 7. 1. 1区11号住居全景(北西から)
 2. 同 遺物出土状態(1490・北から)
 3. 同 遺物出土状態(1489)
 4. 同 出土遺物
 5. 1区12号住居全景(北西から)
 6. 同 出土遺物
 7. 1区14号住居全景(西から)
 8. 同 遺物出土状態(1495)
- P L 8. 1. 1区14号住居遺物出土状態(1496)
 2. 同 遺物出土状態(1497)
 3. 同 遺物出土状態(1498)
 4. 同 出土遺物
 5. 1区15号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 土層断面A-A'(西から)
 8. 同 遺物出土状態(南西から)
- P L 9. 1. 1区15号住居遺物出土状態
 2. 同 出土遺物
 3. 1区16号住居全景(北西から)
 4. 同 遺物出土状態(1506)
 5. 同 出土遺物
- P L 10. 1. 1区17・76号住居全景(北西から)
 2. 同 土層断面B-B'(南から)
 3. 1区17号住居竈遺物出土状態(西から)
 4. 同 遺物出土状態(東から)
 5. 同 遺物出土状態(1236・東から)
- P L 11. 1. 1区17号住居竈右脇遺物出土状態(西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 1区18号住居全景(西から)
 4. 同 土層断面A-A'(南から)
 5. 同 出土遺物
- P L 12. 1. 1区28号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 1区31号住居全景(西から)
 5. 同 出土遺物
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 1区32号住居全景(西から)
- P L 13. 1. 1区33号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 同 土層断面A-A'(南西から)
4. 同 出土遺物
- P L 14. 1. 1区35・36号住居周辺全景(西から)
 2. 1区35号住居全景(西から)
 3. 同 竈全景(西から)
 4. 同 遺物出土状態(1255)
 5. 1区35・36号住居全景(西から)
 6. 1区36号住居遺物出土状態(1565・西から)
 7. 1区35号住居出土遺物
 8. 1区36号住居出土遺物
- P L 15. 1. 1区38号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 1区39号住居出土遺物
 5. 同 竈全景(北西から)
 6. 1区45号住居全景(西から)
 7. 同 遺物出土状態(西から)
- P L 16. 1. 1区45号住居竈全景(北西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 1区46号住居全景(北西から)
 4. 同 低全景(北西から)
 5. 同 竈全景(北西から)
 6. 同 出土遺物
 7. 1区53号住居全景(西から)
 8. 同 竈全景(西から)
- P L 17. 1. 1区54号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 1区53・54号住居出土遺物
 4. 1区56号住居全景(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 同 出土遺物
- P L 18. 1. 1区59号住居全景(西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 1区62号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 土層断面A-A'(南から)
 6. 同 遺物出土状態(1275・1277)
 7. 同 出土遺物
- P L 19. 1. 1区67・73号住居全景(西から)
 2. 1区67号住居竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 1区73号住居竈全景(西から)
 5. 同 出土遺物

- P L 20. 1. 1区74号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態(1558・1559)
 4. 同 遺物出土状態(1556・1557)
 5. 同 出土遺物
 6. 1区調査風景
 7. 1区調査風景
- P L 21. 1. 1区5号土坑全景(東から)
 2. 同 土層断面(東から)
 3. 1区39号土坑全景(西から)
 4. 1区10号土坑(井戸)土層断面(西から)
 5. 1区5・10・39号土坑出土遺物
 6. 1区51号土坑(井戸)全景(西から)
- P L 22. 1. 2区2号住居全景(南西から)
 2. 同 竈全景(南西から)
 3. 2区5号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 土層断面A-A'(南西から)
 6. 同 出土遺物
- P L 23. 1. 2区8号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態(S169・1577・西から)
 4. 同 遺物出土状態(1575・東から)
 5. 同 出土遺物
- P L 24. 1. 2区9号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 2区10号住居全景(南西から)
 4. 同 出土遺物
 5. 2区13号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 出土遺物
- P L 25. 1. 2区14号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
- P L 26. 1. 2区15号住居全景(西から)
 2. 同 遺物出土状態(1592・北東から)
 3. 同 出土遺物
 4. 2区16号住居全景(東から)
 5. 2区18号住居全景(西から)
 6. 2区16・18号住居出土遺物
 7. 2区21号住居全景(西から)
 8. 同 竈全景(西から)
- P L 27. 1. 2区25号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 2区27号住居全景(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 同 土層断面A-A'(西から)
 7. 同 遺物出土状態(1603)
 8. 同 出土遺物
- P L 28. 1. 2区28号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態(1605・北から)
 4. 同 出土遺物
 5. 2区29号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 遺物出土状態(西から)
 8. 同 遺物出土状態(1613・北から)
- P L 29. 1. 2区29号住居遺物出土状態(南西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 2区35号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 2区40号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
- P L 30. 1. 2区42号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 2区43号住居全景(北西から)
 4. 同 竈全景(北西から)
 5. 2区43・44号住居出土遺物
 6. 2区44号住居全景(北西から)
 7. 同 竈全景(北西から)
 8. 2区46号住居全景(西から)
- P L 31. 1. 2区46号住居竈全景(西から)
 2. 同 出土遺物
 3. 2区51号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 出土遺物
- P L 32. 1. 2区58号住居全景(西から)
 2. 2区61号住居全景(北西から)
 3. 同 竈全景(北西から)
 4. 同 出土遺物
 5. 2区66号住居全景(西から)
- P L 33. 1. 2区66号住居竈全景(西から)
 2. 同 中央部遺物出土状態(南西から)

3. 同 遺物出土状態(1297・北西から)
4. 同 遺物出土状態(1302・北西から)
5. 同 出土遺物
6. 2区70号住居全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
- P L 34. 1. 2区71号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 2区71・72号住居出土遺物
4. 2区72号住居全景(西から)
5. 同 竈全景(西から)
6. 同 遺物出土状態(1651・北西から)
7. 2区74号住居全景(東から)
8. 同 出土遺物
- P L 35. 1. 2区75号住居全景(北西から)
2. 同 竈全景(北西から)
3. 同 遺物出土状態(1306・1309・北西から)
4. 同 遺物出土状態(1307・南から)
5. 同 出土遺物
6. 2区76号住居全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
- P L 36. 1. 2区76号住居遺物出土状態(北西から)
2. 同 遺物出土状態(1660・西から)
3. 同 遺物出土状態(1659)
4. 同 出土遺物
5. 2区80号住居全景(北西から)
6. 同 竈全景(北西から)
7. 同 出土遺物
- P L 37. 1. 2区86号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(1676・南東から)
4. 同 遺物出土状態(1691・北西から)
5. 同 出土遺物
6. 2区87号住居全景(西から)
7. 同 遺物出土状態(1680)
8. 同 出土遺物
- P L 38. 1. 2区92号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(1688)
4. 同 出土遺物
5. 2区93号住居全景(西から)
6. 同 外周ビット全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
8. 同 出土遺物
- P L 39. 1. 2区96号住居全景(北西から)
2. 同 竈全景(北西から)
3. 同 遺物出土状態(1697・南西から)
4. 同 出土遺物
5. 2区98号住居全景(西から)
6. 同 竈全景(西から)
7. 同 遺物出土状態(1700・北西から)
8. 同 出土遺物
- P L 40. 1. 2区99号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(1710・南西から)
4. 同 遺物出土状態(1711・南西から)
5. 同 遺物出土状態(1708)
- P L 41. 1. 2区99号住居遺物出土状態(1707・北から)
2. 同 遺物出土状態(1706・北から)
3. 同 出土遺物
4. 2区100号住居全景(北西から)
5. 同 竈全景(北西から)
- P L 42. 1. 2区100号住居遺物出土状態(1717)
2. 同 貯蔵穴全景(北から)
3. 同 出土遺物
4. 2区101号住居全景(北から)
5. 同 竈全景(西から)
- P L 43. 1. 2区101号住居遺物出土状態(1725)
2. 同 遺物出土状態(1724)
3. 2区101・103号住居・1号竪穴出土遺物
4. 2区103号住居全景(南から)
5. 同 竈全景(南から)
6. 2区1号竪穴全景(北西から)
7. 2区調査風景
8. 2区調査風景
- P L 44. 1. 5区1号住居全景(西から)
2. 同 竈全景(西から)
3. 同 遺物出土状態(北西から)
4. 同 出土遺物
5. 5区6号住居全景(西から)
6. 同 低全景(西から)
7. 同 竈全景(西から)
8. 同 遺物出土状態(1737)
- P L 45. 1. 5区6号住居遺物出土状態(1738)
2. 同 出土遺物

3. 5区9号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 同 出土遺物
 6. 5区11号住居全景(西から)
 7. 同 出土遺物
- P L 46. 1. 6区3号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 南東隅遺物出土状態(北西から)
 4. 同 遺物出土状態(1751・北から)
 5. 同 遺物出土状態(1755・北東から)
 6. 同 遺物出土状態(1758)
 7. 同 出土遺物
- P L 47. 1. 6区8号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
- P L 48. 1. 6区9号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 6区10号住居全景(西から)
 5. 同 竈全景(西から)
 6. 同 出土遺物
 7. 6区15号住居全景(西から)
 8. 同 竈全景(西から)
- P L 49. 1. 7区1号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 同 出土遺物
 4. 7区5号住居全景(北西から)
 5. 同 出土遺物
 6. 同 竈全景(北西から)
 7. 7区9号住居全景(北西から)
- P L 50. 1. 8区1・14号住居全景(西から)
 2. 8区1号住居竈全景(西から)
 3. 同 遺物出土状態
 4. 同 遺物出土状態
 5. 同 遺物出土状態
 6. 同 遺物出土状態
 7. 同 出土遺物
- P L 51. 1. 8区2号住居全景(西から)
 2. 8区3号住居全景(西から)
 3. 同 竈全景(西から)
4. 同 遺物出土状態(1822・1824・南から)
 5. 8区8号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 出土遺物
- P L 52. 1. 8区9号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 同 土層断面A-A'(南西から)
 4. 同 遺物出土状態(1843・北東から)
 5. 同 出土遺物
- P L 53. 1. 8区10号住居全景(北西から)
 2. 同 竈全景(北西から)
 3. 同 竈前遺物出土状態(北西から)
 4. 同 出土遺物
 5. 8区12号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 同 遺物出土状態(1392・南西から)
 8. 同 出土遺物
- P L 54. 1. 8区2号掘立柱建物跡全景(南から)
 2. 8区3号掘立柱建物跡全景(東から)
 3. 8区4号掘立柱建物跡全景(東から)
- P L 55. 1. 9区1号住居全景(西から)
 2. 同 竈全景(西から)
 3. 9区2号住居全景(西から)
 4. 同 竈全景(西から)
 5. 9区4号住居全景(西から)
 6. 同 竈全景(西から)
 7. 9区5号住居全景(西から)
 8. 9区6号住居竈全景(西から)
- P L 56. 1. 11区1号住居全景(西から)
 2. 同 土層断面A-A'・B-B'(西から)
 3. 同 竈全景(西から)
 4. 同 出土遺物
 5. 11区2号住居全景(西から)
- P L 57. 1. 11区2号住居竈全景(西から)
 2. 同 遺物出土状態(1410・1411・南西から)
 3. 同 遺物出土状態(1413・西から)
 4. 同 遺物出土状態(1414・西から)
 5. 同 遺物出土状態(北から)
 6. 同 出土遺物
 7. 11区の台地

第1章 調査の経過と遺跡の概要

1. 調査に至る経過

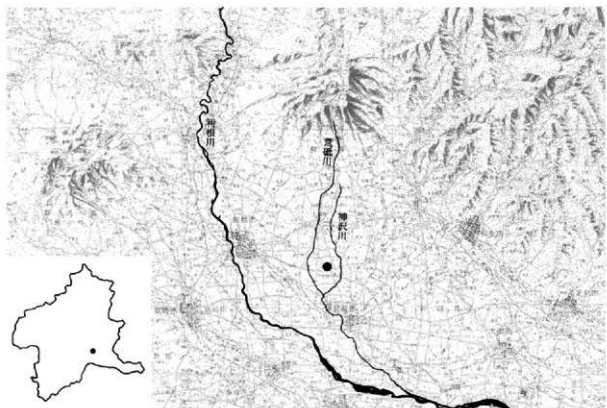
荒砥上ノ坊遺跡は、県営圃場整備事業荒砥北部地区に伴って発掘調査された遺跡群の1つである。

荒砥地域は、群馬県のほぼ中央部、前橋市の東端部にある農業地帯である。関東平野の北西の隅にあたり、上越の山から流れ出る利根川の左岸の地域である。北側には赤城山があり、南に大きく裾野を広げている。本地域は、この赤城山麓の丘陵性台地の末端にあたり、山麓を流下する荒砥川と神沢川に挟まれた地域である。周辺には、これらの主要河川以外にも、小河川が山麓を開析して形成された帯状沖積地が発達していて、起伏に富んだ地形となっている。このような地域の中で圃場整備事業を実施するので、工事は土砂の切り盛りが著しく、多量の土

砂を移動する計画となった。

しかし、この地域には、群馬県内でも有数の大形前方後円墳が集中する大室古墳群をはじめとして、原始・古代の多くの遺跡が分布する。したがって、圃場整備事業が開始されるにあたっては、埋蔵文化財の保護が大きな課題となった。そこで、群馬県農政部と群馬県教育委員会は、埋蔵文化財の保護を前提にした協議をおこない、工事によって破壊される切り土部分と道水路部分について、事前に埋蔵文化財の発掘調査を実施することが確認されたのである。

荒砥地区の圃場整備事業は、国道50号線で南北2地区に分けて実施された。昭和49年から56年にかけての荒砥南部地区と、昭和56年から平成3年にかけての荒砥北部地区である。大規模なその対象地域は、



第1図 群馬県中央部の地勢と遺跡の位置

第1章 調査の経過と遺跡の概要

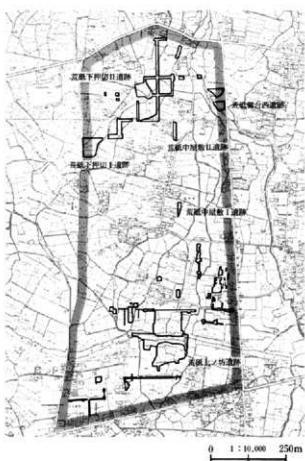
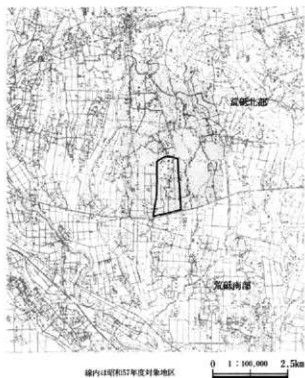
群馬県前橋市東端部の旧荒砥村域で、現在の荒井町・今井町・二之宮町・飯土井町・東大室町・荒子町・下大屋町・泉沢町にまたがる広大な地域である。

発掘調査は、昭和49年から52年まで県教育委員会の直営で実施されたが、昭和53年7月の(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団の設立に伴って、昭和53年度から(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が発掘調査を受託することとなった。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、県農政部の委託を受けて、荒砥南部地区の圃場整備事業が終了する昭和59年度までの7年間に13遺跡を調査した。

継続して(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団は、昭和56年度から荒砥北部地区の発掘調査を受託し、昭和59年度まで調査を実施した。相前後して昭和59年度以降の発掘調査は、県教育委員会と荒砥北部遺跡群調査会に引き継がれ、平成3年度で終了した。

荒砥上ノ坊遺跡を調査した昭和57年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区の六工区が事業対象地域であった。(第2図上) 発掘調査を開始するにあたり工事計画との調整を重ね、5・6月に遺跡分布調査を実施して、発掘調査面積を確定した。この分布調査によって、荒砥上ノ坊遺跡のほかに、荒砥中屋敷遺跡・荒砥下押切遺跡・荒砥舞台西遺跡・荒砥新屋遺跡が発掘調査されることとなった。(第2図下)本書で報告する荒砥上ノ坊遺跡は、縄文時代から中世までの複合集落遺跡である。切り土部分・道水路部分あわせて4200㎡を調査し、調査区は11区にわたった。

発掘資料の整理事業は、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が県教育委員会から受託し、昭和57年から実施している。本年度は、県営圃場整備事業荒砥北部地区関連の出土品整理事業の3年次にあたる。荒砥上ノ坊遺跡の資料整理は2年次目であり、平成6年度に『荒砥上ノ坊遺跡 一縄文～古墳時代の調査一』を刊行した。分布調査の内容と発掘区の設定および調査体制については、『荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ』第1章を参照願いたい。



第2図 圃場整備地域(上)と昭和57年度調査区

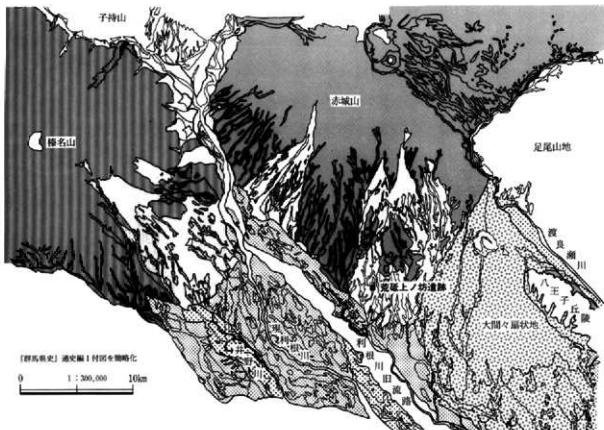
2. 遺跡周辺の地形と遺跡分布

群馬県中央部の地形 荒砥上ノ坊遺跡がある地域は、県北の山地と南東部の平野部が接する群馬県中央部にあたる。県央地域には、榛名・赤城両火山があり、その裾野には台地が広がっている。その台地上は小河川によって谷地が開析され、平野部は自然堤防・後背湿地が発達している。このように県央部は様々な地形が入り組んでおり、地形環境が遺跡の立地にも大きく関係していると考えられる。

また、群馬県では、各地の発掘調査から、火山災害が人間生活に大きな影響を与えたことが判明している。周辺の火山のうち、西毛地域にある榛名山や浅間山は完新世にも大噴火し、火砕流が山麓の家屋を壊し、降下火山灰が県央部の田畠を埋没させたことが、発掘調査からわかっている。しかし、人々は火山災害に立ち向かい、田畠を復旧して、生活を継続させてきたのである。

一方、赤城山は40～50万年前から活動を始めた複合成層火山であるが、3.1～3.2万年前に大規模な軽石噴火をおこして中央火口丘群を形成した後、目立った火山活動はなく、現在は火山山麓扇状地の形成期となっている。山麓には、山体を流下する小河川による開析作用によって、帯状に谷地が刻まれている。また、赤城白川・荒砥川・神沢川・粕川等の小河川沿いには、土砂が堆積して扇状地が形成されている。これらの河川作用は数万年の間繰り返されてきた。扇状地はさらに開析されて、樹枝状の低地が発達した複雑な起伏の多い地形となっている。この間安定した時期には、関東ローム層が堆積して、台地地形を形成している。

遺跡周辺の地形 荒砥上ノ坊遺跡は、赤城山の南麓末端に近い、標高95～103mの緩斜面にある。遺跡周辺の地形は後期更新世前半に形成された山麓扇状地で、山麓に谷をもつ細長い低地とその支谷が樹枝状に入り込んだ様相を呈している。



第3図 群馬県中央部の地形と荒砥上ノ坊遺跡

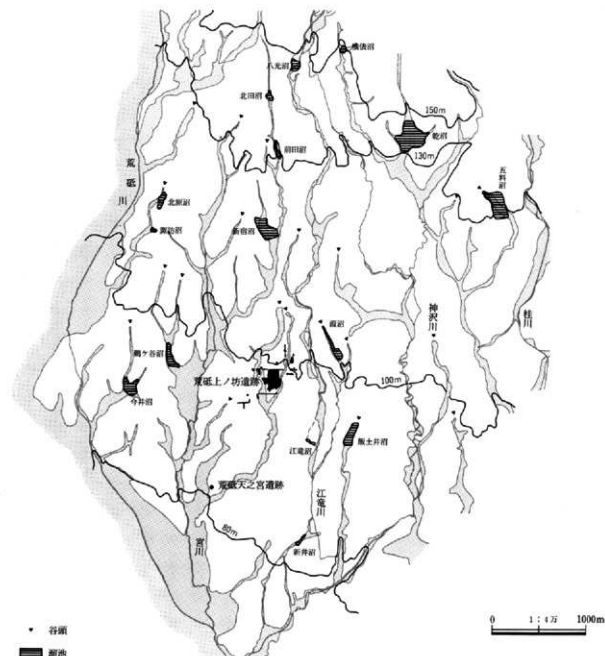
第1章 調査の経過と道路の概要

これらの低地は、内部に河川が流れていて比較的長いものと、主要河川がなく小規模なものに分けられる。遺跡周辺に流れる主な河川は、西から荒砥川・宮川・江竜川・神沢川・桂川等があるが、このうち荒砥川・神沢川・桂川は標高200m以上に水源をもつ流域面積の長い河川である。一方、宮川・江竜川は、標高150m以下に水源をもつ、比較的短い小河川である。他の河川の無い低地の多くも同様に、標高

90~130mに谷頭が並んでいる。

これらの低地に広がる沖積地は小規模で、それぞれは幅も狭く短い。しかし、合流地点では複数の沖積地が合わさって、幅が広がる。宮川の中流域では幅が200m近くになる地点があり、主要河川に伴う沖積地と変わらない広さの沖積地が広がっている。

また、荒砥地域には溜池・溜井が多く分布し、農業用水源として使われている。溜池は谷頭に堤をつ



第4図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の地形

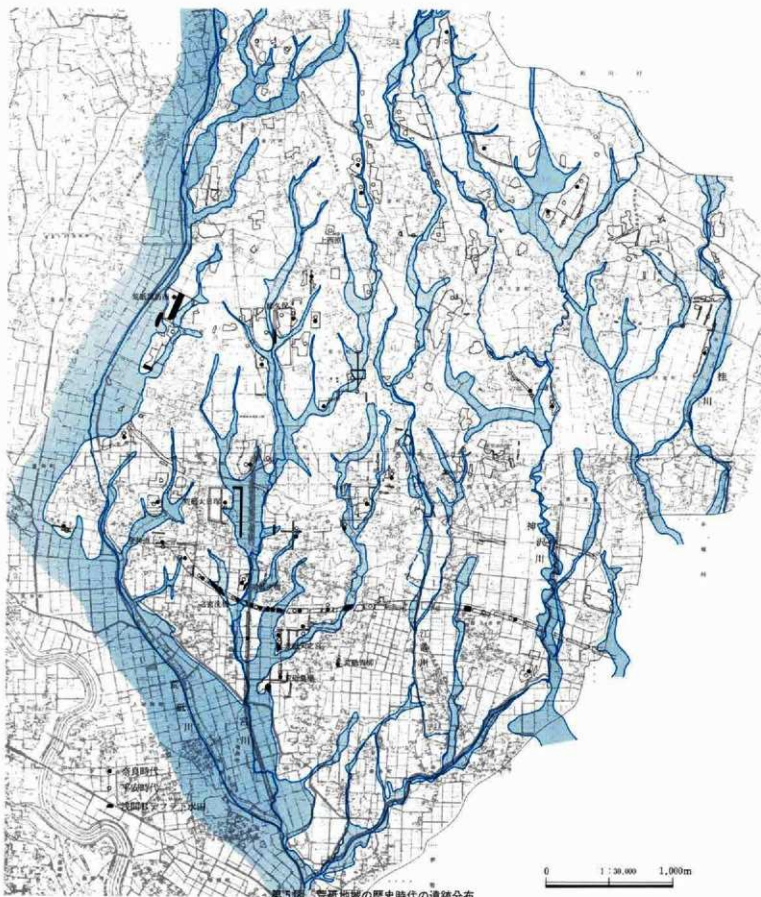
くり湧水を堰止めた池であるが、いつ頃造られたものかは不明である。溜井は、人工的に掘った井戸で、これに水路を付設して農業用水として利用したものである。宮川下流域の荒砥天之宮遺跡で、古墳時代後期以降の溜井が検出されている。

このように、荒砥上坊遺跡周辺は山麓扇状地であり、欠水性の地域であるが、樹枝状に発達した低地をうまく利用し、農耕集落を営む風土が生まれたものと考えられる。

周辺の歴史時代の遺跡分布 荒砥地域では、圃場整備事業や道路建設に伴って、これまで発掘調査も多く実施されている。これらの成果から、奈良・平安時代の遺跡を示したのが第5図である。西・南の荒砥川、東の神沢川・桂川で区切られた地域（旧村名から荒砥地域と呼ぶ）を対象にして、下記の発掘調査報告書からデータを検索した。主に前橋市域の発掘調査成果であるので、遺跡を網羅しているものではないが、傾向は把握できるものとする。

検索文獻

- 二之宮遺跡群緊急発掘調査概報（荒砥南部土地改良事業に伴う第2次調査）1976群馬県教委・編・詳評文 荒砥上川久保遺跡昭昭和50、51年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書182群馬県教委・編・詳評文 荒砥前原遺跡・赤石城址昭和51年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書195群馬県教委・編・詳評文 荒砥東原遺跡昭和53年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書197群馬県教委 荒砥島原遺跡昭和55年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書184群馬県教委 荒砥二之郷遺跡昭和55年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書198群馬県教委・編・詳評文 荒砥洗橋遺跡・荒砥宮西遺跡昭和55年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書198群馬県教委・編・詳評文 荒砥北原遺跡・今井神社古墳群・荒砥青柳遺跡昭和56年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書196群馬県教委・編・詳評文 荒砥北三木寺遺跡Ⅰ昭和56年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書199群馬県教委・編・詳評文 荒砥北三木寺遺跡Ⅱ昭和56年度皇宮園場整備事業荒砥南部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書194群馬県教委・編・詳評文 荒砥大日坂遺跡昭和56年度皇宮園場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書194群馬県教委・編・詳評文 荒砥芝子遺跡・荒砥宮田遺跡・荒砥諏訪西遺跡・荒砥諏訪遺跡昭和58年度皇宮園場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査198508詳評文 昭和58年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報1984群馬県教委 堀東遺跡1985群馬県教委 試掘・泉沢谷遺跡・荒砥上原遺跡昭和59年度皇宮園場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査198508詳評文 昭和59年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報1984群馬県教委 昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報1986群馬県教委・調査会 上原野・向原・谷津昭和60年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1986群馬県教委 昭和61年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報1986調査会・群馬県教委 丸山・北原昭和61年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1987群馬県教委 昭和62年度荒砥北部遺跡群発掘調査概報1988調査会・群馬県教委 丸山・北田下・中畑・村主・中山B昭和62年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1988群馬県教委 阿弥花井土遺上・伊勢山・大道・山王・明神山昭和63年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1989群馬県教委 下郷1・天神平成元年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1990群馬県教委 舞台・西大丸山平成2年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1991群馬県教委 富士山Ⅰ遺跡1号古墳平成3年度荒砥北部遺跡群発掘調査報告書1992群馬県教委 昭和57年度実情報告皇宮園場整備事業荒砥北部地区埋蔵文化財発掘調査198308詳評文 飯土井二木松遺跡・下田田前遺跡一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1991建設省・群馬県教委・編・詳評文 二之宮中央遺跡一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1991建設省・群馬県教委・編・詳評文 飯土井中央遺跡一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1991建設省・群馬県教委・編・詳評文 二之宮千足遺跡一般国道17号線（上武道路）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1992建設省・群馬県教委・編・詳評文 富田遺跡群・西大室遺跡群・南原南部遺跡群土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報1980前橋市教委 西大室遺跡群Ⅱ土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報1981前橋市教委 富田遺跡群・西大室遺跡群土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報1982前橋市教委 西大室遺跡群土地改良事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報1983前橋市教委 富田遺跡群土地改良事業実施地区ならびに前農業構造改善事業実施地区内埋蔵文化財発掘調査概報1981前橋市教委 一般国道50号（東前橋幅）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査整理事業1990080詳評文 荒砥上原遺跡群昭和今井前橋線地区内埋蔵文化財発掘調査報告書1977群馬県教委 荒砥五反田遺跡東道今井前橋線地区内埋蔵文化財発掘調査報告書1978群馬県教委 地田原田遺跡市道246号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書1994前橋市埋文発掘調査団 群馬県前橋市瓦子小学校校庭Ⅱ・Ⅲ遺跡群発掘調査報告書1990前橋市教委・前橋市調査団 鶴谷遺跡群前橋総合運動公園事業地区内埋蔵文化財発掘調査概報1982前橋市教委 群馬県前橋市小幡谷遺跡群発掘調査報告書1987前橋市教委・前橋市調査団 山伏町 女堀一中世紀初葉・農業用水の発掘調査198408詳評文 柳久保遺跡群Ⅰ1985前橋市埋文発掘調査団 柳久保遺跡群Ⅱ1986山伏町考古学研究所 柳久保遺跡群Ⅰ1987前橋市教委・前橋市調査団 柳久保遺跡群Ⅲ1988前橋市埋文発掘調査団 柳久保遺跡群Ⅳ1988前橋市教委・前橋市調査団 柳久保遺跡群Ⅴ1989前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅰ1990前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅱ1991前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅲ1991前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅳ1991前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅴ1993前橋市埋文発掘調査団 横伏遺跡群Ⅵ1989前橋市埋文発掘調査団 内張遺跡群Ⅰ1989前橋市埋文発掘調査団 内張遺跡群Ⅱ1990前橋市埋文発掘調査団 内張遺跡群Ⅲ1991前橋市埋文発掘調査団 内張遺跡群Ⅳ1991前橋市埋文発掘調査団 内張遺跡群Ⅴ1993前橋市教委



第5図 荒砥地域の歴史時代の遺跡分布

遺跡分布図のスクリーン・トーン部分は、実体視鏡による空中写真判読によって「本来の沖積地」を示したもので、地形改変を受けない原地形といえるものである。白抜き部分は、微高地・台地を含んでいる。「本来の沖積地」は水利や土壌のある水田可耕地である。さらにこれらの条件が整えば、白抜きにした微高地部分にも水田耕作地が及ぶ可能性がある。なお、河川は、現河道を示した。

分布図を見ると、荒砥地域の奈良・平安時代の遺跡は中央部やや西半に集中しているように見える。しかし、本図は発掘調査された遺跡のみの分布図であるので、これは実態ではない。この偏在は、東半に比較して西半の方が発掘調査地点の多いことに起因していると考えられる。発掘調査がおこなわれれば、東半にも歴史時代の遺構が検出されることは、発掘調査が進んでいる西半に遺跡が多いことから推定できる。ただ偏在について一つ指摘しておきたいことは、古墳時代の遺跡との関連性である。「荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ」でみたように、荒砥地域の6世紀以降の古墳は江竜川以東に偏在している。この偏在と歴史時代の遺跡の分布状況に関連があるかどうかは、検証する必要があるだろう。

粗密の偏りがある発掘調査の成果で、全体的な傾向を述べることはできないので、比較的発掘調査の進んでいる宮川流域の状況のみをみておこう。宮川流域は弥生時代中期後半に農耕集落が成立し、古墳時代前期には、流域の台地縁辺に一定間隔をもって、遺跡が並ぶように分布する。古墳時代後期には、人工的な農業用水確保によって、それまで遺跡のなかった地点にも集落が検出されるようになる。（「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」第7・8図）

奈良・平安時代の遺跡は、それ以前からの遺跡にほぼ重複する。荒砥島原遺跡や荒砥天宮遺跡・荒砥大日塚遺跡・柳久保遺跡等ほとんどの遺跡がそうである。農民たちは、宮川沖積地に開発された水田耕作地を保持・拡大してきたのであろう。また、荒砥青柳遺跡のような台地中央部に住居が検出される遺跡もある。歴史時代になると、水田耕作地の微高

地への進出によって、居住域が台地縁辺から内部に遷移する傾向がみられるようになる。このような遺跡の変遷は、他の小河川流域でも同様である。

荒砥地域では、15地点の浅間Bテフラ埋没水田が検出されている。これらは1108年に浅間山が爆発する以前にはすでに開かれていた水田である。その多くはこの宮川流域で検出されているが、近年、上武道路に伴う調査では、赤城南麓を横断する樹枝状の谷地のほとんどの、この水田跡を検出した。また、荒砥川左岸の荒砥諏訪西遺跡では、広大な微高地の上の浅間Bテフラ下水田も検出されており、水田耕作地の拡大を示している。このことから、荒砥地域の可耕地は12世紀初頭には開発されていたことが理解されよう。

荒砥地域は律令期には勢多郡域にあり、東山道の通過ルートでもある。一般農耕集落以外の遺跡も検出されている。上西原遺跡では8世紀末から9世紀末まで存続した方形区画内の基礎建物が検出され、寺院もしくは郡衙と考えられている。今井道上・道下遺跡では8世紀後半以前の二重区画溝の中に大形掘立柱建物が検出された。また、宮川下流域の二之宮洗橋遺跡では「芳郷」、荒砥洗橋遺跡では「大郷長」の墨書土器が出土している。これらの文字資料から、周辺が勢多郡の「芳賀郷」あるいは「大口郷」にあたと推定されている。

荒砥上ノ坊遺跡の立地 荒砥上ノ坊遺跡は、このような荒砥地域の一般農耕集落である。赤城山南麓を開析した樹枝状の低地に区切られた低台地のひとつに立地する。標高105m前後に谷頭のある2本の低地が遺跡の南側で合流する。発掘調査では、この合流点の北にある中央の低台地と、その東西の台地上に発掘区を設定した。東西の沖積地の一部もトレンチ調査をおこなった。

この中央の低台地は、ローム層の堆積が無く、黄灰褐色の砂壤土が厚く堆積している。この土層上面で、縄文時代前期諸磯期の住居が確認できるので、それ以前に堆積した地層と考えられる。この土層については、発掘調査時にテフラ等の検出による層位

の確認および地層の分布について調査をしていないので、関東ローム層との関係等は不明である。東側台地の一部も、この砂壤土の堆積が見られた。西側台地は関東ローム層の堆積する台地である。

赤城山南麓地域では、河川作用による砂壤土性の微高地がローム台地に付随して形成されている地点が多い。これらの微高地は赤城山の山体崩落土砂が山麓端部に再堆積することにより形成されたと考えられている。周辺では類似する土層堆積があり、飯土井二本松遺跡では砂壤土下で縄文時代早期の遺物包含層が検出されている。これらの調査から、この砂壤土・砂層の堆積は縄文時代早期から前期の中で漸次進行したと考えられている。このような台地・微高地上に弥生時代以降農耕集落が定着し、農耕地を拡大させながら、居住域も再開されていった。

東西両側の低地には、黒色腐植土が厚く堆積しており、水田適地であったと考えられる。地表下60～80cmのところに浅間Bテフラが、地表下2mのところで浅間C軽石がほぼ水平堆積していた。浅間C軽石の下層には一部で灰色白砂の堆積があるが、それ以降は、安定した沖積土が堆積する環境であったと考えられる。

3. 発掘調査の方法と経過

荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査では、発掘調査に先立って実施した遺跡分布調査結果と工事設計とを照合し、遺構面を破壊する切り土部分をまず、発掘区とした。また、分布調査に基づいて道水路部分に大形掘削重機(バックホー)による試掘トレンチを適宜設置し、遺構の有無の確認をおこなった。その結果、11区の発掘区を調査することとなった。

1・2区は、遺跡のほぼ中央を横断する「女堀」と、その南北に広がる中央の低台地の大部分である。工事工程との調整から、南側を1区、北側を2区とした。3区は西側の沖積地を隔てた対岸の台地の縁辺で切り土になる部分である。3区から東へは、中央低台地を貫いて道路が新設されるので、その部分

へも試掘トレンチを設定した。4区も西の対岸の台地縁辺で、道路の試掘トレンチで遺構が検出されて広げた発掘区である。5区は東側沖積地を隔てた対岸の台地で、これも道路の試掘トレンチで遺構が検出された。6区は中央低台地の突出部で、切り土部分である。7区は東側台地の縁辺で切り土部分と、周辺の道水路部分の試掘トレンチおよびその拡張区である。8～10区は中央台地の北部であるが、いずれも道路の試掘トレンチで遺構が検出されて広げた発掘区である。11区は西側台地のやや内部に位置している。これも道水路部分の試掘トレンチと拡張部分である。

発掘区内には記録用の一辺5mのグリッドを設定した。グリッドの基準は、圃場整備の工事に用いた杭を利用した。グリッド南北ラインの国家座標との偏角は、1～10区が西へ1°04'16"、11区が西へ4°である。すべての区の一辺5mの小グリッドは、北から南へアルファベット(a～w)を、西から東へ数字(0～19)を付した。また、女堀を含めた1・2区、4区、7区では、それぞれ個別の100m四方の大グリッドを設定し、杭の呼称を大グリッド(アルファベット)－小グリッド(アルファベット－数字)で表している。グリッドの呼称は、すべての区で北西隅の杭を用いている。

発掘区は幾つかの地形に分散しており、各区ごとに土層の堆積状況や遺構確認面が異なっている。

1・2・8・9・10区のある低台地は、現耕作土下に、20cmほどの暗褐色土、5～20cmの軽石混じりの黒色土が堆積している。この黒色土は地点によっては、削られて残っていないところもある。これらを除去した暗褐色土上面で遺構が検出された。6区も基本的に同様の土層堆積を示していた。

3・4・11区のある西側台地と5・8区のある東側台地は、現耕作土下の暗褐色土を除去すると、ローム層上面となり遺構が確認される。

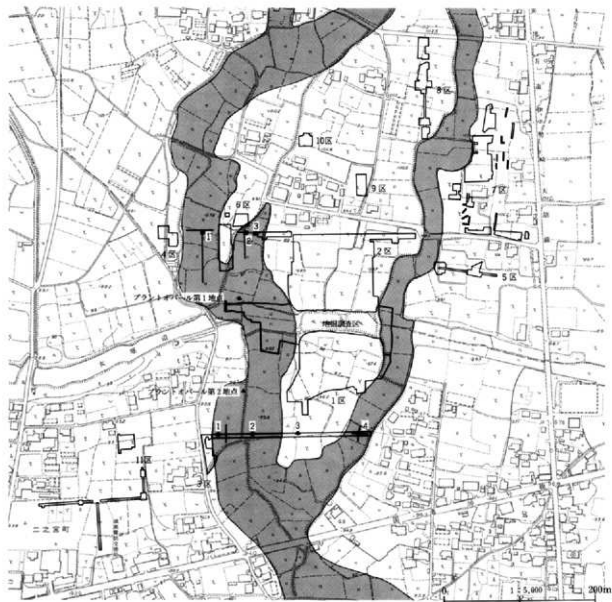
低地部の土層は、沖積地を横断して新設される道水路部分に設定した試掘トレンチで観察した。西側の沖積地に設定したトレンチのほぼ全域で浅間Bテ

3. 発掘調査の方法と経過

フラが確認された。浅間Bテフラの下層はやや粘質の黒褐色土で、下層にいくにしたがって植物遺存体が多く含まれるようになる。浅間C軽石はトレンチの一部を深掘りした地点で確認できた。そこは沖積地の中央部で、浅間C軽石を確認したのは地表下2mのところである。浅間Bテフラ・浅間C軽石両テフラ直下水田の有無は、調査時には確定できなかった。

荒砥上ノ坊遺跡の調査は、6月19日からの女堀の発掘で始まった。1～11区の発掘調査は、女堀の調

査が終了間近の9月17日から、女堀の両岸の微高地にある1・2区の表土掘削作業から開始した。その後、工事工程との調整と体制の強化を図りながら、調査を実施した。そして、荒砥上ノ坊遺跡の発掘調査は1月25日に完全に終了した。24日には一部の体制で、K工事の下押切遺跡の低地部分の調査に移行し、25日には全体制が下押切遺跡に移った。なお、荒砥上ノ坊遺跡の調査で記録した図面・写真の基本整理・遺物の洗浄・注記作業は、下押切遺跡の調査が終了した2月5日から3月5日まで実施した。



第6図 荒砥上ノ坊遺跡の発掘区

第2章 歴史時代前半期の遺構と遺物(第II分冊補遺)

歴史時代前半期(概ね8世紀から9世紀前半)と確定できる遺構は、既刊の『荒砥上ノ坊遺跡II』で報告したが、これに漏れたものが判明したので、ここで補っておきたい。

2区10号住居

位置 Hs・t-7・8グリッド 写真 PL24

重複 西壁を8号住居に、南東部を9号住居に、切られている。東壁が11号住居を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.94m、短軸3.30mである。

面積 11.02㎡ 南壁方位 N-71'-E

埋没土 上層は軽石粒・焼土粒・炭化物粒を含む黒色土で、下層は黄褐色土塊を含む黒色土で埋まる。

床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面とな

る。床面はほぼ平坦で、中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていたと推定されるが、後出する9号住居に壊されていて痕跡をとどめるにすぎない。竈左側には袖の基部とも考えられる粘土がわずかに残存していた。焚口幅は50cmほどと考えられる。

周溝 検出されなかった。

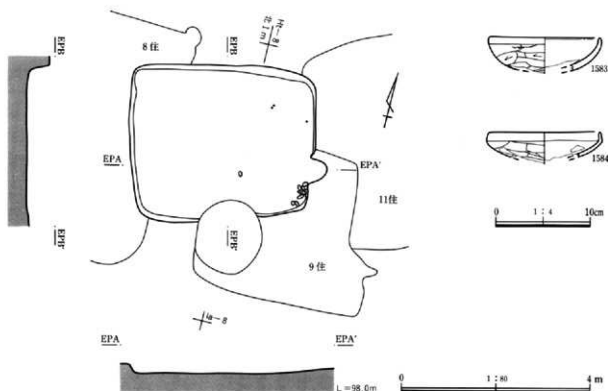
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 130点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。床面近くからも遺物が出土しているが、破片で図化はできなかった。図化したのはいずれも埋没土中からの出土遺物である。

(遺物観察表：1頁)

所見 出土遺物から、8世紀前半の住居と考えられる。



第7図 2区10号住居と出土遺物

2区28号住居

位置 La・b-2グリッド 写真 PL28

重複 29号住居の南西部床下で検出された。

形状 わずかに長い長軸を東西方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁東端がやや南にふれて確認された。四隅は比較的角張っている。規模は長軸3.07m、西壁長2.95m、東壁長2.6mである。

面積 6.45㎡ 電方位 N-87°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色粘質土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は40cm、左側は25cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は30cmである。燃焼部の壁の焼土化は顕著でな

い。煙道部は壁から外へ58cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には土師器坏形土器(1611)が使用面に出土した。周溝 検出されなかった。

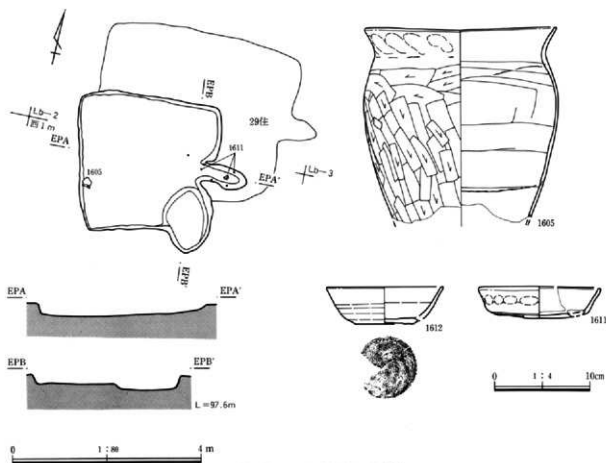
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居南東隅に、長径1.40m、短径1.00m、深さ0.32mの楕円形の貯蔵穴が検出された。南側は壁から0.48mほど張り出していた。底面の形態は方形に近く、平坦であった。

遺物 100点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。床面に近い遺物は、土師器坏形土器(1611)が竈使用面上で変形土器(1605)が西壁際床面上4cmで出土している。須恵器坏形土器(1612)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表：1頁)

所見 出土遺物から、8世紀末の住居と考えられる。



第8図 2区28号住居と出土遺物

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物

1. 概要

荒砥上ノ坊遺跡は、古墳時代初頭にはこの地点に定着していた農耕集落遺跡である。中央の低台地西縁で縄文時代前期の住居が3軒検出されているが、それ以降古墳時代初頭までの遺構は、発掘調査区内では検出されていない。荒砥地域の同様な農耕集落遺跡では、弥生時代中期後半から住居が確認されている調査例もあり、荒砥上ノ坊遺跡にも弥生時代の集落がある可能性はある。

既刊の報告書「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」「荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ」で述べたように、荒砥上ノ坊遺跡で検出された古墳時代から奈良平安時代の竪穴住居は252軒である。これらの住居のうち、「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」で古墳時代の61軒、「荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ」で概ね8世紀から9世紀前半までの86軒を報告した。既報告の住居の検出状況を発掘区ごとにまとめてみると第1表のようになる。

これらの住居の時期は、古墳時代初頭と、古墳時代後期から奈良時代以降に中心があり、その間は5世紀前半の住居が3軒検出されたのみである。このように発掘区内で検出された住居の時期には断絶がある。しかし、その集落を支えた水田耕作地は継続していると考えられるので、この間を埋める住居は発掘区以外に存在すると考えられ、集落としては続

いていると考えておきたい。

本書では、歴史時代後半期の住居100軒を中心に各発掘区で検出された遺構を報告する。歴史時代後半期としたのは概ね9世紀後半～10世紀後半の時期である。荒砥上ノ坊遺跡の歴史時代後半期の住居は、前半期とほぼ同様の分布傾向をみせており、この地域に定着して農耕集落が営まれたことを示している。歴史時代には、台地縁辺のみでなく台地の内部に居住域が展開する傾向は顕著になり、西側台地内部の11区にも9世紀後半の住居がつけられている。

このような古墳時代以降の荒砥上ノ坊遺跡の住居分布の変化は、荒砥地域の小河川沿いに成立した他の農耕集落の変遷とよく合致している。赤城山麓では、小河川沿いの水田耕作適地を望む微高地縁辺に定着した農耕集落が、古墳時代後期には水利の良くない低地にも生産域を拡大させるのにもなって、新開の居住域を形成している。さらに奈良平安時代には生産域を傾斜地にも広げ、それにもなって居住域が台地内部に展開するようになる。

荒砥上ノ坊遺跡でも、東西二条の帯状低地を生産域として成立した集落が、生産域の開発と関連して変化している。ある一時期にたてられていた竪穴住居や集落景観を復元することは厳密にはできないが、土地利用の変遷を確認することは可能であろう。荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初頭以降の居住域占地の

第1表 荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代から歴史時代前半期の住居一覧表

地形単位	発掘区	3世紀		4世紀		5世紀		6世紀		7世紀		8世紀		9世紀	
		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半
中央低台地	8区													1軒	3軒
	9区	As-C埋込品												1軒	
	10区												3軒		
	1・2区		住居	29軒									28軒	10軒	10軒
西台地	6区		住居	3軒		3軒			1軒	1軒	17軒	2軒	3軒	2軒	
	4区	瓦溝墓6基													
東台地	3区							1軒			2軒	2軒	3軒		
	11区														
東台地	7区										1軒	1軒		3軒	
	5区										1軒	1軒	1軒	2軒	

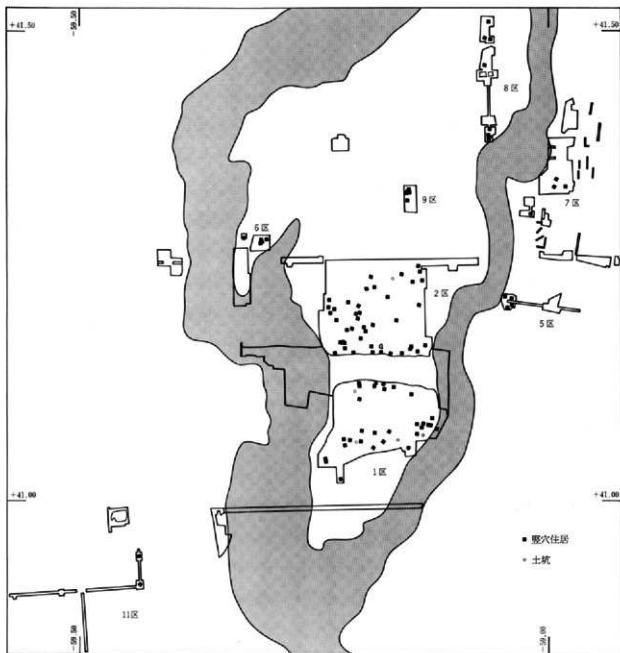
1. 概 要

変遷については、第4章で詳述する。ここでは、発掘調査で検出された各発掘区の遺構と、出土遺物の概要をのべる。

古墳時代の初頭から居住域であった中央低台地の1・2区では、歴史時代になっても住居が台地のほぼ全体に分布し、古墳時代後期からの遺構分布を踏襲している。しかし、歴史時代後半期の住居の分布には、やや偏りがあり、竪穴住居が掘られていない

空白地帯が看取できる。この空白部によって竪穴住居群は二つの大きなまとまりがあるようにみえている。空白部は竪穴住居が掘られていないだけで何らかの別の施設が存在した可能性もあるが、発掘調査では解明できなかった。

空白部のひとつは1区の中央部で、幅40mの帯状の空白部が東西方向に1区を貫いている。この空白部には9世紀前半には竪穴住居が掘られていたが、



第9図 歴史時代後半期の遺構分布

9世紀中葉以降の竪穴住居は確認できなかった。この地点には時期の不明な土坑群と1区を東西に貫く1号溝が掘られている。1号溝は出土遺物がほとんどなく、掘削時期は明確でない。重複関係は、5世紀前半の42号住居と9世紀後半の18号住居を切っていて、9世紀後半以降に掘られたことがわかる。したがって9世紀後半の空白部は1号溝による可能性もある。土坑群の掘削時期も明確でなく、この空白部の背景は今のところ不明である。

また、2区の中央東半部にも住居分布の希薄な部分がある。この部分の中央部に孤立してある2区51号住居は、本調査で検出された住居のうち最も新しいものの一つで、出土遺物から10世紀後半と考えられる。この住居以前には9世紀中葉以降竪穴住居が掘られていないことになり、直径30mほどの円形に空白部ができることになる。2区には北西部にも竪穴住居のない部分がある。これらの空白部は、黒井峯遺跡の成果等を考えあわせると、畑作耕地や竪穴住居とは機能の異なる平地住居等に利用されていた部分であろう。

1・2区では竪穴住居以外に土坑と井戸が検出されているが、当該時期のものとの確証はない。出土遺物も破片が多いが、時期がまとまっている遺構は本分冊に掲載した。

1・2区と同じ中央微高地で、歴史時代前半期にも住居がつくられていた6・8・9区には歴史時代後半期にも住居が検出された。10区には住居が検出されなかったが、台地内部の居住域が継続していることを示している。

8区には竪穴住居以外に掘立柱建物が5棟検出されているが、これらの遺構の時期は明確でない。このうち2号・3号掘立柱建物跡は東西に2棟並んでおり、柱穴の掘り形も似ていて同時に建てられていた可能性も大きいと考えられる。2号建物は9世紀前半の8区6号住居の埋没土を掘り込んで建てられているので、それ以降の建物ということになる。柱穴の出土遺物は9世紀代のものであるが、遺構の時期は判然としにくい。この8区以外でも掘立柱建物が

あわせて10棟検出されているが、時期の明確になったものはない。これらについては第IV分冊で詳述したい。

西側台地は、台地縁辺で歴史時代前半期まで居住域であった3区に住居が検出されなかった。しかし台地内部の11区に新たに住居が検出された。いずれも発掘区が狭いので不明な点も多いが、11区では台地内部への居住域拡大を確認することができた。

東側台地は、歴史時代前半期に継続して台地縁辺の発掘区に住居が検出された。

出土遺物は土器・石器・鉄器が出土した。土器は在地の土師器・須恵器に加えて、灰釉陶器・緑釉陶器が出土した。灰釉陶器は、9世紀後半以降の住居100軒のうち14軒、緑釉陶器は2軒の住居で出土している。また10世紀の住居からはロクロ使用・酸化焰焼成の須恵器が出土した。墨書・刻書された土器も、椀形土器を中心として合わせて15点出土した。9世紀後半の住居2軒からは円面磁の破片が出土している。

石器は、砥石・紡錘車と、棒状礫を用いた敲石・磨石が出土している。砥石は砥沢石製の小形・中形のもの、粗粒輝石安山岩製の大型のものがある。紡錘車は土製が1点、石製が7点出土しているが、石製の7点のうち3点にそれぞれ「羊・美・東」「元井」「大上」の刻書がなされている。棒状礫は敲打や摩擦等の使用痕のあるものを中心に固化した。円盤状の礫を使用したものもある。

鉄器は10点出土している。これには釘3点、針1点、鎌？1点、刀子1点、不明鉄器1点と、馬具が3点含まれている。馬具は9世紀後半の住居の貯蔵穴付近から土師器杯形土器破片とともに出土した。轡の銜および引手金具および鞍具の破片である。平安時代の竪穴住居出土の馬具の出土例は少なく、一般農耕集落内での馬のあり方には不明な点が多い。調査例の増加が待たれるところである。群馬県における集落出土馬具の現況と鉄製品の金属学的解析は第4章に記載した。

2. 1・2区の遺構

I区3号住居

位置 Jb・c-13・14グリッド 写真 PL1
 形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸4.35m、短軸3.68mである。

面積 12.34㎡ 方位 N-110°-E
 床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面には小さな凹凸があるが、住居中央部は堅く締まっていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は14cm、左側は18cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は50cmである。焚口部前面の床面には灰が比較的厚く広がっていた。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ100cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに

傾斜していた。燃焼部には複数個体の土師器壺形土器が破片の状態で出土している。

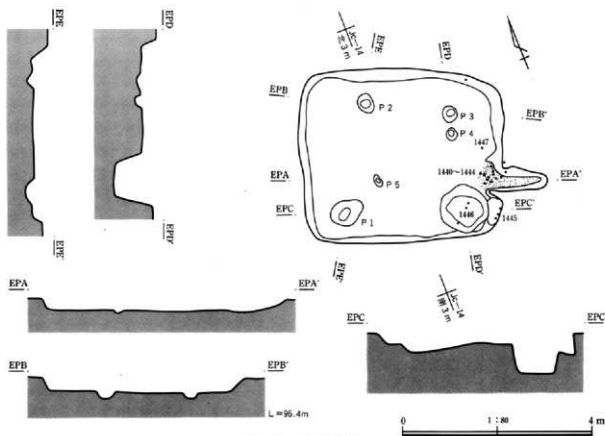
柱穴 3本の主柱穴と考えられる柱穴と2本の小穴が検出された。各主柱穴の規模(長径×短径×深さ)は、P1:72×55×18cm、P2:41×34×13cm、P3:34×30×9cmである。小穴はP3のすぐ南にP4:27×25×15cm、P1とP3を結ぶ線上にP5:28×14×8cmが検出された。主柱穴のうちP1は住居対角線上にのりが、P2・P3は対角線からずれた位置にある。各主柱穴を結んだ形は南東隅の柱穴があるとすれば、台形を呈する。

貯蔵穴 住居南東隅に長径0.97m、短径0.93m、深さ0.62mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は平らで、埋没土中から鉄製釘が出土している。

遺物 200点あまりの遺物が出土している。電前では土師器壺形土器の複数個体の破片が出土した。

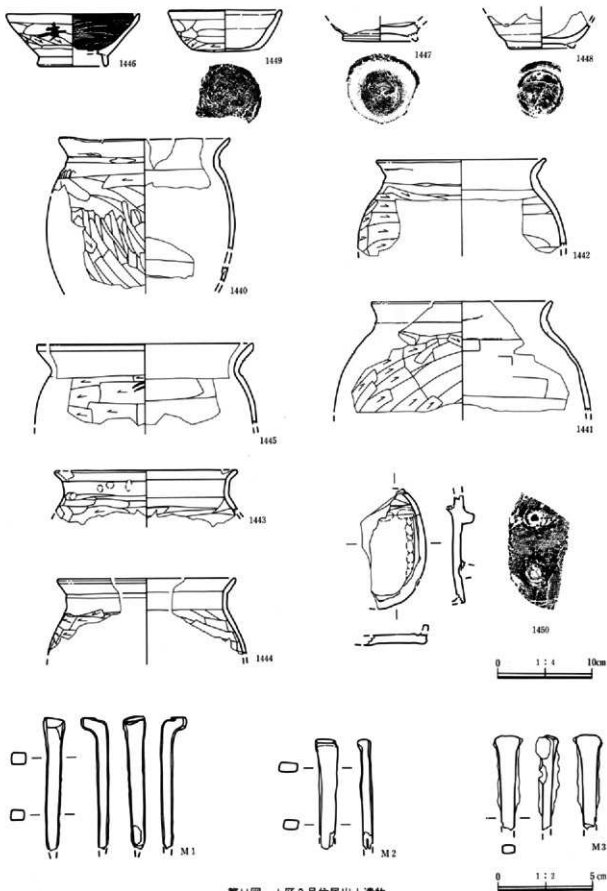
(遺物観察表: 1・2頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考える。



第10図 I区3号住居

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第11図 1区3号住居出土遺物

I区4号住居

位置 J a・b-16グリッド 写真 PL 2
重複なし

形状 対角線をほぼ南北方向にする長方形を呈す。周壁は東壁がやや膨らんで掘られているほかはほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.65m、短軸3.40mである。

面積 9.88㎡ 方位 N-112°-E
床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。床面は、貯蔵穴の周囲がやや高まっているほかはほぼ平坦である。中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖がほとんど張り出さない形態の竈である。焚口幅は35cmで、竈前面の床面には灰が広がっていた。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ100cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、高さ20cmの段をもって平坦な煙道部に続いていた。煙道東端部はピット状に掘られていたが、煙出しの施設としての構造を調査で確認することはできなかった。

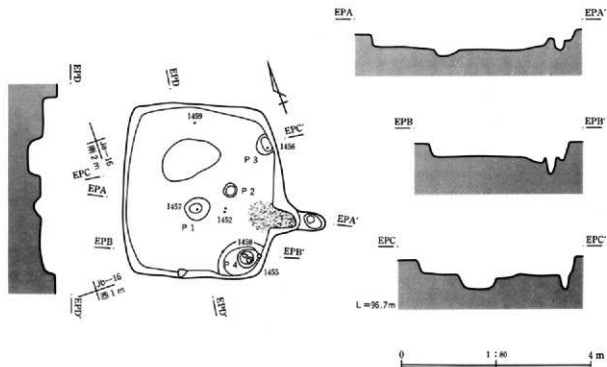
柱穴 床面中央部の主柱穴は検出されなかったが中央部に小ピット2本と、東壁の北端と南端に1本ずつ壁柱穴が2本検出された。各柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P 1 : 48×53×14cm、P 2 : 25×29×5cm、P 3 : 32×43×31cm、P 4 : 36×47×35cmである。中央部の柱穴のうちP 2は浅く、柱穴の可能性は少ないと考えられる。

貯蔵穴 竈右脇の、住居南隅に長径1.05m、短径0.70m、深さ0.36mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の東壁際には柱穴と考えられるP 4が掘り込まれていた。この柱穴の上から須恵器杯形土器(1458)・土器器台付壘形土器(1455)が出土した。

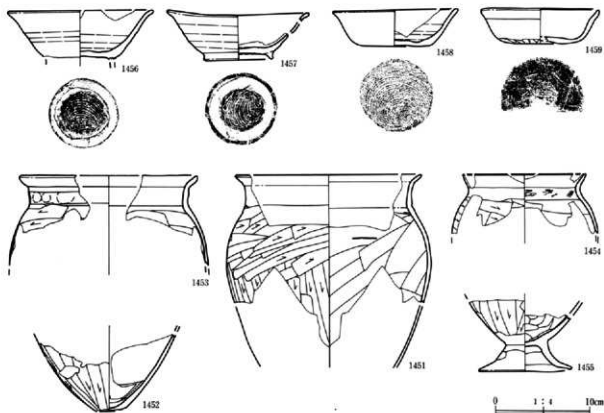
遺物 200点あまりの遺物が出土している。床面から出土した遺物は多くない。竈前では土器器台付壘形土器(1452)が床面からほぼ床面直上で出土している。また、北東隅P 3の上から須恵器高台付碗形土器(1456)が床面から18cm上で出土している。

(遺物観察表：2頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第12図 I区4号住居



第13図 Ⅰ区4号住居出土遺物

Ⅰ区5号住居

位置 Is・t-17グリッド 写真 PL3
重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。南東隅を除く三隅は角張って掘られている。南東隅は貯蔵穴が張り出しているため、丸く膨らんでいる。規模は長軸3.6m、短軸2.7mである。

面積 9.06㎡ 方位 N-107-E

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前から中央部にかけて硬化していた。また、西半部の床面直上には、炭化材が数本残されていた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖がほとんど張り出さない形態の竈である。燃焼部の壁や竈前面の壁は良く焼けて土質化していた。焚口幅は64cmである。煙道部は壁から外へ40cm突出していた。燃焼部はほぼ平ら

で煙道部に向かって立ち上がっていた。燃焼部には土師器壘形土器(1461)の破片がまとめて出土した。

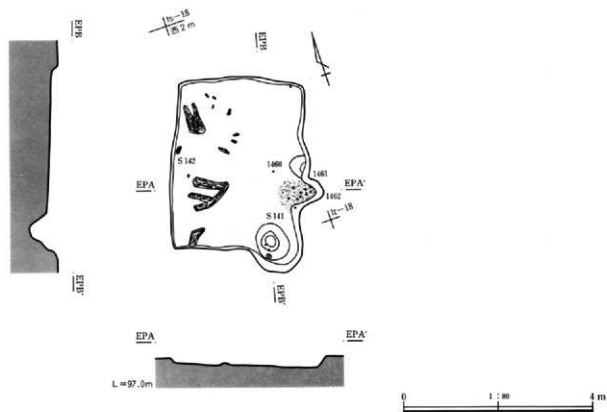
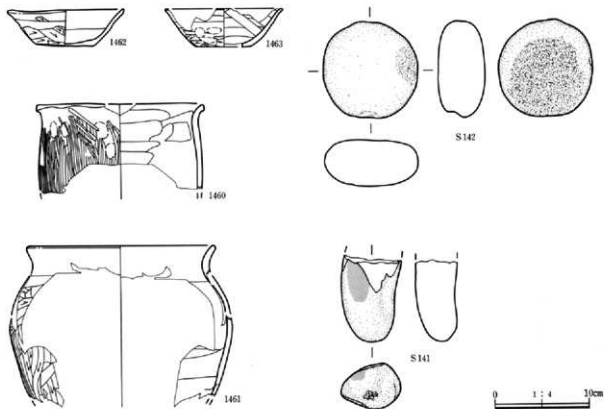
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.8m、短径0.64m、深さ0.41mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴は南壁ラインより40cmほど南側に張り出して掘られていた。埋没土中から土師器杯形土器(1462)が完形で出土している。

遺物 70点あまりの遺物が出土している。床面近くの遺物は少ない。竈燃焼部からは前述のように土師器壘形土器(1461)が灰面直上で出土しているが、竈前面の床面上には土師器壘形土器(1460)が出土している。(遺物観察表：2・3頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第14図 1区5号住居と出土遺物

I 区 9 号 住 居

位置 Mb・c-1・2 グリッド

写真 PL4~6

重複 1区10号住居を切っている。西壁が6号住居竈(8世紀後半)を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は、東・南壁はほぼ直線的に掘られているが、西・北壁はやや膨らんで掘られている。四隅のうち、南東隅は角張って掘られているが、残りの三隅は丸い。規模は長軸6.70m、短軸4.82mである。

面積 27.39㎡ 方位 N-91°E
埋没土 軽石粒・焼土粒・炭化物粒・暗黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。電前から中央部の床面はやや高まって硬化しており、灰が床面を覆っていた。灰の範囲は壁方向に平行する方で、長軸方向は主柱穴の間、短軸方向は住居東半に限られていた。周辺部の床面は平坦で、あまり固くない。

竈 東壁に竈が2基検出されたが、竈崩落土の堆積状況から、南側の竈が古く、北側の竈が住居廃絶時の竈と考えられる。

南竈 東壁中央よりやや南側に付設されていた。燃焼部の焼土や灰は剥落しており、袖等の竈の構造については明らかでない。現状では東壁から突出する掘り形が残存しているのみである。その規模は、奥行き67cm、最大幅120cmである。掘り形の左右の壁際には電構築に使用されたとみられる礫が1~2個残されていた。

北竈 東壁中央よりやや北側に付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈である。焚口の両側には、小さな角礫があり、その礫に渡すように角柱状の礫が横たわった状態で出土した。この角柱状の礫は、焚口部の天井になっていたものと考えられる。焚口の幅は50cmである。燃焼部の壁は焼けて、焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ75cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は、上方に傾斜していた。燃焼部には

土師器蓋形土器(1466)が竈にかけられたと考えられる状態で出土した。また、電前向かって右側と、左脇に扁平な礫が出土した。これらの礫については機能・用途等不明である。また、電左脇にP3が検出されている。P3の規模は74×86×15cmで、他の主柱穴に比べて大きくて浅い。位置も竈に近接していることを考えると柱穴とは考えにくい。竈との関連もつかめなかった。

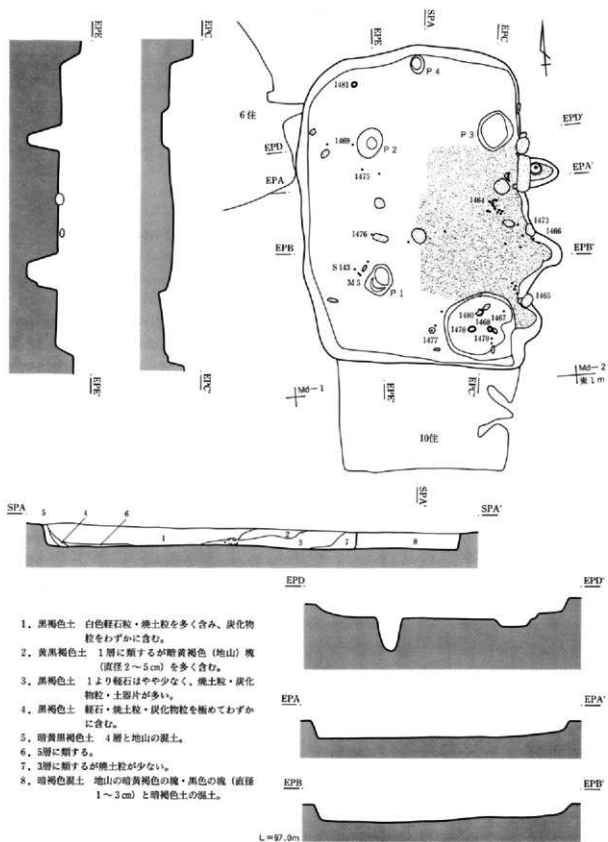
周溝 検出されなかった。

柱穴 2本の主柱穴(P1・P2)と、1本の壁柱穴(P4)が検出された。また竈左前に小穴(P3)が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:50×66×68cm、P2:53×65×69cmである。主柱穴P1・P2の位置は住居対角線上にあり、両柱穴を結んだ線は西壁に平行する。東壁沿いには主柱穴は検出されなかった。北東隅には前述したP3が竈寄りに検出されただけであり、南東隅には柱穴は検出されていない。壁柱穴P4は北壁際のほぼ中央にあり、規模は(短径×長径×深さ)30×39×30cmである。これに対応する南壁沿いの柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴 住居南東隅に長径1.5m、短径1.35m、深さ0.23mの不定円形の貯蔵穴が検出された。断面形は皿形で底面は平らであるが、東側の外形が不定型であった。底面近くからは土師器杯形土器(1468)・須恵器杯形土器(1479)・土師器杯形土器(1480)が出土した。

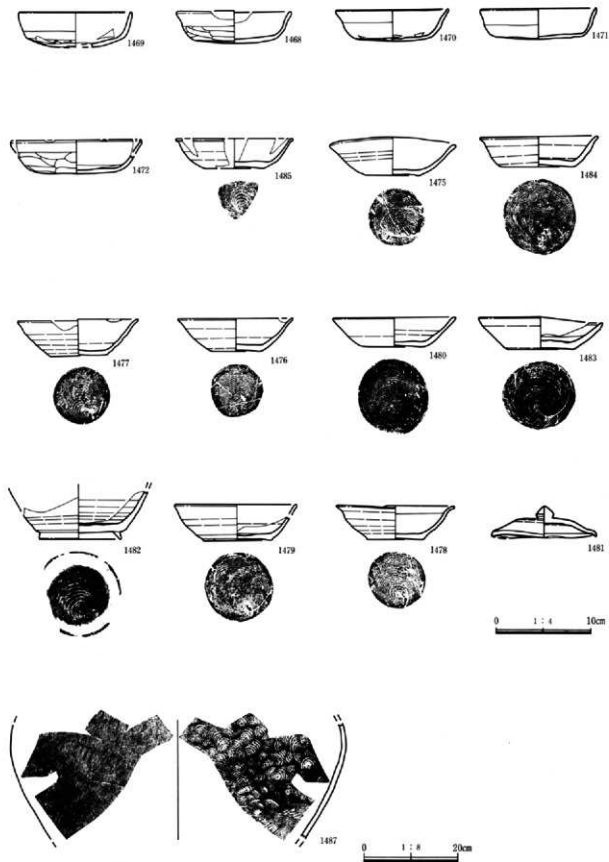
遺物 1900点あまりの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物が多い。主柱穴P1の西脇床面直上で、鉄製針(M5)と石製紡錘車(S143)が出土した。この紡錘車には「東」「羊」「美」の3文字が刻書されている。また、埋没土中から紡錘車(S144)と碁石(S145)が出土した。土師器杯形土器(1469)や須恵器杯形土器(1475・1476・1477)・須恵器蓋形土器(1481)は、住居西壁から南壁にかけての柱穴や貯蔵穴付近に床面直上で出土した。(遺物観察表3・4頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。

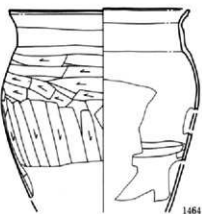
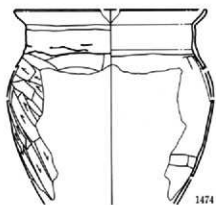
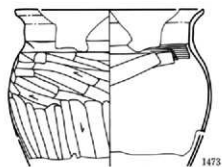
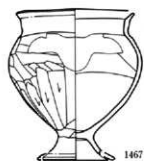
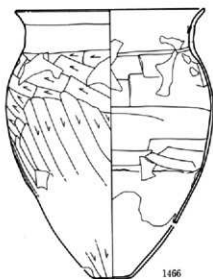
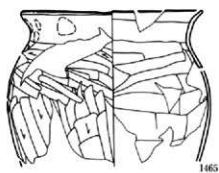


第15図 1区9号住居

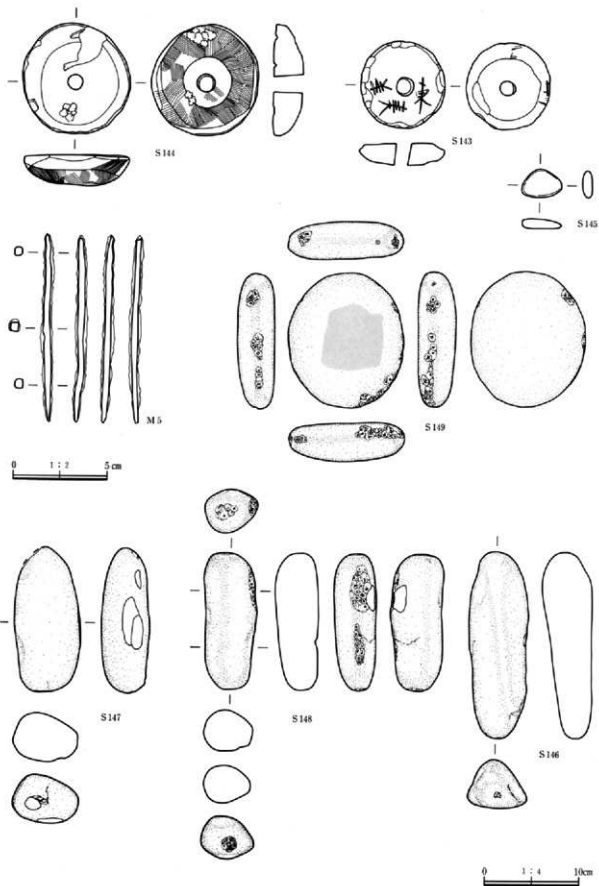
第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第16図 I区9号住居出土遺物(1)



第17図 1区9号住居出土遺物(2)



第18図 1区9号住居出土遺物(3)

I区II号住居

位置 Lr・s-7・8グリッド 写真 PL7
重複 住居中央部を新しい細い溝で、西壁付近を4号溝で切られている。

形状 西壁をほぼ南北方向にする方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁および西壁は確認できなかった。図示したのは床面が明確に確認できる範囲である。唯一確認できた南東隅は丸く掘られていた。確認できた住居の規模は、西壁長3.8m、南壁長3.6mである。

面積 測定不可 電方位 N-110°-E
床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。

間く締まった床面の硬化は確認できなかった。電前の床面には灰が広がっていた。

電 東壁ほぼ中央に電が付設されていた。住居

壁より内側に電袖が張り出さない形態の電で、焚口幅は70cmである。燃焼部の壁はやや焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ75cm突出していた。燃焼部はやや窪み、煙道部に緩やかに傾斜していた。

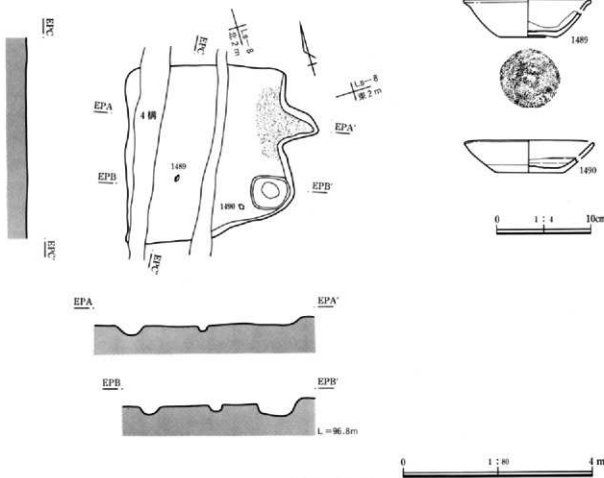
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居南東隅に長径0.83m、短径0.70m、深さ0.28mの楕円形の貯蔵穴が検出された。断面形はほぼ箱形で、底面は丸くやや窪んでいた。

遺物 30点あまりの遺物が出土している。ほとんど小破片で、埋没土中から出土した。図示した須恵器杯形土器(1489・1490)は、住居南部の床面から数cm上で出土した。(遺物観察表：4頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第19図 I区II号住居と出土遺物

Ⅰ区12号住居

位置 L s・t-3グリッド 写真 PL7
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は、やや膨らんで掘られている東壁を除いて、ほぼ直線的に掘られている。四隅はやや角張っている。貯蔵穴のある南東隅はやや丸い。規模は長軸4.58m、短軸3.70mである。

面積 15.24㎡ 方位 N-103°-E
 床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。

住居中央部の床面は、やや高まり硬化していた。

電 東壁中央より南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電袖がやや張り出す形態の電で、右側は12cm、左側は8cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は80cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。燃焼部は10cmほど円形に窪んでおり、煙道部に緩やかに傾斜していた。電煙道部からは土師器甕形土器(1491)が出土している。

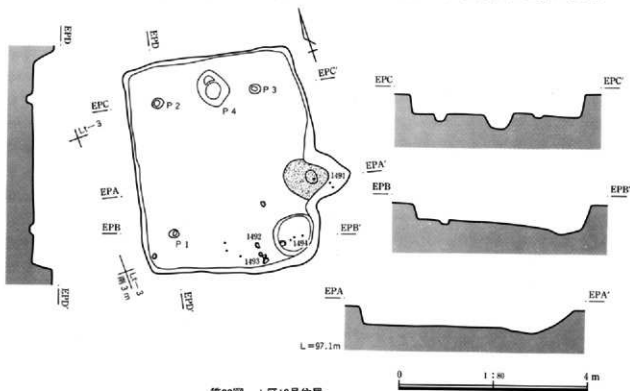
周溝 検出されなかった。

柱穴 3本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規

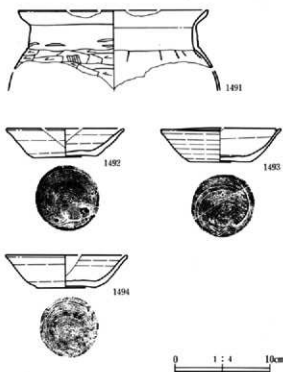
模(短径×長径×深さ)は、P1:20×22×9cm、P2:24×24×13cm、P3:20×24×8cmである。南東隅にもう1本主柱穴があったと考えられるが、貯蔵穴に隣接した位置には確認できなかった。南東隅の主柱穴を想定すれば、各主柱穴を結んだ形は長方形を呈する。主柱穴のうちP1・P2は住居対角線上にのるが、P3はやや西にずれている。また、北壁沿いのP2とP3の中間の位置にP4が検出された。大きさは、P4:62×76×34cmである。壁に近い北側に段をもつピットで、他の主柱穴より深い。住居に伴うかどうか確定できないが、その位置から考えると、住居の施設と考えられることも可能である。貯蔵穴 住居南東隅に、長径0.90m、短径0.84m、深さ0.13mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面はやや丸くなっている。底面近くから、須恵器杯形土器(1494)が出土した。

遺物 160点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物であるが、貯蔵穴周辺と南壁沿いに須恵器杯形土器(1492・1493)が集中して出土している。(遺物観察表:4・5頁)

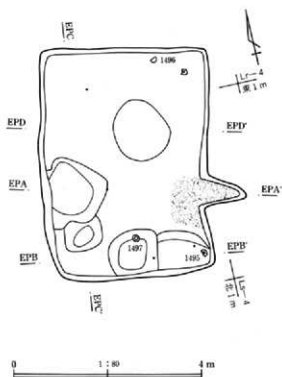
所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考える。



第20図 Ⅰ区12号住居



第21図 I区12号住居出土遺物



第22図 I区14号住居

I区14号住居

位置 LQ・r-3・4グリッド

写真 PL7・8

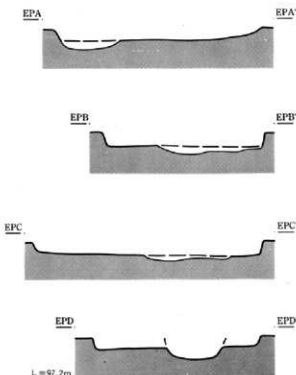
形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸4.88m、短軸3.60mである。

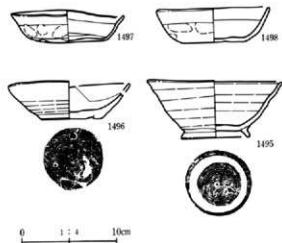
面積 15.17㎡ 竈方位 N-112°-E

床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。

床面は、中央部を中心に硬化していた。南壁・西壁沿いの土坑群は、床面下の掘り形とみられる。土を充填して床面をつくっていたと考えられるが、明瞭に硬化した床面が確認できなかったため、土坑状の掘り形となった。中央部の土坑については、住居との前後関係は明らかにできなかった。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ88cm





第23図 1区14号住居出土遺物

突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。電内からの遺物の出土はない。周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅の掘り形が貯蔵穴の可能性があるが、床面下施設との区別が調査時には確認できなかった。

遺物 10点ほどの遺物が出土しているが、ほとんど床面に近い遺物である。土師器杯形土器(1497)と須恵器高台付椀形土器(1495)は住居南壁沿いの床面直上で出土した。須恵器杯形土器(1496)は床面から少し上で出土した。土師器杯形土器(1498)は、住居を切る、土坑埋没土中で出土した破片である。

(遺物観察表：5頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。

1区15号住居

位置 Lr・s-4・5グリッド

写真 PL8・9

重複 北東隅が16号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁のうち北壁・西壁はほぼ直線的に掘られているが、東壁・南壁は膨らんでいる。四隅は丸い。規模は長軸4.60m、短軸3.50mである。

面積 13.12㎡ 電方位 N-99°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・炭化微粒と、少量の黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から48cm掘り込んで床面となる。床面は電前を中心にして硬化しており、灰・焼土が広がっていた。電左前には土坑が掘り込まれているが、住居に伴うかどうか確定的ではない。土坑の規模は長径0.85m、短径0.70mで、不整形円形である。

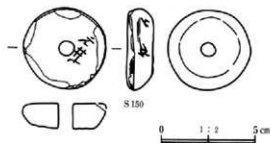
電 東壁中央よりやや南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出す形態の電で、右側は32cm、左側は16cmほどの袖の基部が残存していた。右袖部や電前面には角礫が散乱して出土したが、これらは袖を構築していた部材と考えられる。(そのうちのS193はPL9に掲載) 焚口幅は60cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていなかった。煙道部は壁から外へ62cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

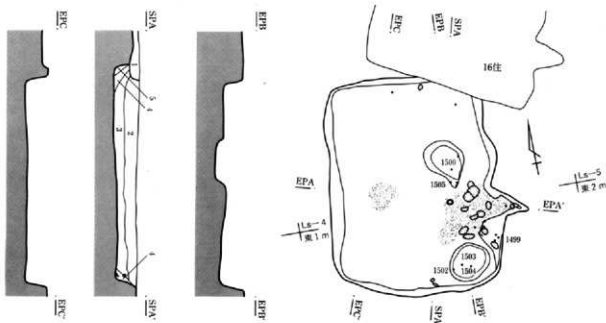
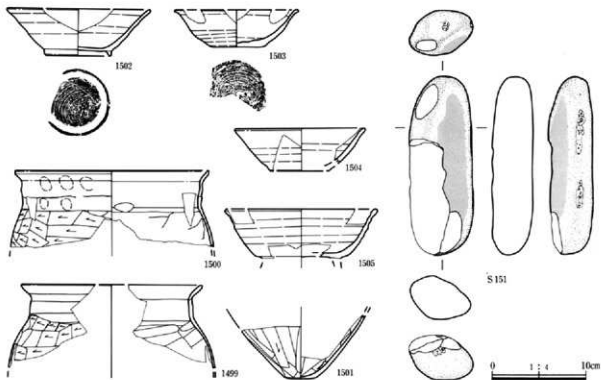
柱穴 検出されなかった。

遺物 320点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。床面近くの遺物は電及び貯蔵穴周辺に集中して出土している。貯蔵穴からは須恵器高台付椀・杯形土器(1502・1503・1504)が底面から数cm上で出土している。電周辺および電左の土坑から土師器甕形土器(1499・1500・1501)が出土した。(遺物観察表：5頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第24図 1区15号住居出土遺物(1)



1. 黒褐色土 浅間C軽石を多く含む。焼土粒をわずかに含む。暗黄褐色土(地山)塊(直径0.5~4cm)を含む。
2. 黒褐色土 浅間C軽石・焼土粒を多く含むが1層より量は少ない。地山塊の量が少ない。
3. 黒褐色土 浅間C軽石・焼土粒・地山塊をわずかに含む。
4. 黒褐色土 軽石はわずかである。
5. 地山



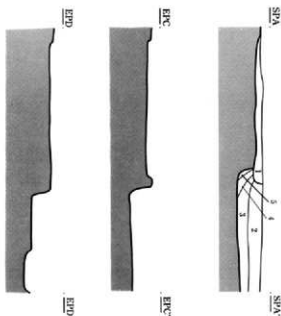
第25図 1区15号住居と出土遺物(2)



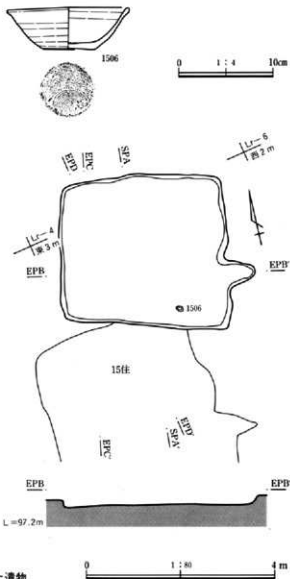
I区16号住居

位置 L・q・r-4・5グリッド 写真 PL9
 重複 南壁が15号住居の北東隅を切っている。
 形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.55m、短軸3.20mである。
 面積 10.19㎡ 電方位 N-110°-E
 埋没土 わずかな軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。
 床面 遺構確認面から19cm掘り込んで床面となる。
 竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電軸が張り出さない形態の竈

で、焚口幅は43cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ60cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部はほぼ直立に近く立ち上がる。竈の出土遺物はない。
 周溝 検出されなかった。
 柱穴 検出されなかった。
 貯蔵穴 検出されなかった。
 遺物 30点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中の出土であるが、図示した須恵器杯形土器(1506)は、南壁近くの床面直上で出土した。(遺物観察表：5頁)
 所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 浅間C軽石を多く含む。焼土粒をわずかに含む。暗黄褐色土(地山)塊(直径0.5~4cm)を含む。
2. 黒褐色土 浅間C軽石・焼土粒を多く含むが1層より量は少ない。地山塊の量が少ない。
3. 黒褐色土 浅間C軽石・焼土粒・地山塊をわずかに含む。
4. 黒褐色土 軽石はわずかである。
5. 地山



第26図 I区16号住居と出土遺物

1区17号住居

位置 L s-6・7グリッド

写真 P L10・11

重複 西壁が76号住居を切っている。電前の床面を2号溝が切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸6.08m、短軸5.4mである。

面積 31.17㎡ 方位 N-104°-E

埋没土 軽石・焼土粒を含む暗褐色土で埋没。

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。小さな凹凸はあるが、ほぼ平坦で中央部から竈にかけて硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。

住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は76cm、左側は44cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は84cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は2号溝に切られているために遺存状態は悪いが、壁から外へ12cm突出した部分が確認されたのみである。燃焼部はほぼ平らで、煙道端部は斜め上方に立ち上がっていた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 3本の主柱穴と考えられる位置に小ピットが検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:40×56×32cm、P2:84×60×56cm、P3:38×36×60cmである。主柱穴のうちP2は住居対角線上にのるが、P1・P3は対角線に並行するが、南東方向に30cmほどずれている。主柱穴を結んだ形は、南東隅の主柱穴が2号溝に切られているとすれば、長方形を呈する。これらの主柱穴とは別に西壁および南壁の壁沿いに小ピットが検出された。西壁の小ピットは壁柱穴の可能性が高いと考えられる。南壁のピットはやや大きく南西隅のピットの上には石が検出されている。南壁沿いのピットについては性格は不明である。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 76号住居と合わせて1400点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物で

ある。床面近くの遺物は土師器甕形土器(1221)のほかは壁沿いに出土している。須恵器瓶・杯形土器(1235・1236)は西壁際床面直上で、土師器杯形土器(1226~1230)は竈右脇の南東隅に集中して床面直上で出土した。また土師器甕形土器(1222)が竈燃焼部から竈使用面直上で出土した。

(遺物観察表:6・7頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。なお、本住居南側に方形の掘り形をもつ遺構の一部が重複して検出されたが、住居として判断しなかった。この遺構の底面には大きな凹凸が著しく床面も検出できなかった。

1区76号住居

位置 L s-8グリッド 写真 P L10

重複 東半部の多くを17号住居に切られている。

形状 方形を呈すると考えられるが、全体形状は不明である。西壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は西壁長5.4mである。

面積 測定不可 西壁方位 N-11°-E

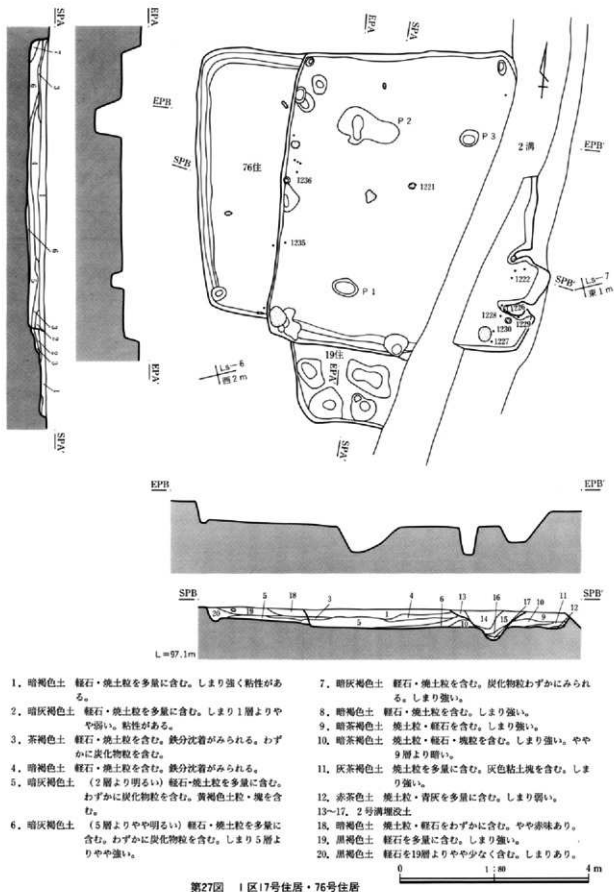
埋没土 軽石・焼土粒を多量に含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面は平坦であった。西壁付近しか残存していないので特に硬化した部分は認められなかった。17号住居に切られている部分には、5~8cmの段が確認できる。

周溝 西壁と北壁に、幅16~20cm、深さ5cmの周溝が検出された。南西隅には直径20cm、深さ13cmの小円形ピットがあり、西壁周溝はそこで途切れて南壁沿いに周溝は検出されなかった。

遺物 17号住居と合わせて1400点あまりの遺物が出土しているが、本住居に伴うと判断できる遺物はきわめて少ない。

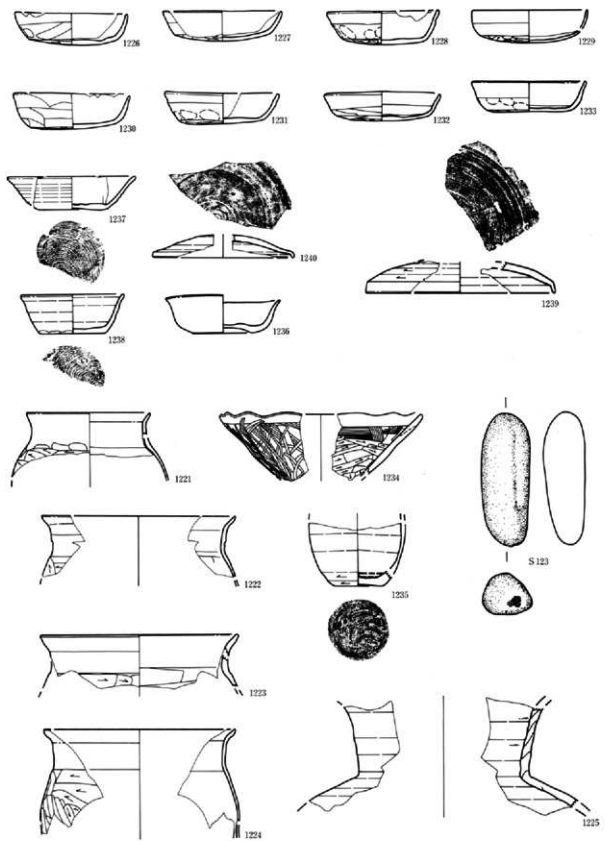
所見 出土遺物から住居の時期を考えることは困難であるが、住居の検出状況から17号住居の時期(9世紀中葉)を遡らないことがわかる。



1. 暗褐色土 軽石・焼土粒を多量に含む。しまり強く粘性がある。
2. 暗灰褐色土 軽石・焼土粒を多量に含む。しまり1層よりやや弱い。粘性がある。
3. 茶褐色土 軽石・焼土粒を含む。鉄分沈着がみられる。わずかに炭化物粒を含む。
4. 暗褐色土 軽石・焼土粒を含む。鉄分沈着がみられる。
5. 暗灰褐色土 (2層より明るい) 軽石・焼土粒を多量に含む。わずかに炭化物粒を含む。黄褐色土粒・塊を含む。
6. 暗褐色土 (5層よりやや明るい) 軽石・焼土粒を多量に含む。わずかに炭化物粒を含む。しまり5層よりやや強い。
7. 暗灰褐色土 軽石・焼土粒を含む。炭化物粒わずかにみられる。しまり強い。
8. 暗褐色土 軽石・焼土粒を含む。しまり強い。
9. 暗茶褐色土 焼土粒・軽石を含む。しまり強い。
10. 暗茶褐色土 焼土粒・軽石・塊粒を含む。しまり強い。やや9層より暗い。
11. 灰茶褐色土 焼土粒を多量に含む。灰色粘土塊を含む。しまり強い。
12. 赤茶色土 焼土粒・青灰を多量に含む。しまり弱い。
- 13~17. 2号溝増設土
18. 暗褐色土 焼土粒・軽石をわずかに含む。やや赤味あり。
19. 黒褐色土 軽石を多量に含む。しまり強い。
20. 黒褐色土 軽石を19層よりやや少なく含む。しまりあり。

第27図 1区17号住居・76号住居

2. 1・2区の遺構



第28図 Ⅰ区17号住居出土遺物

I区18号住居

位置 LP・Q-6・7グリッド 写真 PL11
重複 東壁南半分を2号溝に、北部を1号溝に切られている。

形状 東壁を南北方向にする正方形に近い台形を呈する。周壁はやや凹凸をもって掘られており、特に西壁は膨らんでいた。四隅は角張っている。規模は北壁長4.02m、東壁長4.0m、西壁長3.85mである。

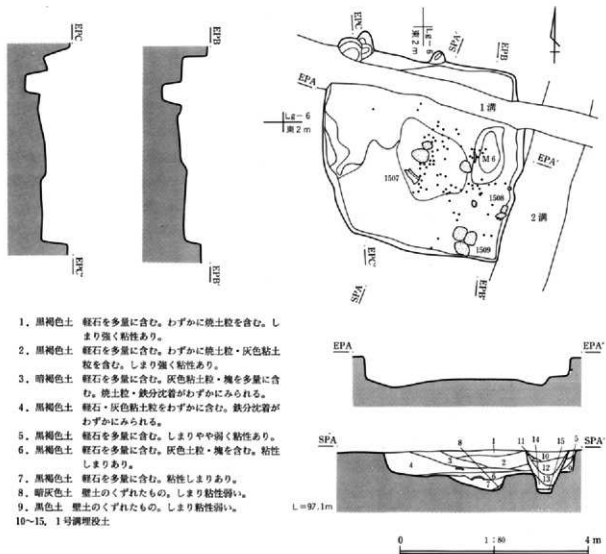
面積 14.43m² 北壁方位N-104°E
埋没土 軽石・焼土を含む黒褐色土で埋まっていた。
床面 遺構確認面から59cm掘り込んで床面となる。床面は南半部が窪んでおり、特に中央部は直径1.2~1.4mの不整形形状に落ち込んでいる。その窪

み部分を中心にして須恵器大形甕形土器の破片がまわって出土したが、埋没土層の観察からは後からの掘り込みではなく、住居床面の窪みと判断された。

竈 東壁中央より少し南側に、竈と考えられる焼土や灰の分布範囲が確認された。竈の大部分は2号溝に切られているために全体形状は不明である。竈の右脇と考えられる部分に角礫が2個残されていた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 主柱穴と考えられるピットは検出されなかった。一方、北壁沿いに小ピットが2カ所確認されたが、他の壁沿いに確認できないことから、壁柱穴の可能性は薄い。



1. 黒褐色土 軽石を多量に含む。わずかに焼土粒を含む。しまり強く粘性あり。
2. 黒褐色土 軽石を多量に含む。わずかに焼土粒・灰色粘土粒を含む。しまり強く粘性あり。
3. 暗褐色土 軽石を多量に含む。灰色粘土粒・塊を多量に含む。焼土粒・鉄分沈着がわずかにみられる。
4. 黒褐色土 軽石・灰色粘土粒をわずかに含む。鉄分沈着がわずかにみられる。
5. 黒褐色土 軽石を多量に含む。しまりやや弱く粘性あり。
6. 黒褐色土 軽石を多量に含む。灰色土粒・塊を含む。粘性しまりあり。
7. 黒褐色土 軽石を多量に含む。粘性しまりあり。
8. 暗灰色土 壁土のくずれたもの。しまり粘性弱い。
9. 黒色土 壁土のくずれたもの。しまり粘性弱い。
- 10~15. 1号溝埋没土

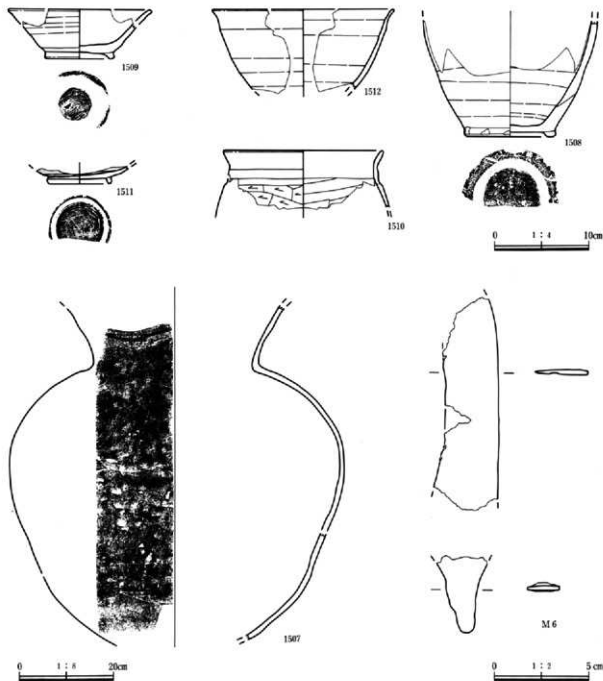
第29図 I区18号住居

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 590点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物である。本住居で最も特徴的な遺物は中央部の窪みに散乱した須恵器大形壺形土器(1507)である。床面直上の破片もあり、本住居に伴う遺物と考えたい。他に図示した須恵器高台付長頸壺形土器(1508)も竈前床面直上で出土し

た。須恵器高台付碗形土器(1509)は南東隅で床面上16cm、鉄製鎌(M6)は中央部床面上16cmで出土している。また、大きな円鏝・角鏝が南壁際と中央部にまともまって出土しているが、資料化することはできなかった。(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第30図 1区18号住居出土遺物

Ⅰ区28号住居

位置 Lk-1・2グリッド 写真 PL12
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.97m、短軸3.07mである。
 面積 11.23㎡ 竈方位 N-100°-E
 床面 遺構確認面から10cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ66cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾

斜していた。竈前面と燃焼部には、角礫と土師器変形土器の破片が散乱した状態で出土している。

周溝 検出されなかった。

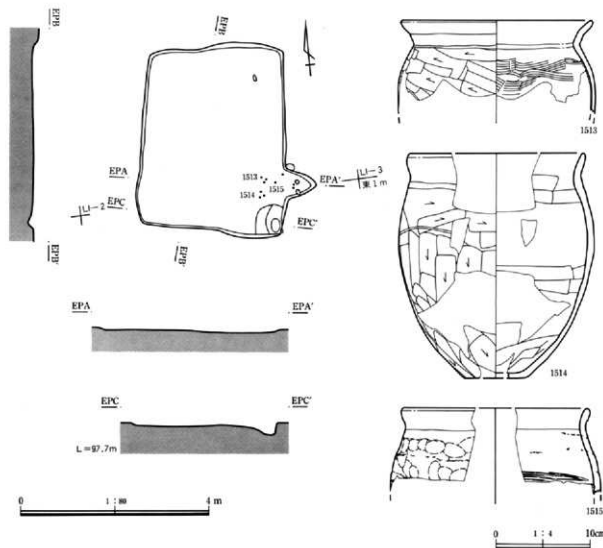
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.65m、短径0.55m、深さ0.17mの楕円形の貯蔵穴が検出された。東・南両壁に接して掘られていた。

遺物 30点あまりの遺物が出土している。多くは埋没土中の出土遺物であるが、竈周辺には床面に近い土師器変形土器(1513・1514・1515)が出土した。

(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第31図 Ⅰ区28号住居と出土遺物

I区31号住居

位置 I i・j—18・19グリッド写真 PL12
重複 重複はないが、住居の西部分が削平されており、西壁は確認できなかった。

形状 西壁が明確でないため確定はできないが、長軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.20m、短軸推定2.35mである。

面積 測定不可 遺方位 N-90°-E
床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は35cm、左側は23cmほどの袖の基部が残存していた。袖基部上には角礫が残っており、袖を構築した粘土の中には、角礫が芯として入れられていたと見られる。焚口幅は20cmである。燃焼部の壁は焼けていたと考えられるが、剥落した焼土が部分的に

残っているのみであった。煙道部は壁から外へ32cmほど突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部奥のやや左側に礫が置かれており、その上に須恵器高台付椀形土器が伏せられた状態で出土している。

周溝 竈左の東壁の一部から北壁にかけて下幅16cm、深さ4cmほどの周溝が検出された。

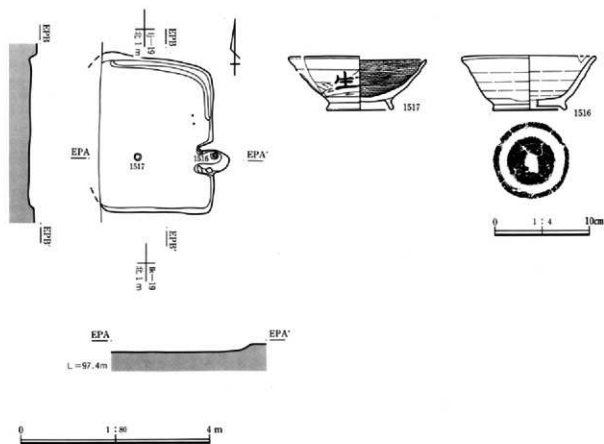
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 4点の土器と4点の礫が出土している。礫は竈構築材の一部と考えられる。住居ほぼ中央部には土師器椀形土器(1517)が床面直上で、竈燃焼部には須恵器高台付椀形土器(1516)が出土している。1517には「生」の墨書があった。

(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第32図 I区31号住居と出土遺物

I 区 32号 住居

位置 I h・i-16グリッド 写真 P L12
重複 女堀に北壁を切れている。

形状 北壁が未確認であるので断定はできないが、長軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁は南壁がやや膨らんでいるほかは、ほぼ直線的に掘られている。南西の隅は角張っており、南東隅は円形の貯蔵穴が張り出しているの、丸くなっている。規模は残存西壁長2.8m、短軸2.35mである。

面積 測定不可 方位 N-110°-E
床面 遺構確認面から7cm掘り込んで床面となる。中央部の埋没土床面は硬化していたが、周辺部の床面の硬化は顕著でない。

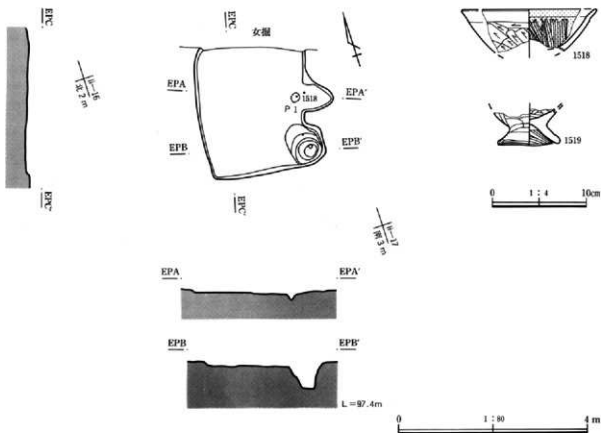
竈 東壁に竈が付設されていた。北壁が未確認であるので、竈が東壁のどの位置にあるのかは断定できない。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形

態の竈で、焚口幅は54cmである。燃焼部の壁は焼土化した部分がほとんど残っていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ50cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。焚口部中央に18×20×13cmの小ピット(P1)が検出されたが、住居に伴うものかは不明である。

周溝 柱穴 検出されなかった。
貯蔵穴 住居南東隅に、長径0.85m、短径0.75m、深さ0.56mの円形の貯蔵穴が検出された。断面形はすり鉢状で、底面には直径30cmほどの平坦面がある。
遺物 20点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示したのは土師器碗形土器(1518)で、竈燃焼部で出土した。土師器台付壺形土器(1519)は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：7頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第33図 I 区32号住居と出土遺物

I区33号住居

位置 I 1-11グリッド 写真 PL13

重複 東壁のほぼ中央を新しい方形土坑で切られていた。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的角張っていた。規模は長軸3.9m、短軸3.45mである。面積 10.12㎡ 方位 N-112°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

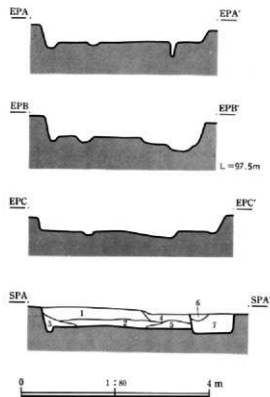
床面 遺構確認面から42cm掘り込んで床面となる。中央部が楕円形にやや窪んでいるが、他は平坦で、柱穴を結んだ線の内側が硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていたと推定されるが、土坑に切られているので、規模や全体形状は不明である。

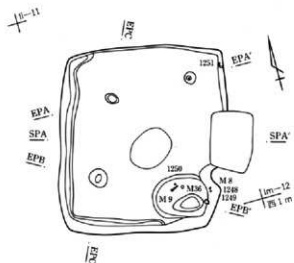
周溝 西壁および南壁の西半分の壁沿いに幅18cmほどの周溝がL字形に検出された。

柱穴 3本の支柱穴と推定されるピットが検出されたが、P3の位置がやや外側にずれている。各支柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:37×40×12cm、P2:21×30×5cm、P3:27×27×7cmである。これらの支柱穴は住居対角線上にのるが、P2・P3を結んだ線は北壁と平行でなく、P3の位置は一般的でない。また、後述するように南東隅の貯蔵穴の中にピットがあり、これも支柱穴の可能性がある。これとP3を結んだ線は東壁と平行になる。P2とともに住居対角線の上のっている。これらの支柱穴および貯蔵穴内のピットを結んだ形は台形を呈する。

貯蔵穴 南東隅に長径1.16m、短径0.9mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内は深さ0.1mのところ



第34図 I区33号住居



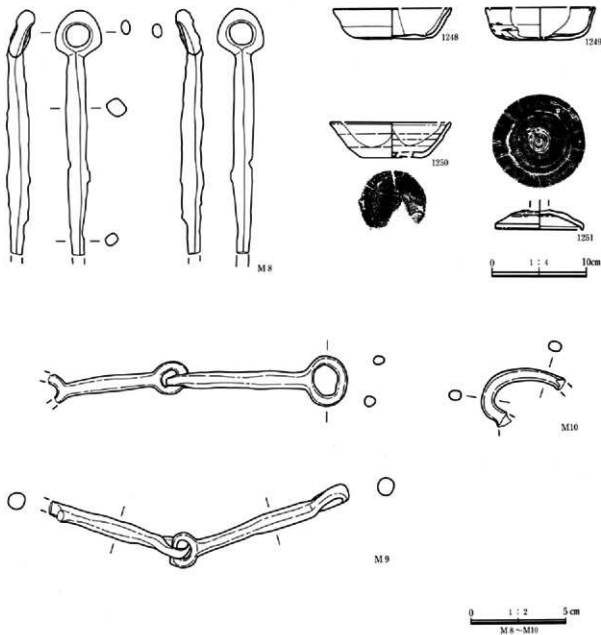
1. 黒褐色土 軽石粒・地山粒を含む。浅間C軽石を多く含む。白色軽石も散見される。ややサラサラしている。小石も混じる。
2. 黒褐色土 軽石粒・地山粒を含む。浅間C軽石・白色軽石の量は少ない。小石も混じる。ややサラサラしている。
3. 黒褐色土 軽石粒・地山粒を含む。白色の軽石は含まない。地山塊(直径1cm)含む。
4. 黒褐色土 1層に類するが、土はサラサラせずしまりをもつ。
5. 暗褐色土 軽石粒・焼土粒・地山粒・小石を含む。
6. 暗褐色土 暗褐色土に地山・塊・黒褐色土が混じる。
7. 暗褐色土 暗褐色土に地山・塊・黒褐色土が混じる。焼土粒・塊がわずかにはいる。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物

に平らな段があり、壁際に楕円形の小ピット（34×63×13cm）があった。このピットは先述のように柱穴の配置から考えると主柱穴の可能性も否定できない。平らな面のやや上位には鉄塊系遺物(M36・P L 13)、馬具轡引手金具(M8)と轡銜(M9)が出土し土師器杯形土器(1248・1249)や須恵器杯形土器(1250)と同様な出土状況で出土している。

遺物 320点あまりの遺物が出土している。前述のように、貯蔵穴付近で鉄製品と鉄塊および土器類が集中して出土した。また、北東隅で須恵器蓋形土器(1251)が壁際で出土した。(遺物観察表：8頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。貯蔵穴付近では鉄塊が出土したが、住居内に鉄生産関連遺構は検出されなかった。



第35図 I区33号住居出土遺物

I区 35号住居

位置 I i・j-14グリッド 写真 PL14
重複 34号住居の北壁を切っている。36号住居の
南西隅を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周
壁はほぼ直線的に掘られている。北西・北東の二隅
は角張っているが、貯蔵穴の掘られている南東隅は
丸い。規模は長軸4.04m、短軸3.40mである。

面積 10.98㎡ 竈方位 N-91°-E
床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。
床面は平坦で、中央部を中心にして硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されてい
た。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈
で、焚口幅は72cmである。燃焼部の壁はほとんど焼
けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ58cm
突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は上方

に傾斜していた。竈からは土師器壘形土器の破片が
出土した。

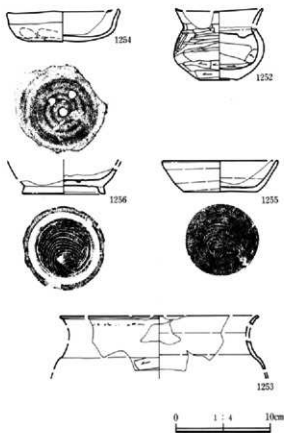
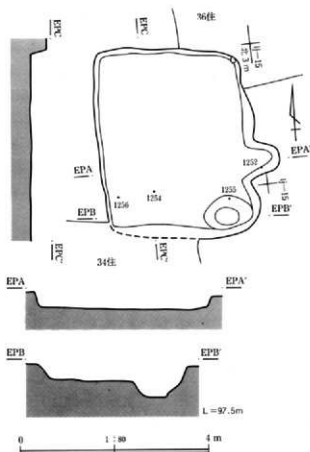
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径1.04m、短径0.72m、深さ
0.32mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内か
らは須恵器杯形土器(1255)が伏せられた状態で出土
した。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとん
ど埋没土中の出土遺物であるが、前述した貯蔵穴の
須恵器杯形土器のほか、南西部で土師器杯形土器
(1254)・須恵器高台付椀形土器(1256)が床面直上で
出土している。竈からは土師器壘形土器(1252)が使
用面直上で出土した。(遺物観察表：8頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えら
れる。



第36図 I区35号住居と出土遺物

Ⅰ区36号住居

位置 I h・i-14・15グリッド 写真 PL14
重複 南西隅を35号住居に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。北西隅は丸いが、北東および南東隅は角張っていた。規模は長軸3.94m、短軸2.78mである。

面積 測定不可 方位 N-91°-E
床面 遺構確認面から17cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部が硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電軸が張り出す形態の竈で、右側は14cm、左側は10cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は34cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。煙道部は壁から外へ40cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。竈右脇の床面には土師器菱形土器(1566)が、竈前に

は須恵器杯形土器(1520)が出土したが、燃焼部には遺物は出土しなかった。

周溝 検出されなかった。

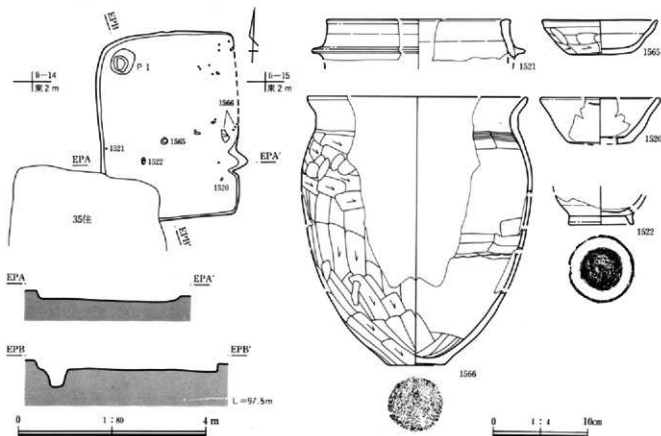
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居北西隅に長径0.52m、短径0.48m、深さ0.38mの楕円形の小土坑が検出された。本遺跡では、竈右脇の住居南東隅に貯蔵穴が検出される場合が多いが、本住居の小土坑は北西隅である。本土坑がいわゆる貯蔵穴といえるかどうかは不明と言わざるを得ない。

遺物 60点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。前述した竈周辺の遺物のほかに住居中央部の床面から、土師器杯形土器(1565)・須恵器高台付椀形土器(1522)が出土した。

(遺物観察表：8頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第37図 Ⅰ区36号住居と出土遺物

I区 38号住居

位置 Ii・j-11グリッド 写真 PL15
重複 39号住居の北半分と、50号住居の北西隅を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.62m、短軸3.28mである。

面積 10.96㎡ 方位 N-88°-E

床面 遺構確認面から17cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、周辺部は余り硬化していない。中央部には、長径2.28m、短径0.53m、深さ0.33mのだるま形の土坑が検出されたが、これは床下の土坑と考えられる。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。竈の前には焼土や袖の構築材が崩落して堆積していた。竈焚口部の両側にも、焼土・粘土の固まりがあった。この固まりが竈袖の基部の可能性もあるが

調査では確定できなかった。焚口幅は48cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。煙道部は壁から外へ114cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

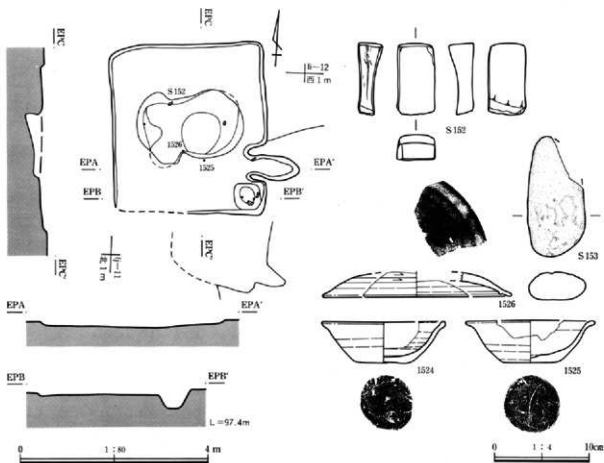
周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.55m、短径0.53m、深さ0.26mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。底面はやや丸いが、住居隅の形態を意識して、方形に掘られている。貯蔵穴中からは須恵器杯形土器(1524)が落ち込むように出土している。

遺物 120点あまりの遺物が出土している。住居中央部から須恵器杯形土器(1525)や蓋形土器(1526)が出土している。磁石(S152)は、中央部床面直上で棒状鏢(S153)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表：9頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第38図 I区38号住居と出土遺物

I区 39号住居

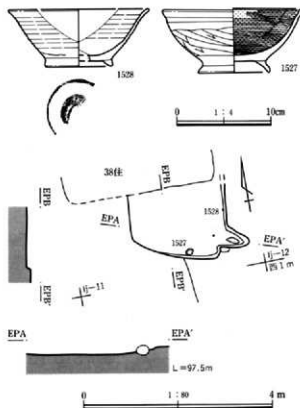
位置 I i-11グリッド 写真 PL15
重複 50号住居の北西部を切っている。北半分を38号住居に切られている。

形状 北半分を切られているために全体形状は不明である。規模は東西長2.04mと推定される。

面積 測定不可 方位 N-102°-E
床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。床面はやや凹凸があるが、硬化しており、電の灰も広がっていた。

電 東壁の最も南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の電で、焚口幅は33cmである。燃焼部の壁は焼けてやや焼土化していた。燃焼部は壁から外へ55cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していたが、ほぼ中央部に円礫が埋設されていた。礫は、電焚口部右脇にも立てられていた。

周溝 検出されなかった。



第39図 I区39号住居と出土遺物

柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 20点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物であるが、南壁際で土師器高台付椀形土器(1527)、東壁沿いで須恵器高台付椀形土器(1528)が床面直上で出土している。

(遺物観察表：9頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。

I区 45号住居

位置 J a-8・9グリッド 写真 PL15・16
形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや膨らんで掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.80m、短軸3.15mである。

面積 8.35㎡ 方位 N-96°-E
床面 遺構確認面から31cm掘り込んで床面となる。床面は、中央部に多少の凹凸があるが、ほぼ平坦である。全体に硬化していた。

電 東壁中央より南側に電が付設されていた。電前には、焼土や構築粘土が崩れて堆積していた。写真(P L 16)では袖のように見えるが、崩落した電構築土と考えられる。したがって電の形態は、住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の電であったと考えたい。焚口幅は55cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に斜めに傾斜していた。電の出土遺物はない。

周溝 電左横の東壁から北壁・西壁の北2/3に、コの字状に幅10~18cm、深さ2~8cmの周溝を検出。

柱穴 検出されなかった。

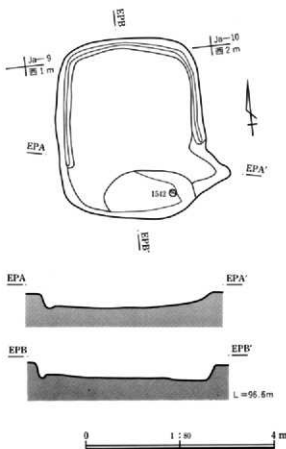
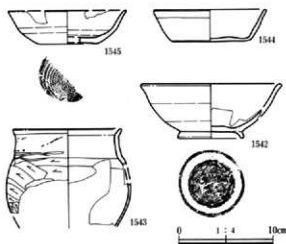
貯蔵穴 明確な貯蔵穴は検出されなかったが、電右脇の南壁に沿って、長径1.9m、短径1.02m、深さ0.31mの不定楕円形に窪んでいる部分があった。底面には須恵器椀形土器(1542)が出土した。

遺物 240点あまりの遺物が出土している。多くは埋没土中からの出土遺物である。図示したのは、前述した須恵器椀形土器(1542)のほか、土師器壺形土器(1543)・土師器杯形土器(1544)・須恵器杯形土器

(1545)で、いずれも埋没土中の出土である。

(遺物観察表：9頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第40図 I区45号住居と出土遺物

I区46号住居

位置 Ij-16グリッド 写真 PL16

重複 52号住居の南側の大半を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。東壁・南壁はほぼ直線的に掘られている。西壁は後世の擾乱によって壊されており、確認できなかった。また、北壁の一部は先行する52号住居との識別が困難で確認できなかった。四隅は丸い。規模は長軸3.57m、短軸2.63mである。

面積 8.14㎡ 竈方位 N-97°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から27cm掘り込んで床面となる。床面は平坦である。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は37cm、左側は50cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は70cmである。燃焼部の壁はよく焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ30cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には土師器甕形土器や須恵器椀形土器の破片が重なるような状態で出土している。また、竈の壁に沿って、円礫が出土している。竈構築材の一部と考えられるが、竈構造を示唆するような出土状況は見られなかった。

周溝 柱穴 検出されなかった。

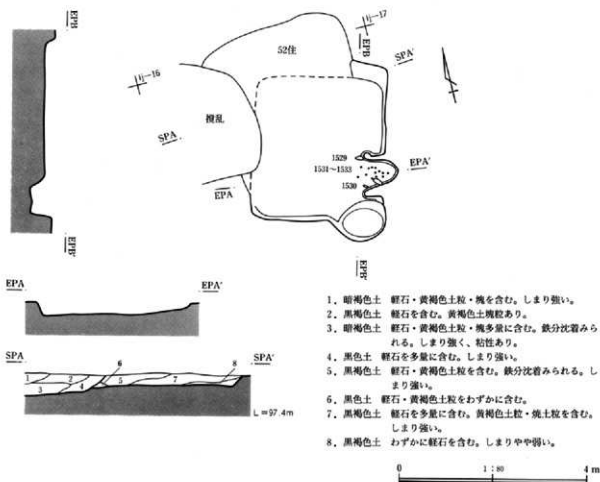
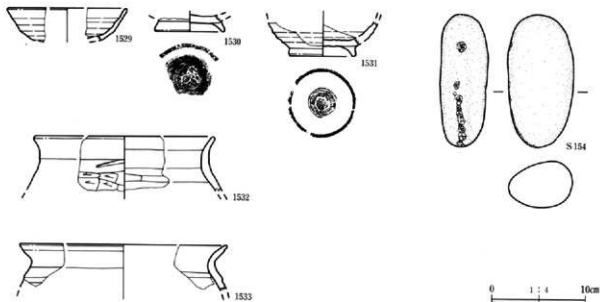
貯蔵穴 南東隅に長径1.05m、短径0.9m、深さ0.45mの楕円形の貯蔵穴が検出された。住居の平面形よりも張り出すような形態である。底面はほぼ平らであったが、出土遺物はない。

遺物 20点あまりの遺物が出土しているが、そのほとんどが竈からの出土遺物である。図示した遺物は、竈内で出土した土師器甕形土器(1532・1533)、酸化焰焼成の須恵器椀形土器(1529・1530・1531)である。敲石(S154)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表：9・10頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第41図 I区46号住居と出土遺物

I区53号住居

位置 I s・t-14グリッド 写真 P L16・17

重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は乱れており、平行四辺形に近い形となっている。これは調査時の確認状況によると考えられる。本来的には、北東隅と南西隅がもう少し広がるものと考えられる。規模は長軸4.15m、短軸2.40mである。

面積 8.63㎡ 電方位 N-93°-E

床面 遺構確認面から25cm掘り込んで床面となる。床面には凹凸があり、特に南壁沿いは床面が下がっていた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は52cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ38cm突出していた。燃

焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

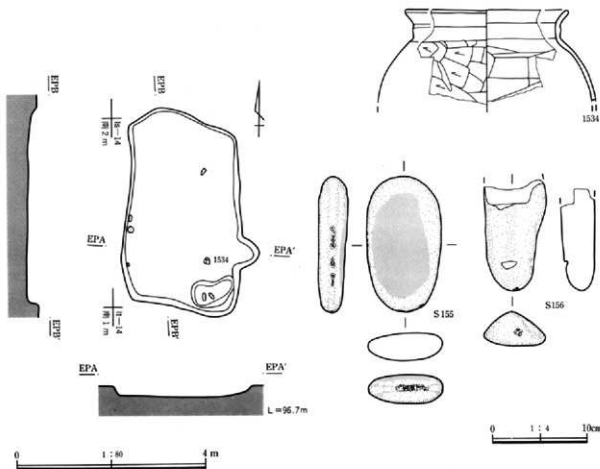
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈右側の南東隅がわずかに窪んでいるが、定型的に掘られた貯蔵穴といえるかどうか疑問が残る。窪みの大きさは長径0.97m、短径0.50m、深さ0.11mである。

遺物 30点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器壺形土器(1534)は、竈前の床面直上から出土した。また、石器が南東隅の窪みや西壁沿いに出土しているが、使用痕跡の明確なものとは図示した2点の蔽石・磨石(S155・S156)である。

(遺物観察表：10頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



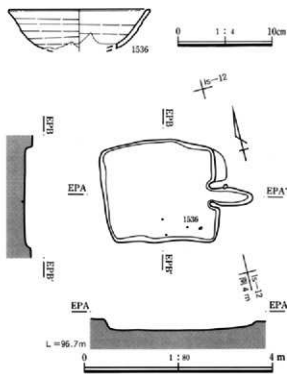
第42図 I区53号住居と出土遺物

I区 54号住居

位置 I s-11・12グリッド 写真 P L 17
 形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁の東端はやや窪んで不定形である。調査時には壁の立ち上がり全体に不明瞭であった。四隅は角張っていた。規模は、長軸2.45m、短軸2.15mである。

面積 4.53㎡ 方位 N-102°-E
 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で中央部を中心にして硬化していた。

竈 東壁のほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は18cm、左側は20cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は20cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。焼土の残存も少なかった。煙道部は壁から外へ61cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部左壁上方に円礫が1個出土しているが、竈の構築に関係した遺物かどうかは断定できなかった。



第43図 I区54号住居と出土遺物

遺物 70点あまりの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物が大半である。図示した須恵器杯形土器(1536)も南東部の床面直上で出土した。

(遺物観察表:10頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。

I区 56号住居

位置 J a-11グリッド 写真 P L 17
 重複 57号住居の南東部を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、四隅は丸い。竈左脇の張り出し部は住居に伴わないと考えられる。規模は長軸4.14m、短軸3.08mである。

面積 10.62㎡ 方位 N-94°-E
 埋没土 軽石粒・焼土粒・炭化物粒を含む暗褐色土。
 床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は45cmである。燃焼部の壁は上部に焼土化した部分が残っているが、全体にはあまり焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ65cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に斜め上方に傾斜していた。燃焼部には土師器菱形土器の破片が出土した。

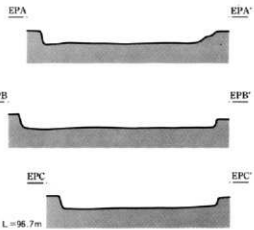
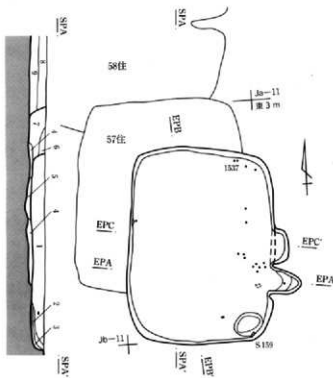
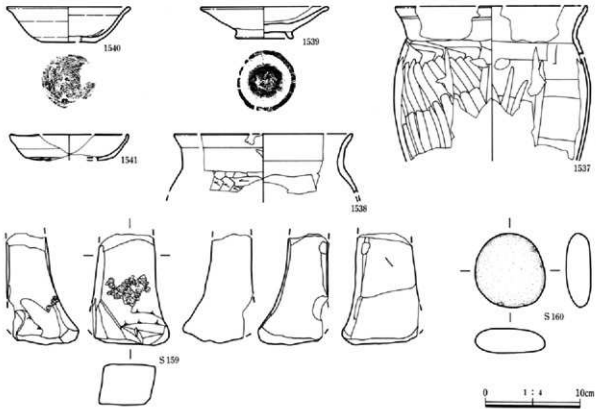
貯蔵穴 南東隅に長径0.69m、短径0.40m、深さ0.21mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 590点あまりの遺物が出土している。そのほとんどは埋没土中の出土遺物である。竈周辺は土師器菱形土器の破片がまとめて出土したが、図示できなかった。床面近くの遺物は壁沿いに出土している。図示した土師器菱形土器(1537)は北壁沿いに出土した。また、南東隅で砥石(S 159)が出土した。

(遺物観察表:10頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



1. 暗褐色土 軽石・小礫を多量に含む。焼土粒を含む。非常にしまり強い。
2. 暗褐色土 軽石・焼土粒を少量含み、しまり弱い。
3. 暗褐色土 軽石・焼土粒を少量含み、しまり弱く、ややフカフカしている。
4. 暗褐色土 56号住居粘土。軽石・焼土粒をわずかに含む。
- 5~7. 1区57号住居埋設土
- 8・9. 1区58号住居埋設土

第44図 1区56号住居と出土遺物

Ⅰ区 59号住居

位置 J a・b-7・8グリッド 写真 PL18

重複 69号住居の東部を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈するが、正方形に近い平面形である。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸4.33m、短軸4.03mである。

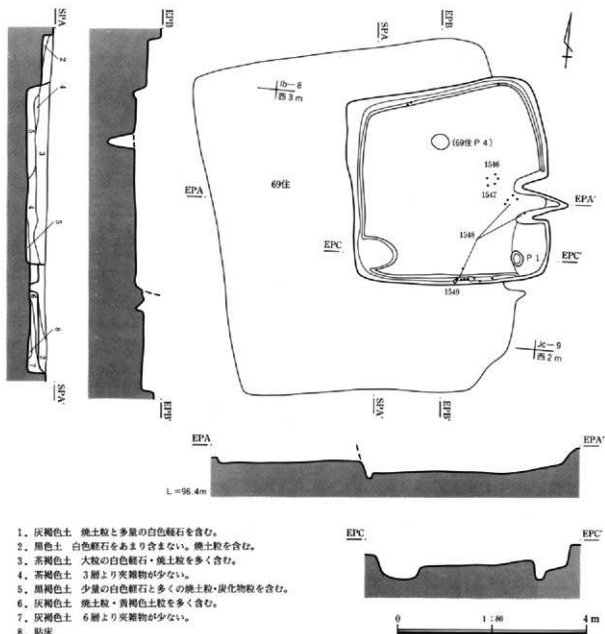
面積 14.24m²

方位 N-87°-E

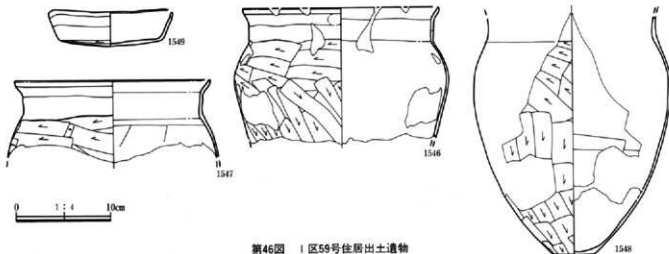
埋没土 軽石粒と焼土粒・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から32cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、竈右側は床面が明確にとらえられなかった。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は60cm、左側は60cmほどの袖の基部が残存して



第45図 Ⅰ区59号住居



第46図 I区59号住居出土遺物

いた。焚口幅は65cmである。燃焼部の壁の遺存状態はあまり良くなかったが、燃焼部上部は住居壁部分に固く焼土化した部分が良く残っていた。煙道部は壁から外へ40cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は斜め上方に立ち上がっていた。焚口部には土師器壺形土器の破片が散らばっていた。

周溝 竈右脇を除く四周の壁沿いに幅12cm、深さ4～10cmほどの周溝が検出された。

柱穴 主柱穴は検出されなかったが、南東隅に小ピットが検出された。小ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:27×32×40cmである。P1の周辺部は、床面が明確でなく、調査時には貯蔵穴のように窪んだ状態になった。

貯蔵穴 前述のように竈右脇に窪みがあるが、貯蔵穴とは断定できなかった。また、住居南西隅に直径0.7m、深さ0.4mの円形の土坑が検出されたが、これも貯蔵穴とは断定できなかった。

遺物 580点あまりの遺物が出土している。そのほとんどは埋没土中の出土遺物である。床面に近い遺物は竈周辺と北壁・南壁の周溝上に出土している。竈周辺では、土師器壺形土器(1546・1547・1548)が床面直上で出土している。また、南壁周溝上から土師器杯形土器(1549)が落ち込んだ状態で出土した。

(遺物観察表:10・11頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考える。

I区62号住居

位置 I t-7・J a-7グリッド

写真 P L 18

重複 63号住居の南東隅を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸3.8m、短軸2.9mである。

面積 9.90㎡ 竈方位 N-77°E

埋没土 軽石粒・焼土粒を含む褐色土・黒色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から38cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部が硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に短い竈袖が張り出す形態の竈で、右側は17cm、左側は19cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は53cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ61cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は斜め上方に立ち上がっていた。燃焼部には出土遺物はない。

周溝 検出されなかった。

柱穴 2本の主柱穴が検出された。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:24×28×14cm、P2:20×29×9cmである。主柱穴のうちP1は住居対角線上にのるが、P2は対角線から少し東へずれているので、主柱穴を結んだ線は西壁に平行しない。

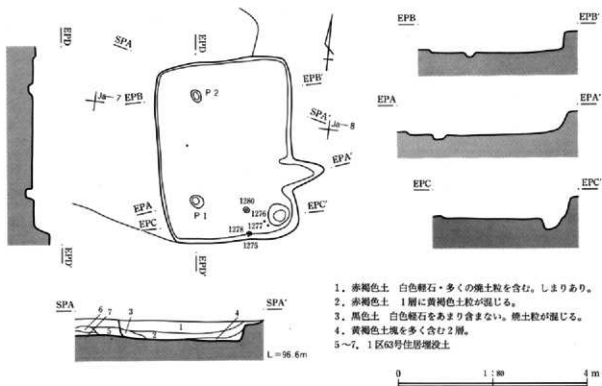
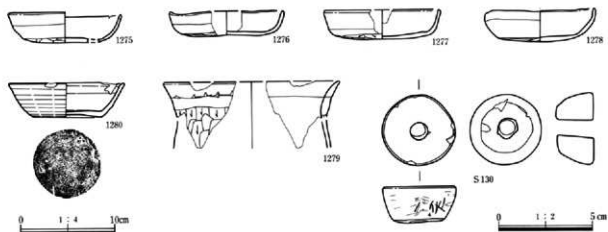
第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物

東壁沿いの柱穴は検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に直径0.45m、深さ0.18mの円形の貯蔵穴が検出された。西側の縁には遺物が集中して出土した。

遺物 310点あまりの遺物が出土している。ほとんどは埋没土中の出土遺物である。床面近くの遺物は、住居南東部、貯蔵穴の西縁に集中して出土した。こ

こでは杯形土器がまとまっている。須恵器杯形土器(1280)は貯蔵穴の前の床面直上で出土した。土器杯形土器(1275・1276・1277・1278)は南壁際で重なるように出土した。また、埋没土中から石製紡錘車(S130)が出土している。(遺物観察表:11頁) 所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



1. 赤褐色土 白色軽石・多くの焼土粒を含む。しまりあり。
2. 赤褐色土 1層に黄褐色土粒が混じる。
3. 黒色土 白色軽石をあまり含まない。焼土粒が混じる。
4. 黄褐色土塊を多く含む2層。
- 5～7. 1区63号住居増設土

第47図 1区62号住居と出土遺物

I区67号住居

位置 J e-3グリッド 写真 PL19
 重複 66号住居南西隅を切っている。73号住居を切っている。重複する66号住居は7世紀代の住居であり本住居に先行するが、調査時に新旧関係を誤認し、本住居より先に66号住居を完掘してしまった。したがって、本住居北壁から東壁の北半分を記録することができなかった。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は東西壁の一部しかとえられなかったが、ほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的丸い。規模は長軸推定4.15m、短軸推定3.25mである。

面積 測定不可 方位 N-102°-E
 埋没土 少量の軽石粒と焼土粒・炭化物粒を含む茶褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。顕著な硬化面は確認できなかった。

電 東壁中央より南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電軸が張り出さない形態の電で、

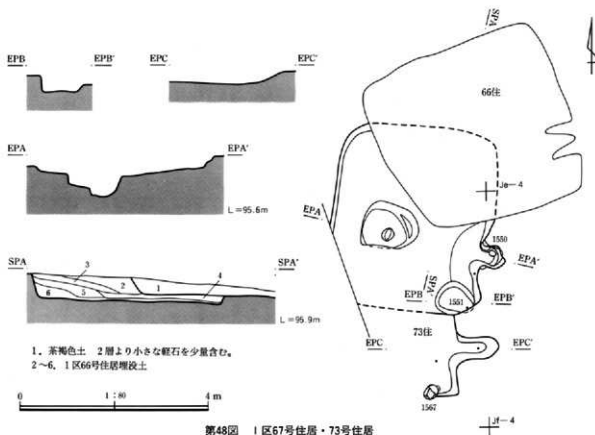
焚口幅は40cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていなかった。壁際には壁が残されており、電構築材の可能性が高い。煙道部は壁から外へ53cm突出していた。燃焼部はほぼ平ら。煙道部は2段に立ち上がる。周溝 検出されなかった。

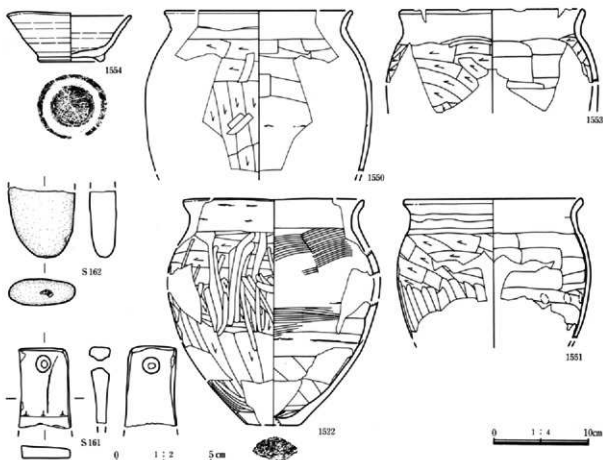
柱穴 主柱穴は検出されなかったが、住居中央部の土坑内に1本の小ピットが検出された。ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:22×28×床面から40cmである。土坑の性格は不明であり、このピットが柱穴かどうかは断定できない。

貯蔵穴 南東隅に長径0.4m、短径0.35m、深さ0.21mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 350点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した遺物のうち、土師器変形土器(1550)は電燃焼部から、1551は貯蔵穴内から出土した。礫石(S161)は埋没土中から出土した。(遺物観察表:11・12頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。





第49図 I区67号住居出土遺物

I区73号住居

位置 Je-3グリッド 写真 PL19

重複 北部を67号住居に切られている。

形状 竈とその周辺しか確認できなかった。

面積 測定不可 竈方位 N-84°-E

床面 床面は竈周辺の灰や焼土部分のみ検出。

竈 東壁に竈が付設されていたが、位置は明確にできなかった。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は20cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

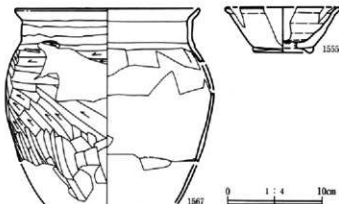
遺物 竈周辺に20点あまりの遺物が出土している。

土師器壺形土器(1567)は住居南東隅で、須恵器高台

付椀形土器(1555)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表:12頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考える。



第50図 I区73号住居出土遺物

I 区 74号住居

位置 Ji-6・7グリッド 写真 PL20

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は短軸2.8m、東壁長3.4m、西壁長2.7mである。

面積 7.65㎡ 電方位 N-88°-E

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は52cmである。燃焼部の壁は顯著に焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜し、東端で立ち上がる。

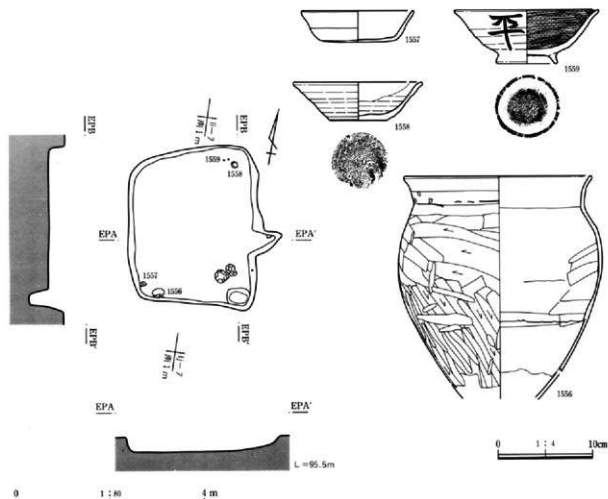
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.44m、短径0.36m、深さ0.41mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 180点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物であるが、北西隅および南壁沿いに床面近くの遺物が出土している。北西隅の遺物は須恵器杯形土器(1558)と黒色土器碗形土器(1559)で、1559には墨書「平」がみられる。南西隅には土師器杯形土器(1557)と、土師器甕形土器(1556)が出土した。また貯蔵穴北には土師器甕形土器が床面直上で出土したが、口縁部や底部が欠損しており、図化しなかった。(遺物観察表：12頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第51図 I区74号住居と出土遺物

I区5号土坑

位置 J a-19グリッド 写真 P L21
重複 なし

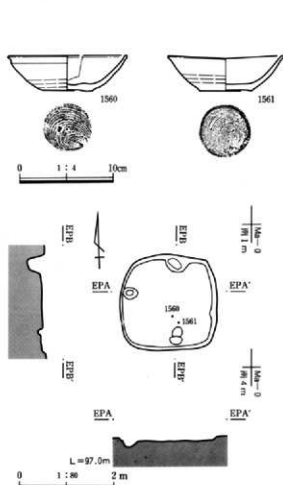
形状 東西壁を南北方向にする隅丸正方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、四隅は丸い。規模は東西2.08m、南北2.00mである。

面積 3.14m² 東壁方位 N-1'-E

底面 遺構確認面から8cmほど掘り込んで底面となる。底面はほぼ平坦であるが、北・西・南壁沿いには直径26~40cmほどの小ピットが掘られている。

遺物 40点あまりの遺物が出土している。底面近くの遺物は、南壁沿いのピット脇に須恵器杯形土器(1560・1561)と、図示できなかったが土師器壺形土器の破片が出土している。(遺物観察表：12頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の土坑と考えられる。



第52図 I区5号土坑と出土遺物

I区39号土坑

位置 I j-10・11グリッド 写真 P L21

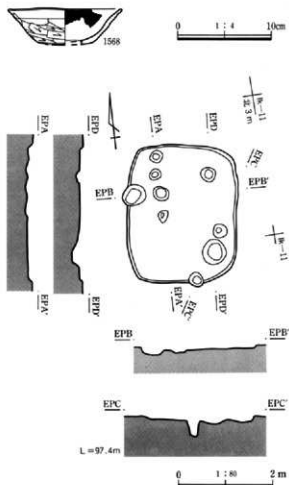
形状 長軸を南北方向にする隅丸長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが東西壁の中央はややへこんでいる。四隅は丸く掘られている。規模は長軸2.87m、短軸2.33mである。

面積 5.71m² 東壁方位 N-10'-E

埋没土 軽石粒・炭化物粒・焼土粒をわずかに含む黒褐色土で埋まっていた。底面 遺構確認面から6~8cm掘り込んで床面となる。

遺物 35点あまりの遺物が出土しているが、底面に近い遺物はない。図示した土師器杯形土器(1568)は埋没土中から出土した。(遺物観察表：12頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の土坑と考えられる。



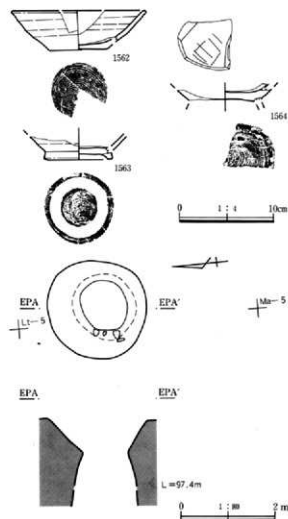
第53図 I区39号土坑と出土遺物

I区10号土坑(井戸)

位置 Lt-4・5グリッド 写真 PL21
重複なし

形状 直径2.1mの円形を呈する。断面形は確認面から0.8mの所から上部が逆ハの字に開く筒形である。確認面から1.5mまで掘り下げたが、湧水が著しく底面を確認することができなかつたので、深さは不明である。筒形になっている部分はややえぐれたようになっている。ハの字に開いた部分には礫が数個出土したが、井戸の構築にかかわるものかどうかは判断できなかった。

遺物 35点の遺物が出土している。いずれも埋没土中の遺物である。土師器杯形土器の破片が多かつたが、



第54図 I区10号土坑と出土遺物

たが、いずれも小破片で図示できなかった。図示したのは須恵器杯形土器(1562)・須恵器高台付碗形土器(1563・1564)で、1564には底部内面に井桁状の刻線が入っている。(遺物観察表:12頁)

所見 埋没土中からの遺物であるが、時期的にまとまっていることから、9世紀後葉の井戸と考えたい。しかし、調査できたのは井戸の上層部分であり、厳密には井戸の時期は断定できない。

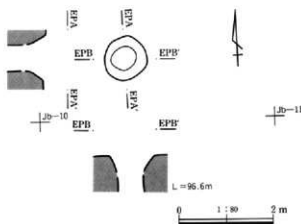
I区51号土坑

位置 Ja-10グリッド 写真 PL21
重複なし

形状 直径0.92mの円形を呈する。断面形は直径0.6m前後の筒状で、確認面から0.3mまで掘り下げたが、狭くなったために掘り下げることが困難であった。したがって底面を確認することができなかつたので、深さは不明である。

遺物 27点の土器破片が出土した。ほとんどが土師器杯形土器・甕形土器の小破片であり、図示することはできなかった。

所見 埋没土の出土遺物の時期は9世紀であった。しかし、調査できたのは井戸の上層部分であるのでこれらの土器から井戸の時期を断定することは厳密にはできない。歴史時代の遺構として参考として掲載した。



第55図 I区51号土坑

2区2号住居

位置 Ib・c-5・6グリッド 写真 PL22
重複 3号住居を切っている。南壁を女堀に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁は乱れている。四隅は丸い。規模は短軸3.30m、長軸は4.3m以上である。

面積 測定不可 北壁方位 N-68°-E
床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面の北半分は平坦であるが、南半部は女堀側に下がっている。北東隅に段が検出されたが、掘り残しの可能性がある。

竈 東壁に竈が付設されていたが、壁のどの部分に竈があるかは不明である。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は45cmである。

焚口部の両側に礫が立てられていた。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ65cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部のほぼ中央にも礫が立っており、支脚と考えられる。燃焼部には、土師器甕形土器の破片が多く出土した。

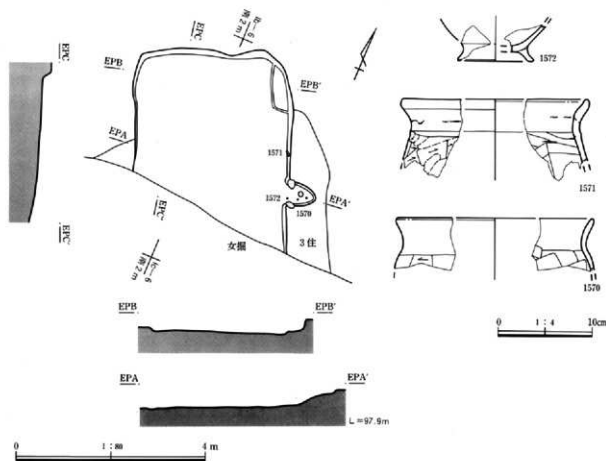
周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 残存していた範囲には検出されなかった。

遺物 65点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示したのは竈周辺から出土した遺物で、土師器甕形土器(1570)・須恵器高台付碗形土器(1572)は竈燃焼部から、土師器甕形土器(1571)は竈左壁際で出土した。

(遺物観察表：13頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第56図 2区2号住居と出土遺物

2区5号住居

位置 I a-8グリッド 写真 PL22

重複 7号住居の西隅を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.72m、短軸3.18mである。

面積 9.56㎡ 方位 N-88°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒を含む黒褐色土で埋まる。

床面 遺構確認面から49cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、中央部は凹凸が著しい。床下に土坑があるためとみられるが、この土坑が住居に伴うかどうかは断定できなかった。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は31cm、左側は18cmほどの袖の基部が残存していた。左袖には煙が残っていた。焚口幅は66cmである。燃焼部は、先行する7号住居の柱穴上につくられてい

るため、竈壁の顕著な焼土化は認められなかった。煙道部は壁から外へ56cm突出していた。燃焼部から煙道部へは一段あり、煙道部は緩やかに傾斜していた。燃焼部中央には支脚の礎が立てられていた。周溝 検出されなかった。

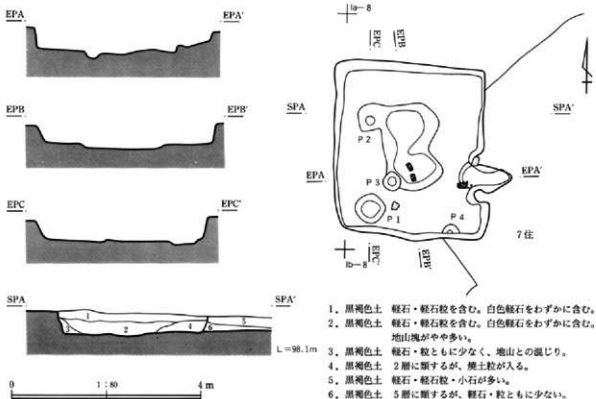
柱穴 4本の小ピットが検出されたが、いずれも相互に関係がなく、主柱穴とは考えにくい。それぞれの規模(短径×長径×深さ)は、P1:62×66×9cm、P2:56×62×3cm、P3:36×40×17cm、P4:22×32×15cmである。

貯蔵穴 検出されなかった。

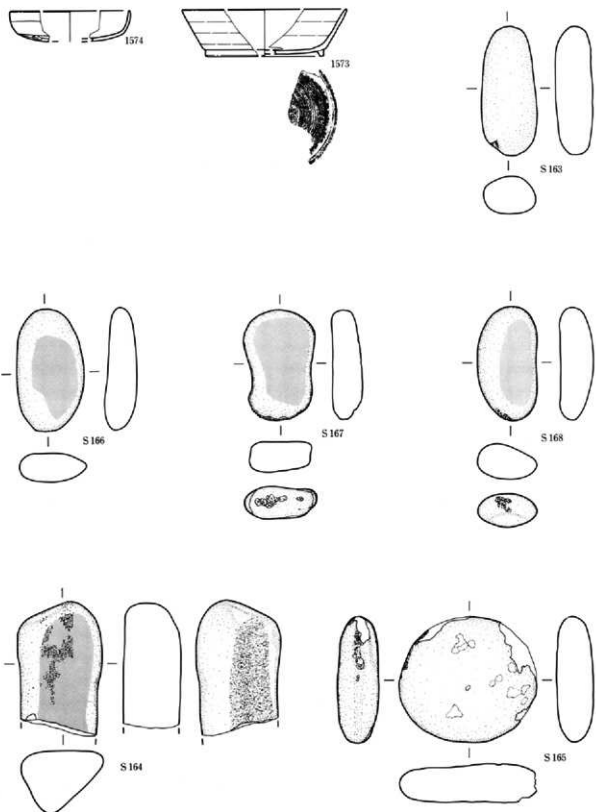
遺物 75点あまりの遺物が出土している。竈周辺で遺物が出土しているが、これらは図示できなかった。図示したのは、埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表:13頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第57図 2区5号住居



第58図 2区5号住居出土遺物

2区8号住居

位置 Ht・s-6・7グリッド 写真 PL23

重複 10号住居の西壁を切っている。

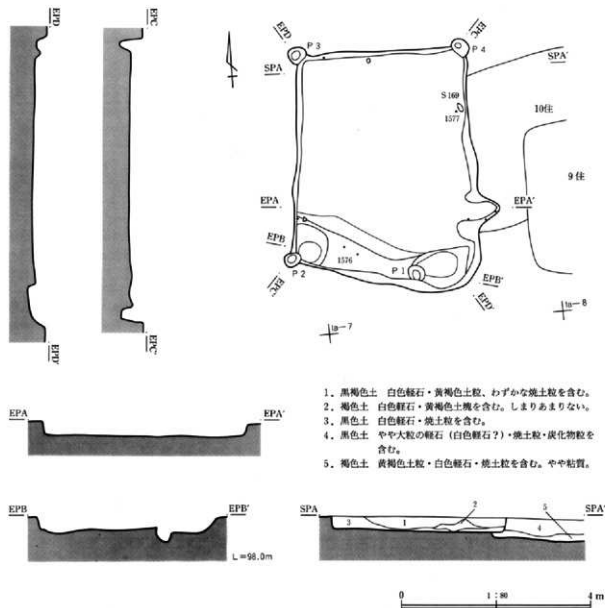
形状 長軸を南北方向にする長方形を呈するが、やや西壁が短く、台形に近い形状である。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はピットが掘られている三隅は角張っているが、ピットがずれている南東隅は丸い。規模は短軸3.70m、東壁長5.20m、西壁長4.40mである。

面積 16.58㎡ 竈方位 N-95°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色

土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から32cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前を中心に硬化していた。住居南壁沿いには40~72cmの幅で3~8cmほど高くなっている部分があった。その一段高い面には、2基の土坑が両端に掘られていた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に少し竈袖が張り出す形態の竈で、右側は35cm、左側は15cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃焼部の壁はあまり顕著な焼土化はない。燃焼部および煙道部は壁から外



第59図 2区8号住居

へ47cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は上方に立ち上がっていた。燃焼部には土師器甕形土器などが破片で出土したのみである。

周溝 検出されなかった。

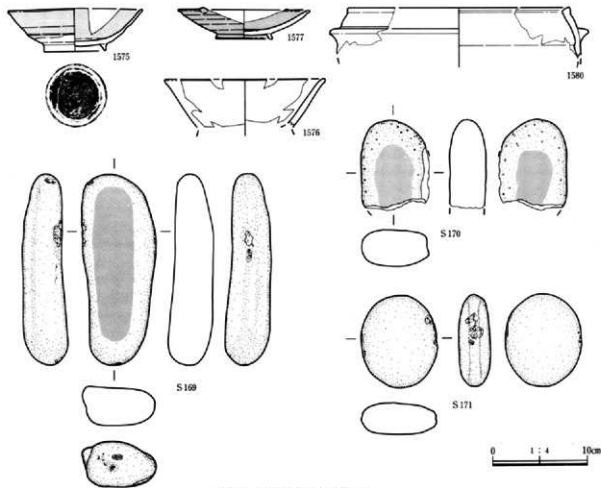
柱穴 4本の小ピットが四隅に検出された。これらが主柱穴と考えられる。各主柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:32×35×33cm、P2:30×33×23cm、P3:35×40×25cm、P4:35×40×47cmである。主柱穴のうちP2・P3・P4はそれぞれ住居の角に掘られているが、P1は西側へ少はずれており、南壁沿いに1.2m西へ行ったところに掘られている。後述する貯蔵穴をよけた位置にあたると思われる。各主柱穴を結んだ形は台形を呈する。

貯蔵穴 一段高くなった南壁沿いの床面の両端に土坑が2基検出された。規模は東側が長径1.02m、短径0.90m、深さ0.19m、西側が長径0.85m、短径0.

75m、深さ0.09mである。いずれの土坑もやや形が不定形で、断面形もすり鉢状である。これらの用途がなにであるかは調査では明らかにできなかった。貯蔵穴と断定したいが、掘られている位置や一段高い床面との関連から本住居の施設と考えたい。

遺物 150点あまりの遺物が出土した。ほとんどが埋没土中の出土遺物である。床面近くの遺物は壁沿いに出土している。図示した緑釉陶器の皿形土器(1577)は東壁際床面直上で出土した。灰釉陶器碗形土器(1575)や酸化焰焼成の須恵器碗形土器(1576)は南壁沿いの一段高い床面直上で出土した。また、敲石(S169)・磨石(S170)はそれぞれ東壁・北壁際の床面直上で出土した。敲石(S171)は埋没土中から出土した。(遺物観察表:13頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第60図 2区8号住居出土遺物

2区9号住居

位置 Ht-7・8グリッド 写真 PL24
重複 10号・11号住居を切っている。竈右側を方形の土坑で切られている。

形状 東西壁をほぼ南北方向にする正方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.27m、短軸3.14mである。

面積 8.55㎡ 竈方位 N-90°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・炭化物粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁は左側は良く焼けて焼土化していた。一部に構築材と考えられる角礫

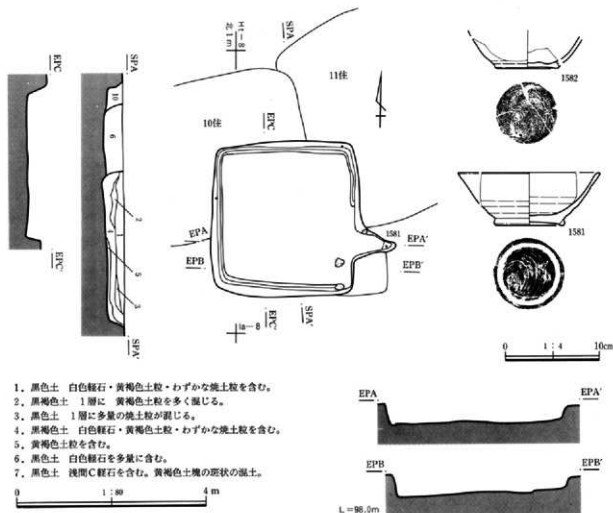
が残っていた。右側は方形土坑に切られており残っていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、壁から外に50cmほどのところで立ち上がり、煙道部に傾斜していた。周溝 東壁の竈の周辺を除く四壁に幅20~24cm、深さ2~4cmの周溝が検出された。

柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 110点あまりの遺物が出土している。床面に近い遺物は、竈や周溝内から出土した。図示した須恵器椀形土器(1581)が出土している。須恵器椀形土器(1581)は煙道部から出土した。須恵器杯形土器(1582)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表: 14頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒色土 白色軽石・黄褐色土粒・わずかな焼土粒を含む。
2. 黒褐色土 1層に黄褐色土粒を多く含む。
3. 黒色土 1層に多量の焼土粒が覆じる。
4. 黒褐色土 白色軽石・黄褐色土粒・わずかな焼土粒を含む。
5. 黄褐色土粒を含む。
6. 黒色土 白色軽石を多量に含む。
7. 黒色土 浅間C軽石を含む。黄褐色土塊の形状の温土。

第61図 2区9号住居と出土遺物

2区 13号住居

位置 I b・c-14グリッド 写真 PL24
重複 南壁を女堀に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的丸い。規模は長軸3.96m以上、短軸2.72mである。

面積 推定9.35㎡ 電方位 N-91°-E
床面 遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。床面は一部に後世の擾乱によって乱れているところはあるが、ほぼ平坦で、電周辺は硬化していた。

電 東壁中央よりやや南側に電が付設されていた。住居壁より内側に少し電袖が張り出す形態の電で、右側は18cm、左側は12cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は48cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁か

ら外へ68cm突出していた。燃焼部はやや煙道に向かって傾斜しており、煙道部も上方になだらかに傾斜していた。

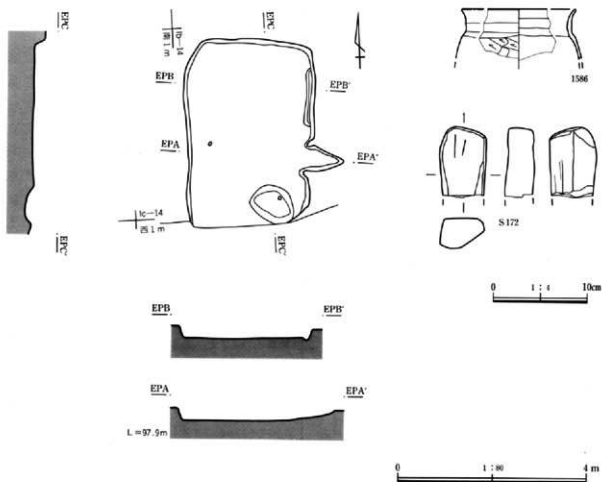
周溝 電左側の東壁沿いの一部に、幅12cm、深さ3~5cmほどの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南壁東端に長径0.94m、短径0.74m、深さ0.22mの楕円形の土坑が検出された。底面は乱れている。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物で、図示できたのは土師器台付変形土器(1586)である。また、貯蔵穴から砥石(S172)が出土している。(遺物観察表:14頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第62図 2区13号住居と出土遺物

2区14号住居

位置 Ht・Ia-13・14グリッド

写真 PL25

重複 32号住居を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的丸い。規模は長軸4.73m、短軸3.93mである。

面積 14.89㎡ 方位 N-101°-E

床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈から中央部にかけては硬化していた。北東部は床面が検出されない部分があり、掘り込みが確認されたが、本住居に伴うかどうかは確定できなかった。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出す形態の竈で、右側は44cm、左側は34cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は90cmである。燃焼部の壁は、向かって左の壁が焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ1m突出していた。煙道部の壁には板状の石が立

てられていた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜し、煙道部は上方に立ち上がっていた。煙道端部には土師器甕形土器(1588)がつぶれて出土した。燃焼部左脇には棒状隙が縦に埋め込まれており、支脚と考えられる。

周溝 東壁沿いの竈の両脇と、北壁の中央部を除いて、壁沿いに幅12~16cm、深さ4~8cmの周溝を検出。

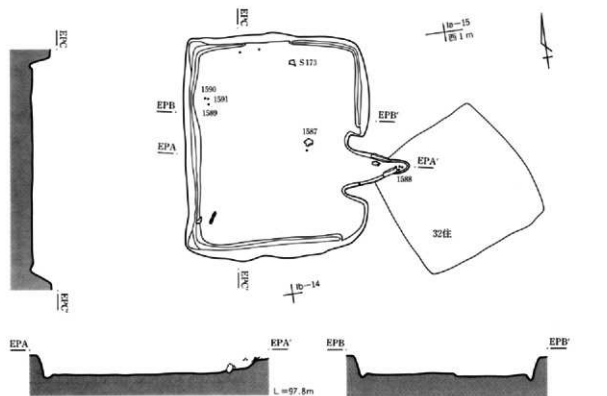
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 270点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物は、竈前に土師器甕形土器(1587)が、住居北西部壁沿いに須恵器円盤形土器(1589・1590・1591)がままとって床面直上で出土した。砥石(S173)は北壁際の床面直上で出土した。

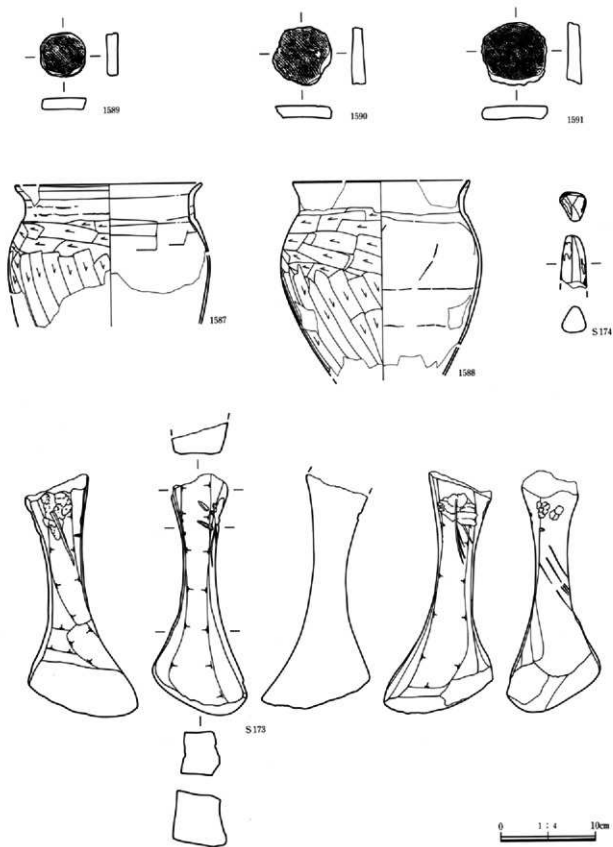
(遺物観察表:14頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第63図 2区14号住居

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第64図 2区14号住居出土遺物

2区15号住居

位置 I b-15・16グリッド 写真 P L 26
重複 南壁を女堀に切られている。

形状 南壁を切られているので断定はできないが、正方形もしくは長軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は東西長3.20mである。

面積 測定不可 方位 N-89°-E

床面 遺構確認面から11cm掘り込んで床面となる。床面は中央部は硬化していたが、周辺部は大小の掘り込みが顕著である。これらの掘り込みが住居に伴うかどうかは不明である。

竈 検出されなかった。

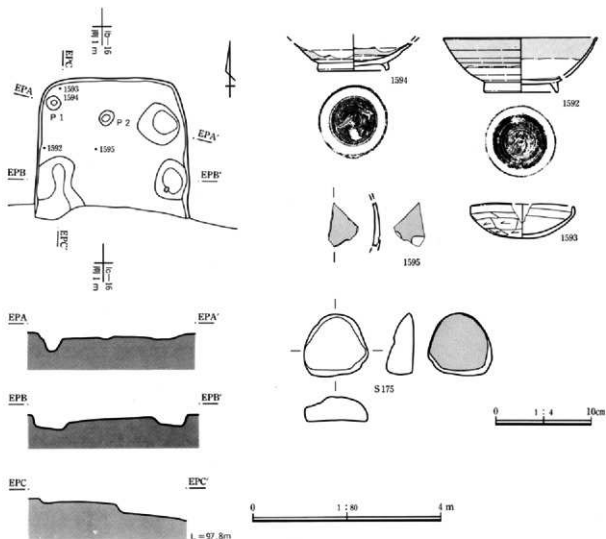
周溝 検出されなかった。

柱穴 住居北部に柱穴様の小ピットが2本検出されたが、柱穴とは考えにくい。ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P 1 : 30×30×26cm、P 2 : 34×30×5 cmである。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 15点あまりの遺物が出土している。床面近くの遺物は住居北西部に出土している。図示したのは灰釉陶器高台付碗形土器(1592・1594)・土師器杯形土器(1593)・緑釉陶器破片(1595)である。1593は混入と思われる。(遺物観察表: 14・15頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第65図 2区15号住居と出土遺物

2区16号住居

位置 I b・c-9・10グリッド

写真 PL26

重複 南部を女堀に切られている。

形状 方形を呈するが、全体形状は不明である。北壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は東西長4.87mである。

面積 測定不可 北壁方位 N-91°-E

床面 遺構確認面から76cm掘り込んで床面となる。他の住居より掘り込みは深い。中央部は硬化。

電周溝 検出されなかった。

柱穴 柱穴は検出されなかったが、北東隅に小

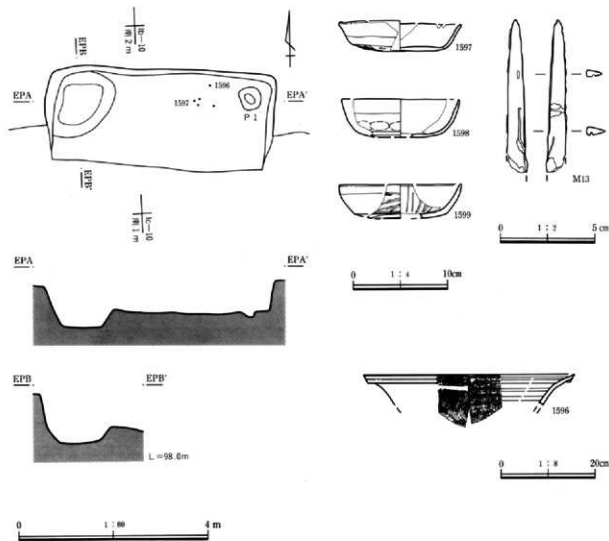
ピットが検出された。規模(短径×長径×深さ)は、P1:45×50×12cmである。

貯蔵穴 北西隅に長径1.32m、短径1.25m、深さ0.38mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 30点あまりの遺物が出土している。埋没土中の出土遺物が多いが、図示した土師器杯形土器(1597)や須恵器変形土器破片(1596)は床面から数cm上で出土した。土師器杯形土器(1598・1599)や鉄製刀子(M13)は埋没土中から出土した。

(遺物観察表:15頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第66図 2区16号住居と出土遺物

2区18号住居

位置 Ic-18グリッド 写真 PL26

重複 南壁を女堀に切られている。

形状 方形を呈すると考えられるが、全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的角張る。規模は東西長2.72mである。

面積 測定不可 北壁方位 N-89'-E

床面 遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。床面は凹凸が著しい。調査では床面を確認できずに床面下まで掘り込んだ可能性もあるが、住居に伴う確認は得られなかった。土坑の規模は長軸0.70m、短軸0.68m、深さ0.22mである。

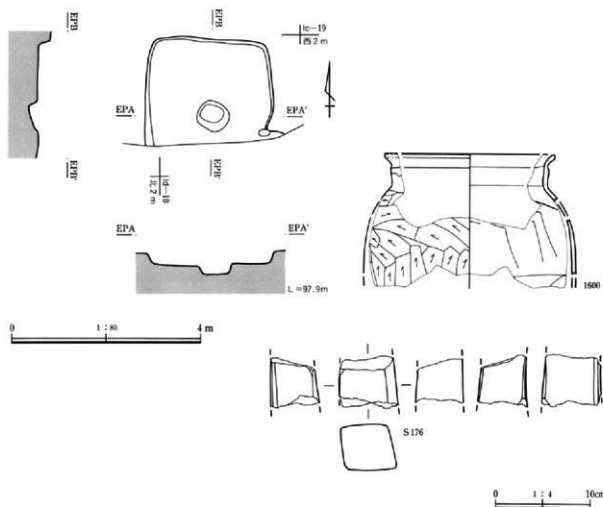
竈 東壁に竈が付設されていたが、南半分を切られているために全体形状は不明である。竈左側は住居壁より内側に20cmほど竈袖の基部が残っており、その端部には円礫が1個立てられていた。燃焼部はほとんど残存していなかった。

周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 15点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土器甕形土器(1600)や砥石(S176)も埋没土中から出土した。(遺物観察表：15頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第67図 2区18号住居と出土遺物

2区21号住居

位置 Lb・c-0・1グリッド 写真 PL26
重複 東壁が22号住居と接しているが、本住居の方が新しい。南東隅を女堀に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は西壁長4.58m、短軸4.25mである。

面積 15.64㎡ 竈方位 N-100°-E

床面 遺構確認面から62cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部は硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、左側に30cmほどの袖基部が残存していた。焚口幅は

55cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ75cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部は斜め上方に立ちあがっていた。

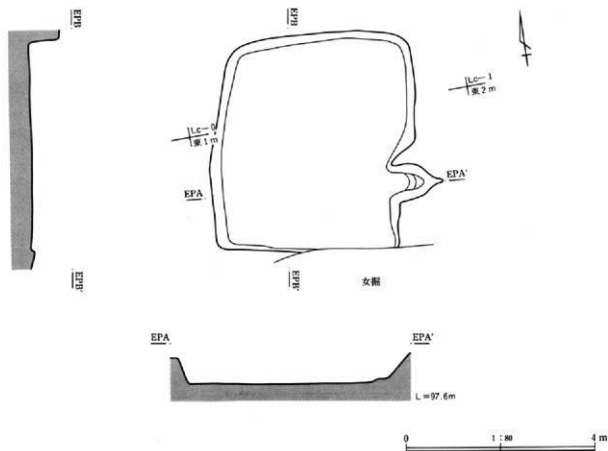
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 210点あまりの遺物が出土しているが、これらは埋没土中の出土遺物で、床面近くで出土した遺物はない。埋没土中の遺物は小破片が多く、図示できなかった。

所見 埋没土中の出土遺物からではあるが、時期がまとまっていることから、9世紀後葉の住居と考えられる。



第68図 2区21号住居

2区25号住居

位置 L.b-3・4グリッド 写真 PL27
重複なし

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.35m、短軸2.75mである。

面積 7.67㎡ 竈方位 N-104°-E
床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。竈前を中心に硬化しており、灰・焼土が広がっていた。住居南西部に床面が検出できない部分があったが、住居に伴う掘り込みがあるかどうかは不明である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電線が張り出す形態の竈で、

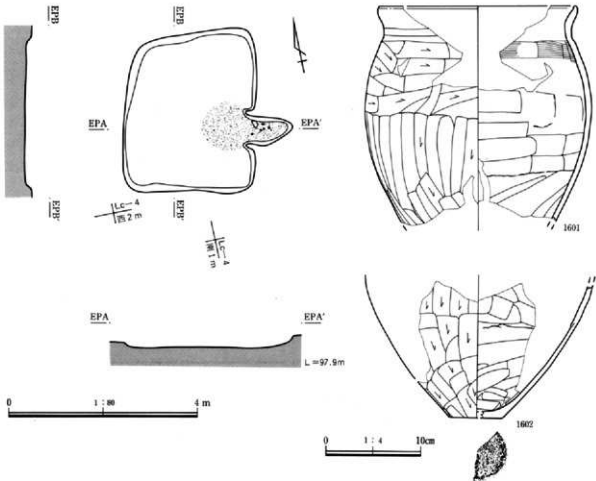
右側は18cm、左側は13cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は55cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には使用面上に土器器壘形土器の破片が出土している。

周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 50点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物である。図示した土器器壘形土器(1601・1602)も埋没土中から出土した。(遺物観察表:15頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第69図 2区25号住居と出土遺物

2区27号住居

位置 La・b-5・6グリッド 写真 PL27

重複 30号住居の埋没土を掘り込んでいる。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸5.08m、短軸3.30mである。

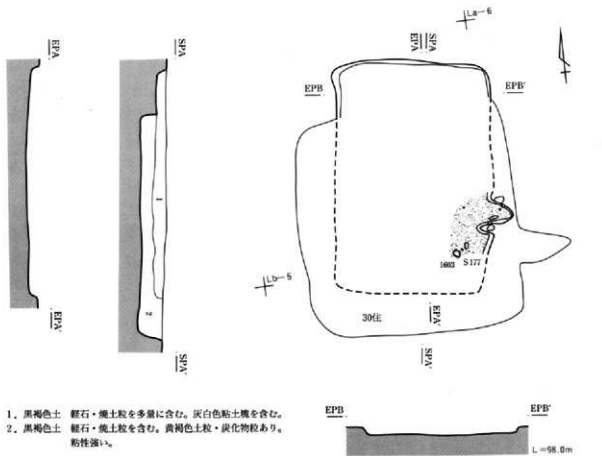
面積 測定不可 方位 N-104°-E
埋没土 多量の軽石・焼土粒と、灰白色粘土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から19cm掘り込んで床面となる。調査当初、重複する30号住居との先後関係を逆に考えていたために、本住居の床面の大部分は掘りすぎてしまった。本住居の床面を確認できたのは、断面観察部分、竈周辺と30号住居の北側のみである。竈前の床面には灰が広がっていた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈軸が張り出す形態の竈で、右側

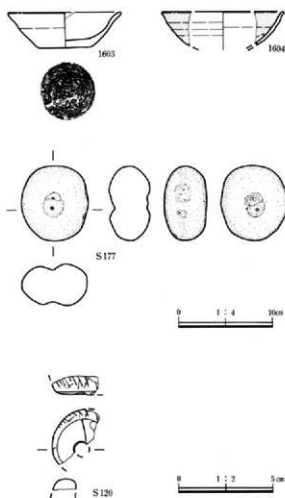
は22cm、左側は5cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。焚口部の左右には円礫が立てられていた。燃焼部および煙道の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ45cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。煙道部端は筒状に立ち上がっていた。燃焼部中央には円礫が立てられており、支脚と考えられる。周溝 柱穴 貯蔵穴 検出できなかった。

遺物 埋没土中の遺物は30号住居の遺物と一緒に取り上げられており、480点あまりになっている。本住居に伴うと断定できる遺物は、竈周辺から出土した遺物のみである。竈周辺の床面直上からは須恵器杯形土器(1603)・凹み石(S177)が出土している。また、埋没土中から格子状の線刻文様のある石製防塵車の破片(S120)が出土した。(遺物観察表:15頁) 所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 軽石・焼土粒を多量に含む。灰白色粘土塊を含む。
2. 黒褐色土 軽石・焼土粒を含む。黄褐色土粒・炭化物粒あり。粘性強い。

第70図 2区27号住居



第71図 2区27号住居出土遺物

2区29号住居

位置 La・b-2グリッド 写真 PL28・29

重複 28号住居北半部を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。南東隅は丸く、北西・北東隅は角張っていた。南西隅は、28号住居との識別が困難で検出できなかった。規模は長軸4.20m、短軸4.00mである。

面積 測定不可 方位 N-94°-E

埋没土 軽石粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から24cm掘り込んで床面となる。床面は竈周辺がやや高くなっている。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は35cmである。燃焼部の壁は焼けて、やや焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ72cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部右半部に円礫の上に伏せられた状態で土師器碗形土器(1913)が出土している。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

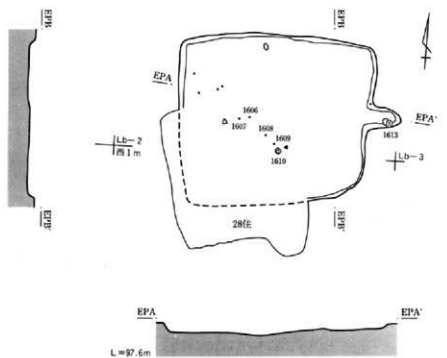
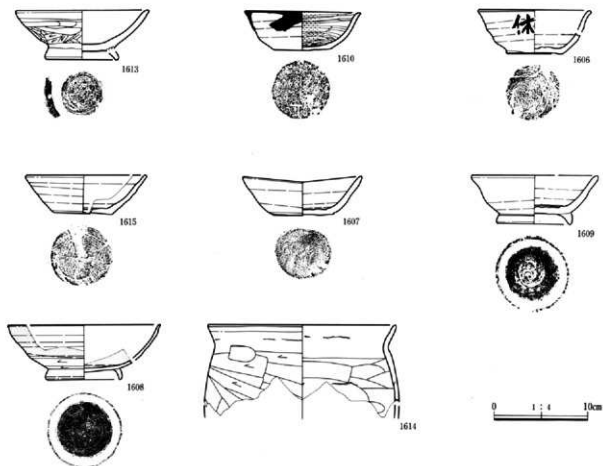
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 40点あまりの遺物が出土している。床面近くの遺物は、住居中央部と前述の竈に出土している。黒色土器(1606・1610)・須恵器杯形土器(1607)・高台付碗形土器(1609)・灰釉陶器高台付碗形土器(1608)は中央部床面直上から8cm上でまとまって出土した。土師器壺形土器(1614)・須恵器杯形土器(1615)は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：16頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第72図 2区29号住居と出土遺物

2区35号住居

位置 I 8-11グリッド 写真 PL29

重複 なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的丸い。規模は長軸2.95m、短軸2.64mである。

面積 6.54㎡ 竈方位 N-89°-E

床面 遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は13cm、左側は13cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は65cmである。燃焼部の壁はあまり焼土化していなかった。煙道部は壁から外へ64cm突出しており、端部は焼土化していた。燃焼部はやや窪

み、煙道部は緩やかに傾斜していた。燃焼部および左袖部には土師器甕形土器の破片がまとめて出土している。

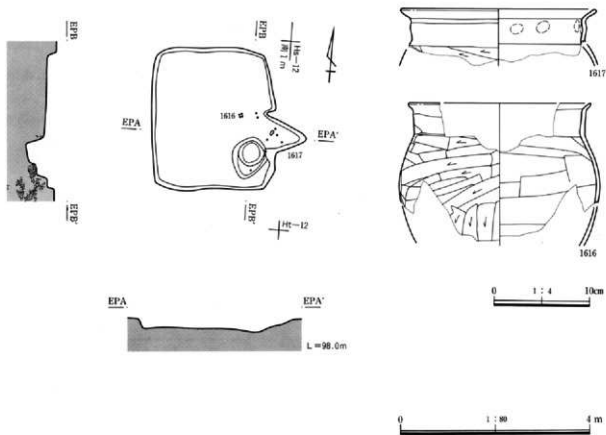
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 竈のすぐ右脇に、長径0.92m、短径0.72m、深さ0.40mの楕円形の貯蔵穴が検出された。南側に段があり、底部は円形に掘られている。須恵器甕形土器の破片が出土している。

遺物 85点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物である。図示した土師器甕形土器のうち、1616は竈左袖前の床面直上で、1617は竈燃焼部で出土した。(遺物観察表：16頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第73図 2区35号住居と出土遺物

2区40号住居

位置 Hq-8・9グリッド 写真 PL29

重複 49号住居の南東壁を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁は直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.15m、短軸2.67mである。

面積 6.85㎡ 方位 N-89°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒を含む黒褐色土で埋まる。

床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈軸が張り出さない形態の竈で、焚口幅は30cmである。焚口部の両脇には角礫が立てられており、著しく焼けていた。燃焼部の壁は左側が顕著に焼土化しており、右側は剥落したもの

と考えられる。燃焼部および煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はやや煙道部に向かって傾斜し、煙道部は斜め上方に立ち上がっていた。

周溝 竈の左脇30cm、右脇60cmを除く四周の壁際に、幅20~24cmの周溝が検出された。やや南壁中央部は浅くなっていた。

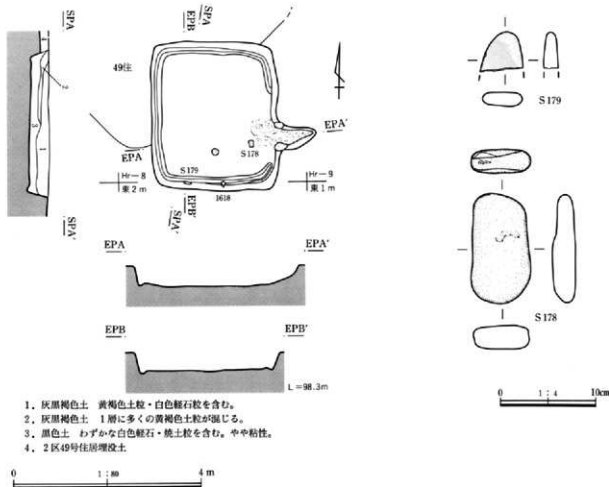
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 130点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くからは敲石(S178・S179)が出土した。

(遺物観察表：16頁)

所見 埋没土中の出土遺物から、9世紀の住居と考えられる。



第74図 2区40号住居と出土遺物

2区42号住居

位置 Hq・r-12・13グリッド 写真 PL30

重複 なし

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.30m、短軸2.50mである。

面積 6.93㎡ 竈方位 N-97°-E

床面 遺構確認面から19cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居より内側に少し竈袖が張り出す形態の竈で、右側は14cm、左側は14cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は48cmである。燃焼部および煙道部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ62cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部へ緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.82m、短径0.64m、深さ0.

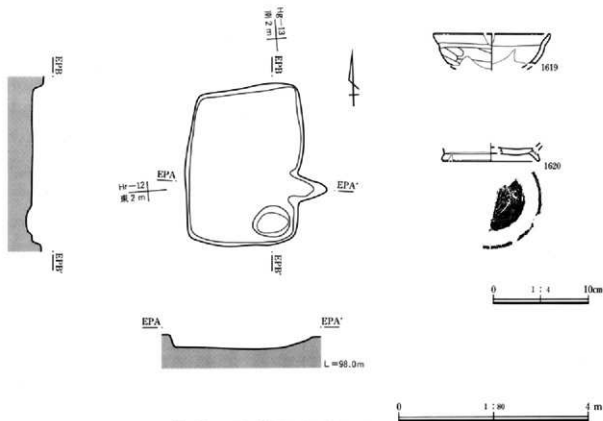


2区中央部の住居群の調査
手前は2区46号住居。向こうは42号～44号住居。

12mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は平らである。

遺物 13点の遺物が出土したのみである。床面近くの遺物はない。図示した須恵器高台付碗形土器(1620)や土師器杯形土器(1619)は埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：16頁)

所見 出土物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第75図 2区42号住居と出土遺物

2区43号住居

位置 H9-12グリッド 写真 PL30
 形状 わずかな長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸2.62m、短軸2.57mである。面積 5.58㎡ 電方位 N-98°-E
 床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、電周辺を中心に硬化していた。
 竈 東壁の最も南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は33cmである。燃焼部の壁はあまり焼土化していなかったが、煙道端部は顕著に焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ40cm突出してい

た。燃焼部はほぼ平らで、煙道部へ緩やかに傾斜していた。燃焼部には土師器甕形土器の破片が多く出土している。

周溝 検出されなかった。

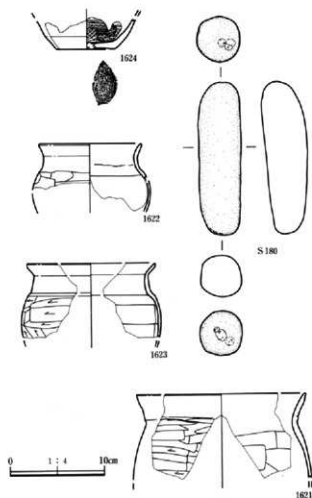
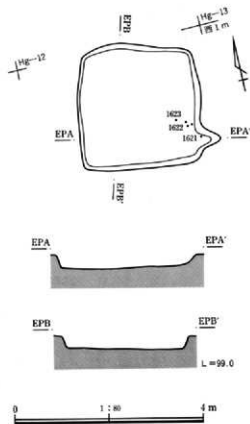
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 120点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の破片遺物である。図示した土師器甕形土器(1621)は電燃焼部埋没土中から、土師器台付甕形土器(1622・1623)は電前から出土した。

(遺物観察表: 16・17頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第76図 2区43号住居と出土遺物

2区44号住居

位置 IP・Q-14グリッド 写真 PL30
重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、四隅は他の住居に比して丸い。規模は長軸3.23m、短軸2.71mである。

面積 6.98㎡ 方位 N-106°-E
床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が少し張り出す形態の竈で、右側は8cm、左側は20cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は63cmである。左袖の焚口部には角礫

が立てられていた。燃焼部の壁は焼けて著しく焼土化していた。煙道部は壁から外へ110cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部へ緩やかに傾斜していた。燃焼部には土器器臺形土器の破片がまとも土出している。

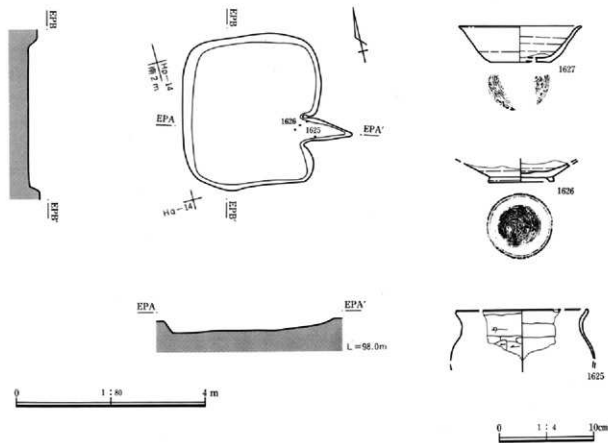
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 50点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面に近い遺物は竈に集中していた。図示した須恵器血形土器(1626)も竈内から出土した。(遺物観察表：17頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第77図 2区44号住居と出土遺物

2区46号住居

位置 I 9-9・10グリッド

写真 PL30・31

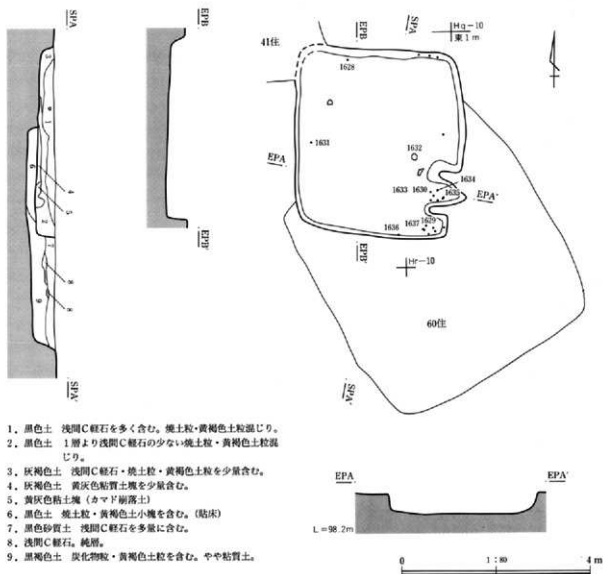
重複 41号住居の南東隅を切っている。60号住居の北西部を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的丸い。規模は長軸4.00m、短軸3.65mである。

面積 11.36㎡ 方位 N-99°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。床面は中央部がやや窪んで小さな凹凸がみられたが、硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は40cm、左側は52cmほどの袖の基部が残存していた。竈袖は角鏝を芯にして粘土でつくられていたが、天井部までは残存していなかった。焚口幅は60cmである。燃焼部の壁にも粘土が貼られており、焼けて焼土化していた。崩落した粘土塊が竈前に散乱していた。煙道部は壁から外へ24cm突出していた。燃焼部



1. 黒色土 浅間C軽石を多く含む。焼土粒・黄褐色土粒混じり。
2. 黒色土 1層より浅間C軽石の少ない焼土粒・黄褐色土粒混じり。
3. 灰褐色土 浅間C軽石・焼土粒・黄褐色土粒を少量含む。
4. 灰褐色土 黄灰色粘質土塊を少量含む。
5. 黄灰色粘土塊 (カマド崩落土)
6. 黒色土 焼土粒・黄褐色土小塊を含む。(貼床)
7. 黒色砂質土 浅間C軽石を多量に含む。
8. 浅間C軽石。純層。
9. 黒褐色土 灰化物粒・黄褐色土粒を含む。やや粘質土。

第78図 2区46号住居

はほぼ平らで、煙道端部は上方に立ち上がっていた。
竈周辺には土器が集中して出土している。

周溝 検出されなかった。

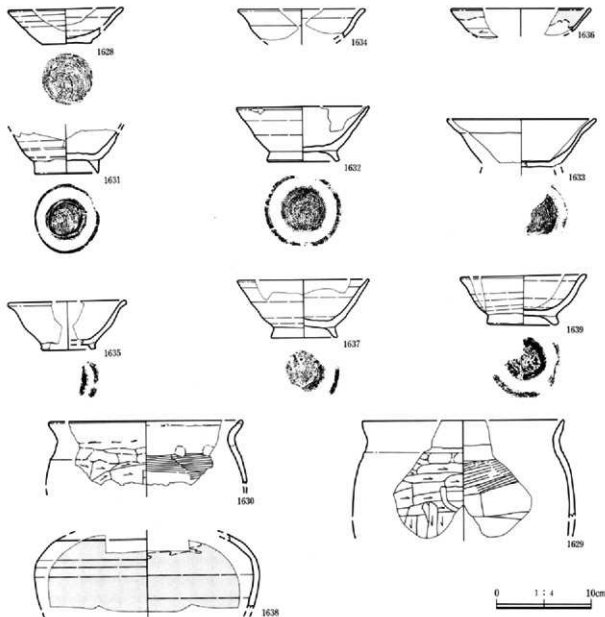
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 540点あまりの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物はほとんど図示することができた。電燃焼部から

は土師器甕形土器(1630)が、竈の周辺からは土師器甕形土器(1629)・須恵器椀形土器(1632・1633・1634・1635)が出土した。灰軸陶器破片(1636)も竈近くから出土している。また、須恵器杯形土器(1628)・椀形土器(1631)はそれぞれ北壁・西壁際の床面直上で出土している。(遺物観察表：17頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第79図 2区46号住居出土遺物

2区51号住居

位置 H0・P-19・K0・P-0グリッド

写真 PL31

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は西の二隅は丸く、東の二隅は角張っている。規模は長軸4.02m、短軸3.40mである。

面積 11.10㎡ 方位 N-99°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から20cm掘り込んで床面となる。

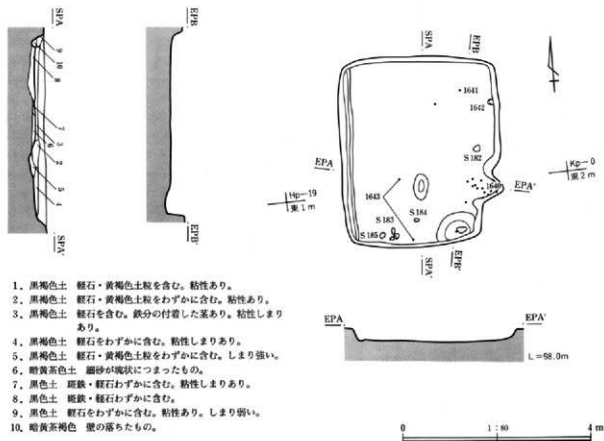
竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は11cm、左側は10cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は60cmである。燃焼部の壁の残存状況は悪く、剥落したものと考えられる。竈使用面の検出は困難であった。燃焼部には土器器変形土器の破片が散乱していた。

周溝 西壁際のみ、幅12~15cmの周溝が検出された。

柱穴 主柱穴は検出されなかったが、竈西側の住居中央部に長軸0.6mほどの楕円形の掘り込みが検出された。深さは未計測で、詳細は不明である。貯蔵穴 南東隅に長径0.92m、短径0.60m、深さ0.15mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面はほぼ平らで角礫が出土した。

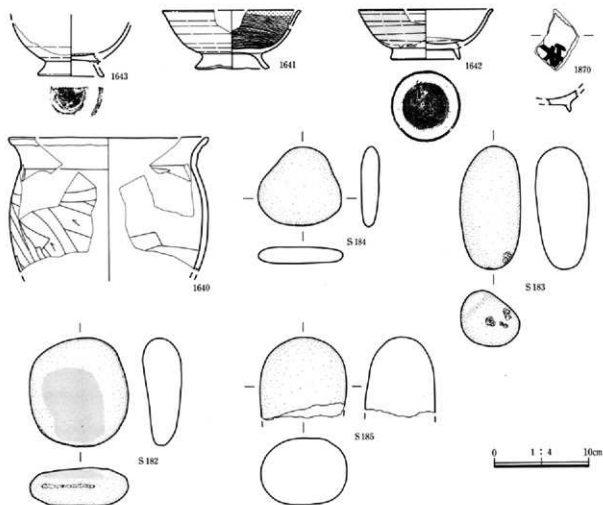
遺物 50点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中の出土遺物であるが、図示した遺物は床面直上で出土している。土器器変形土器(1640)は竈燃焼部から出土した。灰釉陶器椀形土器(1642)や黒色土器椀形土器(1641)は北東壁際、同椀形土器(1643)は南壁際で出土した。本住居は棒状礫が南壁沿いに集中して出土している。明瞭な使用痕のあるものを図示した。(遺物観察表：18頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 軽石・黄褐色土粒を含む。粘性あり。
2. 黒褐色土 軽石・黄褐色土粒をわずかに含む。粘性あり。
3. 黒褐色土 軽石を含む。鉄分の付着した茎あり。粘性しまりあり。
4. 黒褐色土 軽石をわずかに含む。粘性しまりあり。
5. 黒褐色土 軽石・黄褐色土粒をわずかに含む。しまり強い。
6. 暗黄茶色土 細砂が塊状につまったもの。
7. 黒色土 斑鉄・軽石わずかに含む。粘性しまりあり。
8. 黒色土 斑鉄・軽石わずかに含む。
9. 黒色土 軽石をわずかに含む。粘性あり。しまり弱い。
10. 暗黄茶褐色 壁の落ちたもの。

第80図 2区51号住居



第81図 2区51号住居出土遺物

2区58号住居

位置 H0-6グリッド 写真 PL32

重複 59号住居の北西部を切っている。

形状 削平が著しく本住居の全体形状は不明である。唯一検出された竈および東壁の一部から考えると、東壁を南北方向にする方形を呈すると推定される。東壁はほぼ直線的に掘られている。南東隅は角張っている。規模は不明である。

面積 測定不可 東壁方位 N-85°E

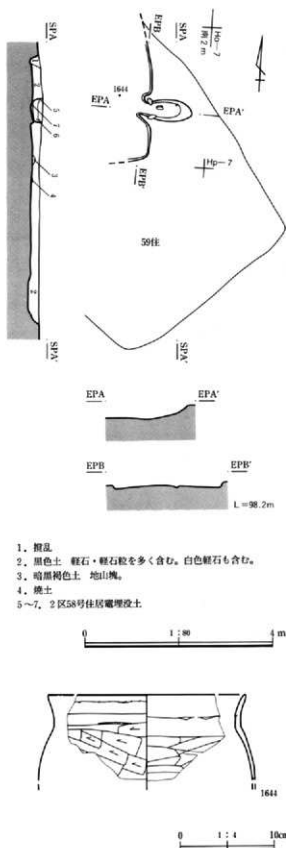
床面 竈周辺では遺構確認面から13cm掘り込んで床面となる。竈周辺の床面は多少の凹凸はあるが、硬化していた。

竈 東壁の南隅近くに竈が付設されていた。住

居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は32cm、左側は14cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は29cmである。焚口部の両側には円礫が立てられていた。燃焼部の壁は顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ90cm突出していた。燃焼部の中央よりやや左に角礫が出土したが、竈構築材が支脚か明確にはできなかった。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

遺物 15点あまりの遺物が出土している。図示した土師器変形土器(1644)は竈前床面直上で出土した。(遺物観察表:18頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



1. 掘込
2. 黒色土 軽石・軽石粒を多く含む。白色軽石も含む。
3. 暗黒褐色土 地山礫。
4. 焼土
- 5~7. 2区58号住居燻煙段土

第82図 2区58号住居と出土遺物

2区66号住居

位置 H0-10・11グリッド

写真 P.L.32・33

形状 短軸を南北方向にする台形に近い長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は北壁の両隅は角張っているが、南壁の両隅は丸い。規模は長軸4.5m、短軸3.9mである。

面積 14.98㎡ 方位 N-115°-E
床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、中央部が硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁は焼土が剥落して残存していないが、煙道端部は焼土化していた。煙道部は壁から外へ90cm突出していた。燃焼部はやや傾斜し、煙道部は一段上の平坦な面につくられていた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 2本の柱穴と考えられる小ビットを検出したが、深さが浅いので断定できない。各柱穴の規模(短径×長径×深さ)は、P1:30×35×26cm、P2:19×20×8cmである。P2は住居対角線上にのりが、P1はやや南にずれている。P1とP2を結んだ線は南壁にほぼ平行している。また、南壁際ほぼ中央にP3(45×60×15cm)が検出されたが、性格は不明である。

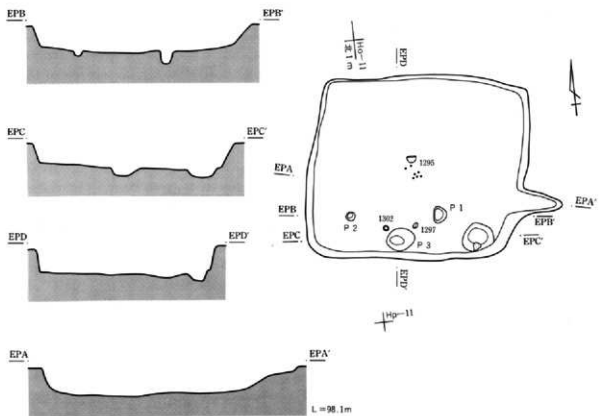
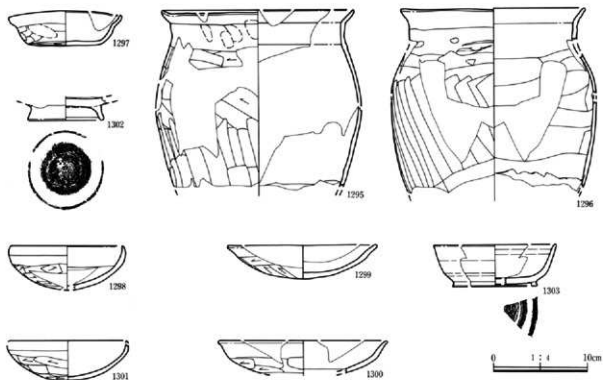
貯蔵穴 南東隅に長径0.65m、短径0.57m、深さ0.16mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面はほぼ平らで、角隅が1点出土している。

遺物 3100点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した遺物も床面直上の遺物ではなく、床面から10cmほど上で出土した。須恵器高台付碗形土器(1302)と土師器杯形土器(1297)は南壁際のP3の脇で出土した。土師器変形土器(1295)は住居中央から出土した。

(遺物観察表:18頁)

所見 出土遺物には、古い様相をもつ遺物も含まれているが、9世紀後葉の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



第83図 2区66号住居と出土遺物

2区61号住居

位置 K1・m-4グリッド 写真 PL32
重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的角張っている。規模は長軸4.55m、短軸3.70mである。面積 13.97㎡ 竈方位 N-103°-E
床面 遺構確認面から27cm掘り込んで床面となる。住居西半部に床面が検出できない楕円形の部分があったが、住居廃絶後に掘り込まれたものと考えられる。その他の部分の床面は平坦で、竈の前を中心にして硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は10cm、左側は17cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は55cmである。燃焼部の壁の焼土は剝落

が著しく、焼土化した部分は顕著に残っていなかった。煙道部は壁から外へ51cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。竈周辺に土師器壺形土器の破片が散乱して出土した。

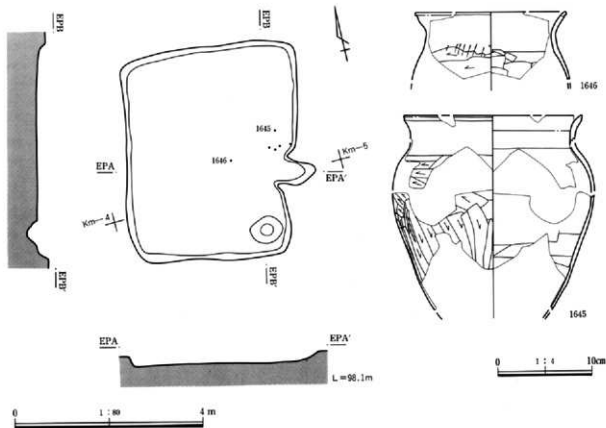
周溝 顕著な周溝は検出されなかったが、北壁沿いに若干窪んだ部分が確認された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に、長径0.65m、短径0.60m、深さ0.24mの楕円形の貯蔵穴が検出された。断面形は台形である。

遺物 150点あまりの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器壺形土器(1645・1646)は竈前で床面から10~15cm上で出土した。(遺物観察表：19頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第84図 2区61号住居と出土遺物

2区70号住居

位置 H1・m-6・7-グリッド

写真 P.L.33

重複 西壁が64号住居の東隅を切っている。

形状 わずかに長い長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや外へ膨らむように掘られている。四隅は丸い。規模は長軸2.87m、短軸2.80m。

面積 6.37㎡ 竈方位 N-89'-E

埋没土 上層は軽石粒と焼土粒を含む黒色土で、下層は軽石をほとんど含まない粘質の黒灰色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。北西部には0.9×2mほどの楕円形の範囲に床面が検出されない部分があったが、この落ちこみと住居との関係は不明である。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は5cm、左側は11cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は45cmである。燃烧部の壁の顕著な焼土は残っていない。煙道部は壁から外へ87cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

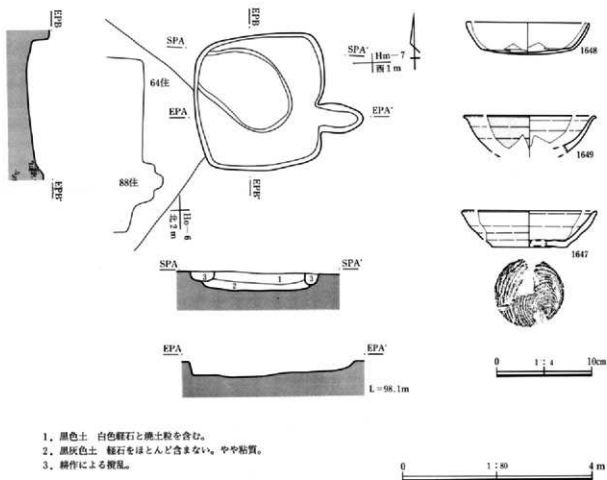
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 230点あまりの遺物が出土している。床面近くの遺物はなく、図示したのは埋没土中の出土遺物である。(遺物観察表：19頁)

所見 埋没土の出土遺物から、9世紀中葉の住居と推定される。



第85図 2区70号住居と出土遺物

2区71号住居

位置 Hm・n-5グリッド 写真 P.L.34

重複 北壁が88号住居の南壁を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸3.00m、短軸2.65mである。

面積 6.95㎡ 竈方位 N-94°-E

床面 遺構確認面から18cm掘り込んで床面となる。床面は多少の凹凸はあるが、中央部が硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は30cmである。焚口部には整形された角礫が割れて2個倒れ込んでいた。また、竈左前と右側にも整形された礫が転がっていた。これらは火を受けており、竈焚口の構築材であったと考えられるが、竈左右に転がっていた角礫が、袖の芯であったかど

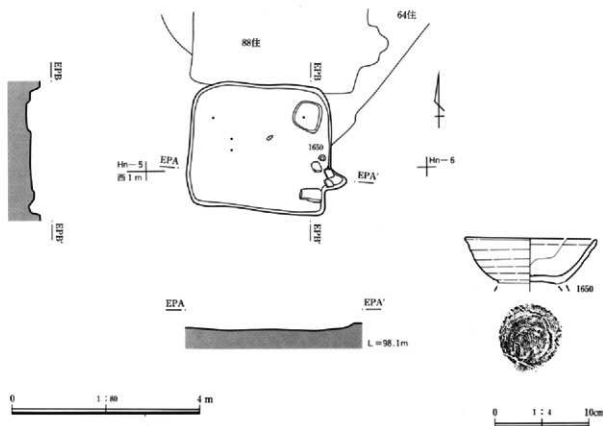
うかは不明である。燃焼部の壁の焼土は剥落し、一部が残るだけであった。燃焼部および煙道部は壁から外へ45cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 北東隅に一辺0.58m、深さ0.1mの方形の貯蔵穴が検出された。底面から須恵器杯形土器の破片が出土している。

遺物 50点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの遺物である。図示できなかったが、西半分の床面直上から土師器整形土器の破片が出土している。また、竈左脇から須恵器高台付椀形土器(1650)が床面直上で出土した。(遺物観察表：19頁) 所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。



第86図 2区71号住居と出土遺物



第87図 2区72号住居と出土遺物

2区72号住居

位置 H1・m-4・5グリッド 写真 PL34
重複 64号住居・88号住居を切っている。

形状 わずかに長い長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸2.67m、短軸2.41mである。

面積 5.12㎡ 方位 N-92°-E
床面 遺構確認面から35cm掘り込んで床面となる。

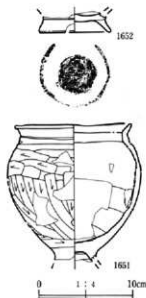
竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は47cmである。焚口部両側には跡が出土したが、竈の構築材かどうかは不明である。燃焼部の壁は顕著な焼土化はない。燃焼部および煙道部は壁から外へ58cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 120点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器台付壺形土器(1651)は竈前住居中央部床面直上で出土した。また竈燃焼部内でも須恵器壺形土器破片や図示した須恵器高台付椀形土器(1652)が出土している。(遺物観察表:19頁)

所見 遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



2区74号住居

位置 H j・k-4・5グリッド 写真 PL34 重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸5.53m、短軸4.78mである。

面積 24.32㎡ 南壁方位 N-85°-E
埋没土 軽石粒や黄灰褐色土塊を含む黒色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面は平坦である。中央部に焼土化した部分があるが、地床炉かどうかは不明である。

竈 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

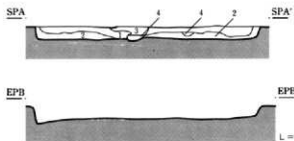
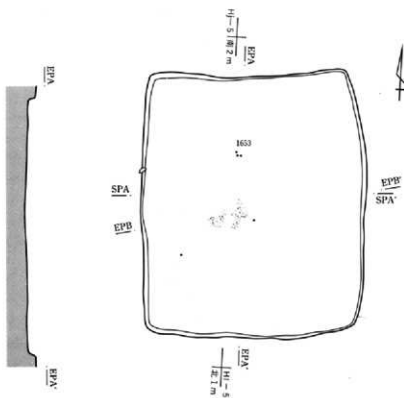
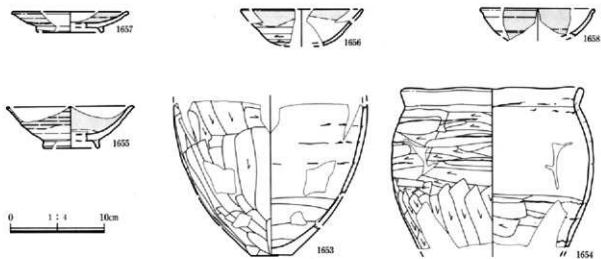
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 140点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器壺形土器(1653)も15cmほど床面から上で出土した。(遺物観察表:19頁)

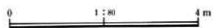
所見 床面直上の遺物はほとんど無いので住居の年代を決め難いが、埋没土の出土遺物の時期はまともなことから、10世紀後半の住居と考えたい。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



1. 黒色土 白色軽石・わずかな黄褐色土粒を含む。
2. 黄灰褐色土 黒色土塊を含む。地山の粘質土。
3. 黒色土 斑鉄目立つ。
4. 焼土

第86図 2区74号住居と出土遺物



2区75号住居

位置 Hm・n-11グリッド 写真 PL35
 重複 本住居の上層に76号住居がつくられている。
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周
 壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張ってい
 る。規模は長軸3.55m、短軸2.75mである。
 面積 8.43㎡ 竈方位 N-113°-E
 埋没土 軽石粒・小礫・焼土粒を含む褐色土で埋ま
 っていた。

床面 遺構確認面から36cm掘り込んで床面とな
 る。床面は竈前がやや高くなって、やや凹凸がある
 ほかは平坦で、中央部は硬化していた。南西隅に楕
 円形の掘り込み(床面での規模長径1.85m、短径0.95
 m、深さ0.51m)が検出されたが、土層からは住居よ
 り新しいものと観察された。時期等は不明である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されてい
 た。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、
 右側は20cm、左側は24cmほどの袖の基部が残存して

いた。竈口幅は40cmである。焼焼部の壁は顕著な焼
 土化は無かったが、煙道端部は焼土化していた。煙
 道部は壁から外へ45cm突出していた。焼焼部はやや
 窪んでおり、煙道部に緩やかに傾斜していた。煙道
 端部に須惠器杯形土器(1305)が出土している。

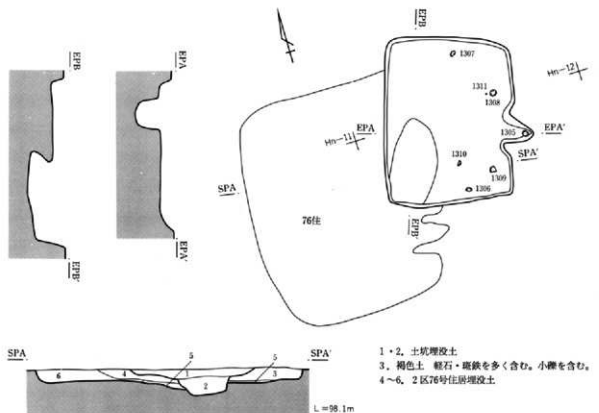
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

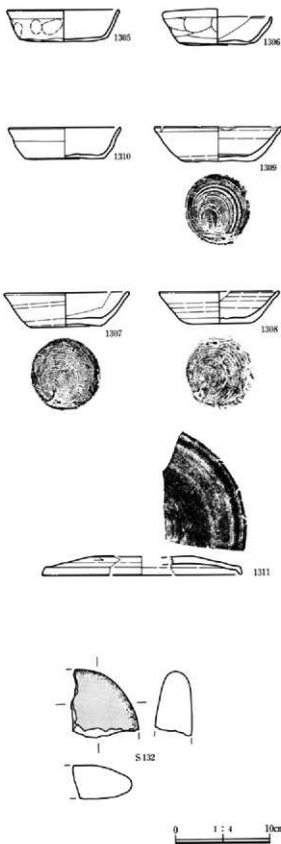
遺物 150点あまりの遺物が出土している。ほとん
 ど埋没土中からの出土遺物であるが、緑釉陶器破片
 も含まれている。本住居には床面直上に遺物がまと
 まって残されていた。竈および竈左側には須惠・土
 師器杯形土器・須惠器蓋形土器(1305・1307・1308・
 1311)が、右側には土師器杯形土器(1306・1310)と須
 惠器杯形土器(1309)が出土した。埋没土中から磨石
 (S132)が出土している。(遺物観察表：20頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えら
 れる。



第89図 2区75号住居





第90図 2区75号住居出土遺物

2区76号住居

位置 Hm・n-10・11グリッド

写真 PL.35・36

重複 75号住居より上層の住居であるが、新しい掘り込みと重なっているために75号住居と重複する東壁は不明瞭で、検出できなかった。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや膨らんで掘られている。四隅は丸い。規模は長軸4.80m、短軸3.50mである。

面積 測定不可 電方位 N-96°E
埋没土 わずかに軽石を含む暗褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から31cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、電前は硬化していた。

竈 東壁南端に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出す形態の竈で、右側は35cm、左側は60cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は50cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ15cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。煙道部は斜め上方に立ち上がっていた。燃焼部には土師器壘形土器の破片が出土している。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

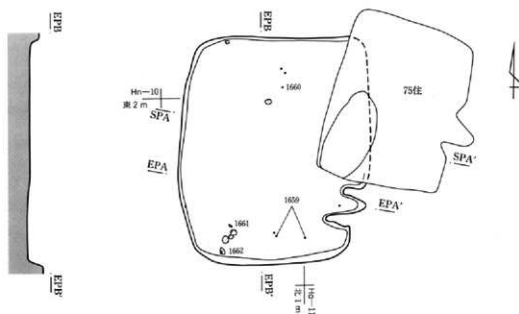
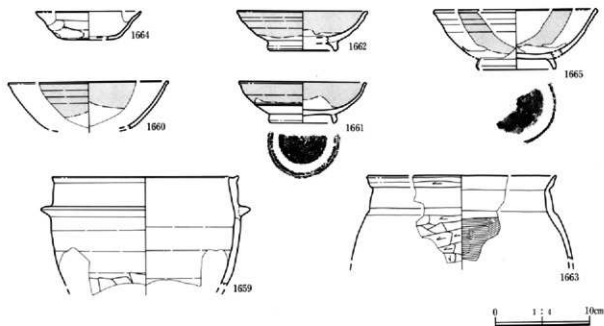
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 820点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、図示した遺物のうち灰軸陶器椀形土器(1660)は住居北半中央部、須惠器羽釜(1659)は電右前、灰軸陶器椀形土器(1661・1662)は南西隅の床面直上で出土した。土師器杯形土器(1664)・壘形土器(1663)・灰軸陶器椀形土器(1665)は埋没土中で出土した。

(遺物観察表：20頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。

2. 1・2区の遺構



- 1・2. 土坑埋没土
3. 2区75号住居埋没土
4. 褐色土 3層よりやや軽石・磁鉄は少ない。
5. 暗灰黄褐色土 灰褐色粘土粒・塊を含む。粘灰と思われる。
6. 暗褐色土 わずかに軽石を含む。しまり強い。

第91図 2区76号住居と出土遺物



2区80号住居

位置 H1・m-10・11グリッド 写真 PL36

重複 81号住居の南西隅を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや膨らんで掘られている。四隅は丸い。規模は長軸4.50m、短軸4.13mである。

面積 13.69㎡ 竈方位 N-113°-E

埋没土 軽石粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から41cm掘り込んで床面となる。床面は平坦である。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形跡の竈で、右側は35cm、左側は40cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は60cmである。燃焼部の壁はほとんど焼けていない。煙道部は壁から外へ25cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部の右側の壁には構築材の粘土のなかに跡が入

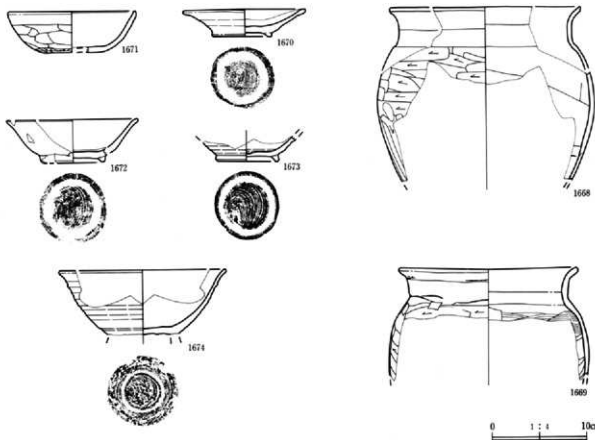
れられていた。

周溝 検出されなかったが、北壁際にはやや窪んだ部分があった。

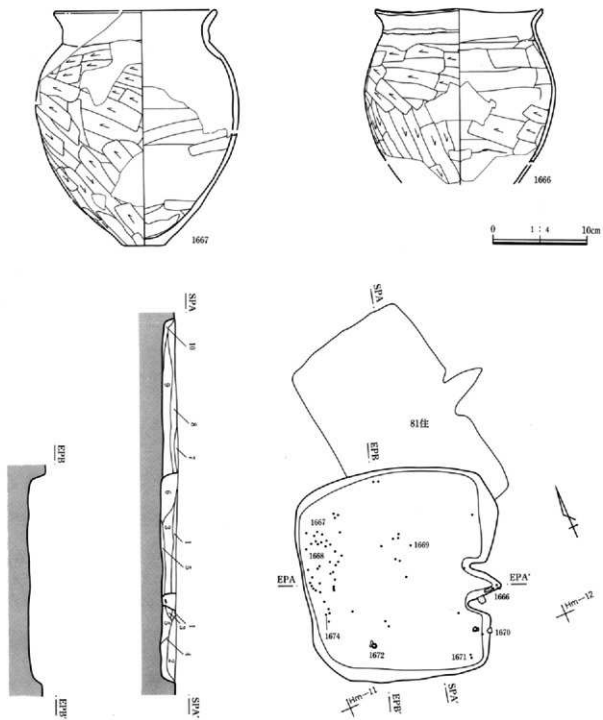
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 420点あまりの遺物が出土している。埋没土中の遺物がほとんどである。西壁沿いには床面から10~20cmほど上で土師器変形土器の破片が流れ込むように出土した。この中の1667・1668を図示した。南壁近くで出土した須恵器高台付椀形土器(1672・1674)や土師器椀形土器(1671)・須恵器皿形土器(1670)も床面より上の遺物で、流れ込んだ遺物と考えられる。竈左前で出土した土師器変形土器(1669)は床面直上で出土した。(遺物観察表：20・21頁)
所見 床面直上の遺物は少なく、住居の時期を考えるのは困難であるが、出土遺物の全体的傾向から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第92図 2区80号住居出土遺物(1)



1. 暗茶褐色土 軽石・斑鉄を含む。しまりあり。
2. 暗褐色土 軽石を含む。
3. 暗褐色土 軽石を含む。斑鉄やや含む。
4. 黒色土 しまり弱くややザラザラしている。
5. 黄茶褐色土 粘性強い黄褐色土主体。
6. 暗褐色土 軽石・斑鉄を含む。
- 7～10. 81号住居増設土



第93図 2区80号住居と出土遺物(2)



2区86号住居

位置 Hk-1-8・9グリッド 写真 PL37
重複 なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸4.42m、短軸3.38mである。

面積 12.39㎡ 竈方位 N-86°-E

床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面には中央部に若干の凹凸はあるが、概ね平坦である。中央部を中心に硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は14cm、左側は20cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は70cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ90cm突出していた。煙道端部には直径20cmほどの円形に焼土化した部分が発見された。煙道部の天井が残っている可能性もあるが、堆積していた土は焼土粒・炭化物

粒が含まれた褐色土で崩落したものと観察された。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜し煙道端部は上方に立ち上がっていた。竈燃焼部内には土師器変形土器が数個体分出土している。このうち4個体を図示した。

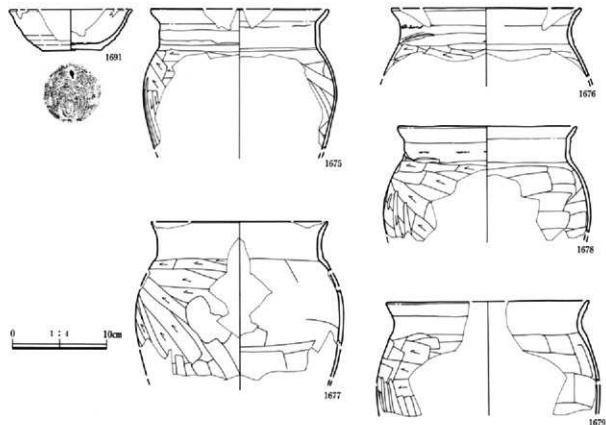
周溝 竈前と南壁中央部の1.48mの部分を除く壁沿いに、幅12~15cm、深さ2~3cmの周溝が発見された。

柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

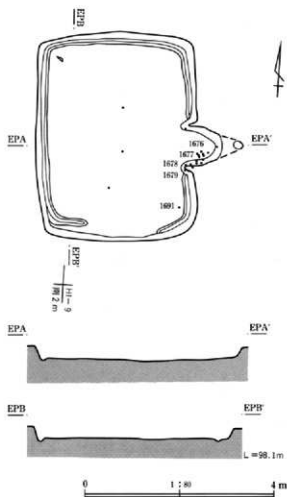
遺物 380点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物であるが、床面近くの遺物は住居中央部と、竈内に集中していた。図示した土師器変形土器のうち、1675は煙道端部、1676は燃焼部右脇、1677・1678は竈右袖部、須恵器杯形土器(1691)は南西隅で出土した。

(遺物観察表：21頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第94図 2区86号住居出土遺物



第95図 2区86号住居

2区87号住居

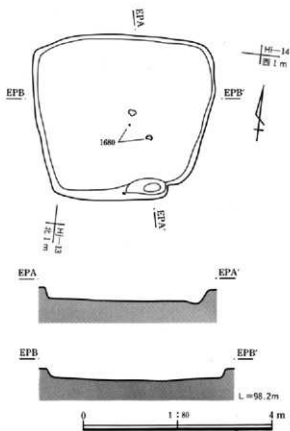
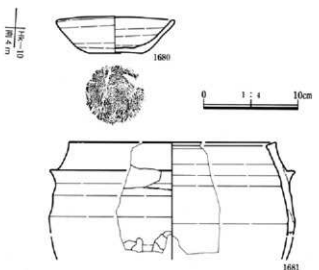
位置 Hh・i-12・13グリッド 写真 PL37
 形状 短軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はやや膨らんで掘られている。四隅は丸い。規模は北壁長3.80m、南壁長2.70m、短軸3.50mである。面積 10.05㎡ 北壁方位 N-87°-E
 床面 遺構確認面から26cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、多少の凹凸はあるが硬化していた。

竈 東壁中央より南側に焼土が確認されたが、竈としての形態を検出することができなかった。
 周溝 柱穴 検出されなかった。
 貯蔵穴 南壁東端に長径0.8m、短径0.36m、深さ0.07mの楕円形の小ピットが検出されたが、機能・用

途は不明である。

遺物 30点あまりの遺物が出土している。床面近くの遺物は中央部で須恵器杯形土器(1680)が出土。(遺物観察表：21頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考える。



第96図 2区87号住居と出土遺物

2区92号住居

位置 Hf-14グリッド 写真 PL38

重複 東壁北部を土坑で切られている。

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は長軸4.40m、北壁長3.60m、南壁長2.80mである。

面積 11.79㎡ 方位 N-94°-E

床面 遺構確認面から36cm掘り込んで床面となる。床面は周辺部に多少の凹凸はあるが概ね平坦で、中央部が硬化していた。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出す形態の竈で、右側は15cm、左側は10cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は70cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ85cm突出していた。燃焼部はやや窪んで、煙道部に緩やかに傾斜していた。竈前には土器が床面に散らばって出土していた。

周溝 北壁の西1/3の2.4mと、西壁の中央部の2.64mの2カ所に幅10~16cm、深さ2~4cmの周溝が検出された。

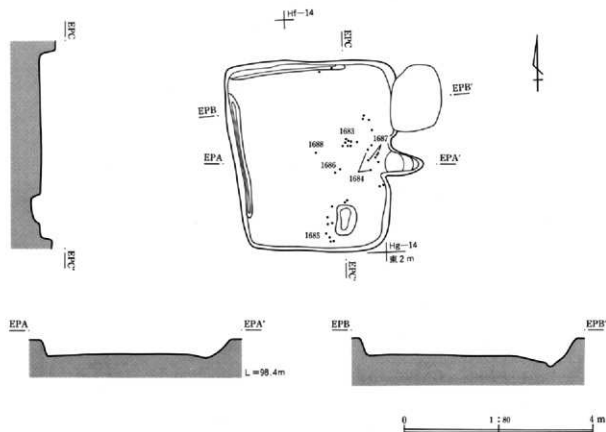
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 住居南東隅よりやや南側に長径0.64m、短径0.42m、深さ0.17mの楕円形の貯蔵穴を検出。

遺物 250点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、床面近くの遺物は住居東半分集中していた。土師器壺形土器(1685)は南壁沿いで床面から9cm上で出土した。また土師器壺形土器(1683・1684・1686・1687)は竈前の床面直上から7cm上で出土している。また、須恵器高台付椀形土器(1688)は竈前床面上15cmで出土した。土師器杯形土器(1689)・須恵器皿形土器(1690)は埋没土中からの出土遺物である。

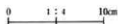
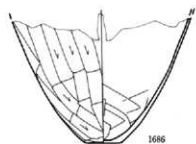
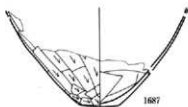
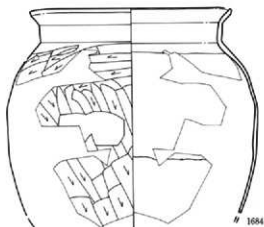
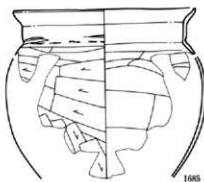
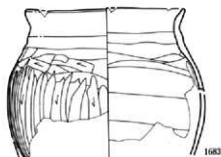
(遺物観察表：21・22頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第97図 2区92号住居

2. 1・2区の遺構



第98図 2区92号住居・93号住居出土遺物

2区93号住居

位置 Hh・i-14・15グリッド 写真 PL38
重複 なし。本住居の周縁部に小ピット群が検出されたが、これらは、本住居に付随するのか、重複する別の遺構なのかは判断できなかった。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや角張っている。規模は長軸4.83m、短軸3.15mである。

面積 13.40㎡ 電方位 N-94°-E

床面 遺構確認面から29cm掘り込んで床面となる。南半部がやや窪んでおり、多少の凹凸があるが、全体には平坦である。

竈 東壁の南端に近い方に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は23cm、左側は30cmほどの袖の基部が残存して

いた。焚口幅は42cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ52cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。煙道端部は上方に立ち上がっていた。

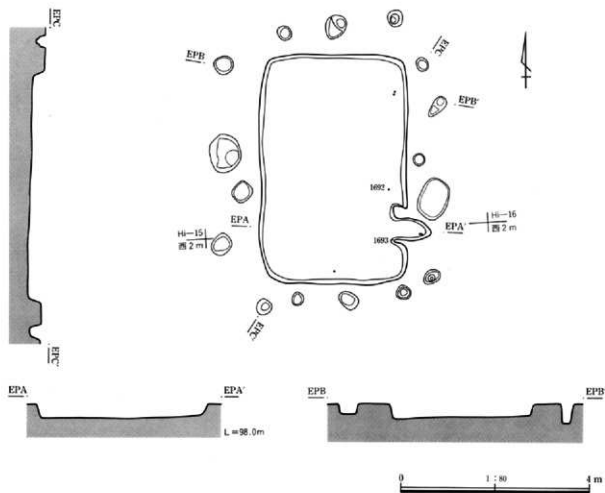
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 105点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、竈周辺に床面近くの遺物が出土している。須恵器羽釜(1692)は竈左脇で、須恵器椀形土器(1693)は竈右袖部で出土した。墨書「王」のある須恵器椀形土器(1694)は埋没土中から出土した。(遺物観察表：22頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第99図 2区93号住居

2区96号住居

位置 Ke・f-0・1グリッド写真PL39
 形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.95m、短軸3.15mである。
 面積 10.23㎡ 方位 N-96°-E
 埋没土 上層は軽石粒と焼土粒を含む黒色土で、下層は夾雑物を含まない粘質黒色土で埋まっていた。
 床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。小さな凹凸があるが概ね平坦で、中央部を中心にして硬化していた。

竈 東壁中央より若干南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ66cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には土師器甕形土器が出土した。

周溝 北壁の東半分1.52m、東壁の北端部1.4mのL字形に幅10~12cmの周溝が検出された。

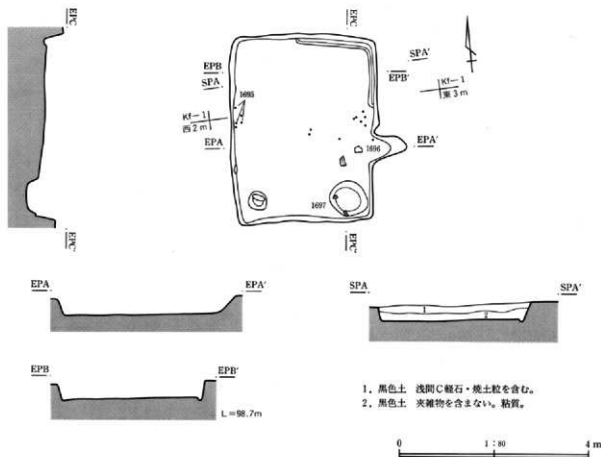
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.80m、短径0.75m、深さ0.27mの円形の貯蔵穴が検出された。西縁には土師器杯形土器が出土した。また、南西隅には直径0.4mほどの円形の窪みが検出された。窪みの北半部には大形の棒状鏝が置かれていた。

遺物 140点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。竈前の遺物は接合したが、図示できるまでにはならなかった。竈燃焼部内では須恵器杯形土器(1696)が、貯蔵穴西縁からは土師器杯形土器(1697)が、西壁際からは土師器甕形土器(1695)が床面直上で出土している。

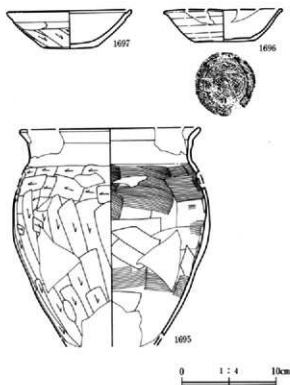
(遺物観察表：22頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



1. 黒色土 浅間C軽石・焼土粒を含む。
2. 黒色土 夾雑物を含まない。粘質。

第100図 2区96号住居



第101図 2区96号住居出土遺物

2区98号住居

位置 Kf・h-3・4グリッド 写真 PL39
重複 西壁で27・28号土坑と重複している。27号土坑は本住居に切られているが、28号土坑との新旧関係は不明である。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。四壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや角張っている。規模は長軸4.80m、短軸3.72mである。

面積 15.60㎡ 方位 N-92°-E
埋没土 上層は軽石粒・焼土粒を含む黒褐色土で、下層は夾雑物を含まない粘質黒色土で埋まっていた。床面 遺構確認面から22cm掘り込んで床面となる。床面には全体に小さな凹凸があるが、竈から中央部にかけて硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈口が張り出さない形態の竈で、焚口幅は47cmである。燃焼部の壁はあまり顕著

に焼けていなかった。燃焼部および煙道部は壁から外へ72cm突出していた。燃焼部はやや煙道部に向かって傾斜していた。竈前および燃焼部には土師器壘形土器破片が出土した。

周溝 北壁際に幅14cmほどの周溝が検出された。

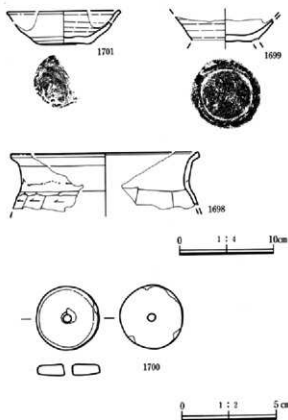
柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.66m、短径0.53m、深さ0.13mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

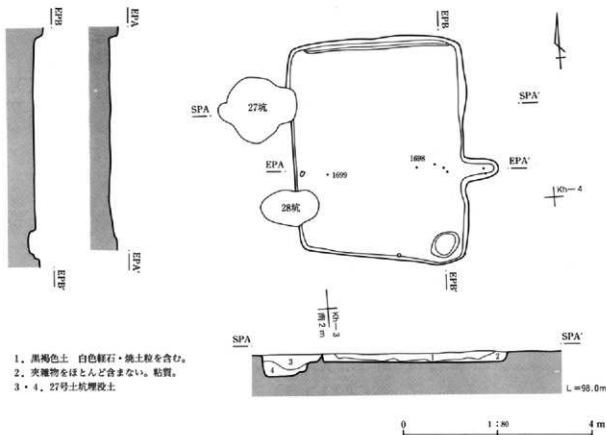
遺物 180点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物は竈周辺に集まっている。竈前から土師器壘形土器(1698)が床面直上で出土した。須恵器高台椀形土器(1699)は西半部中央床面上6cmで、土製紡錘車(1700)は南東隅壁際床面直上で出土した。

(遺物観察表：22頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。



第102図 2区98号住居出土遺物



1. 黒褐色土 白色軽石・焼土粒を含む。
 2. 夾雑物をほとんど含まない。粘質。
 3・4. 27号土坑埋戻土

第103図 2区98号住居

2区99号住居

位置 K g・h-4・5グリッド

写真 P L40・41

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。南西隅は工事用杭保全のため、完掘できなかった。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸5.56m、短軸4.50mである。

面積 21.70㎡ 電方位 N-88°-E

床面 遺構確認面から57cm掘り込んで床面となる。床面は全体には平坦で、中央部が硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は24cm、左側は12cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は72cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化し、使用面には灰がよく残っていた。燃焼部および煙道部は壁から外へ80cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

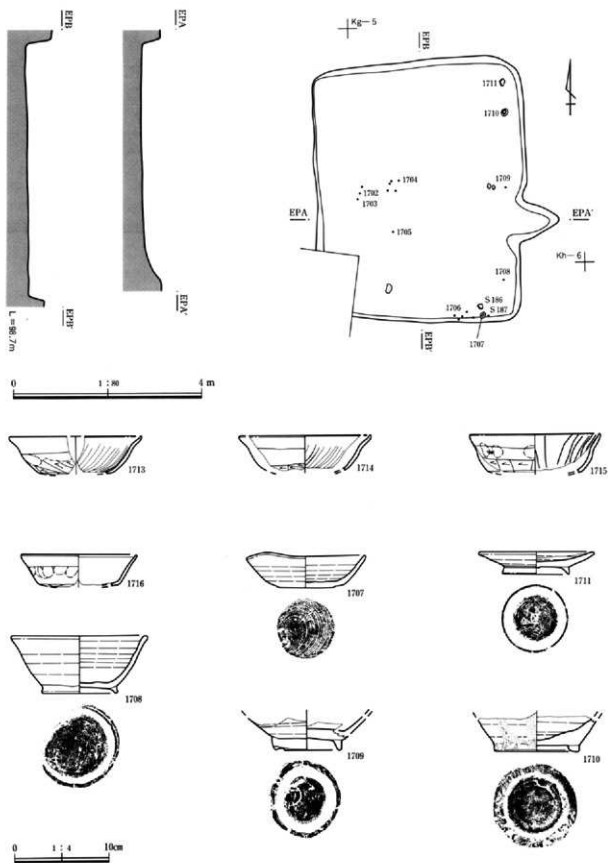
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

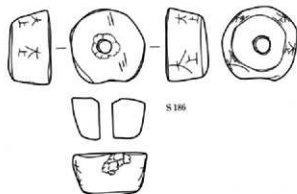
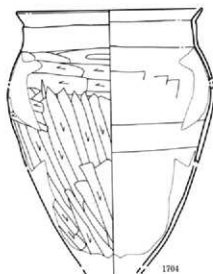
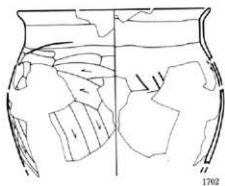
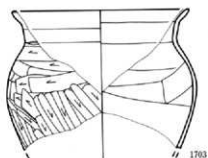
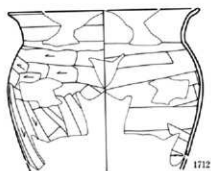
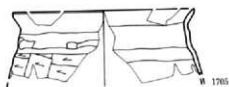
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 900点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。住居西半部に出土した土師器甕形土器(1702・1703・1704)も床面から10~20cm上で出土した。土師器甕形土器(1705)は床面直上で出土した。南東隅にも遺物が集中していたが、土師器甕形土器(1706)は流れ込むように床面から10cmほど上で出土した。須恵器杯形土器(1707)や須恵器高台付碗形土器(1708)、石製紡錘車(S 186)、碁石(S 187)は床面近くで出土している。また、須恵器高台付碗形土器(1709)・須恵器長頸壺形土器(1710)・須恵器高台付皿形土器(1711)は電左側東壁沿いの床面直上で出土した。(遺物観察表: 23頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第104図 2区99号住居と出土遺物(1)



第105図 2区99号住居出土遺物(2)

2区 100号住居

位置 ke-f-4・5グリッド

写真 PL41・42 重複なし

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。南西部が大きく膨らんでいるほかは、周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は南西隅は丸いが、他の三隅は角張っている。規模は長軸4.10m、短軸3.60mである。

面積 12.15㎡ 方位 N-111°-E

床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面は中央部から南壁付近がやや窪んでいるが、ほぼ平坦である。

竈 東壁中央より南側に焼土化した部分があったが、竈としての形態を確認することはできなかった。電崩落後の堆積とも考えられるので竈がこの位置にあった可能性が高い。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

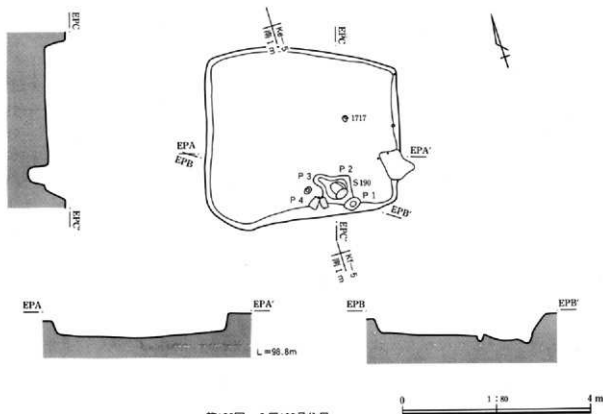
貯蔵穴 本住居では、本遺跡の他の住居内で、貯蔵

穴が検出されている南東隅には貯蔵穴は検出されなかったが、南壁沿いの南東隅から0.8m西の位置に小ピット群が検出された。これらは横に並んだ3基のピットと1本の小ピットである。中央のP2は隅丸方形で最も大きい。このP2の周囲には砥石や大形礫が出土し、貯蔵以外の特定の機能があったことを示唆している。各ピットの規模は、P1：25×35×18cm、P2：60×68×45cm、P3：26×32×16cm、P4：15×15×12cmである。

遺物 750点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物で図示できたのは須恵器碗形土器(1717)であるが、これは東部床面から10cmほど上で出土した。また南壁沿いのP2の中から砥石(S190)が、P2の南側から砥石2個(S188・S189)が出土した。

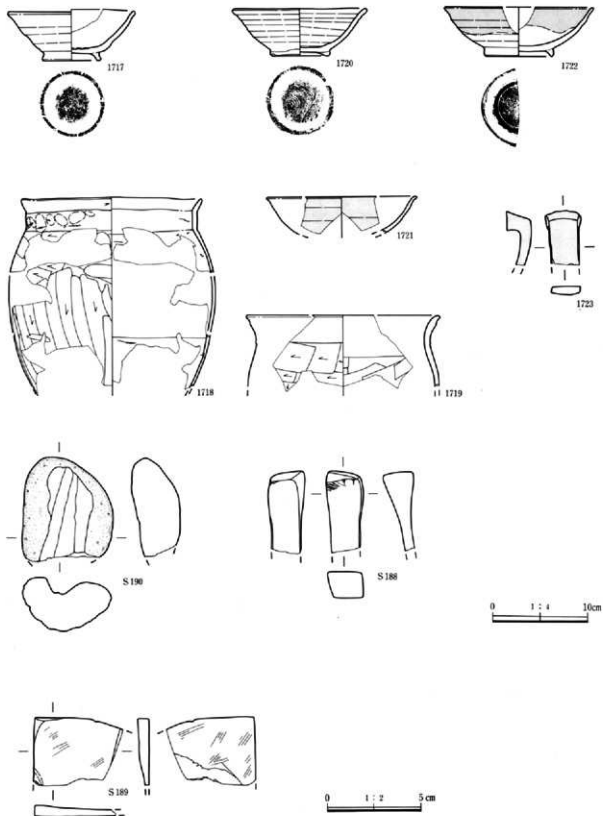
(遺物観察表：23・24頁)

所見 床面近くの遺物は少ないが、埋没土中の出土遺物の全体的傾向から、10世紀前半の住居と考えられる。



第106図 2区100号住居

2. 1・2区の遺構



第107図 2区100号住居出土遺物

2区 101号住居

位置 Kc・d-4グリッド 写真 PL42・43

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。南西隅および竈前は工事用杭保全のため完掘できなかった。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸4.44m、短軸3.54mである。

面積 測定不可 竈方位 N-95°-E
床面 遺構確認面から62cm掘り込んで床面となる。床面は中央部がやや高くなっている。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は55cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていなかった。燃焼部および煙道部は壁から外へ66cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に

緩やかに傾斜し、煙道端部は斜め上方に立ち上がっていた。燃焼部には土師器甕形土器の破片がまとまって出土している。

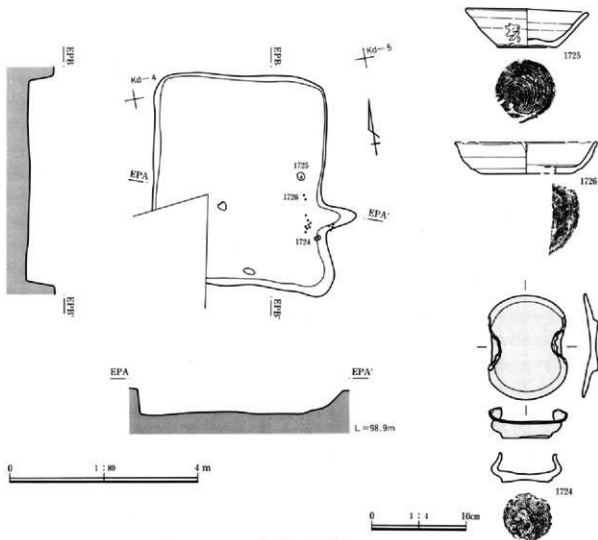
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 20点あまりの遺物が出土したのみである。図示した須恵器杯形土器(1725・1726)は竈左側で出土した。これらはともに、床面から3~4cm上で出土したが、1726は破片であり、混入の可能性がある。灰軸陶器耳皿形土器(1724)は竈右脇の床面から15cmほど上で出土した。(遺物観察表:24頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第108図 2区101号住居と出土遺物

2区 103号住居

位置 H j・k-17・18グリッド 写真 P L 43

重複 西部を新しい掘り込みに切られている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。南東隅は削平によって壊されており、確認できなかった。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は丸い。規模は長軸4.20m、短軸3.45mである。

面積 測定不可 竈方位 N-4°-E
埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から12cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平らで硬化していたが、南東部は削平されており検出できなかった。

竈 北壁中央よりやや東側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形跡の竈で、右側は32cm、左側は25cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は32cmである。燃焼部の壁は焼けて焼

土化していた。煙道部は壁から外へ60cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

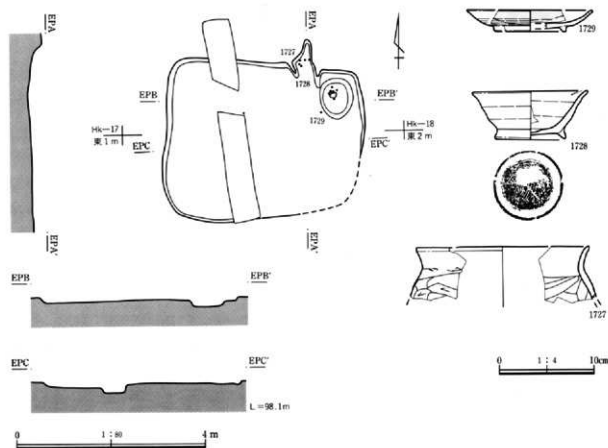
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 北東隅に長径0.88m、短径0.73m、深さ0.14mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は平らで断面形は皿状を呈する。須恵器椀形土器や土師器甕形土器の破片が出土した。

遺物 120点あまりの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物である。竈燃焼部からは須恵器椀形土器や土師器甕形土器が出土したが、須恵器椀形土器(1728)・土師器甕形土器(1727)を图示した。また、貯蔵穴西縁床面直上で灰釉陶器皿形土器(1729)が出土した。(遺物観察表：24頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第109図 2区103号住居と出土遺物

2区1号壁穴

位置 Ia-15・16グリッド 写真 PL43
 形状 基本的には短軸を南北方向にする台形を呈するが、時期不明の重複遺構が西壁・南壁にあり不定型な形状となっている。西壁と東壁はほぼ直線的に掘られているが、北壁は大きく膨らんでいる。四隅は北西隅が丸い他は、角張っている。規模は長軸4.7m、短軸3.7mである。

面積 方形部分推定10.39㎡

東壁方位 N-3°E

埋没土 浅間B軽石・焼土粒を含む砂質の黒褐色土で埋まっていた。

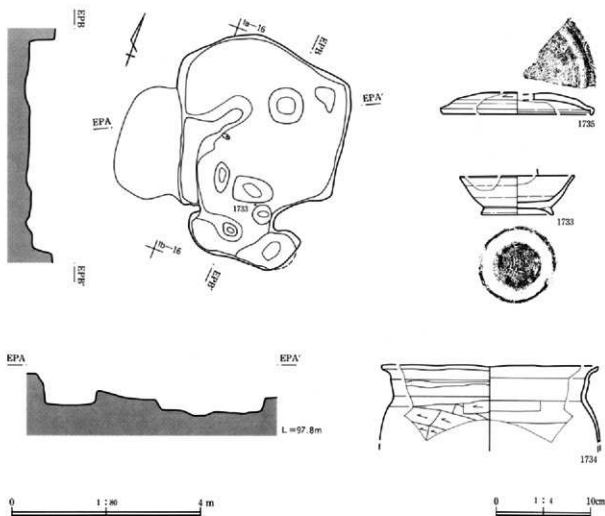
底面 遺構確認面から40cmほど掘り込んで底面と

なる。底面には凹凸があり、西壁沿いには高さ20cmの掘り残り部分があった。

柱穴 貯蔵穴 底面には凹凸や直径40~80cmの円形のピットがいくつか検出されたが、いずれも浅く柱穴や貯蔵穴等の施設とは考えにくい。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物であり、底面直上で出土した遺物はない。遺物は土師器杯・甕形土器がほとんどである。(遺物観察表：24・25頁)

所見 出土遺物は9世紀中葉を中心とする時期のものである。本遺構もこの時期に掘られたものと考えられるが、住居とは考えにくい。遺構の性格は不明である。



第110図 2区1号壁穴と出土遺物

3. 5区の遺構

5区1号住居

位置 1・m-5・6グリッド

写真 PL44

重複 6号住居・10号住居を切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。試掘トレンチや遺構の重複によって全体形状を把握することができず、西壁・北壁は推定線を示した。南壁はほぼ直線的に掘られている。南東隅・南西隅は比較的丸い。規模は長軸推定4.8m、短軸4.08m。

面積 測定不可 方位 N-62°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒・黄褐色土粒を含む黒色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から43cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前で硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側

は34cmほどの袖の基部が残存していた。左半分はトレンチで壊されており、形状は不明である。燃燒部の壁はあまり焼けていない。

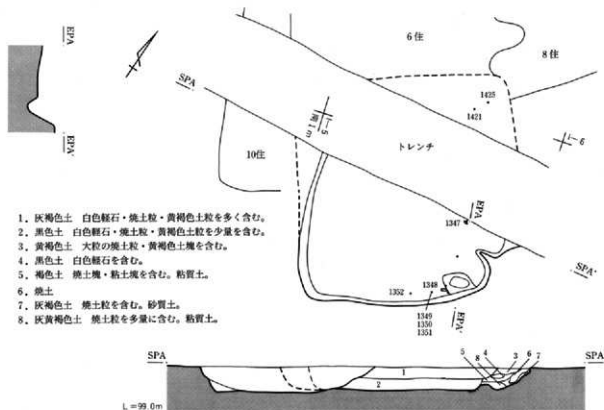
周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.7m、短径0.42m、深さ0.23mの隅丸方形の貯蔵穴が検出された。西縁から、土師器杯形土器・甕形土器が出土した。

遺物 170点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、竈周辺に床面近くの遺物がまとめて出土した。土師器杯形土器(1349・1350・1351)や須恵器段皿形土器(1352)は南壁際に集中して出土した。土師器甕形土器(1347)は竈前で床面から7cm上で出土した。また、本住居の範囲と推定した北東隅では、土師器杯形土器(1421)や須恵器円面甕(1425)が出土している。

(遺物観察表：25頁)

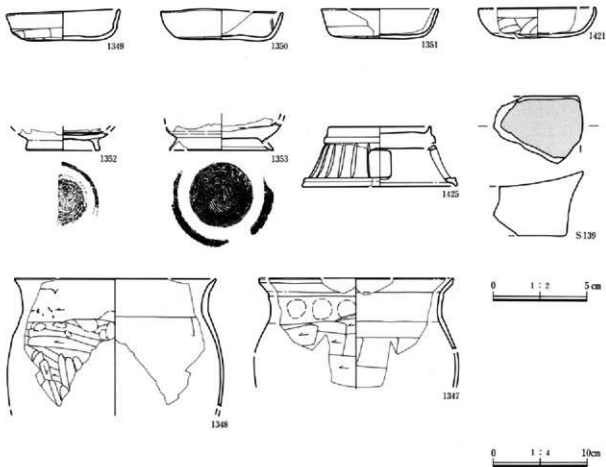
所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



1. 灰褐色土 白色軽石・焼土粒・黄褐色土粒を多く含む。
2. 黒色土 白色軽石・焼土粒・黄褐色土粒を少量含む。
3. 黄褐色土 大粒の焼土粒・黄褐色土塊を含む。
4. 黒色土 白色軽石を含む。
5. 褐色土 焼土塊・粘土塊を含む。粘質土。
6. 焼土
7. 灰褐色土 焼土粒を含む。砂質土。
8. 灰黄褐色土 焼土粒を多量に含む。粘質土。

第111図 5区1号住居

0 1:80 4m



第112図 5区1号住居出土遺物

5区6号住居

位置 k・1-4・5グリッド

写真 PL44・45

重複 8号住居・10号住居を切っている。1号住居に切られている。

形状 1号住居に南壁を切られているので全体形状は不明である。短軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られている。隅は角張っている。規模は東西長4.22mである。
面積 測定不可 竈方位 N-57°-E
床面 遺構確認面から34cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈前が硬化していた。

竈 東壁に竈が付設されていたが、南壁が1号住居で切られているので、東壁のどの位置にあるかは不明である。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は54cmである。燃焼部の壁は

あまり焼けていない。煙道部は壁から外へ72cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には円礫が左寄りに立てられた状態で出土したが支脚かどうかは不明である。使用面には土師器甕形土器(1736)の破片が出土した。

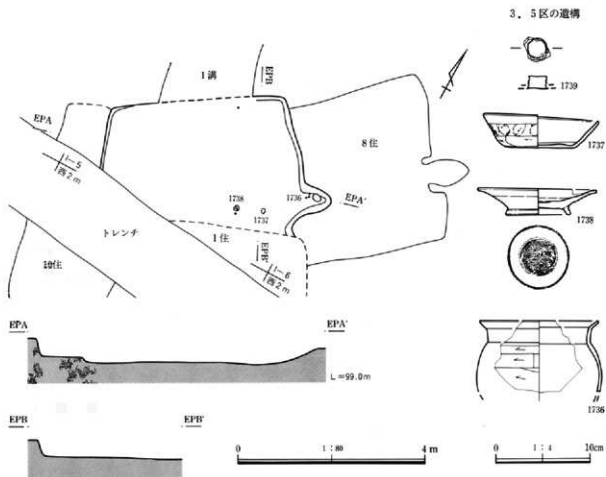
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 50点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、床面近くの遺物は竈周辺にまとまって出土した。須恵器皿形土器(1738)は竈前の住居中央部の床面直上で、土師器杯形土器(1737)は竈前的小ピットの底面から出土した。
(遺物観察表：25頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第113図 5区6号住居と出土遺物

5区9号住居

位置 m-4グリッド 写真 P.L.45

重複 東壁北端が3号土坑に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸3.89m、短軸3.32mである。

面積 12.08㎡ 方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から57cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦である。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は68cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ74cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部には竈の構築材と考えら

れる角礫や粘土が竈前に崩落した状態で出土している。また土師器壺形土器や須恵器杯形土器の破片が重なって出土した。

周溝 柱穴 検出されなかった。

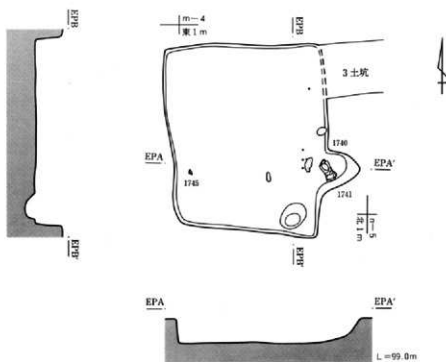
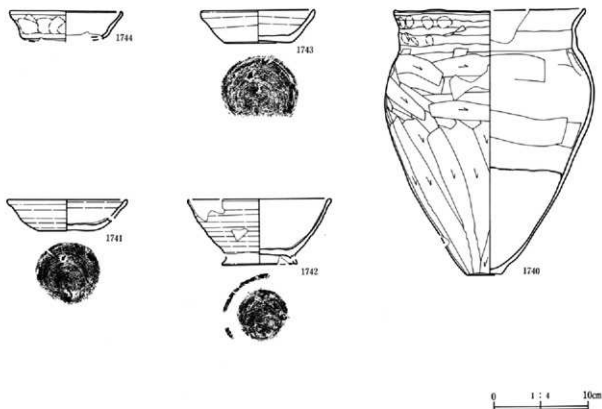
貯蔵穴 南東隅に長径0.62m、短径0.50m、深さ0.20mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 175点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器壺形土器(1740)・須恵器杯形土器(1741)は燃焼部使用面直上で出土した。他の須恵器碗形土器(1742)・須恵器杯形土器(1743)・土師器杯形土器(1744)は埋没土中からの出土遺物である。

(遺物観察表：25・26頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



第114図 5区9号住居と出土遺物



5区11号住居

位置 j-3・4グリッド 写真 PL45
重複 7号住居を切っているが、本住居埋没土との識別が困難で、南壁は検出できなかった。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。南壁は出土遺物の時期や埋没土層の検討から推定した。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸4.14m、短軸推定2.48mである。

面積 測定不可 北壁方位N-89°-E
埋没土 わずかに軽石粒・焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸はあるが平坦で、竈周辺が硬化。

竈 東壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出す形態の竈で、右側は25

cm、左側は15cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は35cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部先端は新しい掘削で壊されており、壁から外へ18cm突出して遺存していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道端部は上方に立ち上がっていた。

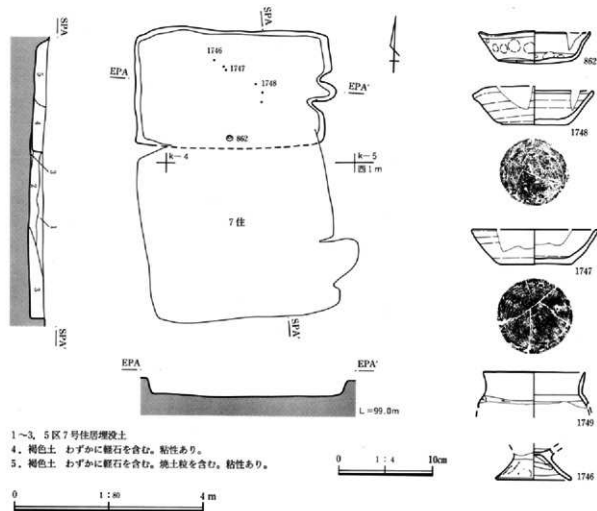
周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 70点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物は住居中央部に出土している。図示した土師器台付菱形土器(1746)・須恵器杯形土器(1747・1748)・土師器杯形土器(862)は床面直上で出土した。

(遺物観察表：26頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第115図 5区11号住居と出土遺物

4. 6区の遺構

6区3号住居

位置 c・d-7・8グリッド 写真 PL46
形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや角張っている。規模は長軸4.90m、短軸4.26mである。

面積 18.56㎡ **電方位** N-88°-E
床面 遺構確認面から24cm掘り込んで床面となる。電前と北東隅に焼土・灰が残存していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は40cmである。竈焚口部の両側には礎が立てられていた。煙道部は壁から外へ75cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで煙道部に緩やかに傾斜していた。周溝 西壁の中央部および電左脇に幅20cmの周溝が検出された。

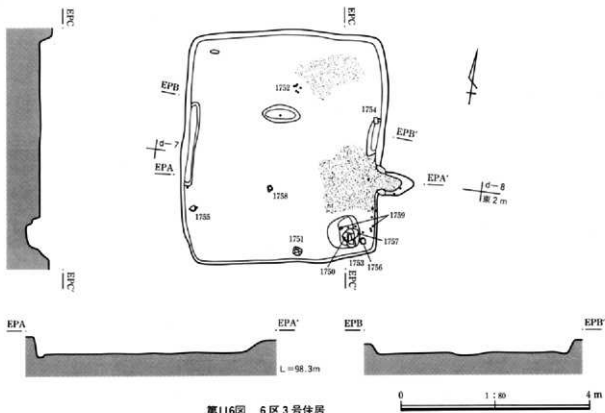
柱穴 主柱穴は検出されなかったが、住居北部に規模(短径×長径×深さ)が39×81×6cmの溝状の小ピットが検出された。形態から柱穴とは考えにくい

が、東西壁に検出された周溝の北端を結ぶ線状に長く掘られていることから、間仕切りの施設とも考えられよう。

貯蔵穴 南東隅に長径0.65m、短径0.54m、深さ0.28mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴内からや東壁との間には多くの遺物が出土した。

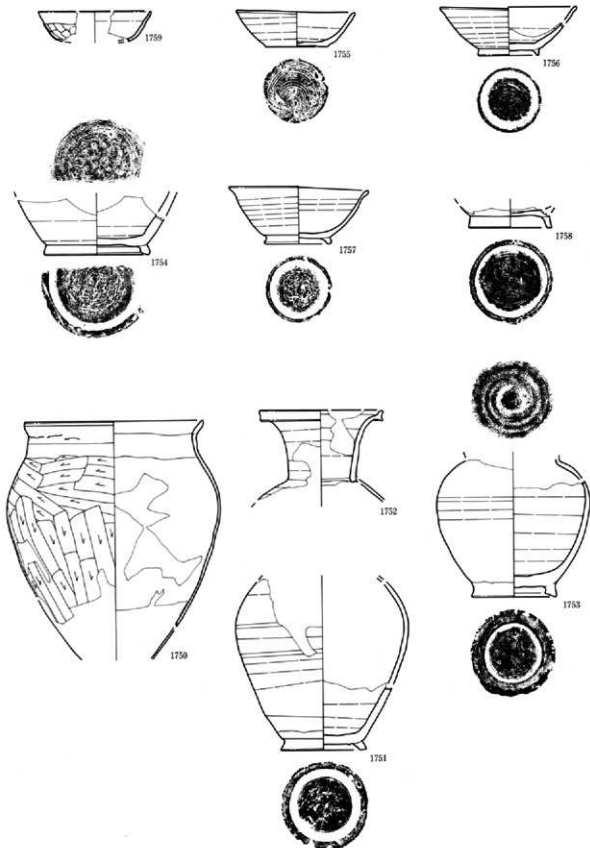
遺物 340点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、床面近くの遺物も比較的多く残されていた。最も遺物がまとまっていたのは貯蔵穴周辺で、貯蔵穴の中からは土師器壺形土器(1750)や須恵器壺形土器(1753)が出土した。貯蔵穴と東壁の間には須恵器椀形土器(1756・1757)や土師器杯形土器(1759)が床面直上で出土した。また本住居は須恵器長頸壺形土器が特徴的に出土している。南壁沿いの1751・電左脇の1754・北部の1752が床面直上で出土した。また須恵器椀形土器(1758)や須恵器杯形土器(1755)は西壁近くで床面直上で出土した。(遺物観察表：26頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。



第116図 6区3号住居

4. 6区の遺構



第117図 6区3号住居出土遺物

0 1:4 10cm

6区8号住居

位置 c・d-6・7グリッド 写真 PL47

重複 9号住居の北壁を掘っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、東壁はやや膨らんでいる。四隅は比較的丸い。規模は長軸5.49m、短軸4.35mである。

面積 21.43㎡ 方位 N-93°-E

埋没土 焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土。

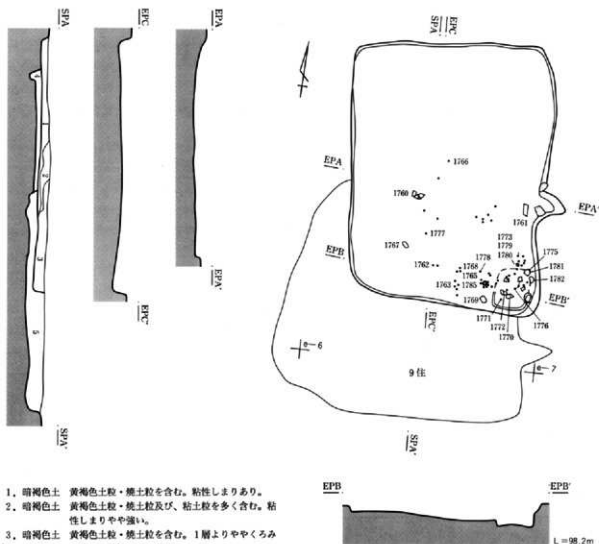
床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面とな

る。床面は平坦で電気がやや硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は55cmである。焚口の両側には礫が1個ずつ出土した。燃焼部の壁は残存が浅く、顕著な焼土化は見られなかった。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 長軸推定0.9m、短軸0.72m、深さ0.2mの隅丸長方形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴の内外か



1. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒を含む。粘性しまりあり。
2. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒及び、粘土粒を多く含む。粘性しまりやや強い。
3. 暗褐色土 黄褐色土粒・焼土粒を含む。1層よりややくろみが強い。粘性しまりあり。
4. 床下覆土 黒色を主体とし、地山塊（灰褐色土）を含む。
5. 6区9号住居埋没土

第118図 6区8号住居

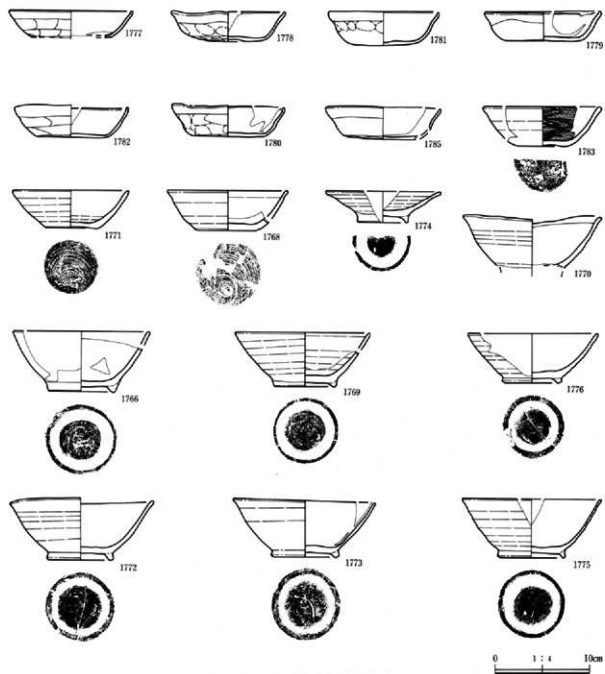
4. 6区の遺構

ら遺物が多数出土している。

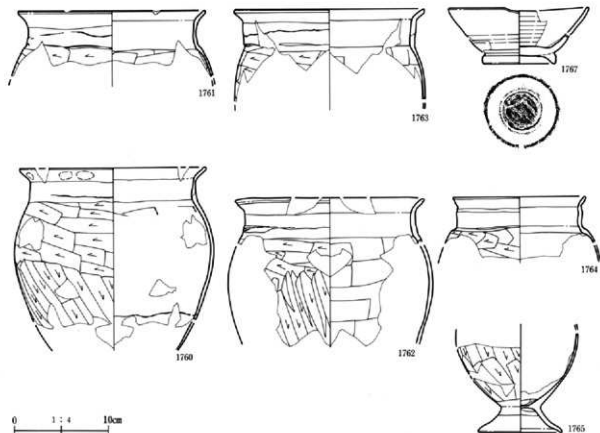
遺物 1100点あまりの遺物が出土している。1000点以上が埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物も比較的残っており、23点を図示することができた。出土した遺物の器種は土師器杯形土器・土師器甕形土器と須恵器杯・椀形土器がほとんどである。土師器甕形土器(1760・1761・1762・1763・1764・1765)の多くは貯蔵穴の西側南壁沿いにまとまって

出土した。これに対して土師器杯形土器(1777・1778・1779・1781・1782)や須恵器皿・杯・椀形土器(1766・1767・1768・1769・1770・1771・1772・1773・1774・1775・1776)は貯蔵穴の周囲で出土している。黒色土器杯形土器(1783)は埋没土中から出土した。(遺物観察表：27・28頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第119図 6区8号住居出土遺物(1)



第120図 6区8号住居出土遺物(2)

6区9号住居

位置 d・e-6・7グリッド 写真 PL48
重複 8号住居に北壁を切られているが、床面は残っていた。また北西隅と西壁は攪乱によって切られているが、かろうじて西壁下部は残存していた。

形状 わずかに短い短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが西壁はやや膨らんでいた。四隅は北東隅を除いて丸い。規模は長軸3.86m、短軸3.70mである。

面積 測定不可 方位 N-89°-E
埋没土 わずかな焼土粒・黄褐色土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、北西隅は床面が検出できなかった部分があり、凹凸が著しい。

電 東壁中央よりやや南側に電が付設されてい

た。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の電で、焚口幅は50cmである。燃焼部の壁は顕著に焼土化していない。煙道部は壁から外へ55cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 検出されなかった。

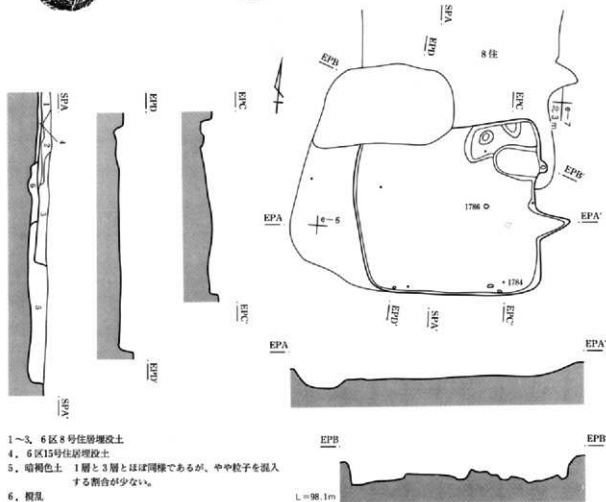
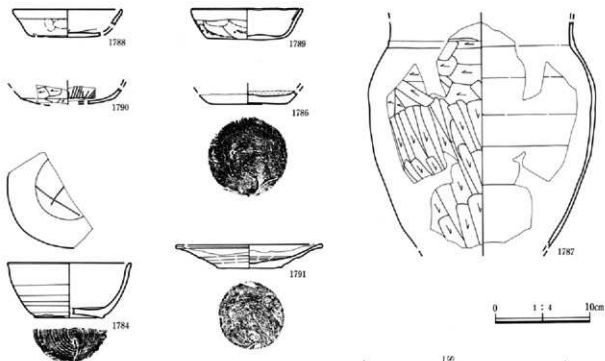
貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 730点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であり、床面近くからの遺物も少ない。図示し得たのはいずれも須志器杯形土器で、1786は竈前に伏せた状態で出土した。1784は「×」の刻書のある土器で、住居南東隅の壁際で出土した。他は埋没土中の出土遺物である。

(遺物観察表：28頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。

4. 6区の遺構



1~3、6区8号住居埋没土

4、6区15号住居埋没土

5、暗褐色土 1層と3層とは同様であるが、やや砂子を混入する割合が少ない。

6、概観

第121図 6区9号住居と出土遺物

6区10号住居

位置 b・c-2・3グリッド 写真 PL48
重複 なし

形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや膨らんで掘られており、台形に近い四隅は丸い。規模は長軸3.02m、短軸2.66mである。面積 6.25㎡ 竈方位 N-98°-E
床面 遺構確認面から24cm掘り込んで床面となる。床面は多少の凹凸は見られるが、全体には平坦である。あまり顕著な硬化面は検出されなかった。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は42cmである。燃焼部の壁は奥の方が少し焼けていた。煙道部は壁から外へ36cm突出してい

た。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

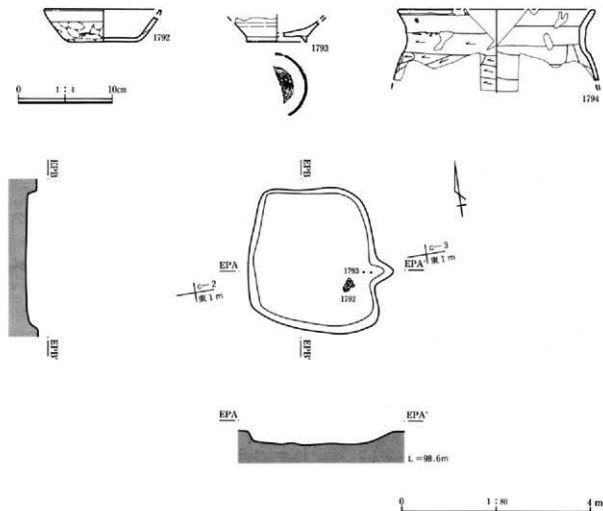
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 105点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した、土師器杯形土器(1792)は竈前床面直上で出土した。須恵器高台付椀形土器(1793)は竈燃焼部で床面から11cm上で出土したが、竈崩落土に含まれていた遺物と考えられる。土師器甕形土器(1794)は埋没土中からの出土遺物である。(遺物観察表：28頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第122図 6区10号住居と出土遺物

6区15号住居

位置 c・d-6グリッド 写真 PL48

重複 本住居埋没土上に8号住居がつくられ、本住居南壁を9号住居が切っている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。規模は長軸3.76m以上、短軸3.05mである。

面積 測定不可 北壁方位 N-84°-E

床面 遺構確認面(8号住居床面)から13cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていたと考えられるが、8号住居掘り形によって壊されていると判断した。

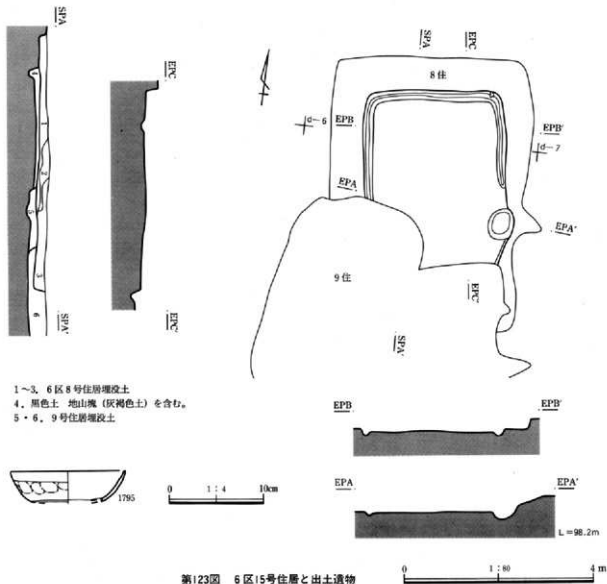
周溝 本住居の確認できた壁のうち、竈周辺を除く東・北・西壁に幅20cm、深さ7cmほどの周溝が検出された。

柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。竈前床面直上で土師器杯形土器や壺形土器の破片が出土したが、いずれも小破片で図示できなかった。図示した土師器杯形土器(1795)は埋没土中の遺物であるが、竈前で出土した遺物と同型式のものである。

(遺物観察表: 28頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第123図 6区15号住居と出土遺物

5. 7区の遺構

7区1号住居

位置 n・o-11・12グリッド 写真 PL49
 形状 住居対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は東隅は丸く、他は角張っている。規模は長軸3.42m、短軸3.03mである。

面積 8.77㎡ 方位 N-116°-E
 床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。床面は多少の凹凸があるがほぼ平坦で、電前は硬化していた。

電 東南壁中央よりやや南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形製の電で、焚口幅は50cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ45cm

突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

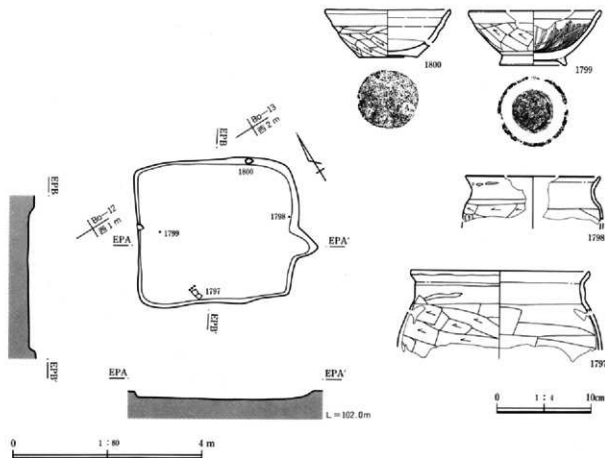
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 35点あまりの遺物が出土している。出土遺物は比較的少ないが、床面近くの遺物が壁沿いに残されていた。いずれも床面と考えた面から数cm上にあるが、比較的大きな破片であり、時期的にもまとまっていることから、住居に伴うものと考えたい。電左脇から土師器台付甕形土器(1798)、南壁中央から土師器甕形土器(1797)が、北東壁・北西壁際から土師器高台付碗形土器(1799)・土師器杯形土器(1800)が出土した。(遺物観察表：28・29頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第124図 7区1号住居と出土遺物

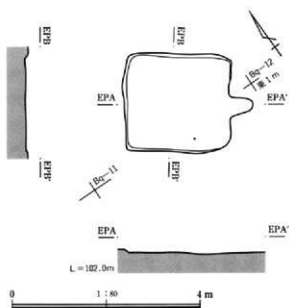
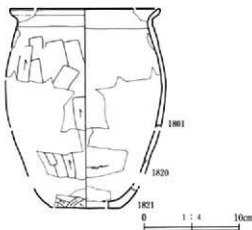
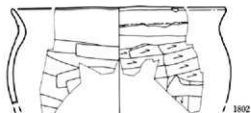
7区2号住居

位置 B P・Q-11グリッド

形状 住居対角線を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は比較的角張っている。規模は長軸2.25m、短軸2.05m。

面積 4.17㎡

方位 N-122°-E



第125図 7区2号住居と出土遺物

床面 遺構確認面から5cm掘り込んで床面となる。床面はやや凹凸があり、顕著な硬化面はみられない。

竈 東南壁ほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は42cmである。削平が著しく、竈使用面が残されているのみで、燃焼部の壁の焼土もほとんど確認できなかった。燃焼部および煙道部は壁から外へ50cm突出していた。

周溝 柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 10点あまりの遺物が出土している。図示した土師器変形土器(1801)は南壁際の床面直上で出土した。(遺物観察表:29頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。

7区5号住居

位置 C b-6グリッド 写真 P L49

重複 南壁を11号溝に切られている。

形状 長方形を呈すると考えられるが、南壁を11号溝に、西壁は削平によって壊されており、全体形状は明らかにできなかった。北壁・東壁は直線的に掘られており、北東隅は角張っている。規模は不明である。

面積 測定不可 北壁方位 N-102°-E
埋没土 小礫・軽石・焼土粒を含む淡褐色土で埋まっていた。

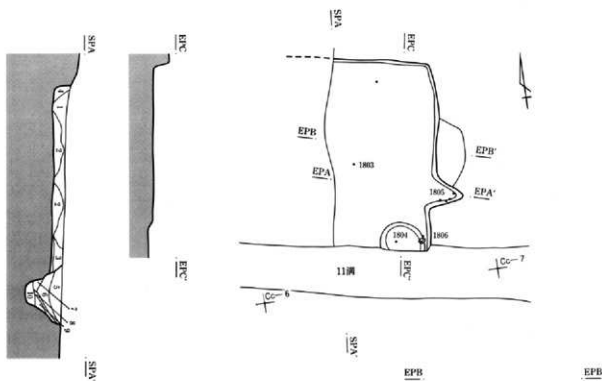
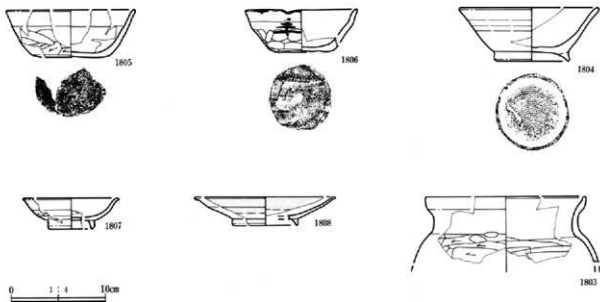
床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面は竈前がやや下がっているが、ほぼ平坦である。あまり顕著な硬化面は確認できなかった。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁はあまり焼けていない。燃焼部および煙道部は壁から外へ60cm突出していた。燃焼部はやや窪み、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



1. 淡褐色土 小礫・細砂を含む。サラサラした層。
2. 淡褐色土 小礫・細砂・軽石・焼土粒を含む層。サラサラした層。
3. 淡黄褐色土 小礫・細砂・軽石・黄褐色土粒を含む。サラサラした層。
4. 褐色土 黄褐色土粒・細砂・白色軽石あり。サラサラした層。
- 5~10, 7区11号溝埋没土

第126図 7区5号住居と出土遺物

貯蔵穴 南東隅と考えられる位置に、長径0.95m、短径0.6m以上、深さ0.95mの楕円形の貯蔵穴が検出された。南半分は11号溝に切られている。

遺物 190点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物は竈および貯蔵穴の周辺で出土している。土師器杯形土器(1805)は竈前落土内から、土師器杯形土器(1806)・須恵器碗形土器(1804)は貯蔵穴底面直上で出土している。土師器甕形土器(1803)は住居中央部、床面から9cm上で出土した。(遺物観察表：29頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。

7区9号住居

位置 B P-14グリッド 写真 P L 49
重複 なし

形状 削平によって竈周辺のみが残った住居であり、全体形状および規模は不明である。

竈方位 N-114°-E

床面 竈前の床面はすこし高くなっており、若干硬化していた。

竈 東壁南隅よりに竈が付設されていたと推定される。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は28cmである。焚口部の両側には円礫が立てられていた。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ42cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道端部は上方に立ち上がっていた。

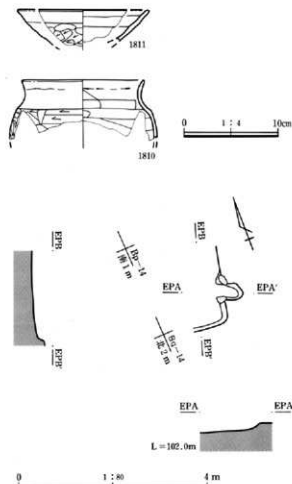
周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 5点の遺物が出土している。いずれも埋没土中の小破片である。このうち土師器甕形土器(1810)・杯形土器(1811)を図示した。

(遺物観察表：29頁)

所見 埋没土中からの出土遺物であるが、10世紀前半の住居と考えられる。



第127図 7区9号住居と出土遺物

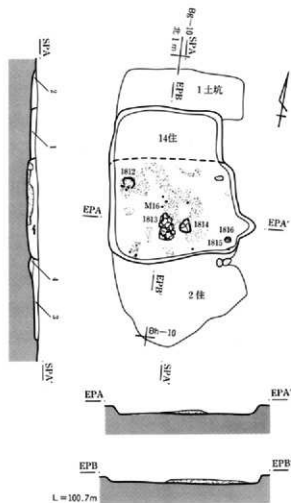
7区の調査
 後世に開られた方形区画の間に、平安時代の整った住居が
 検出された。



6. 8区の遺構

8区1号住居

位置 Bg-9・10グリッド 写真 PL50
重複調査時には、1号土坑を切っている北壁までを本住居の範囲と考えていたが、全体の形や住居内の床面の高さおよび焼土・炭化物の分布範囲から考えると、2軒の重複と考えた方が良いと思われる。したがって炭化物が多量に出土した部分を8区1号住居とし、1号土坑を切っている部分を8区14号住



1. 8区1号・14号住居埋没土
2. 8区1号土坑埋没土
3. 黒褐色土 軽石粒・小石・焼土粒を含む。
4. 黒褐色土 軽石粒・小石・焼土粒・焼土塊（直径2～4cm）を含む。

第128図 8区1号住居

居とする。したがって本住居の北壁は14号住居の南半部を切っている。また、南壁は2号住居を切っている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈すると推定される。周壁はほぼ直線的に掘られているが、四隅はやや丸く、特に南西隅は大きく膨らんでいる。規模は長軸3.25m、短軸2.68mである。

面積 7.3㎡ 方位 N-89°-E
埋没土 軽石・炭化物粒を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から18.5cm掘り込んで床面となる。床面には焼土塊や炭化物塊を多量に含んだ土が厚さ15cmほど堆積しており、その上面や中部からほとんど完形に近い遺物が出土した。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は40cmである。燃燒部の壁は顕著に焼けていなかった。燃燒部および煙道部は壁から外へ36cm突出していた。燃燒部はほぼ平らで、煙道端部は上方に立ち上がっていた。

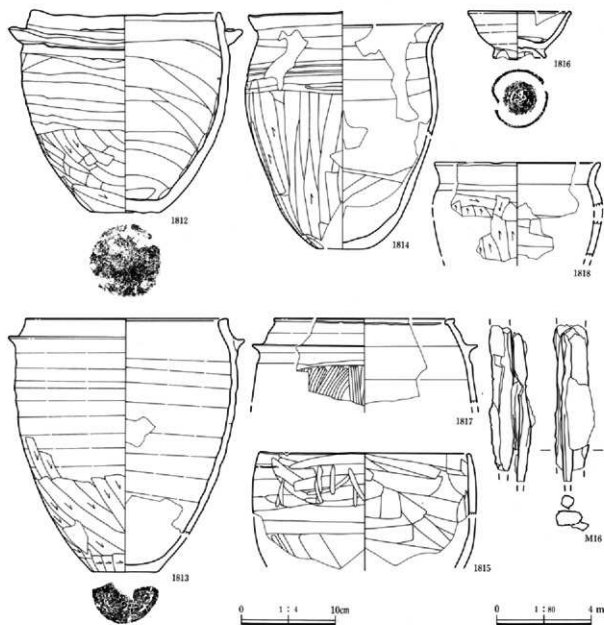
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物であるが、完形に近い遺物が床面上に堆積した焼土・炭化物を多く含む土の内部および上面から出土している。中央部の須恵器羽釜(1813)や土師器壺形土器(1814)は焼土・炭化物を含む土の上面から出土した。これに対し、土師器羽釜(1812)や土師器鉢形土器(1815)や須恵器高台付碗形土器(1816)は南東隅壁際の床面直上で出土した。また、形態不明の鉄製品(M16)が中央部床面直上で出土している。(遺物観察表：30頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第129図 8区1号住居出土遺物

8区14号住居

位置 B 8-9・10グリッド 写真 PL50
重複 北壁が1号土坑を切っている。南半分を1号住居に切られている。

形状 方形を呈すると考えられるが、南半部が切られているために全体形状は不明である。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は丸い。規模は北壁長2.32mである。北壁方位 N-85°-E

床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸はあるが、全体には平坦である。
遺物 1号住居とともに70点あまりの埋没土出土遺物を出土しているが、確実に14号住居と断定できる遺物は確認できなかった。
所見 出土遺物からは住居の時期を判断することはできない。1号住居との関係から10世紀前半以前の住居と考えられる。

8区2号住居

位置 B8-9・10グリッド 写真 PL51

重複 1号住居に北半部を切られている。

形状 対角線を南北方向にする方形を呈すると推定されるが、全体形状は不明である。周壁はやや凹凸があり、隅は丸い。規模は南東壁長2.5mである。南壁方位 N-49°-E

埋没土 焼土粒・塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から15cm掘り込んで床面となる。床面は南西部に小ピットが多く検出され、凹凸が著しい。これらの小ピットが住居に伴うものかは判然としない。東南壁際には炭化材も出土していた。

竈 北東壁に竈が付設されていたと推定されるが、その左半分を1号住居に切られており、全体は

明確でない。残存していた焼土や粘土塊から考えると竈は壁より内側に竈袖が張り出す形態と思われる。右側の袖の基部が40cmほど残っていた。袖には礎が2個芯として使われていた。

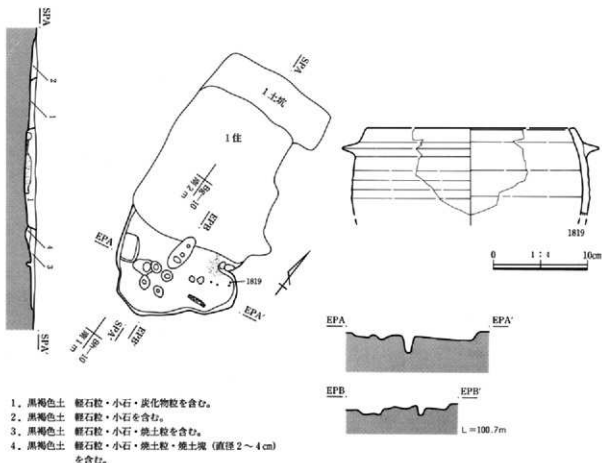
周溝 検出されなかった。

柱穴 南西部に小ピットが多数検出されたが、柱穴とは断定できなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 5点ほどの土器小破片が出土しているが、いずれも床面直上で出土した。須恵器羽釜(1819)を図示したが、他に須恵器椀形土器や土器器杯形土器がある。(遺物観察表：30頁)

所見 出土遺物から、10世紀後半の住居と考えられる。



第130図 8区2号住居と出土遺物

8区3号住居

位置 Be・f-10グリッド 写真 PL51
重複なし

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸4.00m、短軸3.65mである。

面積 11.02㎡ 竈方位 N-88°-E
床面 遺構確認面から44cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、竈前を中心に硬化していた。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は52cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ83cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに

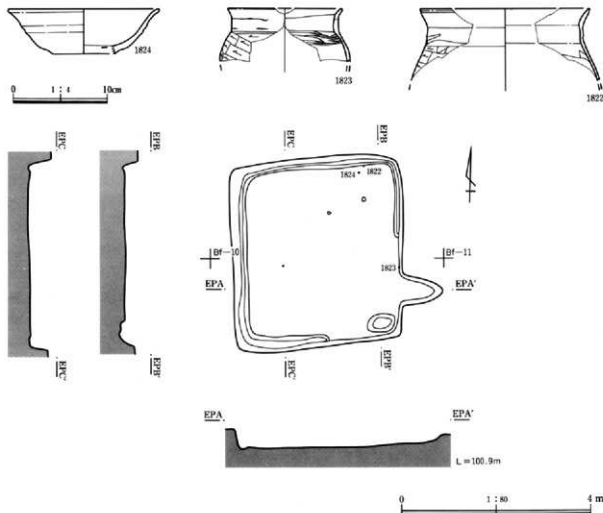
傾斜していた。

周溝 東壁の竈右0.8mのところから、北壁・西壁と南壁の西半分の壁際に幅16~24cm、深さ3~7cmの周溝が検出された。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.55m、短径0.45m、深さ0.12mの楕円形の貯蔵穴が検出された。

遺物 80点あまりの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面直上の遺物は4点で、北壁際で出土した土師器変形土器(1822)と須恵器杯形土器(1824)、竈左脇の土師器台付変形土器(1823)を図示した。(遺物観察表:30頁)
所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。



第131図 8区3号住居と出土遺物

8区8号住居

位置 Ak・1-9グリッド 写真 PL51
重複 なし

形状 短軸を南北方向にするやや台形に近い長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られているが、東壁はやや膨らんでいる。四隅は南西・北西隅は角張り、南東・北東隅は丸い。規模は長軸3.94m、短軸3.68mである。

面積 13.44㎡ 電方位 N-90°-E

床面 遺構確認面から30cm掘り込んで床面となる。床面は2段あり、北壁と西壁に沿って3~4cm高い床面がつくられていた。その幅は北壁沿いで0.42m、西壁沿いで1.0mである。

竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電軸が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁は良く焼けて固く焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ86cm突出していた。燃焼部は煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部に残された遺物はない。

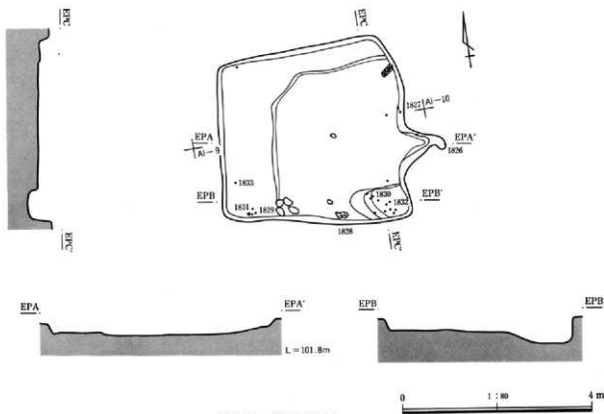
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

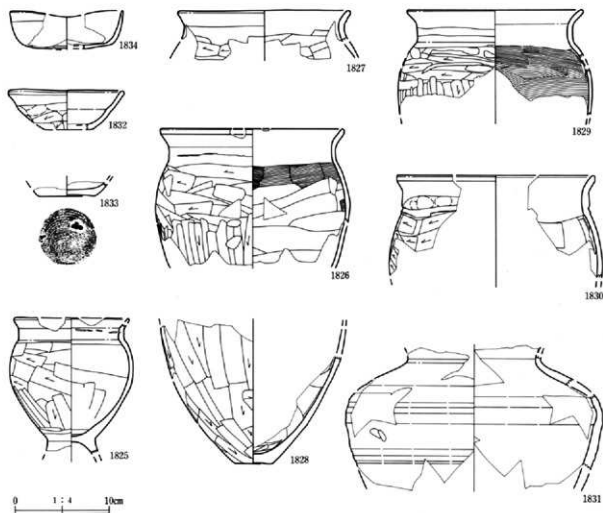
貯蔵穴 南東隅に長径1.3m、短径0.72m、深さ0.49mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面はほぼ平らで、西側は緩やかに立ち上がっていた。底面に土師器変形土器や杯形土器が出土した。

遺物 330点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、床面近くにも多くの遺物が残されていた。竈周辺には土師器変形土器(1825・1826・1827)が出土しているが、いずれも床面から10cmほど上で出土した。貯蔵穴周辺には土師器杯形土器(1832)や土師器変形土器(1828・1830)が床面直上で出土した。北西隅には土師器変形土器(1829)や須恵器短頸壺形土器(1831)が床面直上で、須恵器杯形土器(1833)が床面上8cmで出土した。また西壁沿いの段と南壁が接する位置に礎が4個まとも出土した。(遺物観察表：30・31頁)

所見 出土遺物から、10世紀前半の住居と考えられる。



第132図 8区8号住居



第133図 8区8号住居出土遺物

8区9号住居

位置 Af・g-10・11グリッド写真PL52
形状 長軸をほぼ南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は南西隅が丸いのを除いてやや角張っている。規模は長軸5.00m、短軸3.50mである。

面積 14.40㎡ 竈方位 N-101°-E
埋没土 軽石と少量の焼土粒を含む褐色土で埋まる。
床面 遺構確認面から46cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、中央部が盛り上がった状態になっていた。電前から中央部は硬化面が顕著であった。また、西壁に沿って長さ1.6~1.8m、幅0.6mほどの長方形の土坑が2基床面上に検出さ

れた。土層観察の結果からは土坑埋没土上層に貼り床が確認された。したがってこの土坑は住居に先行するか、住居に伴うものと考えられる。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。焚口部左側面には角礫が立てられていた。燃烧部の壁は良く焼けて焼土化していた。燃烧部および煙道部は壁から外へ90cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、煙道部は斜め上方に傾斜していた。燃烧部には土師器壺形土器の破片が竈前落土に混じて出土している。

周溝 東壁の北端の一部から北壁・西壁の北端の一部にかけて「コ」の字状に周溝が検出された。本

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物

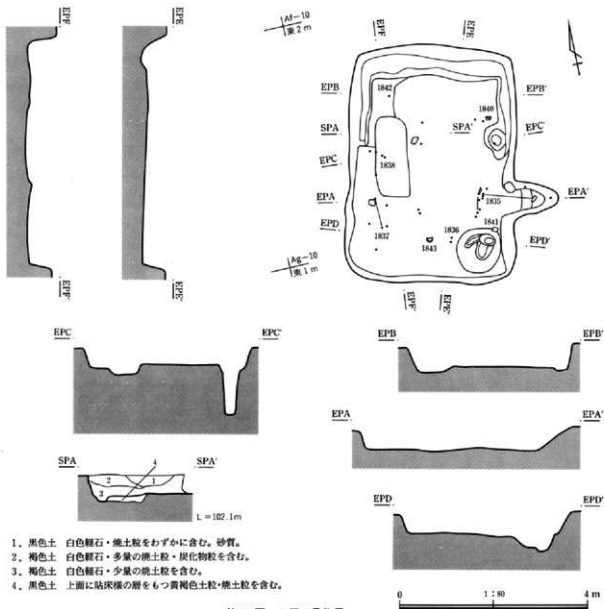
住居の周溝は幅24~44cm、深さ10cmほどで、他の住居の周溝に比べて規模が大きいのが特徴である。

柱 穴 柱穴は検出されなかったが、東壁の周溝の南端に小ピットが検出された。何らかの住居施設と考えられる。ピットの規模(短径×長径×深さ)は、P1:46×74×106cmである。

貯蔵穴 南東隅に長径0.96m、短径0.92m、深さ0.33mの楕円形の貯蔵穴が検出された。底面は平坦でなく、若干の凹凸がある。

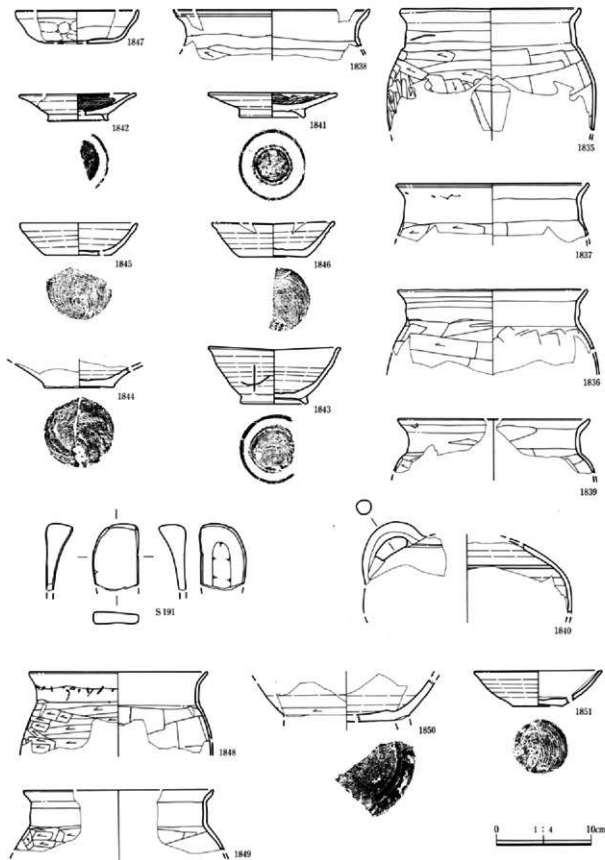
遺物 1050点あまりの多くの遺物が出土している。ほとんどが埋没土中からの出土遺物であるが、

床面近くの遺物も少量出土した。南部に出土した土師器壘形土器(1837)や須恵器高台付碗形土器(1843)は床面直上で出土している。西側の土師器壘形土器(1838)や黒色土器高台付皿形土器(1842)は住居に先行する長方形土坑の埋没土上面で出土しており、本住居床面遺物として考えたい。また、竈前から土師器壘形土器(1835)が床面より数cm上で出土しているが、竈燃焼部で出土した破片と接合しており、本住居に伴う遺物と考えたい。(遺物観察表:31・32頁) 所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



第134図 8区9号住居

6. 8区の遺構



第135図 8区9号住居・10号住居出土遺物

8区10号住居

位置 Ae・f-9・10グリッド

写真 PL53

重複 西壁を新しい土坑で切られている。

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや角張っている。規模は長軸3.36m、短軸3.10mである。

面積 9.06㎡ 方位 N-110°-E

埋没土 軽石と焼土粒を多量に含む褐色土。

床面 遺構確認から27cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で中央部が硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は60cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ46cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。燃焼部から竈前にかけては土師器変形土器破片が出土している。

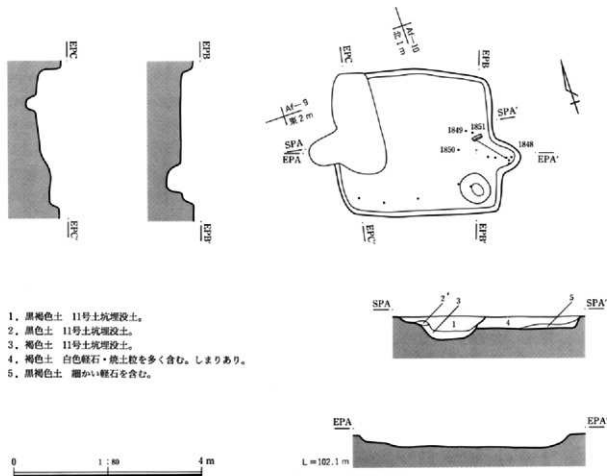
周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.63m、短径0.58m、深さ0.32mの楕円形の貯蔵穴が検出された。貯蔵穴埋没土中からは土師器変形土器の破片が出土している。

遺物 290点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であり、床面直上の遺物はほとんど無い。竈前の土師器変形土器(1848・1849)・須恵器長頸壺形土器(1850)は床面から数cm上から出土したが、竈内の破片と接合しているため、本住居に伴う遺物と考えたい。(遺物実測図は前頁)(遺物観察表:32頁)

所見 出土遺物から、9世紀後半の住居と考えられる。



1. 黒褐色土 11号土坑埋没土。
2. 黒色土 11号土坑埋没土。
3. 褐色土 11号土坑埋没土。
4. 褐色土 白色軽石・焼土粒を多く含む。しまりあり。
5. 黒褐色土 細かい軽石を含む。

第136図 8区10号住居

8区12号住居

位置 Ab・c-10グリッド 写真 PL53
重複 13号住居の西壁を切っている。5号掘立柱建物の柱穴と重複しているが、遺構の平面的な確認の段階では本住居の方が新しいと判断された。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸4.22m、短軸3.52mである。

面積 13.03㎡ 方位 N-88°-E
埋没土 炭化物粒・焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。竈跡には灰と焼土の互層も見られた。

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面はほとんど平坦で竈前から中央部は硬化。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は45cmである。燃焼部の壁は良く焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ72cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 四隅のうち、北東隅を除く三隅に貯蔵穴と考えられる土坑が検出された。これらの土坑はそれぞれ形態が異なっている。南東隅は長径0.95m、短径0.52m、深さ0.23mの長楕円形、南西隅は長径0.92m、短径0.80m、深さ0.25mの楕円形、北西隅は長軸0.80m、短軸0.65m、深さ0.21mの隅丸長方形である。南西隅の貯蔵穴からは土師器変形土器の破片が出土した。

遺物 350点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器杯形土器(1393)や須恵器杯形土器(1394)、北西隅に集中して出土した須恵器変形土器(1392)は、住居東半部の壁際で出土したが、いずれも床面から10~20cm上で出土した遺物である。特に須恵器変形土器は本住居埋没途中に投げ込まれたような状態で出土した。(遺物観察表:32頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。

8区2号掘立柱建物

位置 Am・n-8・9グリッド

写真 PL54

重複 6号住居(9世紀前半)を切っている。

形状 東西棟建物で、3間×2間(7.0m×5.0m)の規模をもつ。柱間寸法は桁行寸法北列(P1~P4)・南列(P7~P10)ともに2.8m-2.0m-2.2mの同一寸法で、西側間口が広い。梁行寸法も西列(P1・P5・P7)・東列(P4・P6・P10)ともに2.0m-3.0mの同一寸法で南側間口が広い。

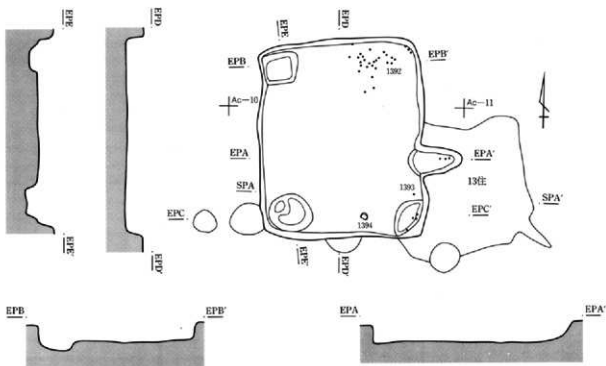
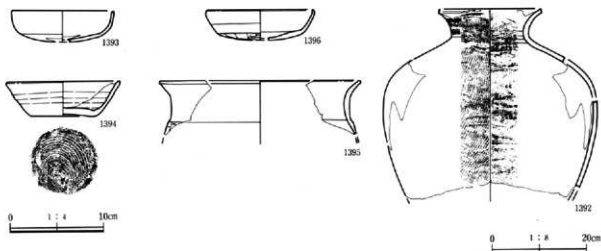
主軸方位 N-1°-E

柱穴 柱穴掘り形は直径1m、深さ0.70mほどの円形あるいは隅丸方形を呈する。柱痕は検出できなかった。

遺物 柱穴から図示した土師器杯形土器3点が出土した。(遺物観察表:32頁)

所見 出土遺物や重複関係から9世紀中葉の建物と考えられるが、建物の時期は厳密には限定できない。8区には他に1号掘立柱建物・3号掘立柱建物・4号掘立柱建物・5号掘立柱建物の1棟の建物跡が検出されているが、時期が明らかになったものはない。本掘立柱建物に隣接する3号・4号掘立柱建物のうち、3号掘立柱建物は柱穴の形態や主軸方位が本建物と一致しており、同時期の可能性が高い。4号掘立柱建物は柱穴の大きさや主軸方位が異なっており、同一時期の建物とはいえない。1号掘立柱建物は時期を考える資料が乏しく、5号掘立柱建物は12号住居との新旧関係が不明確な部分があり時期を限定することは困難である。本書では2号・3号のみ記述して、他の建物は次巻に他区の状況とともにまとめた。

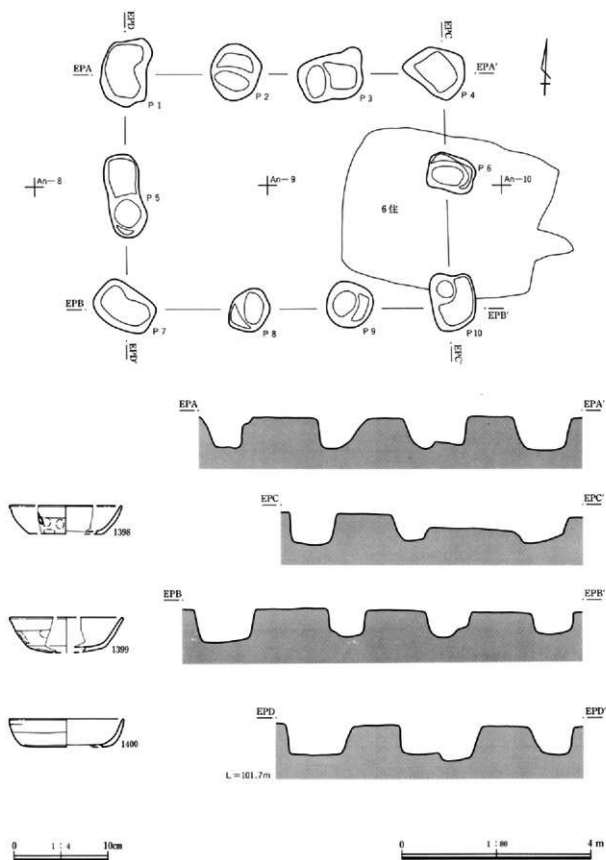
第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



1. 褐色土 白色軽石・浅間C軽石を多く含み、焼土粒・炭化物粒を含む。
2. 褐色土 1層より軽石少ない。しまりあり。
3. 褐色土 2層に焼土粒を多く含む。
4. 灰と焼土粒の互層。
5. 貼床
- 6・7. 8区13号住居埋没土



第137図 8区12号住居と出土遺物



第138図 8区2号掘立柱建物と出土遺物

8区3号掘立柱建物

位置 Am・n-10・11グリッド 2号掘立柱建物の東に隣接する。

写真 PL54

重複なし

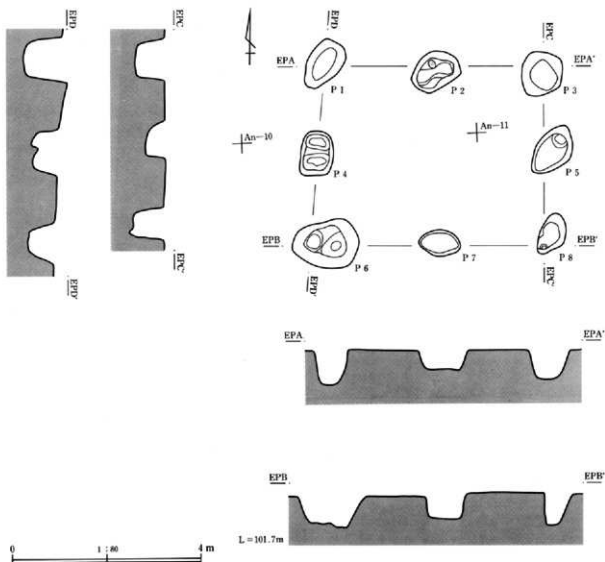
形状 東西棟で、2間×2間の建物である。南西隅のP6には柱痕が2つあり、P6が西の柱痕をとれば梁行西列P1・P4・P6柱筋は西南に広がり、P6東柱痕をとればP1が通らない。したがって西柱痕をとる。柱間寸法は桁行寸法北列(P1~P3)は2.6m-2.0m、南列(P6~P8)は2.9m-2.0m

で東側間口は一致している。梁行寸法は西列(P1・P4・P6)・東列(P3・P5・P8)ともに1.8m-2.2mで同一寸法である。

主軸方位 N-1°-E

柱穴 柱穴掘り形は直径1m、深さ0.70mほどの円形あるいは隅丸方形を呈する。ほとんどの柱穴で柱痕は検出できなかった。

所見 出土遺物はないが、2号掘立柱建物と主軸や柱列の形態や位置が一致するので、同時期の建物と考えられる。



第139図 8区3号掘立柱建物

7. 9区の遺構

9区1号住居

位置 d・e-1グリッド 写真 PL55

重複 古墳時代前期の畠さく溝群を切っている。

形状 長軸を南北方向にする台形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っているが、北東隅のみやや丸い。規模は長軸3.52m、北壁長3.10m、南壁長2.60mである。

面積 8.62㎡ 方位 N-88°-E

埋没土 軽石粒・焼土粒を含む暗褐色土。

床面 遺構確認面から29cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸はあるがほぼ平坦で、電前から中央部にかけて硬化していた。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈

で、焚口幅は61cmである。燃烧部の壁は焼けて部分的に焼土化していた。燃烧部および煙道部は壁から外へ68cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

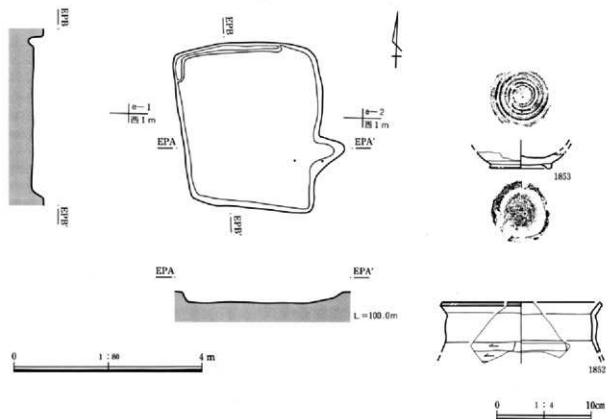
周溝 北壁東端から0.6mのところから、西壁北端0.6mのところまでL字形に、幅16cm、深さ4~7cmの周溝が検出された。

柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 100点あまりの遺物が出土しているが、電前の床面近くに土師器変形土器の破片が出土したのみで、ほとんど埋没土中からの出土遺物である。図示した土師器変形土器(1852)や須恵器高台付碗形土器(1853)も埋没土中から出土した。

(遺物観察表:32頁)

所見 埋没土出土遺物からではあるが、その全体的傾向から9世紀後葉の住居と考えられる。



第140図 9区1号住居と出土遺物

9区2号住居

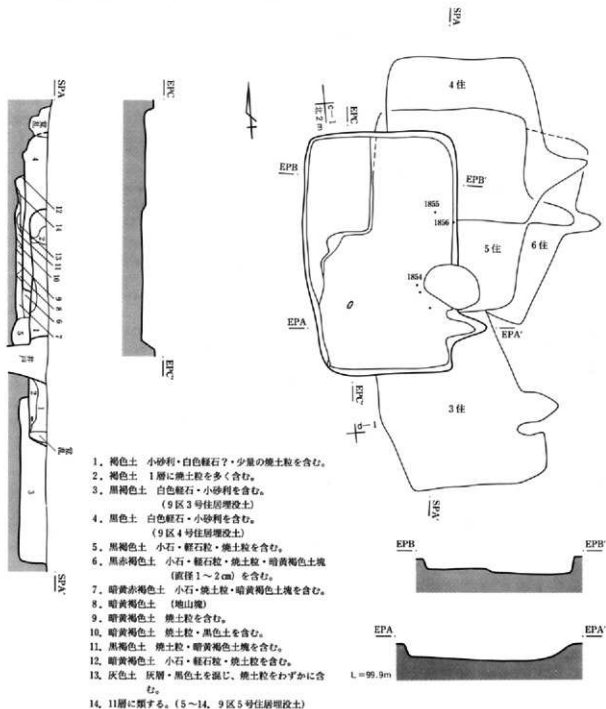
位置 b・c-0・1グリッド 写真 PL55
 重複 3~6号住居を切っている。竈の左脇の東壁の一部を新しい井戸に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅はやや丸い。

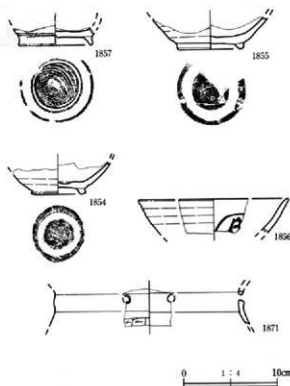
規模は長軸5.10m、短軸3.22mである。

面積 14.39㎡ 方位 N-95°-E
 埋没土 小礫・軽石粒・少量の焼土粒を含む褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から37cm掘り込んで床面となる。床面は下層の5号住居の西壁を反映して4~6



第141図 9区2号住居



第142図 9区2号住居出土遺物

cmほど落ち込んでいたが、他は平坦である。

竈 東壁の南端に近い位置に竈が付設されていた。住居壁より内側に若干電袖が張り出す形態の竈で、右側は6cm、左側は12cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は42cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。燃烧部および煙道部は壁から外へ68cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝 柱穴 貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 340点あまりの遺物が出土しているが、ほとんど埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物は竈周辺に出土した。甕形土器は小破片で図示できなかったが、頸部「コ」の字のものである。また須恵器高台付碗形土器(1854)が竈前床面直上で完形で出土した。また須恵器碗形土器(1855・1856)も竈左脇壁際床面直上で出土した。(遺物観察表:33頁) 所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。

9区4号住居

位置 b・c-1グリッド 写真 PL55
重複 5号・6号住居を切っている。南東部に2号住居が重複するが、本住居が先行する。

形状 短軸を南北方向にする正方形に近い台形を呈する。周壁は南北壁はほぼ直線的に掘られているが、東西壁はやや膨らんでいる。四隅はやや丸い。規模は長軸3.40m、短軸3.28mである。

面積 9.12㎡ **方位** N-95°-E
埋没土 小礫・軽石粒を含む黒色土で埋まっていた。
床面 遺構確認面から49cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦であるが、北部に数cmの段が検出された。これは下層にある5号住居の北壁の線に一致しており、下層の住居の掘り込みを反映したもので、本住居の施設ではないと考えられる。

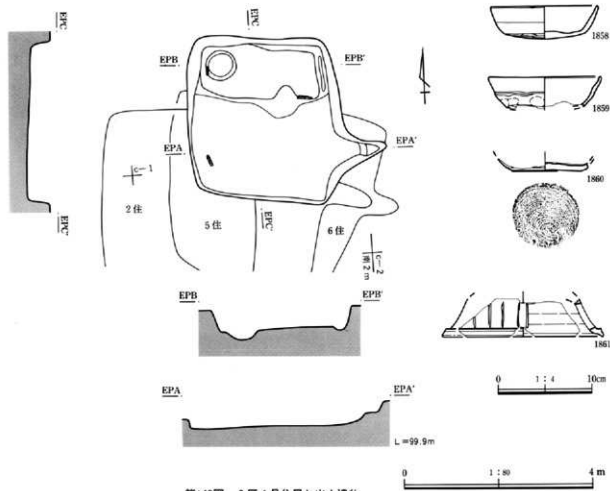
竈 東壁中央より南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に電袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は75cmである。燃烧部の壁は焼けて焼土化していた。燃烧部および煙道部は壁から外へ90cm突出していた。燃烧部はほぼ平らで、突出部のほぼ中央に段があり、煙道部は浅くなっていた。煙道部端は上方に立ち上がっていた。

周溝 東壁北端に幅25cm、深さ5cmほどの周溝状の小溝が検出されたが、住居施設としての周溝かどうかは判断できなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 北西隅に長径0.65m、短径0.62m、深さ0.20mの楕円形の土坑が検出された。検出された位置からすると、住居施設とも考えられるが、厳密には住居に伴うかどうかは確認できなかった。

遺物 120点あまりの遺物が出土しているが、埋没土中の出土遺物であり、床面近くの遺物はない。埋没土中から須恵器円面視の破片(1861)が出土している。図示した土師器杯形土器(1858・1859)・須恵器杯形土器(1860)も埋没土中で出土した。また西壁近くに炭化材が出土している。(遺物観察表:33頁) 所見 埋没土の出土遺物は、9世紀中葉のものと考えられる。



第143図 9区4号住居と出土遺物

9区5号住居

位置 b・c-1グリッド 写真 P.L.55
重複 6号住居を切っている。2号・4号住居が重複するが、本住居が先行する。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はやや乱れており、北壁は食い違いがあり、南壁は膨らんでいる。四隅は北東・北西隅は角張っているが、南東・南西隅は南壁が膨らんでいるために丸い。この南壁の膨らみは重複する新しい井戸の掘り形に影響されている可能性が高い。本来は直線的に掘られていたものと推定される。規模は長軸4.23m、短軸3.27mである。

面積 11.02m² 竈方位 N-102'-E
埋没土 小石・軽石・焼土粒を含む暗褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から60cm掘り込んで床面となる。床面はほぼ平坦で、竈土の焼土が広く中央部にまで広がっていた。

竈 東壁のほぼ中央に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で、焚口幅は38cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。燃焼部および煙道部は壁から外へ100cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜して、煙道端部は上方へ立ち上がっていた。

周溝 検出されなかった。

柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 検出されなかった。

遺物 260点あまりの遺物が出土しているが、埋没土中からの出土遺物である。床面近くの遺物はない。図示した須恵器碗形土器(1862)・器種は不明である

が1863も埋没土中からの出土遺物である。埋没土中に出土した壺形土器は「コ」の字口縁のものである。

(遺物観察表：33頁)

所見 埋没土中の出土遺物は、9世紀後葉と考えられる。

9区6号住居

位置 b・c-1・2グリッド 写真 PL55
重複 5号住居に切られている。

形状 大半を切られているために、東壁と竈周辺のみしか残っていない。直線的な東壁と角張っている二隅からすれば方形を呈すると考えられるが、全体形状および規模は不明である。唯一東壁長は4.07

mである。

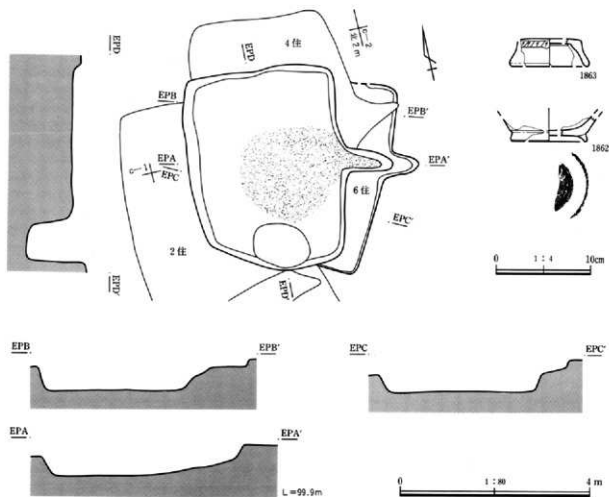
東壁方位 N-102°-E

床面 遺構確認面から16cm掘り込んで床面となる。

竈 東壁中央よりやや北側に竈が付設されていた。住居壁より内側に竈袖が張り出さない形態の竈で焚口幅は42cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ70cm突出していた。

遺物 出土遺物はない。

所見 竈が東壁中央より北側にある点は、本遺跡の他の住居の竈がほとんど東壁中央より南側にあることからすると不自然である。さらに本住居の竈が後出する5号住居の竈と重なっていることからすると、本住居を5号住居とは別の住居と認定できるかどうか判断に窮するところである。別個の住居とすると9世紀後葉の住居と考えられる。



第144図 9区5号住居・6号住居と出土遺物

8. 11区の遺構

11区1号住居

位置 B0・P-11・12グリッド 写真 PL56
重複 北壁を新しい土坑に切られている。

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈すると推定されるが、南東隅や北東隅の形状が乱れている。西壁は直線的に掘られているが、東壁は大きく膨らんだ掘り形となった。住居とは異なる掘り込みがあった可能性がある。隅は丸い。規模は長軸推定4.0m、短軸推定3.08mである。

竈方位 N-111°-E

埋没土 軽石・焼土粒を含む黒色土・黒褐色土で埋まっていた。

床面 遺構確認面から14cm掘り込んで床面となる。床面は小さな凹凸があるが、全体には平坦である。

竈 東壁中央よりやや南側に竈が付設されていた。住居壁より内側に若干竈袖が張り出す形態の竈

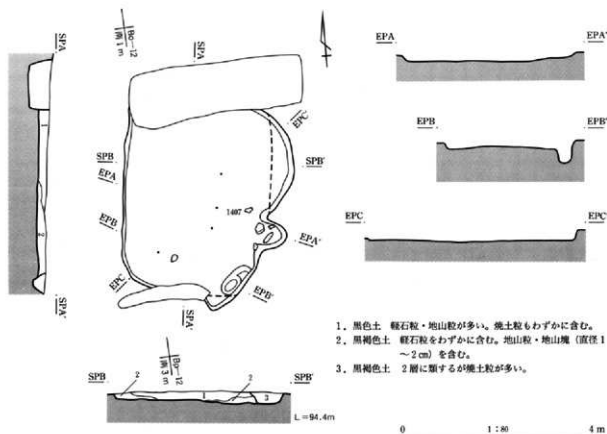
で、右側は18cm、左側は14cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は50cmである。燃焼部の壁はあまり顕著に焼けていない。煙道部は壁から外へ45cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。

周溝柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅の壁沿いに長径0.75m、短径0.40m、深さ0.42mの楕円形の土坑が検出されたが、他の住居の貯蔵穴と考えられる土坑とは形態が異なるので、貯蔵穴とは断定できない。

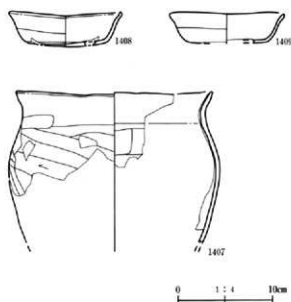
遺物 140点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物である。竈周辺に床面近くの遺物が出土している。図示した土師器甕形土器(1407)は竈燃焼部使用面から出土した。土師器杯形土器(1408・1409)は埋没土中からの出土遺物である。(遺物観察表:33頁)

所見 出土遺物から、9世紀中葉の住居と考えられる。



1. 黒色土 軽石粒・地山粒が多い。焼土粒もわずかに含む。
2. 黒褐色土 軽石粒をわずかに含む。地山粒・地山塊(直径1~2cm)を含む。
3. 黒褐色土 2層に照するが焼土粒が多い。

第145図 11区1号住居



第146図 11区1号住居出土遺物

11区2号住居

位置 Bi・j-12グリッド

写真 PL56・57

形状 長軸を南北方向にする長方形を呈する。周壁はほぼ直線的に掘られている。四隅は角張っている。規模は長軸4.25m、短軸3.22mである。

面積 9.76㎡ 電方位 N-95°-E

床面 遺構確認面から33cm掘り込んで床面となる。床面は平坦で、電から中央部にかけて硬化していた。

電 東壁中央より南側に電が付設されていた。住居壁より内側に電軸が張り出す形態の電で、右側は32cm、左側は33cmほどの袖の基部が残存していた。焚口幅は75cmである。燃焼部の壁は焼けて焼土化していた。煙道部は壁から外へ32cm突出していた。燃焼部はほぼ平らで、煙道部に緩やかに傾斜していた。焚口部には円礫が出土しているが、電構築に関わる遺物かどうかは判断できなかった。

周溝 電両側および南東隅と南壁西半分を除く壁沿いに、幅16~20cm、深さ3~7cmの周溝を検出。柱穴 検出されなかった。

貯蔵穴 南東隅に長径0.57m、短径0.37m、深さ0.

33mの楕円形の土坑が検出されたが、他の住居の貯蔵穴と比べて小さいので、同様な機能をもつかどうかは断定できない。

遺物 80点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中からの出土遺物であるが、電周辺を中心に床面に残された遺物が10点あまり出土している。電燃焼部には土師器甕形土器(1410)や土師器杯形土器(1411)が出土している。電前からは須恵器瓶(1413)や土師器杯形土器(1412)が、南壁際からは須恵器長頸甕形土器(1414)が床面直上から出土した。

(遺物観察表: 33・34頁)

所見 出土遺物から、9世紀後葉の住居と考えられる。

11区方形遺構

位置 a・b-7~9グリッド

形状 短軸を南北方向にする長方形を呈する。南壁西端には幅5m、高さ4mほどの三角形に掘り残された部分があり、不定型である。周壁はほぼ直線的に掘られている。西壁の北端はやや短く、北壁西半分は弧状を呈する。四隅は丸い。規模は長軸17.2m、短軸12.0mである。

面積 234㎡(掘り残し部分を除く。)

東壁方位 N-1°-W

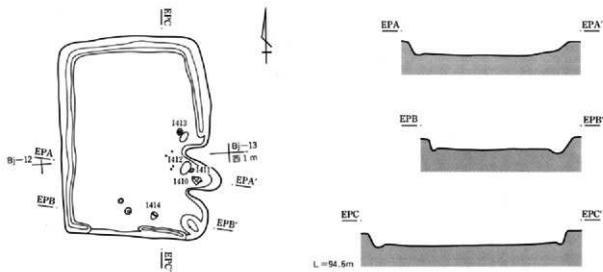
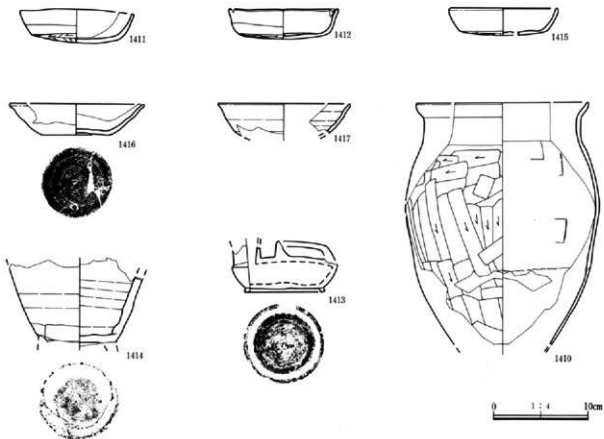
埋没土 暗褐色土塊を含む黒褐色土で埋まっていた。

底面 遺構確認面から20cmほど掘り込んで底面となる。中央部南には長径6m、短径4.8mの楕円形に掘り残し部分がある。この突出部分のほかに、床面には直径30cmほどの円形ピットが不規則に掘られていたが、柱穴とは考えにくい。

遺物 100点あまりの遺物が出土している。ほとんど埋没土中の出土遺物で、土師器杯形土器や甕形土器の破片が多い。図示した土器のうち、須恵器高台付椀形土器(1865・1866)は中央部底面直上で出土した。(遺物観察表: 34頁)

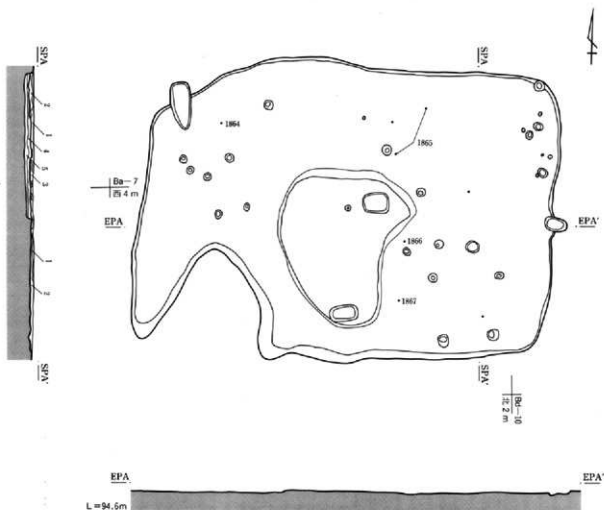
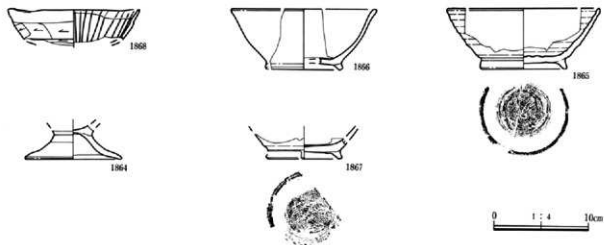
所見 方形を意図した遺構であるが、一般的な住居と比較すると大型である。時期は9世紀後半と考えられる。本遺構の性格は不明である。

第3章 歴史時代後半期の遺構と遺物



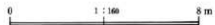
第147図 11区2号住居と出土遺物

8. 11区の遺構



1. 黒褐色土 軽石粒・暗褐色の地山粒を多く含む。
2. 黒褐色土 直径3～5 cm大の暗黄褐色土塊を含む。
3. 黒褐色土 1層に類するが色調はやや明るく固い。軽石粒・地山粒ともに少ない。
4. 暗黄褐色土 暗黄褐色土塊（直径2～4 cm大）を多く含む。
5. 暗褐色土

第148図 11区方形遺構



第4章 調査の成果と課題

1. 調査の成果

荒砥上ノ坊遺跡は、群馬県の中央部、赤城山南麓に営まれた複合集落遺跡である。発掘調査では11の調査区に、縄文時代前期から中世にわたる遺構が検出された。本年度の整理作業は、このうち9世紀中葉から10世紀後半の遺構を対象に実施し、歴史時代後半期として報告した。この報告をもって平成6年度・7年度に刊行した2冊の報告書とあわせて、縄文時代から平安時代後期までの時期が推定できる遺構の報告を完了したことになる。

これらの成果を通観してみると、縄文時代の遺構は前期の住居3軒のみで、発掘区内で検出された遺構は古墳時代初頭まで途絶える。しかし、古墳時代初頭から平安時代後期までの住居は、一定地域内に継続的につくられていたことが判明した。このようなあり方は、群馬県の水田農耕を基盤とする里棲み農耕集落の典型的ななたちであり、荒砥上ノ坊遺跡の農耕集落としての性格を確認することができた。

また、調査によって土師器・須恵器等の土器の他、石器・金属器が出土した。石器では砥石や棒状礫を用いた敲石・磨石のほか、紡錘車が6点出土している。このうち3点に刻書のある紡錘車が含まれていた。紡錘車の文字資料は近年増加しているが、一遺跡で複数の刻書紡錘車が出土している例は多くない。本遺跡の紡錘車出土の背景を明らかにすることが今後の課題である。

また、平安時代の住居から馬具が出土した。これまで馬具は、古墳の副葬品から研究されることが多く、集落での馬具の出土例は不明な部分が多い。馬が古代の人々との生活とかわっていたことは確実であるが、具体的な関係はあまり問題になっていない。馬がどのようにかわっていたかは集落研究の重要な課題と考えられる。本調査は、集落での馬具のあり方から畜力利用の実態に迫る視点が可能であ

るのかどうか考える契機となった。

次項では、これらの調査および整理事業の成果と課題のうち、遺構の年代観の指標とした古墳時代後期以降の出土土器を示した。次にこの出土土器の変化にそって、各期の遺構分布の変遷をまとめた。また、出土遺物のうち馬具をとりあげ、管見にふれた群馬県内の集落出土馬具のデータを示し、集落出土馬具の現状を整理しておきたい。さらに馬具を含めた出土鉄製遺物については、その金属学的解析を岩手県立博物館の赤沼英男氏にまとめていただいた。

2. 住居出土土器の変遷

荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代から平安時代の住居が252軒検出されている。これらのうち32軒は古墳時代初頭の住居で、遺跡中央低台地の西縁に偏っていた。古墳時代初頭の住居出土土器については、「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」でその位置づけを述べた。本遺跡で出土した古墳時代初頭の土器には東海西部地方の影響が強くなる直前の時期に位置づけられる北陸系土器が顕著に伴出している。これらは、群馬県内でも最も古い土師器のひとつになると考えられる土器である。

この直後に続く住居は、発掘区内では明確に検出されなかったが、5世紀の前半には再び発掘区内で住居が検出されるようになる。ここではこれら5世紀前半以降の住居出土土器の変遷を1～13段階にまとめた。図示したのは各段階の特徴を最も良く示すと考えられる住居ごとのセットの抜粋で、補完的に他住居出土の土器も併載した。第150図が「荒砥上ノ坊遺跡Ⅰ」で報告した古墳時代（7世紀を含む）、第151図が「荒砥上ノ坊遺跡Ⅱ」で報告した歴史時代前半期、第152図が本書「荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ」で報告した歴史時代後半期にあたる。年代については県内研究者の間にも細部で諸説があるが、概ね先学の成果

による。
(103)

なお、1段階と2段階、2段階と3段階、10段階と11段階の間には若干の土器の形差がある。時間的な間隔が想定されるが、これは発掘区内で住居が検出されなかったため、基本的には本遺跡での居住は継続していると考えている。

1段階 5世紀前半 遺物を図示した1区42号住居は大形住居で、1辺7mを越える。出土遺物も図化可能な完形に近い土器が59個体もあり、特殊な機能をもった住居とも考えられる。4世紀の埴形土器の系譜にあると考えられるやや丸底の土器に混じって、平底の杯形土器や広口壘形土器が多く出土している。体部の丸い壘形土器と球形胴部の壘形土器が組成している。高杯形土器は大形と小形の二種が数個体ずつ出土した。須恵器の伴出はない。

2段階 6世紀後半 図示した8区7号住居の土器をみると、いわゆる須恵器模倣杯形土器と、丸底で口縁端部がつまみあげられた杯形土器が出土している。壘形土器は胴部中位に最大径をもつ長壘で、頸部が屈曲するものと、緩やかに外反するもの二者がある。この二者がその後の土師器壘形土器の系譜になっていく。本遺跡では須恵器は出土しなかった。

3段階 7世紀中葉 土師器杯形土器の組成は前段階と同様であるが、須恵器模倣杯形土器は浅くなり、口縁端部をつまみ上げる杯形土器は端部がやや内傾し、一住居におけるこのタイプの杯形土器の占める割合が高くなっている。壘形土器は長壘と体部の丸い壘形土器の二者がある。長壘は体部最大径の位置が胴部上位に変わる。今回の調査では須恵器の出土はなかった。

4段階 7世紀後半 土師器杯形土器に占める須恵器模倣杯形土器の数は少なくなり、口縁端部が短く内傾する丸底の杯形土器がほとんどになる。また口径の大きな盤状の杯形土器も組成する。須恵器の出土頻度は高くなり杯形土器・蓋形土器・高壘形土器などが出土している。図示した2区36号住居では、底部切り離し後ナデ調整された杯形土器と、かえりのある蓋形土器とが出土している。

5段階 7世紀末 前段階よりやや新しい様相をもつ2区102号住居の土器群をこの段階とした。土師器杯形土器は4段階と同様口縁端部が内傾するものが主体であるが、本段階では器高がやや深くなっている。壘形土器の長胴化はさらに進み、膨らみはあまりなくなる。胴部最上部を斜め・横方向に削るようになる。体部の丸い壘形土器は底部が平底になる。須恵器は杯形土器の底部がやや大きくなるが、底部は切り離し後、手持ち寛削り調整をしている。

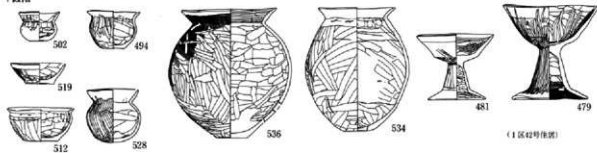
6段階 8世紀初頭 土師器杯形土器は湾曲する底部に直する口縁部の付くものが主体である。壘形土器の稜線は弱くなる。壘形土器は頸部がくの字に屈曲し、胴部は膨らむ。緩やかに口縁部が外反する壘形土器もある。須恵器は図示した3区5号住居からは蓋形土器が出土しているが、蓋形土器は外面を寛削りし、かえりは鈍くなる。この段階の須恵器杯形土器は底部切り離し後、回転寛削りを施す。

7段階 8世紀前半 土師器杯形土器は、内湾する体部からやや外に開く口縁部がつく杯形土器が主体である。体部外面のナデ調整の幅が広がっている。壘形土器は器壁が厚くなる。壘形土器は中位に膨らみをもち、短く外反する口縁部がつく。前の段階に比べて胴部が短くなる。緩やかに口縁部が外反する壘形土器も短胴化する。体部が球形の壘形土器は口縁部が小さくなる。小形の台付壘形土器が出現する。須恵器杯形土器は、底径が長くなり、底部は切り離し後、回転寛削り調整をしている。高台付の杯形土器は図示できなかったが、2区107号住居・3区1号住居等で出土している。2区104号住居では黒色土器(1075)が伴出している。
(104)

8段階 8世紀後半 土師器杯形土器は底部がわずかな丸底から平底に近くなり、底部だけに寛削りを施すようになる。壘形土器は最大径が胴部上方になり、胴部の長さが短くなる。体部球形の壘形土器も残っている。図示した2区17号住居には胴部の膨らまない器形の壘形土器も伴出した。須恵器杯形土器は大きめの平底から直線的に外反する。底部は切り離し後、回転寛削り調整をおこなう。体部立ち上が

第4章 調査の成果と課題

1 段階



2 段階



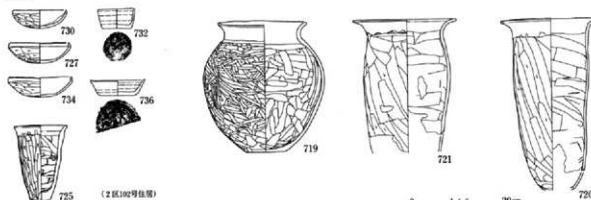
3 段階



4 段階



5 段階

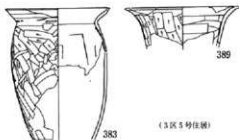
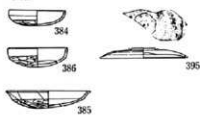


第149図 住居出土土器の変遷(1) 5世紀～7世紀

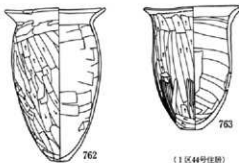
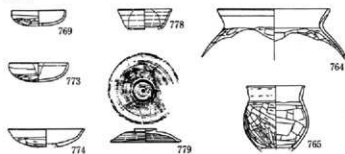


2. 住居出土土器の変遷

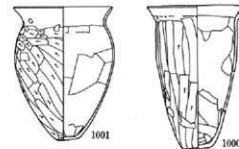
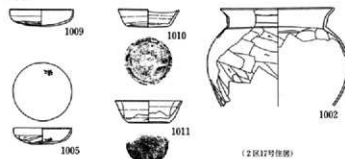
6段階



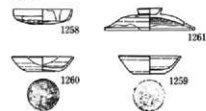
7段階



8段階



9段階



第150図 住居出土土器の変遷(2) 8世紀～9世紀前半

0 1:8 20cm

り部にも寛削りを施すものもある。他に2区108号住居等では回転糸切り離し無調整の杯形土器も出土している。図示しなかったが、返りのない蓋形土器がこの段階と思われる6区7号住居で出土している。

9段階 9世紀前半 土器器杯形土器はやや丸さの残る平底からわずかに内湾する口縁部にいたり、底部のみに寛削りを施す。壺形土器は頸部が一旦直立してから、外反するようになり、次の「コ」の字口縁の壺形土器への変化を始めている。胴部上位に最大径をもつ。胴部上位は横方向の寛削りを施す。須恵器杯形土器は平底の底部からわずかな膨らみをもって立ち上がる。底部は切り離し後、回転寛削りを施すものと無調整のものがある。蓋形土器は口縁部が下方に曲がり、ボタン状の柄みが付く。

10段階 9世紀中葉 土器器杯形土器は平底から外反する体部にいたり、底部に寛削り、体部はきれいなでている。図示した1区74号住居には出土していないが、丸底に近いものもある。壺形土器は屈曲する頸部から口縁部が外方へ開く。前段階の壺形土器から「コ」の字口縁部の壺形土器への過渡的な様相を示している。最大径は胴部上位にある。須恵器杯形土器は底径が小さくなり、底部は回転糸切り離し後無調整である。図示した1区74号住居では黒色土器の高台付碗形土器が出土している。

11段階 9世紀後半 土器器杯形土器は丸底系譜のものと平底系譜のものと両者があるが、いずれも口縁部が緩やかに屈曲して内湾する。体部には指頭丘痕が残る。底部は寛削りされている。壺形土器は頸部が典型的な「コ」の字を示すようになり、胴部上位が張る壺形になる。台付壺形土器は台部が小さくなる。

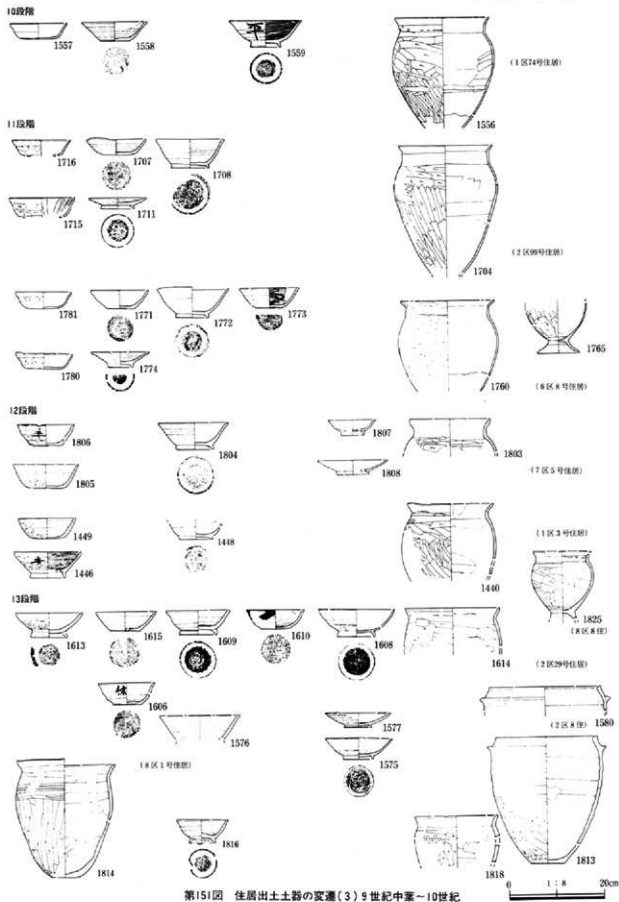
須恵器杯形土器は底径が小さくなり、浅くなる。高台付碗形土器はわずかな膨らみをもつ体部に断面方形の高台をつける。皿形土器が伴出するようになる。図示した6区8号住居には黒色土器碗形土器が出土している。

12段階 10世紀前半 土器器杯形土器は底径が狭く、器高が高くなって深くなり、碗形土器に近い器

形になる。体部には須恵器碗形土器の轆轤整形を思わせるような指頭丘痕が並ぶ。断面台形の高台を付ける碗形土器も出現する。壺形土器は頸部の「コ」の字がくずれて器壁も厚くなる。胴部上位の張りはなくなり、中位が膨らむ。8区8号住居に器壁の薄くなった台付壺形土器が出土している。須恵器は杯形土器の出土量は少なくなり、ほとんど高台付碗形土器である。この段階には還元焰焼成は少なく、酸化焰焼成のものがほとんどである。高台も低く、雑なつくりになる。羽釜はこの段階に出現しているが、本遺跡では出土量はきわめて少ない。本段階と考えられる2区93号住居で酸化焰焼成の須恵器碗形土器と伴出している。灰釉陶器は光が丘1号窯式のものが7区5号住居で出土している。また大原2号窯式期の灰釉陶器が本段階と思われる2区76号住居から出土している。これ以前の灰釉陶器は本遺跡の住居からは出土しなかった。なお、時期不明の3区5号土坑の埋没土中から黒笹14号窯式期の高台付き碗形土器の破片が出土している。来年度刊行の『荒砥土ノ坊遺跡IV』で報告する予定である。

13段階 10世紀後半 この段階の土器器杯形土器は今回の調査では出土していない。碗形土器はやや浅くなっているが使われている。土器器壺形土器は頸部がくの字になり、口径が大きな壺形となる。羽釜は土器器の技法・胎土でつくられたものが東毛地域に特徴的に出土する。第152図には示せなかったが、土器器羽釜が8区1号住居で須恵器羽釜と伴出している。この住居には轆轤使用壺形土器の系譜にあると思われる壺形土器も出土している。須恵器はほとんど酸化焰焼成でつくられているが、体部下位に丸みをもち、開く高台をつけた新しい壺形が登場する。前段階とは異なる展開を重視してこれらの土器を「土器質土器」と呼ぶ研究者もいるが、本書では轆轤使用という技術的規範を重視し、須恵器とした。またこの段階では小形の碗形土器も出現している。黒色土器も体部下位が丸みをもった壺形の碗形土器が出土している。灰釉陶器は大原2号窯式期と虎浜山1号窯式期の碗形土器が本段階の住居に出土して

2. 住居出土土器の変遷



第151図 住居出土土器の変遷(3) 9世紀中葉-10世紀

いる。2区8号住居には緑釉陶器の輪花皿形土器が出土しているが、本資料は近江産に特徴的な形態を示しており、10世紀後半のもののご教授を受けた。^(註1)

以上のように荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代以降の住居出土土器は、数カ所の断絶は認められるものの、一連の形式学的な変遷をたどることが可能と思われる。群馬県内では5世紀後半には須恵器が出現しており、本遺跡2段階には須恵器は使われていたと見られるが、本遺跡発掘区内の2・3段階での出土はなかった。須恵器の変化や灰釉陶器の出現時期は県内の他遺跡の状況とかけ離れた状況ではないと思われる。しかし、土師器・灰土器や変形土器が10世紀まで残存していることは特徴的であり、群馬県東部の歴史時代後半期の従来の方を追認することができたと考えている。

3. 居住域の変遷と集落の動向

前項で本遺跡発掘区で検出された住居から出土した土器の変遷を示した。既刊の報告書本文中では、このような年代観から住居の時期を推定し、記述した。それを一覧表にしたのが第2表である。限られた発掘区内での遺構の確認は集落全体を示すものではないので確定的なことを述べることはできないが、荒砥上ノ坊遺跡における居住域変遷を端的に表していると思われる。本稿では古墳時代初頭以降の居住域の変遷を検出遺構の数と分布からまとめてお

きたい。なお、荒砥上ノ坊遺跡では3軒の縄文時代前期の住居が検出されているが、ここでは割愛した。縄文時代前期の集落動向については既刊の「荒砥上ノ坊遺跡I」の第7章で述べた。

古墳時代初頭の集落は、中央の低台地にまず居住域を設定し、1・2区と6区の間的小さな帯状低地と1・2区西側の低地を望むように住居群がつけられている。(第153図1)西側低地を水田耕作地とした農耕集落が成立していたと考えられる。

荒砥上ノ坊遺跡の古墳時代初頭の集落は、出土時から2～3時期に分けることができるが、住居は古墳時代前期を通じて西側低地に接する台地縁辺につけられている。台地内部への居住域拡大はみられない。2区北中央部と9区には同時期と考えられる畠が検出されているので、台地内部は畠作耕作地として利用されていたのであろう。

古墳時代中・後期になると、それまで住居が検出されなかった1・2区の東半分や3・5・7・8区に住居が検出されている。(第153図2)3区は西側低地沿い、5・7・8区は東側低地沿いである。3区は東側低地に水田耕作地が拡大することによって新開された居住域の可能性が高い。また、5・7・8区も以前には水田化されていなかったと思われる東側低地に接しており、耕地拡大に伴った新開居住域と考えられる。

歴史時代には古墳時代後期に居住域となった地点には必ず住居が検出されている。^(註1)(第153図3・4)住居の密度も高くなっていることから、継続性の高さを示していると考えられよう。古墳時代から次第

第2表 荒砥上ノ坊遺跡の検出遺構一覧表

地形単位	発掘区	3世紀		4世紀		5世紀		6世紀		7世紀		8世紀		9世紀		10世紀	
		後半		前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半	前半	後半		
中央低台地	8区											1	3	2	2	2	2
	9区											1		1	4		
	10区		As-C埋没品									3					
	1・2区	29	2	3	4	(3)	16	32	11	12	14	30	13	12			
	6区	3						3	2	2	2	3					
西台地	4区		周溝墓6基														
	3区					1	1	3	3								
	11区												1	1			
東台地	7区							1	2			3				3	1
	5区							1	2	1	3	3	1				

3. 居住域の変遷と集落の動向

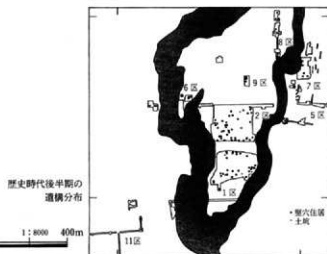
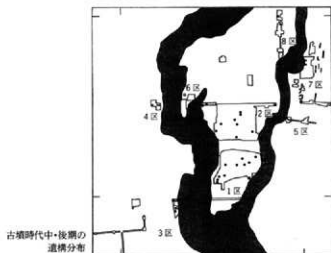
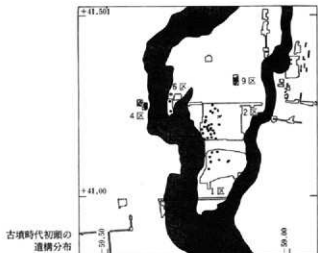
に拡大された西側・東側両低地の水田を堅持しているであろう。また、9・10・11区に住居が新たに検出されている。これはこの時期に台地内部への居住域の拡大が始まっていることを示している。

このように荒砥上ノ坊遺跡で検出された住居群の位置や密度の変化は、水田耕作地の拡大に伴った居住域の変遷と考えられる。このような居住域の変遷は、周辺の遺跡群の動向と関連して理解することができる。

荒砥上ノ坊遺跡の西側低地は遺跡から約1km北方に谷頭をもつ開析谷で、遺跡の南方約2kmの下流で宮川の低地と合流する。この低地沿いの古墳時代前期の集落は、本遺跡の上流下流に一遺跡ずつが確認されている。上流には0.6~0.7kmのところに荒砥中屋敷1遺跡があり、荒砥上ノ坊遺跡と同時期の古墳時代初期頭の住居が1軒検出されている。下流の宮川との合流地点には宮川を望むように荒砥島原遺跡の古墳時代前期集落があり、宮川沖積地を生産域としていと考えられる。他地域でも古墳時代前期の集落は水系沿いに1~数kmおきに並ぶ傾向があることから、本遺跡と下流の荒砥島原遺跡との間にもう一つ集落がある可能性もある。このように関連する水系ごとに周辺の遺跡や遺構の分布を分析すると、自然の水系と可耕地を効率的に使う古墳時代前期の集落立地の特徴を本地点でも認めることができる。

古墳時代後期の遺跡は今のところ上流側には確認されていない。発掘調査が進めば検出される可能性は残されている。下流側では荒砥上ノ坊遺跡から南方0.6~0.7kmのところに二之宮宮下東遺跡が、前述した宮川低地との合流部の北側に荒砥天ノ宮遺跡が、南側に荒砥島原遺跡がある。荒砥島原遺跡は古墳時代前期から継続した伝統集落であるが、荒砥天ノ宮遺跡と二之宮宮下東遺跡は古墳時代後期からの集落である。

荒砥天ノ宮遺跡では、西側の低地に向かってのびる溝を敷設した灌漑用の溜井が台地縁辺に検出されている。これによって西側の欠水性の帯状低地の水田を拡大したと考えられ、荒砥天ノ宮遺跡はこの水



田拡大に伴った新開集落と考えられる。この低地の北部は上武国道建設工事に伴って発掘調査されており、二之宮千足遺跡東谷地にあたる。ここでは古墳時代前期以降7面の水田面が検出されている。これらの調査成果から、最も条件の良い地点が古墳時代前期に一部水田化され、古墳時代後期以降の開発の進展によって帯状低地全体が次第に水田化されていくと推定される。荒砥天之宮遺跡では、古墳時代後期には荒砥上ノ坊遺跡西側からのびる低地沿いにも居住域が広がっており、こちらの低地の水田化にも成功していたのであろう。上武国道建設に伴って、帯状低地のなかを調査した二之宮宮下東遺跡では古墳時代初期の榛名二ツ岳渡川テフラの降下後、4面の洪水堆積物で埋没した水田と、1108(天仁1)年に降下した浅間Bテフラ直下の水田が検出されている。この遺跡の台地上の調査で検出された遺構は、古墳時代後期以降であり、古墳時代後期の開田に支えられた新開集落と考えられよう。荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代後期に東側の低地沿いに居住域が新開され、新たに水田耕地が拡大されているのであろう。荒砥上ノ坊遺跡のある水系では、古墳時代前期に点在していた集落が、遅くとも古墳時代後期には技術の導入を背景にして農耕地の拡大を図って新たに開かれている。

奈良・平安時代には荒砥上ノ坊遺跡をはじめ、前述の荒砥島原遺跡・荒砥天之宮遺跡では継続して居住域が検出されている。また、二之宮宮東遺跡・荒砥青柳遺跡のように奈良・平安時代に居住が始まる地点もある。荒砥上ノ坊遺跡の周囲の低地では埋没水田は調査で確認することはできなかったが、平成5年度の土壌調査と分析で浅間Bテフラ直下の黒色土から多量のイネのプラントオパールが検出されている⁽¹³⁾。浅間Bテフラはほとんど水平堆積をしており、水田面に堆積している状態を示しているとの推定も可能であろう。他遺跡の浅間Bテフラ下水田の検出状況と奈良・平安時代の居住域の継続性や拡大傾向から考えると、荒砥上ノ坊遺跡の東西にある帯状低地はほぼ全域が水田化され、溝作に近い状況を



第153図 荒砥上ノ坊遺跡周辺の遺跡群

呈していたと考えたい。このことは荒砥上ノ坊遺跡の北西2kmのところにある荒砥諏訪西遺跡で、浅間Bテフラ下水田が微高地上に及んでいることからも理解できよう。

荒砥上ノ坊遺跡の居住域の変遷を、同水系の遺跡群の動向と関連づけて考えてみた。このような耕地拡大に伴う集落動向は以前に西側の宮川下流域遺跡群で確認されたことであり、荒砥上ノ坊遺跡水系でも同様のことが追認できたといえよう。

4. 群馬県における集落出土の馬具

荒砥上ノ坊遺跡では、9世紀中頃の1区33号住居の床面付近から、轡の銜と引手金具および鉸具の破片が出土した。これらの出土状態は、床面に密着した状態ではなく、数cm上で出土している(第34図)。その地点は貯蔵穴にあたり、須恵器杯形土器(1250)

や土師器杯形土器(1248・1249)が同様の状態で出土していることから、馬具の出土状況にやや曖昧な点はあるものの伴出した土器とともに住居に残されたものと考えた。住居址出土の馬具は、大谷猛氏によって集成されたことがあるが、群馬県下では出土例が少ないことから等閑視されてきた。しかし、馬具が集落から出土している例は少なからず見られる。

最近の群馬県の発掘調査の成果では、子持村白井遺跡群で6世紀初頭に馬が放牧状態で飼われていたことが判明している。また、平安時代の水田面には馬の蹄跡が残されている。また断片的ではあるが馬骨が集落内に埋められている例もある。これらのことから集落内に馬がいたことは想像に難くない。馬が集落のなかでどのように使われていたかは、乗用・荷駄用・農耕用あるいは放牧飼育を問わず、集落内の社会構造を考える上で極めて重要な課題である。現段階では、集落内の馬の実態を示す考古学的な資料は多くないが、集落における畜力利用の実態解明の端緒として、ここでは群馬県における集落内の馬具の出土例を再確認することにした。

第3表は管見にふれた群馬県内の集落遺跡出土馬具一覧である。今回集成できた馬具は29遺跡から出土した63点である。内訳は轡の連結を一部でもとどめるものは9点、轡を構成する銜6点、引手金具8点、鏡板3点、鞍1点、鞍紐2点、雲珠1点、鎖1点、鉸具22点、鈴4点、および木製の鞍2点である。以下、これらの馬具の形態と出土状態および分布の特徴を分析する。

轡は、9点のうち5点が環状鏡板付轡で、大形矩形立開のものと同形立開のもの両者がある。新田町西田遺跡では7世紀末から8世紀初頭と考えられる住居の埋没土から鉸具造立開環状鏡板付轡が、高崎市下佐野遺跡では10世紀初頭前後の土坑から両者が出土している。これらは古墳時代後期に規格化されて盛んに古墳に副葬された型式のものである。8世紀以降の変遷は良くわかっていないが、奈良時代以降も引き続き使われていたであろう。この他に鉸具造立開の環状鏡板1点が前橋市二之宮谷地遺

跡18号住居から出土しているが、環の内側に装飾的な屈曲があり古墳時代の一般的な環状鏡板とやや異なる。群馬町堤上遺跡H-142号住居の埋没土中からは花形杏葉鏡板が出土している。住居の出土土器は7世紀末と思われるが、鏡板の編年型式は小野山節氏の分類に照らせば3期とみられる。太田市成塚住宅団地遺跡B H632号住居出土の轡は、上端に壺のついた棒状の立開から杏葉形に似た鏡板を付けている。6世紀後半の住居から出土しているが、住居にともなう出土状態でなく、型的にも「奈良時代以降の轡」と考えられている。前橋市鳥羽遺跡1103号住居出土の「眼鏡状の鉄製品」も奈良時代以降の鏡板の可能性が高い。同様のものが吉井町黒熊八幡遺跡29号住居から出土している。形態からは奈良正倉院蔵の「狹轡轡」との形態的な関連も想定される。それぞれ8世紀・9世紀の住居埋没土から出土している。

銜はいずれも二連と思われる。荒砥高原遺跡では5世紀後半と考えられるE区9号住居床面から銜が出土している。報告書では兵庫鎮と引手金具と推定されているが、その後のソフテックス撮影による調査で銜と引手金具と判明した。他例はほとんど奈良時代以降の住居の床面および埋没土から出土している。吉岡町大久保A遺跡II区24号住居(11世紀後半)やII区102号住居(9世紀後半)出土例の報告に床面出土の記載がある。なお、株木B遺跡DH-53号住居出土例は青銅製で柄が短く、銜とすれば銜先環が傾いており特異な形態である。

引手金具は柄と壺部が一体の一本柄引手がほとんどである。一例だけ上栗須寺前遺跡群5-A・03号住居(9世紀前半)の埋没土から柄と壺部一体の二条線引手が出土している。

鞍・鞍紐・雲珠・飾金具は、高崎市下佐野遺跡の3基の土坑から出土した例にとどまる。7区62号土坑には轡を欠くが、6区4B号住居貯蔵穴・7区61号土坑からは轡と鉸具・鞍が組合わさって出土し、62号土坑では雲珠・鞍紐・鉸具・飾金具が出土している。遺構に確実にともなう出土例であるが、他の出土遺物が不明である。報告書によれば、7区61号

第4章 調査の成果と課題

土坑は10世紀初頭の7区6号住居より古い。

鉋具は22点が出土しており、すべて鉄製である。

坂本美夫氏が平面形態で分類した蹄形・C字形・長方形・梨形状の4種すべてがある。実測図からは基部・刺金の形態も数種あると看取できるが、これについては実見していないので今回は分類しなかった。

出土した鉋具の中で、時期が明確なものは先述した下佐野遺跡を除くと、箕郷町河住B遺跡SB9出土例(10世紀前半)と、前橋市芳賀東部工業団地遺跡H

一216号住居西壁中央溝内出土例(9世紀初頭)の

2例である。前橋市烏羽遺跡D289号溝出土例は、浅間Bテフラ降下以後の溝埋没土から出土しており、その溝は中世と考えられている。

鉋は、太田市成塚住宅団地遺跡で鉄製2点、吉岡町大久保A遺跡で銅製2点、合計4点が確認できた。いずれも溝埋没土中の単独出土である。これらの鉋は他の馬具と共伴していないので馬装として使用されたかどうかの疑問も残る。⁽²⁷⁾⁽²⁸⁾

鉋はいずれも破損しているが、古墳時代後期の資料である。

第3表 群馬県における集落遺跡出土の馬具一覧表(●は筆者推定した時期を示す。)

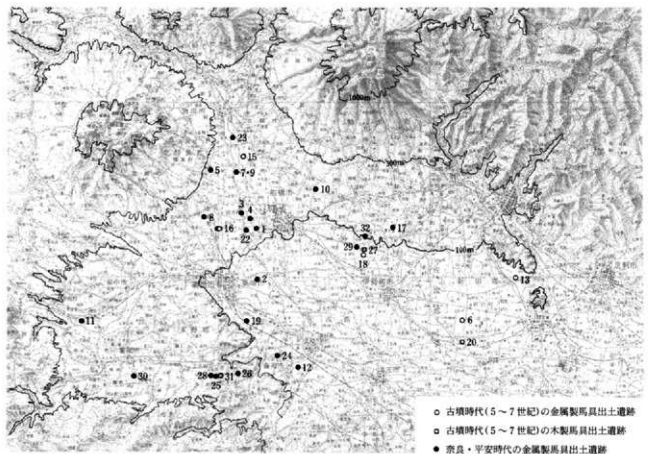
品名	素材	所在地	出土遺跡・遺構	出土位置	出土遺構の時期	遺跡名
1 櫛	鉄	榑木郡松井田町	松井田工業団地遺跡B地点	表層		11
2 櫛具(櫛状形)	鉄	榑木郡松井田町	松井田工業団地遺跡G目グリッド	表層		11
3 櫛具(長方形)	鉄	前橋市元郷町	藤井遺跡	表層		4
4 櫛具(長方形)	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡T1グリッド	表層		7
5 櫛	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡E1-103	表層	5世紀後半	13
6 櫛	鉄	前橋市之宮町	矢島島遺跡土区9号住居址	床面	5世紀後半	14
7 一本鉋引手金具	鉄	前橋市之宮町	矢島島遺跡土区9号住居址	床面	5世紀後半	14
8 櫛	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡B区画	埋土	5世紀後半~1世紀	16
9 櫛	スズ	榑木郡河住町	B遺跡1号溝	H-F1層(6世紀初頭)下	6世紀前半以降	18
10 青銅櫛?	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡H1-632	埋土	6世紀後半	13
11 青銅櫛?	鉄	太田市成塚	成塚住宅団地遺跡H1-632	埋土	6世紀後半	13
12 櫛	アルゴン鋼	前橋市二宮町	二之宮下家遺跡	H-F1層上(6世紀初頭)上	7世紀初頭以前	16
13 櫛具(櫛状形)	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡T1号住居	床面遺土	7世紀後半	35
14 花巻青銅櫛	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡T1号住居	埋土	7世紀後半	36
15 櫛具(長方形)	鉄	前橋市平田	平田中塚・南原遺跡45号住居	埋土	7世紀末	13
16 櫛具(長方形)	鉄	前橋市平田	平田中塚・南原遺跡45号住居	埋土	7世紀末	13
17 櫛具(長方形)銅製状態付物	鉄	新田郡新井町	西原遺跡2号住居	埋土中位	7世紀末~8世紀初頭	6
18 櫛具(高輪状)	鉄	前橋市下高塚	下高塚上之原遺跡1号住居	北西+10cm	8世紀前半	73
19 櫛	青銅	前橋市上戸塚	橋本日遺跡H1-53号住居址	埋土	8世紀後半	12
20 櫛状? (扇輪状)	鉄	前橋市烏羽遺跡	烏羽遺跡1区103号住居	中央部埋土	8世紀後半	20
21 櫛具(高輪状)	鉄	前橋市八木塚	有馬車遺跡35号住居	埋土	8~9世紀	22
22 櫛具(長方形)	鉄	前橋市大久保町	大久保A遺跡T1-214号住居	埋土	9世紀初頭	16
23 櫛具(長方形)	鉄	前橋市小泉下町	芳賀東部工業団地遺跡T1-214号住居	西壁中央溝内	9世紀初頭	16
24 二本鉋引手金具	鉄	前橋市上栗原	上栗原寺前遺跡5A・63号住居址	埋土	9世紀前半	23
25 櫛(櫛状の櫛板)	鉄	多野郡吉岡町	黒塚八幡遺跡29号住居	埋土	9世紀前半	25
26 櫛具(C字形)	鉄	前橋市安子町	荒塚ノ乙遺跡1区33号住居	狩鹿穴埋没土	9世紀前半	31
27 一本鉋引手金具	鉄	前橋市安子町	荒塚ノ乙遺跡1区33号住居	狩鹿穴埋没土	9世紀前半	31
28 櫛	銅	前橋市安子町	荒塚ノ乙遺跡1区33号住居	狩鹿穴中位	9世紀前半	31
29 櫛具(長方形)	鉄	多野郡吉岡町	矢田遺跡12号住居	床面+14cm	9世紀後半	24
30 一本鉋引手金具	鉄	多野郡吉岡町	多野町東遺跡92号住居	北西+10cm	9世紀後半	27
31 櫛	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区102号住居	F1層上	10世紀前半?	7
32 櫛	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区129号住居	床1.10-5cm	9世紀後半	7
33 引手金具?	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区101号住居	埋土	10世紀初頭	7
34 櫛具(立型扇輪状付物)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区61号土坑	中央部遺構	10世紀末以前	19
35 櫛具(櫛状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区48号土坑	南西壁土坑内	10世紀初頭	19
36 櫛	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区48号土坑	南西壁土坑内	10世紀初頭	19
37 大形扇輪立型扇輪状付物	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区48号住居	南西壁土坑内	10世紀初頭	19
38 櫛具(立型扇輪状付物)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区48号住居	南西壁土坑内	10世紀初頭	19
39 櫛具(立型扇輪状付物)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡6区48号住居	南西壁土坑内	10世紀初頭	19
40 櫛具(C字形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
41 櫛具(C字形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
42 櫛具(櫛状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
43 櫛具(櫛状形)	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
44 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
45 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
46 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
47 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
48 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
49 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
50 扇輪	鉄	高崎市下佐野町	下佐野遺跡7区62号土坑	覆土中位から底面	平安時代	19
51 櫛具(立型扇輪状付物)	鉄	前橋市之宮町	二之宮台遺跡18号住居	西壁中央溝	10世紀後半	28
52 櫛具(櫛状形)	鉄	北群馬郡榑木町	榑木遺跡2号住居址	埋土	10世紀後半	5
53 櫛具(C字形)	鉄	北群馬郡榑木町	榑木遺跡3区A289	埋土中央溝	10世紀後半	8
54 一本鉋引手金具	鉄	前橋市大室町	荒塚ノ乙遺跡3区13号住居址	埋土	10世紀後半	12
55 櫛具(櫛状形)	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区17号住居	床1.30cm	10世紀末	9
56 一本鉋引手金具	鉄	群馬県榑木町	榑木遺跡1-112号住居	北西溝	11世紀前半	16
57 櫛	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区101号住居	床1.11cm	11世紀前半	7
58 櫛	鉄	北群馬郡吉岡町	大久保A遺跡1区24号住居	埋土中央溝	平安時代	7
59 櫛の櫛板	鉄	前橋市大蔵科町	大蔵科遺跡4号住居	埋土	11世紀後半	1
60 一本鉋引手金具?	鉄	高崎市大蔵科町	大蔵科遺跡50号住居	埋土	11世紀後半	2
61 櫛具(長方形)	鉄	前橋市大蔵科町	大蔵科遺跡50号住居	埋土	11世紀末	3
62 櫛具(長方形)	鉄	前橋市大蔵科町	大蔵科遺跡50号住居	埋土	11世紀末	3
63 櫛具(高輪状)	鉄	前橋市烏羽遺跡	烏羽遺跡100号溝	埋土	Aa-10号下住居	21

以上のように群馬県下では、5世紀後半(鈴を含めれば5世紀前半)から中世におよぶ集落内の遺構から馬具が出土していることが判明した。このうち2割が古墳時代、8割が奈良・平安時代以降の遺構から出土している。奈良時代以降の馬具の編年は明確でなく、特に銜や引手金具のみでは時期を決定することは困難である。また、埋没土中からの出土例が多く、遺構の時期を馬具の時期と決定できる例は全体の半分ほどである。このように限定された状況ではあるが、古墳の副葬品として考えられがちであった馬具が古代の集落の中でも検出されることが再確認された。全体には大谷氏が指摘したように群馬県でも9～10世紀の遺構の馬具出土例が多い。しかし、群馬県では古墳時代の出土例もあり、そのうち荒砥島原遺跡例は5世紀後半にまでさかのぼることに注目しておきたい。また體に関連した馬具は少なく、

轡関連の馬具が多いことも群馬県の現段階の集積の特徴といえよう。

これらの馬具が出土した29遺跡の位置を示したのが第154図である。群馬県の地形は標高1,000m以上の山岳部、300m以上の山間部、100～300mの山麓部、100m以下の平野部に概ね分けられる。山麓部は利根川中流域の低地(水田卓越地域)の外縁にある榛名山や赤城山等の裾野にあたる。山体から流下する小河川沿いに帯状の沖積地が形成されていて、弥生時代以降農耕集落が拡大していく地域である。平野部にも農耕集落は多く立地している。

古墳時代の馬具出土遺跡は7遺跡で、山麓部に5遺跡、平野部2遺跡が点在している。現段階では出土遺跡数が少ないので分布の背景を分析するには至らない。これに対して奈良・平安時代の馬具出土遺跡は21遺跡と増加し、山麓部から平野部縁辺に集中



第154図 群馬県の馬具出土遺跡の分布

している。平野中央部の馬具出土の遺跡は現状では少ない。この時代における分布の偏在は、平野部の発掘調査が少ないことに起因している可能性もあるが、山麓部の集落と馬の関連性が高いことを示唆する可能性もある。今後、平野部の遺跡の馬具の出土状況や、埼玉県北部・栃木県西部の状況も調査して、馬具出土遺跡と地形との関連を分析することが必要となろう。

また、馬具を官牧や東山道駅路等の政治的施設との関連で考えることもできるが、馬具出土遺跡の分

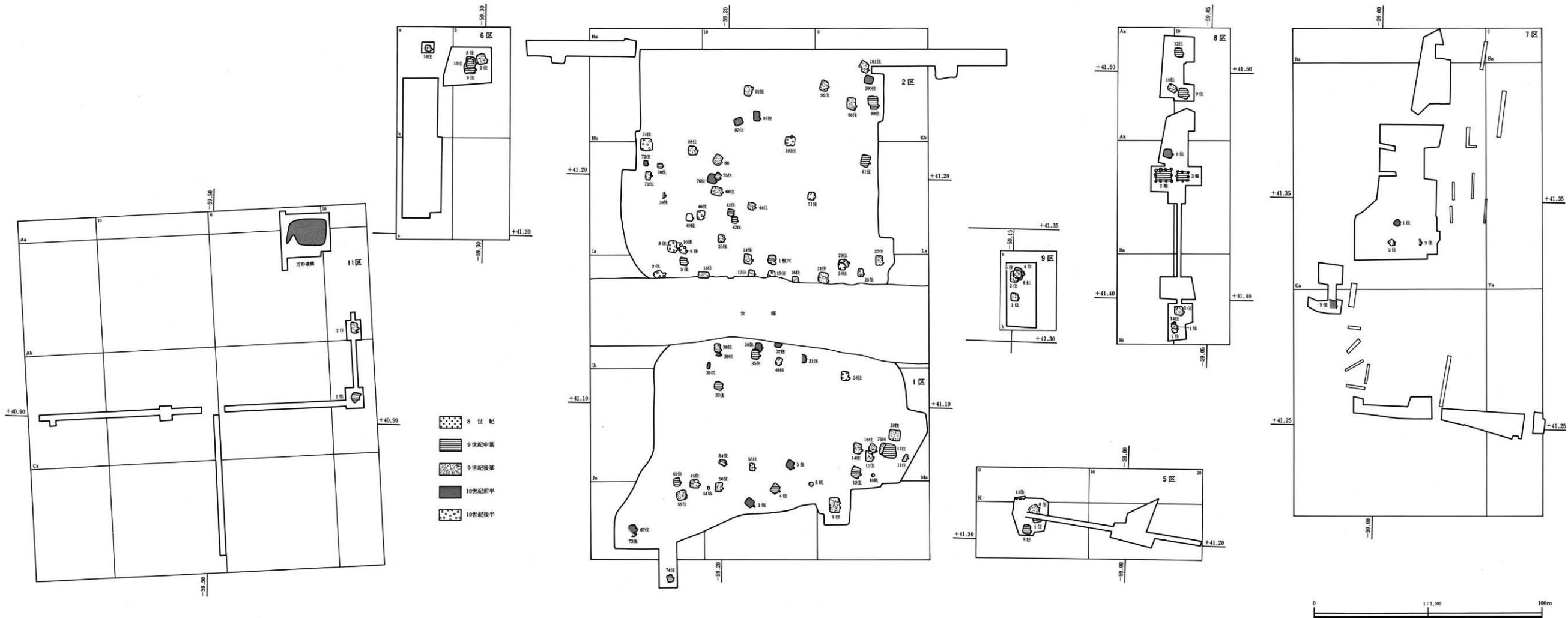
布からすればそれだけに限定できない分布傾向を示している。馬具出土集落の分析には古墳時代以来の農耕集落の発達過程のなかで考える視座を加えることも必要に思える。今回の分析では兼用馬具の集成が中心となったが、今後は農耕や荷役・飼育等を含めた地域内での馬の総合的な使役の実態を明らかにしていく方向性が必要であろう。群馬県における集落出土の馬具の背景については、今後の出土例の増加を持って、さらに深化したい。(小島教子)

註

- 註1 中沢 悟1996「紡錘車の基礎研究(2)」『専修考古学』第6号
 註2 小島教子1995「2. 古墳時代初期の出土土器について」『荒砥上ノ坊遺跡1』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
 註3 坂口 一・三浦京子1986「奈良・平安時代の土器の編年-住居の重複と共存関係による土器型式組列の検討-」『群馬県史研究』24号
 註4 この輪軸使用・酸化焙焼成の土器で、黒色処理を施した土器を「荒砥上ノ坊遺跡II」では「クロコ土器」と呼ぶが、黒色処理する土器の総称として本書では「黒色土器」と呼ぶ。(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996「荒砥上ノ坊遺跡II」
 註5 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団専門員神谷佳明氏のご指示に拠る。
 註6 全体の整理作業の進捗の中で前2巻の報告書に掲載した遺構一覧表を訂正した部分がある。
 註7 前掲註2文献
 註8 3区には住居が確認されていないが、これは発掘区が狭いため、周囲に住居が検出される可能性が高いと考えられる。
 註9 松田 猛1983「荒砥中層敷I遺跡」『群馬文化』195号
 註10 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983「荒砥島原遺跡」。
 註11 小島教子1986「初期農耕集落の立地条件とその背景」『群馬県史研究』24号
 註12 1987「年報7」
 註13 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1988「荒砥天ノ宮遺跡」
 註14 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1992「二之宮千足遺跡」
 註15 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1995「荒砥上ノ坊遺跡1」
 註16 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1983「年報3」
 註17 能登骨・石坂茂・徳江秀夫・小島教子1983「赤城山麓における遺跡群研究」『信濃』35巻4号
 註18 大谷 猛1984「住居址出土の馬具」『学芸調査紀要』1東京都教育委員会
 註19 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1993「白井大宮遺跡」
 註20 安中市教育委員会1991「九九九川沿岸遺跡群」
 註21 吉岡村教育委員会1986「大久保A遺跡II区」
 註22 小野山簡1983「花形青葉と光背」『MUSEUM』383号
 註23 群馬県古墳時代研究会1996「群馬県内出土の馬具・馬形埴輪」
 註24 前掲註10文献
 註25 坂本美夫1988「鞍具考」『藤澤忠先生頌寿記念論文集 考古学要考中巻』
 註26 関西の水田遺跡には地鎮めのために銅鈴を埋納する遺構がある。集落出土の銅鈴の用途については馬具だけに限定できない。
 江瀬 洋1996「古代の土地開発と地鎮め遺構」『帝京大学山梨文化財研究所報告』第7集

引用文献(番号は、第3表遺跡Noと同じ)

- 1 天神遺跡 山武考古学研究所 1978 2 天田・川押遺跡 高崎市教育委員会 1983 3 史跡上野国分寺跡発掘調査概要 5 群馬県教育委員会 1984 4 草作遺跡 前橋市埋蔵文化財発掘調査報告 1985 5 御前遺跡発掘調査報告書 榎東村教育委員会 1985 6 西田・谷津・中道・上新田・今井遺跡発掘調査報告書 東京電力株式会社 1988 7 大久保A遺跡II区 吉岡村教育委員会 1986 8 海田A・B遺跡 群馬県箕栗町教育委員会 1988 9 大久保A遺跡I区 吉岡村教育委員会 1986 10 芳賀東部区地遺跡II-古墳-平安時代編 前橋市教育委員会 1988 11 松井田工業団地遺跡-遺物編一 松井田町教育委員会 1990 12 株木B遺跡 群馬県藤岡市教育委員会 1991 13 成厚住宅団地遺跡II-1 太田市教育委員会 1993 14 下田遺跡 新田町教育委員会 1994 15 平田中原・南原遺跡 渋川市教育委員会 1994 16 堤上遺跡 群馬町教育委員会 1995
 17 荒砥上ノ坊遺跡 1982 18 荒砥島原遺跡 1983 19 下野野跡(平安時代・中・近世編) 1986 20 島羽遺跡G・H・I区 1986 21 島羽遺跡A・B・C・D・E・F区 1992 22 有馬条里遺跡II 1991 23 上栗須寺前遺跡群 1992 24 矢田遺跡II 平安時代住居跡編(3) 1992 25 黒瀬八幡遺跡 1996 26 二之宮宮下東遺跡 1994 27 多胡蛇馬遺跡 1993 28 二之宮谷地遺跡 1994 29 下高瀬上ノ原遺跡 1994 30 多比良追部野遺跡 1997 31 荒砥上ノ坊遺跡II 1997以上(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団



第155図 歴史時代後半期の遺構の位置

荒砥上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の

金属学的解析(2)

岩手県立博物館 赤沼英男

1 はじめに

群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡では、古墳時代初頭から平安時代の住居跡が発見され、刀子、鉄鏃、馬具といった鉄器が検出された。また、8世紀後半または9世紀前半に比定される住居跡からは鉄滓、鉄塊系遺物が見いだされ、その時代には鉄または鉄器に係わる生産活動が展開されていたことが明らかとなった。

このような考古学の発掘調査結果をふまえ、1996年には上述の住居跡出土の製品鉄器、ならびに鉄塊系遺物、鉄滓の金属学的解析が筆者によってなされた。その結果、外部から供給された鉄鉄を素材として鋼を製造するという鋼精錬(操作内容の詳細については後述する)が行われており、その方法によって製造された鋼を用いて製品鉄器が製作されていたこと、そして、原料鉄鉄とともに製品鉄器そのものも外部からもたらされていた可能性の高いことが明らかとなった¹⁾。

このたび、荒砥上ノ坊遺跡の5世紀前半の住居跡出土の鉄器、および9~10世紀代と推定される住居跡から検出された鉄器、鉄塊系遺物、鉄滓の金属学的解析を実施したところ、9~10世紀代においても上述と同様の生産状況が確認された。さらに、今回明らかとなった製品鉄器や鉄塊系遺物の組成と、これまでに実施された7~10世紀代の群馬県出土の製品鉄器の組成を比較することによって、鉄鉄あるいは製品鉄器の供給候補地域として列島内のみならず、大陸をも加え検討する必要があること、すなわち奈良時代から平安時代における鉄・鉄器の生産と流通問題については、東北アジアの視点でもってその解明を計る必要があることが示された。

2 分析資料

分析した資料は住居跡内および女掘盛土遺構から出土した鉄器7点、鉄塊系遺物2点(表面が赤錆層で覆われ、大部分が金属鉄またはその錆によって構成されているとみなすことのできる資料)、および鉄滓1点の合計10点の遺物である。鉄器の実測図を図1に、鉄塊系遺物、鉄滓の外観を図8、図9に示す。

表1 分析資料

No	資料名	出土遺構	時代
1	鏃	1区42号住居	5世紀前半
2	馬具	1区33号住居	9世紀中葉
3	馬具	1区33号住居	9世紀中葉
4	刀子	2区16号住居	9世紀中葉
5	釘	1区3号住居	10世紀前半
6	針?	1区9号住居	9世紀中葉
7	釘	女掘盛土	11世紀以前
8	鉄塊系遺物	1区33号住居	9世紀中葉
9	鉄塊系遺物	1区33号住居	9世紀中葉
10	鉄滓	2区8号住居	10世紀後半

注) 年代の推定は財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 小島 敦子氏による。

3 分析方法

鉄器からの分析用試料片の抽出は、資料全体の形状を損ねることのないよう細心の注意を払いながら、ダイヤモンドカッターを使って行い、試料片抽出部位はエポキシ樹脂で修復した。鉄塊系遺物、鉄滓はダイヤモンドカッターにより切断し、切断面のそれぞれの中心部分から試料片を抽出した。鉄器から抽出した試料片についてはさらに2分した後大きい方を、鉄塊系遺物・鉄滓についてはそれぞれの切断面の中心部分から抽出した試料片のうち的一方を組織観察に、残りの試料片を化学成分分析に供した。

組織観察用試料片は樹脂に埋め込み、エメリー紙、ダイヤモンドペーストを用いて研磨した後、金属顕微鏡で研磨面の観察を行った。さらに、地金の製造法を推定するうえで重要と判断される鉄器中の非金属介在物（鋼を製造する過程で分離・除去することができずに残った異物）、鉄滓中の鉱物については、エレクトロン・プローブ・マイクロアナライザー（EPMA）によりその組成を決定した。

化学成分分析用試料片はエチルアルコール、アセトンで洗浄し、十分に乾燥した。錆試料片と鉄滓については粉砕した後テフロン分解容器に、健全な金属試料については直接テフロン分解容器に秤量し、酸を使って完全に溶解した。このようにして調整した溶液を誘導結合プラズマ発光分光分析（ICP-AES）に供し、T.Fe、Cu、Mn、P、Ni、Co、Ti、Si、Ca、Al、Mg、Vの12成分を定量した。なお、鉄塊系遺物中のC、S、鉄滓中のM.Fe、FeOについては、それぞれ燃焼高周波一赤外線吸収法、クロム酸カリウム滴定容量法により定量し、鉄滓中の Fe_2O_3 については計算によって求めた。

表2 鉄器の分析

No.資料名	化 学 成 分 (%)												ミクロ組織	n.m.i
	T.Fe	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	V		
1 鏃	64.20	0.031	<0.002	0.018	0.026	0.057	0.020	0.170	0.057	0.035	0.009	0.001	no	XT
2 馬具	91.10	0.034	<0.001	0.075	0.017	0.050	<0.001	0.024	0.019	0.008	0.001	<0.001	Cm(0.2~0.3)	S
3 馬具	93.70	0.024	0.005	0.079	0.011	0.031	0.004	0.053	0.036	0.009	0.004	<0.001	Cm(0.3~0.4)	S
4 刀子	91.30	0.034	0.003	0.029	0.035	0.065	0.020	0.073	0.130	—	—	—	no	XT,S
5 釘	62.00	0.014	0.011	0.035	0.009	0.030	0.035	1.79	0.060	—	—	—	no	no
6 針?	59.30	0.007	0.006	0.111	0.005	0.012	0.018	1.43	0.192	—	—	—	no	no
7 釘	54.70	0.006	0.019	0.045	0.005	0.009	0.020	12.24	0.126	0.410	0.079	<0.001	no	no

注1) 分析はICP-AES法による。

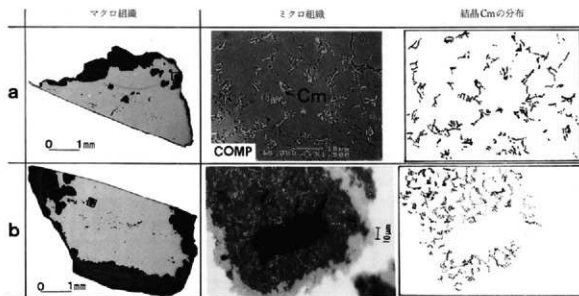
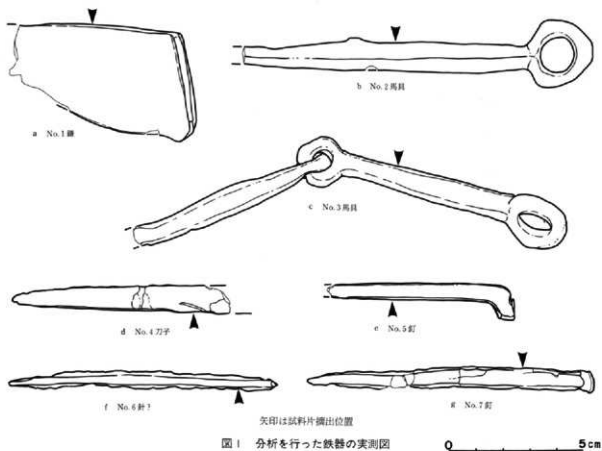
注2) 一は分析せず、Cmはセメントイトもしくはその欠落孔、Cmのカッコ内の数値はミクロ組織から推定される炭素含有量、noは見いだされず。

注3) n.m.iは非金属介在物組成、XTはチタン化合物、Wはウスタイト（化学理論組成 FeO）、Mはマトリックス。

4 分析結果

4-1 鉄器から抽出した試料片のマクロおよびミクロ組織

No.2・No.3馬具から抽出した試料片は、そのほとんどが健全な金属によって構成されており、マクロ組織の枠で囲んだ部分の黒錆層には、金属光沢を呈する結晶Cm、もしくはその欠落孔によって構成される島状の組織が観察された（図2）。結晶Cmは層状に規則正しく並んでおり、もとの健全な地金におけるパーライト中のセメントイト（ Fe_3C ）とみなすことができる²⁾。錆下による結晶の膨張を無視し、セメントイトの分布状況に基づけば、No.2・No.3馬具にはそれぞれ0.2~0.



a : No. 2 馬具 b : No. 3 馬具
 Cm : セメンタイト (Fe₃C) もしくはその欠落孔
 COMP : EPMAによる組成像
 マクロ組織の枠で囲んだ部分はミクロ組織観察位置

図2 No. 2・No. 3 馬具のマクロ・ミクロ組織

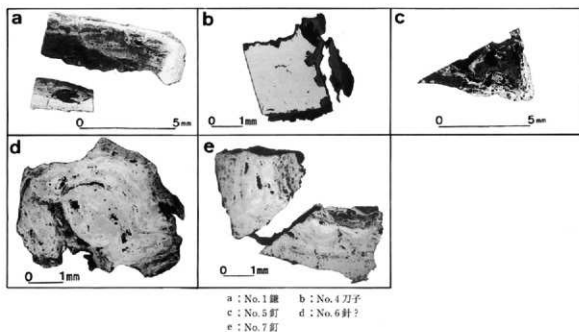


図3 鉄器から抽出した試料片のマクロ組織

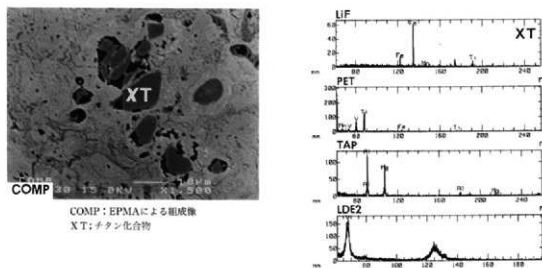


図4 No.1 鎌に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

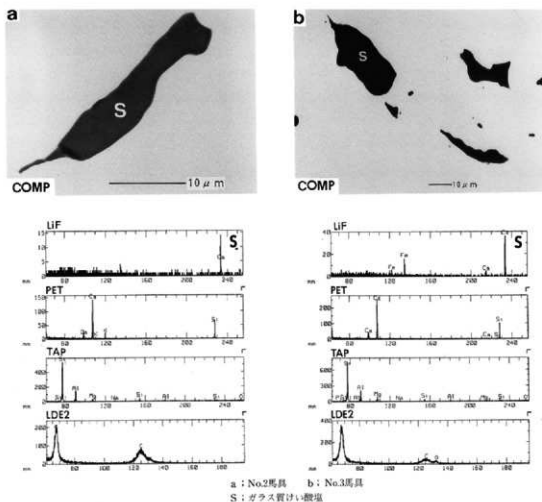


図5 No. 2・No. 3馬具に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

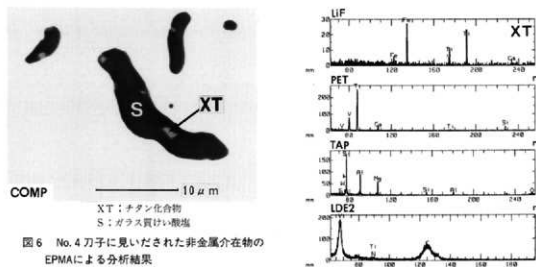


図6 No. 4 刀子に見いだされた非金属介在物のEPMAによる分析結果

3% C、0.3~0.4% Cの鋼が使用されていたものと推定される。No 4 刀子もそのほとんどが健全なメタルから成る(図3)。このような場合には酸によって腐食させることにより、地金の組織観察が可能となるが、腐食による錆化の進行と非金属介在物の喪失を考慮し、今回は見合わせた。また、No 1 鎌をはじめとする他の4点については、もとの健全な地金の状態を推定できる組織を見いだすことができなかった。

4-2 鉄器に残存する非金属介在物の組成

No 1 鎌の黒錆層中には灰色の化合物が確認され、E PMAによる分析によってFeO-TiO₂-MgO-Al₂O₃-V₂O₅系のチタン化合物(XT)と同定された(図4)。No 2・No 3 馬具の健全なメタル中には、それぞれNa₂O-K₂O-CaO-MgO-Al₂O₃-SiO₂系、FeO-Na₂O-CaO-Al₂O₃-SiO₂-P₂O₅系のガラス質けい酸塩(S)からなる非金属介在物(図5 a)が、No 4 刀子にはチタン化合物(XT)とFeO-CaO-Al₂O₃-MgO-SiO₂-TiO₂系のガラス質けい酸塩(S)によって構成される非金属介在物が観察された(図6)。なお、No 5 釘をはじめとする3点については非金属介在物を見いだすことができなかった。

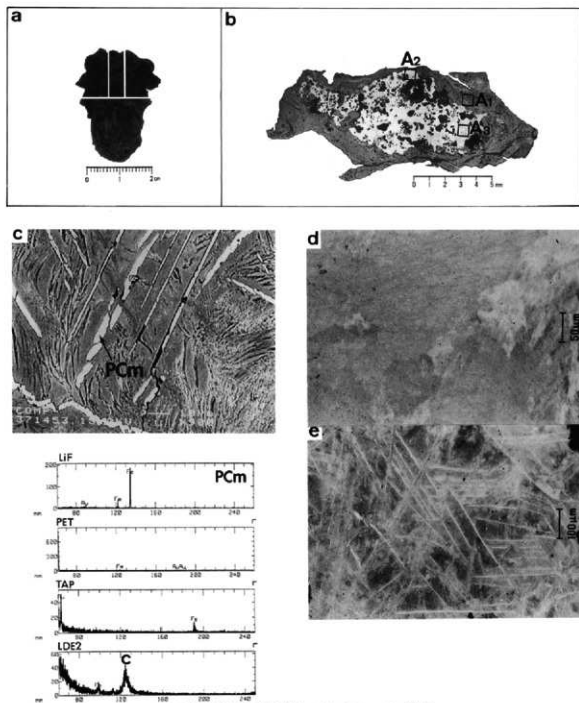
4-3 鉄器から抽出した試料片の化学組成

No 2・No 3 馬具、No 4 刀子から抽出した試料片のT.Feは91%を越えており、ほぼ健全なメタル試料が分析されたことがわかる。No 1 鎌、No 5 釘、No 6 針?、No 7 釘のT.Feは65%未満にあり相当に錆化が進んでいる。

No 1 鎌およびNo 2 馬具、No 4 刀子にはCo分が0.05%以上含有されており、通常の砂鉄に比べ高値をとる。No 1 鎌は錆化した試料であるが、この鉄器には異種金属の付着はもとより、異種金属で製作された遺物の共存はなかったことが発掘調査を行った小島敦子氏によって確認されている。0.05%以上のCo分が土砂等に含有されている可能性はきわめて低く、検出されたCo分はもとの健全な地金に含まれていたとみなすことができる。No 6 針?からは0.111%のP分が検出されている。P分については埋蔵環境下からの富化の可能性についても考慮しなければならない³⁾。この場合、同じ埋蔵環境にあったとみなすことのできる他の鉄器との化学組成上の対比を行い、埋蔵環境下からの富化の有無を検討する必要があるが、No 6 針?と同じ遺構面から検出された他の鉄器はなく困難であった。ここではもとの健全な地金に0.1%を越えるP分が含有されている可能性のあることを述べておく。

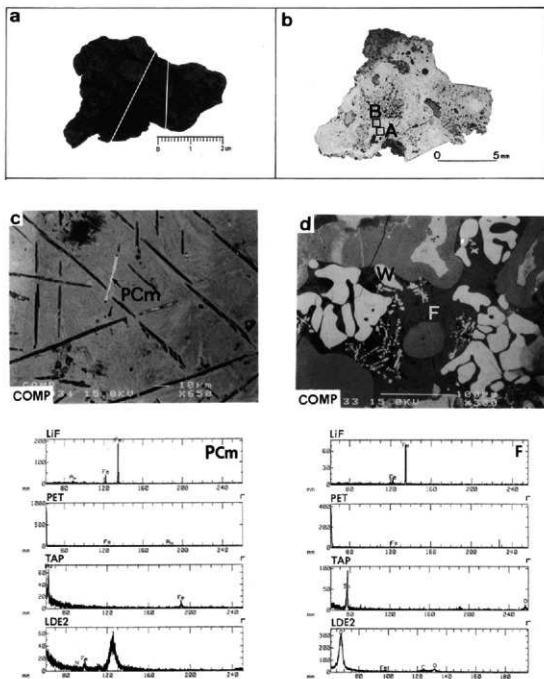
4-4 鉄塊系遺物ならびに鉄滓のマクロ・マイクロ組織

No 8 鉄塊系遺物(図7 a)から抽出した試料片はそのほとんどが健全なメタルからなり、メタルの周縁部には黒錆層が残存していた(図7 b)。黒錆層の領域A₁部には金属光沢を呈する細線状の結晶PCmとその欠落孔がみられ、E PMAによる定性分析によって結晶PCmの主成分はFe、Cであることが確かめられた(図7 c)。この分析結果と結晶形状を考慮すると、結晶PCmは初析セメントイトと判定できる。一方、健全なメタル部分をナイトール(硝酸2.5mlとエチルアルコール100mlの混合溶液)で腐食したマクロ組織は、メタル全域にわたって黒く腐食されている(図7d)。領域A₂、A₃部のミクロエッチング組織によると、前者は共析鋼(0.86% Cの鋼)に近い組成の組



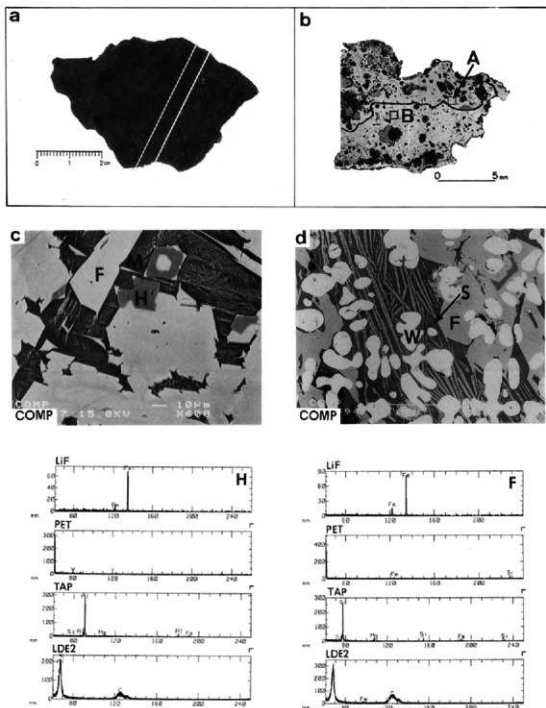
a : 外観。実線は資料切断位置。 b : マクロエッチング組織
 c : bの領域A₁のEPMAによる組成像 (COMP) と定性分析結果
 d、e : それぞれbの領域A₂、A₃のマイクロエッチング組織

図7 No.8 鉄塊系遺物の外観と組織観察結果



a : 外観。実線は資料切断位置。 b : マクロ組織
 c、d : bの領域A、BのEPMAによる組成像 (COMP) と分析結果
 W : ウスタイト (化学理論組成FeO)、F : FeO-SiO₂系化合物

図8 No. 9 鉄塊系遺物の外観と組織観察結果



a : 外観。実線は資料切断位置。 b : マクロ組織
 c、d : bの領域A、BのEPMAによる組成像 (COMP)
 W : ウスタイト (化学理論組成FeO)、F : FeO-SiO₂系化合物、
 T : FeO-Al₂O₃系化合物、S : ガラス質けい酸塩

図9 No.10鉄滓の外観と組織観察結果

織を示し、後者には初析セメントタイトを確認できた(図7d, e)。これらの組織観察によって、No8鉄塊系遺物は過共析鋼から共析鋼に近い組成の鋼が混在した遺物であることがわかった。この分析結果は後述する化学成分分析結果とも合致する。

No9鉄塊系遺物(図8a)から抽出した試料片はそのほとんどが黒錆層によって構成されており、ところどころに鉄滓のかみ込みと付着が認められた(図8b)。黒錆層領域AにはNo8鉄塊系遺物同様、結晶PCmが観察され、E PMAによる分析によって初析セメントタイトと判定された。一方、領域BにはそれぞれFeO-SiO₂系化合物[F:鉄かんらん石(2FeO·SiO₂)と推定される]、ウスタイト(W:化学理論組成FeO)からなる組織がみられ、ところどころにウスタイトとガラス買けい酸塩からなる組織も観察された。

No10鉄滓(図9a)のマクロ組織にはいたるところに空孔が残存しており、化合物F、化合物H、および微細な結晶が混在したマトリックス(M)からなる部分(図9bの領域A部)と、化合物W、化合物F、およびマトリックス(M)からなる部分(図9bの領域B部)によって構成されている。特に、化合物Hは化合物Fの結晶粒界に析出していることから、初晶は化合物Fであり、つぎに化合物Hが析出したものと推測される。E PMAによる定性分析の結果、化合物Wはウスタイト、HはFeO-Al₂O₃系化合物、FはFeO-MgO-SiO₂系化合物[マグネシウムを固溶した鉄かんらん石[2(Fe, Mg)O·SiO₂]と推定される]であることが判明した。

4-5 鉄塊系遺物ならびに鉄滓の化学組成

No8鉄塊系遺物から抽出されたほぼ健全なメタル(T.Feが83.80%)には、0.93%の炭素分が含まれている。この鉄塊系遺物は組織観察によって過共析鋼であることが指摘されたが、化学成分分析結果もそれと合致する。この鉄塊系遺物にはCo分が0.07%、S分が0.13%、また、No9鉄塊系遺物にもCo分が0.05%含まれており、通常の砂鉄よりも高値をとる(表3)。No10鉄滓のT.Feは51.78%、FeO分は54.58%であり、鉄滓の相当部分がウスタイトまたは鉄かんらん石からなることが化学組成からも推測される(表4)。

表3 No8、No9鉄塊系遺物の化学組成(%)

No	T.Fe	C	S	Cu	Mn	P	Ni	Co	Ti	Si	Ca	Al	Mg	Mo	As
8	83.80	0.93	0.13	0.020	<0.01	0.09	0.04	0.07	—	0.20	—	—	—	<0.01	<0.01
9	64.30	—	—	0.030	0.001	0.008	0.017	0.050	<0.001	0.093	0.005	0.012	<0.001	—	—

注) C, Sは燃焼高周波加熱-赤外線吸収法、他はICP-AES法による。

表4 No10鉄滓の分析結果

化 学 成 分 (%)												
T.Fe	M.Fe	FeO	Fe ₂ O ₃	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	CaO	MgO	Na ₂ O	K ₂ O	鉱物組成	
51.78	0.28	54.58	12.97	18.73	0.64	5.82	1.61	1.02	0.32	0.94	W,F,H,S	

注1) T.Fe, M.Fe, FeOはクロム酸カリウム滴定容量法、Fe₂O₃は計算、他はICP-AES法による。

注2) Wはウスタイト、FはFeO-MgO-SiO₂系化合物(マグネシウムを固溶した鉄かんらん石: 2FeO·SiO₂と推定される)、HはFeO-Al₂O₃系化合物、Sはガラス買けい酸塩。

5 鉄器地金の材質

鉄器は鋼を素材とする鋼製鉄器と鉄鉄を素材とする鋳造鉄器の2つに分類される。分析した鉄器の中で、No 1 鎌、No 2・No 3 馬具、No 4 刀子はそれらの組織観察結果から鋼製鉄器であることが明らかである。No 5 釘、No 6 針⁷⁾、No 7 釘の3点については、鋼製鉄器と判定できる金属学的根拠を得ることができなかったが、それらの器種を考慮すると、やはり鋼製鉄器の可能性が高いといえる。

No 2・No 3 馬具に残存する非金属介在物は、それぞれCaO-Al₂O₃-SiO₂系、FeO-CaO-Al₂O₃-SiO₂系のガラス質酸塩であり、介在物中に鉄チタン酸化物やTi-O系化合物(主として酸化チタンを主成分とする化合物)を見いだすことはできなかった。鋼の製造過程での砂鉄の使用を想定することは困難である。一方、No 1 鎌、No 4 刀子の介在物には鉄チタン酸化物が検出されており、鋼製造の過程で砂鉄が使用されたものとみることができる。このように、地金に残存する非金属介在物組成に基づき、鋼製鉄器は以下の3つに分類することができる。

- イ) 砂鉄の使用が認められないもの
- ロ) 砂鉄の使用によって製造された鋼を素材とするもの
- ハ) 砂鉄の使用が不明なもの

No 2 馬具には0.05%を超えるCo分が含有されている。製作に用いられた鋼は、脈石中にCo鉱物を随伴する特殊な鉄鉱石(おそらくは磁鉄鉱)であった可能性が高い。地金の中に非金属介在物が見いだされなかったNo 5 釘、No 6 針⁷⁾、No 7 釘の3点については鋼製造過程での砂鉄の使用については不明である。なお、No 1 鎌にも0.057%ものCo分が含まれている。非金属介在物組成を考慮すれば、始発原料にCo分とTi分を含む特殊な鉄鉱石が使用されたか、あるいは鉄鉱石と砂鉄の両者の使用によって製造された鋼のいずれかを素材として製作されたものと解釈できるが、この問題については後述する。

6 古代ならびに中世における鋼の製造

古代ならびに中世における鋼の製造方法にはいまだに不明な点が多く、いくつかの仮説が出されているが、それらを整理すると以下のごとくなる。

- 1) 原料鉱石(砂鉄もしくは鉄鉱石)を還元し鉄を生産する段階
 - 2) 1)で生産された鉄から目的とする鋼を製造する段階
 - 3) 2)で製造された鋼を素材とし目的とする鋼製鉄器を製作する段階
- ここではとりあえず1)を製錬、2)を精錬、3)を小鍛冶とする。

1)の製錬によって得られる鉄は炭素含有量に応じ、鋼と鉄鉄の2つに分類できる。製錬炉で得られた鉄から極力前者の鋼部分を抽出して、含有される不純物を除去するとともに、炭素量の増減を行って目的とする鋼を製造する。そしてその鋼を使って製品鉄器が製作されたとする見方がある⁸⁾。製錬炉で直接に鋼が作り出されるという意味でこの方法は直接製鋼法と呼ばれている。さらに製錬によって得られた粗鉄を精製し目的とする鋼に変えるという上述の操作は精錬鍛冶とされている。しかし、ここでいう精錬鍛冶がどのような設備を用いどのようなようにしてなされたかという点に関しての具体的な説明はない。不純物の除去と炭素量の増減という複数の操作工程があったと推測されるが、具体的な操作方法が不明である以上、その操作の過程でどのような鉄滓

が排出されたのかを論ずることは困難である³⁾。

1) の製錬では鉄鉄も生産される。鉄鉄は再び溶解炉で溶解し、鋳型に注ぎ込むことによって鑄造鉄器となる。また、鉄鉄中の炭素を低減させる、すなわち脱炭によって鋼を得ることもできる。この場合の方法としては、半地下式堅型炉もしくは火窟炉の中にあらかじめ用意された鉄鉄を挿入して鉄鉄浴を生成させた後、砂鉄、もしくは鉍石粉といった少量の鉄酸化物を投入する方法がとられていた可能性の高いことが遺物の金属学的解析結果に基づき指摘されている³⁾⁹⁾。鉄鉄を素材として脱炭材として砂鉄もしくは鉍石粉を使用し鋼を製造するというこの方法は、鉄鉄を経由して鋼が得られるという意味で間接製鋼法と呼ばれるが、現代製鋼と区別するため以下では“鋼精錬”という用語を用いることにする。脱炭材に鉄鉍石粉が使用された場合、鉄鉍石中のFe分は鉄鉄中の炭素、もしくはCOガスにより還元されてFeO、さらに還元が進めばFeに変わって溶鉄に付け加わる。一方、砂鉄が用いられた場合にはFeO-Fe₂O₃-TiO₂系の鉄チタン酸化物中のFe分は還元により鉄浴に移行し、スラグ浴には還元雰囲気と炉内温度によってウルボスピネル(2FeO・TiO₂)、イルメナイト(FeO・TiO₂)、Ti-O系化合物、Ti(C, N)といったチタン化合物が析出することになる。実際の操作では投入された脱炭材が溶解しスラグ浴が形成される。脱炭材に鉍石粉が使用された場合にはウスタイト、FeO-MgO-SiO₂系化合物、ガラス質の酸塩を主成分とする鉄滓が、砂鉄の場合にはそれらにチタン化合物が加わったものが鉄浴から分離され排出される。この脱炭・精製の工程で生ずる鉄滓を鋼精錬滓という。そして、このような方法により製造された鋼を加熱・鍛打し造形するという小鍛冶操作によって目的とする鉄器がつくりだされることになる。なお、鋼精錬操作の場合、吸熱反応である少量の鉄酸化物の使用による脱炭反応に伴う温度低下を抑制し、鋼精錬温度を維持するための設備あるいは操作方法があったと考えられるが、この点についてはしばしば検出される椀状滓の組成をふまえ今後追求すべき問題といえよう。なお、炉内温度を考慮するとこの操作によって生成する鋼は過共析鋼(0.86~2.0% C)であり、炉内の状況によってはそれ以下の炭素含有量の鋼も生成可能であったと推定される。

小鍛冶操作では鍛打・加熱を繰り返して目的とする鉄器への造形が行われるので、鍛打のときは加熱された鋼の表面に生成する酸化鉄(スケール)が剝離(これは鍛造薄片と呼ばれる)する。一方、加熱のときは酸化鉄が半溶融状態になり、火窟炉の底部に溜まる。そこで炉壁材と反応して鉄分に富む半溶融状態の鉄滓状物質を生成し、加熱炉の底で固化する。このようにして生成した“椀状”(供え餅を逆にした形)をした鉄滓状物質が、鉄関連遺跡の発掘調査では鍛造滓として扱われている。従って、鍛造滓は金属鉄、錆層、ウスタイト(FeO)を主成分とし、他にスケールが寄材と反応した際に生成するFeO-SiO₂系化合物が混在した組成をとるものと推測される。なお、この操作はしばしば鍛錬鍛冶ともいわれる。

上述から明かなように、2) である精錬には直接製鋼法の精錬鍛冶と間接製鋼法の鋼精錬という2つの異なった概念が存在することがわかる。精錬鍛冶についてはその操作内容をより明確にする必要があると考えられるが、ここでは鉄鉄を脱炭し鋼を製造するという鋼精錬とは区別して扱うことにしたい。上述を整理すると図10のごとくなる。

7 住居跡内における鋼製造

9世紀中葉に比定される住居跡からは過共析鋼が検出されている。今回の発掘調査では炉跡や

鉄滓は未検出であった。しかし、これまでの調査において同遺跡では既に8世紀後半には脱炭材として砂鉄を使用する鋼精錬が実施されていた可能性の高いことが指摘されており¹⁾、10世紀代においても群馬県内に立地する住居跡では同様の操作がなされていたものと推測されている¹⁰⁾。このような状況を考慮すると、No. 8、No. 9の鉄塊系遺物を鋼精錬操作によって生成した過共析鋼とみることができる。10世紀後半の住居跡から検出されたNo.10鉄滓についても、鉄かんらん石、FeO-Al₂O₃系化合物が融液から析出した可能性の高いこと、ならびに通常の粘土値に比べ (CaO+MgO)/Al₂O₃が0.45とやや高い値をとることを考え合わせれば、やはり鋼精錬操作に伴って排出された鉄滓の可能性がある。今後は、鋼精錬操作を念頭に、住居跡内における鉄関連遺構(鉄・鉄器生産に使用された炉跡)の詳細な発掘調査を実施し、遺構のうえからも検討する必要があるだろう。

なお、No. 8・No. 9過共析鋼の化学組成に基づけば、同時代に比定され、0.05%を越えるCo分を含むNo. 2馬具、No. 4刀子については住居跡内で製造された鋼を用いて製作された可能性を考慮する必要がある。既述のとおり、No. 2馬具には地金の非金属介在物中にチタン化合物がみられず、No. 4刀子にはチタン化合物が観察された。今後の発掘調査において鉄滓が確認され、その中にチタン化合物が見いだされればNo. 4刀子が、チタン化合物が見いだされず、脱炭材として砂鉄の使用を指摘することができない場合には、No. 2馬具が遺跡内で製作された可能性が高まることになる。また、No. 2馬具に観察された非金属介在物はCaO-Al₂O₃-SiO₂系であり、FeO分はほとんど含まれていない。炭素含有量の高い鉄浴もしくは炭材とスラグ浴とが接触し、スラグ浴中のFe分が低減したものの一部が鋼中に取り込まれたものとみることができる。この非金属介在物組成も鋼精錬操作の実施を支持している。

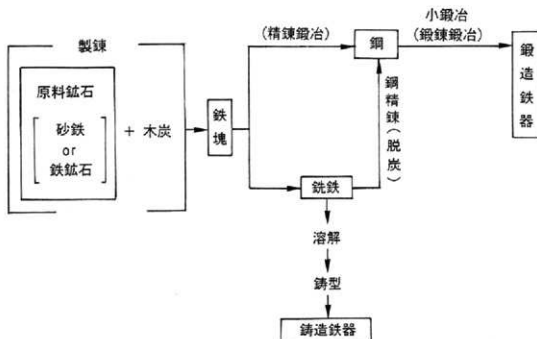


図10 推定される鋼の製造法

8 原料鉄と製品鉄器の流通問題

図11は荒砥上ノ坊遺跡をはじめとし、これまでに解析がなされた群馬県上野国分僧寺・尼寺中間地域¹⁹⁾、中江田八ツ縄遺跡²⁰⁾から出土した7世紀から10世紀代に比定される鉄器のNi、Co、Cu、P、Mnの5成分とT.Feの関係、および非金属材料組成をまとめたものである。図11の中で非金属材料中にチタン化合物が見いだされたものは丸(●)、非金属材料中にチタン化合物を見いだすことができなかったものは四角(■)、非金属材料を見いだすことができなかったものは三角(▲)の記号で表記した。T.Feが80%未満の錆層からなる試料片については埋蔵環境下からの化学成分の富化が問題となるが、図には異種金属の付着がみられず、同じ埋蔵環境下から出土した遺物間での化学成分上の対比によって、その影響が小さいと判断されたもののみを取り上げた。

図から明らかなように、非金属材料中にチタン化合物が観察されず、通常の砂鉄よりも高いNi分、Co分、Cu分、P分、Mn分を含む、刀子、馬具、釘、紡錘車、といった鋼製鉄器がみられる。これらの鉄器については軋石中に当該成分を含む鉱物を随伴する鉄鉱石を始発原料として製造された鋼を素材として、製作されたものとみることができる。地金中に非金属材料を見いだすことができなかったもの、あるいは非金属材料中にチタン化合物が残存する鋼製鉄器についても同様の組成のものがみられる。これらについても上述と同様の始発原料が用いられた可能性が高く、始発原料を砂鉄に限定して、奈良から平安時代の鋼製造を考えることが困難であることがわかる。そして、非金属材料中にチタン化合物が見いだされたものについては、鉄鉄を素材とする鋼精錬によって製造された鋼を用いて製作された鋼製鉄器と解釈することが可能となる。

6に基づけば、流通する遺物の形態としては鉄鉄、鋼、製品鉄器の3形態が考えられ、図11の組成を考慮すると、既に奈良時代には製品鉄器はもとより鉄鉄や鋼といった製品鉄器製作のための鉄素材に関する複数の流通ルートが出来上がっていたことがわかる。また、通常の砂鉄に比べ高レベルのCu分やNi分、Co分という化学組成上の特徴をもつ鋼製鉄器、あるいは鋼素材の存在を考慮すると、それらについては列島内はもとより大陸にまで視野を広げて、その供給地域を検討しなければならない(図12)。今後、時代と器形の明確な製品鉄器、あるいは鉄素材の金属学的解析を精力的に実施し、製鉄炉跡とみなされている遺構から検出された遺物の組成との比較をとおして、各時代ならびにそれぞれの地域における、鉄素材または製品鉄器の供給依存地域を推定する必要がある。

9 まとめ

群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡の9世紀中葉から10世紀代に比定される住居跡から出土した鉄器、鉄塊系遺物、鉄滓の金属学的解析を行ったところ、外部から供給された鉄鉄を素材とする鋼の製造(鋼精錬)がなされていた可能性の高いことが明らかになった。これまでに実施した同遺跡出土遺物の金属学的解析結果を考慮すると、その操作は奈良時代から行われており、その素材となった鉄鉄や製品鉄器は外部から複数のルートでもたらされていたものと推測された。さらに、それらの供給候補地として、列島内のみならず大陸をも加えて検討する必要があることが示された。奈良時代から平安時代の鉄・鉄器の生産と流通問題を検討するうえで重要な情報がもたらされたといえよう。

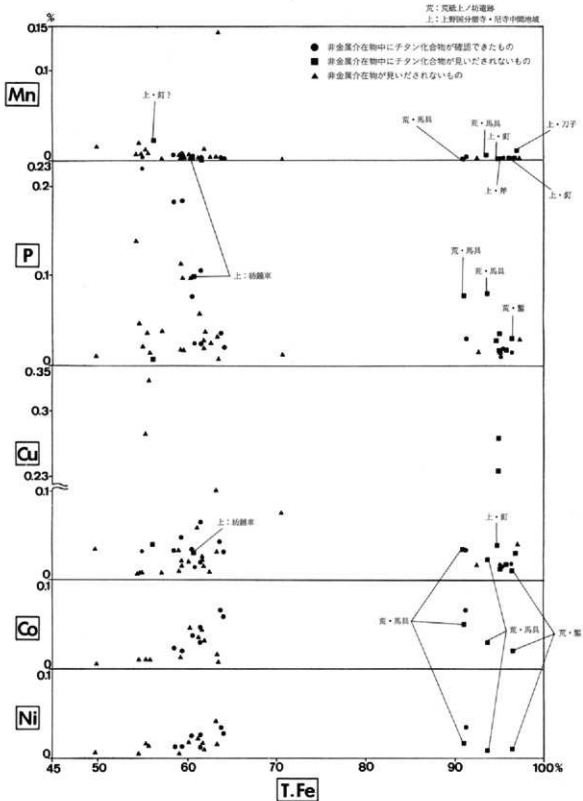


図11 荒砥上ノ坊、中江田八ツ縄、上野国分僧寺・尼寺中間地域出土鉄器の化学成分と非金属介在物組成の関係

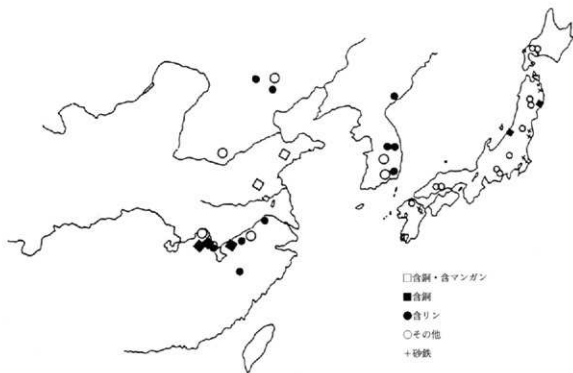


図12 日本列島・中国・朝鮮半島に分布する主な鉄鉱山

註)

- 1) 赤沼英男「高城上ノ坊遺跡出土鉄製遺物の金属学的解析」『高城上ノ坊遺跡Ⅱ』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1996年、p.159-174。
- 2) 佐々木睦、村田明美「古墳出土鉄器の材質と地金の製法」『季刊考古学』第8号、雄山閣出版、1984年、p.27-33。
- 3) 佐々木睦、伊藤薫「川合遺跡出土の鉄器・鉄練ならびに鋳先の金属学的調査」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所、1987年、p.63-80。
- 4) 大澤正巳「古墳伊弉鉄洋からみた製鉄の開始時期」『季刊考古学』第8号、雄山閣出版、1984年、p.36-46。
- 5) 少なくとも精錬鋳治には脱炭、浸炭、鉄滓の絞り出しという工程が含まれていることが大澤正巳氏によって指摘されている。これら3つの操作を同時に行うことは困難であるから、精錬鋳治には最低3つの操作が存在したことになる。当然、それぞれの操作に対応する3種類の鉄滓が排出されることになるが、その点に関する検討が不十分であることが佐々木睦氏によって指摘されている⁴⁾。
- 6) 佐々木睦「遺構を埋れて製鉄滓と断定できるか—霧崎遺跡出土鉄滓の場合—」『たたら研究』34号、たたら研究会、1993年、p.43-47。
- 7) 赤沼英男「いわゆる半地下式原型炉の性格—赤沢・北沢岡遺跡出土遺物の金属学的解析結果から—」『たたら研究』35号、たたら研究会、1995年、p.11-28。
- 8) 赤沼英男「遺物の解析結果からみた半地下式原型炉の性格」『季刊考古学』第57号、雄山閣出版、1996年、p.41-45。
- 9) 赤沼英男「みらのくの地から中世の鉄をみる」『ふよろひ』Vol.2, No.1、社団法人日本鉄鋼協会、1997年、p.44-51。
- 10) 赤沼英男「上野国分僧寺・尼寺中間地域出土鉄器・鉄塊・鉄滓の金属学的解析」『上野国分僧寺・尼寺中間地域（8）（第二編）』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1992年、p.529-561。
- 11) 赤沼英男「遺物の金属学的解析結果からみた中江田ハツ縄遺跡における鉄器の製作と流通」『中江田ハツ縄遺跡』財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団、1996年、p.246-268。

写 真 图 版



1. 1区3号住居全景（北西から）



2. 同 甕全景（北西から）



3. 同 貯蔵穴全景（南から）



1区3号140



1区3号140



1区3号140



1区3号140



1区3号M1



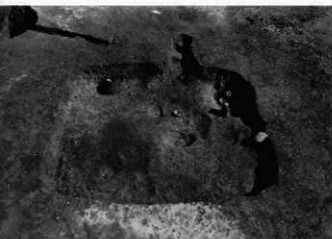
1区3号M2



1区3号M3



4. 同 出土遺物



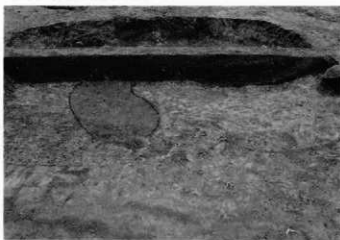
1. 1区4号住居全景（北西から）



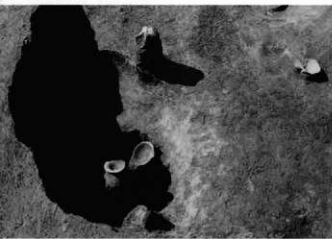
2. 同 床面の状態（北西から）



3. 同 竈全景（北西から）



4. 同 土層断面（北西から）



5. 同 遺物出土状態（1455・1458・南西から）



6. 同 遺物出土状態（1456・南から）



1区4住1456



1区4住1459



1区4住1456



1区4住1457

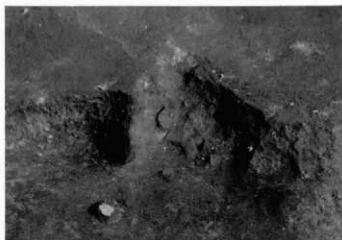


1区4住1454

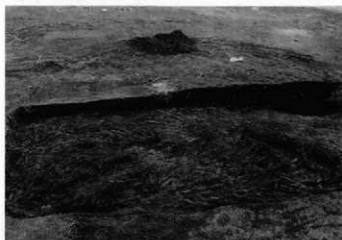
7. 同 出土遺物



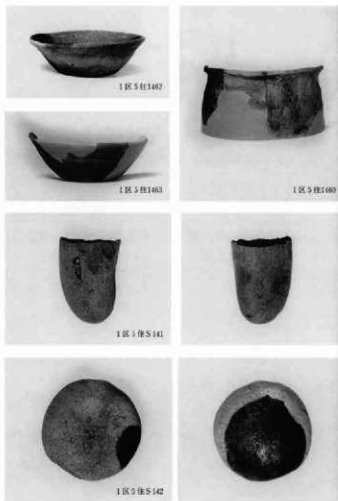
1. 1区5号住居全景（北西から）



2. 同 竈全景（北西から）



3. 同 土層断面（北西から）



4. 同 出土遺物



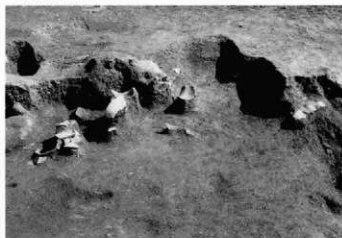
1. 1区9号住居全景(西から)



2. 同 壙全景(西から)



3. 同 土層断面A-A'(西から)



4. 同 甕石胎遺物出土状態(西から)



5. 同 甕遺物出土状態(北西から)



6. 同 貯蔵穴遺物出土状態(南西から)



7. 同 遺物出土状態(1464)



8. 同 遺物出土状態(1467)



1. 1区9号住居遺物出土状態 (1478)



2. 同 遺物出土状態 (1480)



3. 同 遺物出土状態 (1477)



4. 同 遺物出土状態 (1468・1479)



1区9住1468



1区9住1478



1区9住1476



1区9住1485



1区9住1483



1区9住1480



1区9住1484



1区9住1479



1区9住1477



1区9住1475



1区9住1479



1区9住1481



1区9住1467



1区9住1473

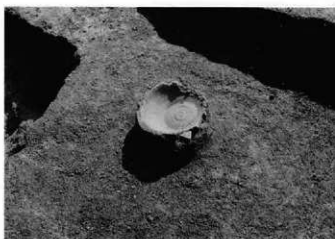
5. 同 出土遺物



1. 1区9号住居出土遺物



1. 1区11号住居全景（北西から）



2. 同 遺物出土状態（1490・北から）



3. 同 遺物出土状態（1489）



1区11住1490



1区11住1490

4. 同 出土遺物



5. 1区12号住居全景（北西から）



1区12住1492



1区12住1494



1区12住1493

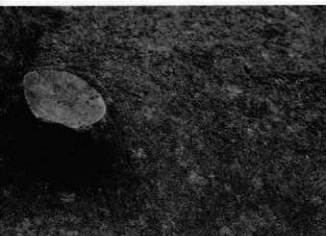
6. 同 出土遺物



7. 1区14号住居全景（西から）



8. 同 遺物出土状態（1495）



1. 1区14号住居遺物出土状態 (1496)



2. 同 遺物出土状態 (1497)



3. 同 遺物出土状態 (1498)



1区14号1497



1区14号1496

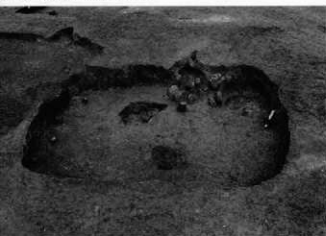


1区14号1498



1区14号1495

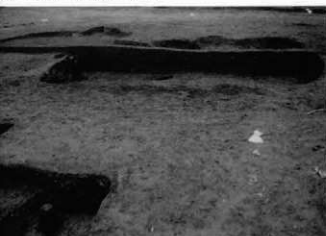
4. 同 出土遺物



5. 1区15号住居全景 (西から)



6. 同 竈全景 (西から)



7. 同 土層断面A-A' (西から)



8. 同 遺物出土状態 (南西から)



1. 1区15号住居遺物出土状態



1区15号S131



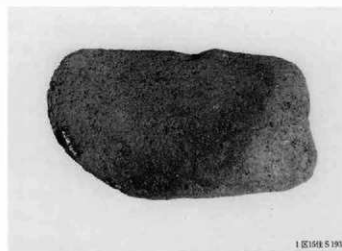
1区15号1903



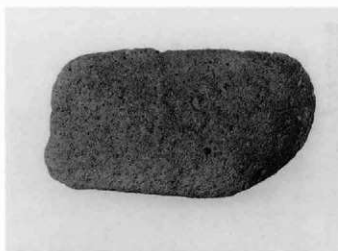
1区15号1904



1区15号S150



1区15号S189



2. 同 出土遺物



3. 1区16号住居全景 (北西から)



4. 同 遺物出土状態 (1506)



5. 同 出土遺物



1 区17・76号住居全景（北西から）



2. 同 土層断面B-B'（南から）



3. 1区17号住居遺物出土状態（西から）



4. 同 遺物出土状態（東から）



5. 同 遺物出土状態（1236・東から）



1. 1区17号住居遺右脇遺物出土状態(西から)



1 区17号S123



1 区17号1228



1 区17号1227



1 区17号1229



1 区17号1222



1 区17号1230



1 区17号1226

2. 同 出土遺物



3. 1区18号住居全景(西から)



4. 同 土層断面A-A'(南から)



1 区18号1507

5. 同 出土遺物



1. 1区28号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



1 K28091513



1 K28091514

3. 同 出土遺物



1 K31091516



1 K31091517



4. 1区31号住居全景 (西から)



6. 同 竈全景 (西から)



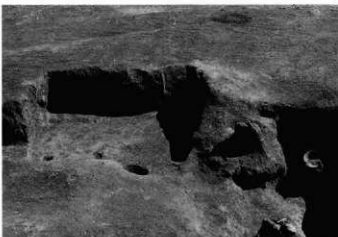
5. 同 出土遺物



7. 1区32号住居全景 (西から)



1. 1区33号住居全景(北西から)



2. 同 離全景(北西から)



3. 同 土層断面 A-A' (南西から)



1 BC30E1254



1 BC30E1256



1 BC30E1246



1 BC30EM 8



1 BC30EM 9



1 BC30EM36



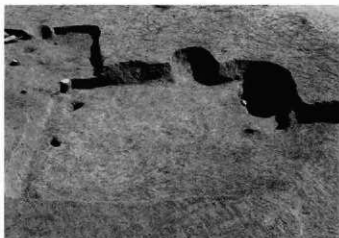
1 BC30EM10



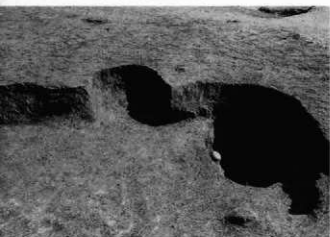
4. 同 出土遺物



1. 1区35・36号住居周辺全景（西から）



2. 1区35号住居全景（西から）



3. 同 竈全景（西から）



4. 同 遺物出土状態（1255）



5. 1区35・36号住居全景（西から）



6. 1区36号住居遺物出土状態（1565・西から）



1区35住1258



1区35住1252



1区35住1254

7. 1区35号住居出土遺物

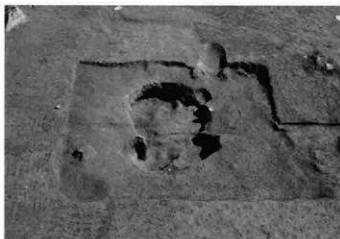


1区36住1566



1区36住1565

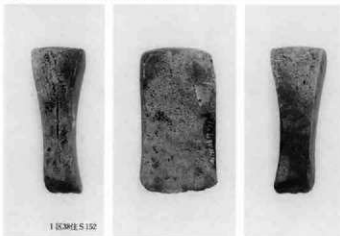
8. 1区36号住居出土遺物



1. 1区38号住居全景（西から）

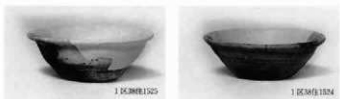


2. 同 竈全景（西から）



183M/S 152

183M/S 153



183M/S 155

183M/S 156

3. 同 出土遺物

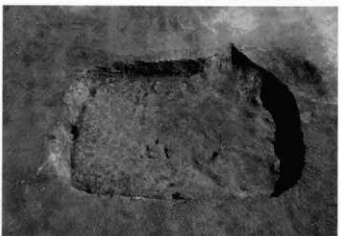


183M/S 157

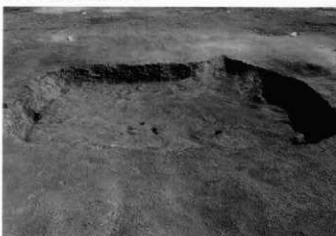
4. 1区39号住居出土遺物



5. 同 竈全景（北西から）



6. 1区45号住居全景（西から）



7. 同 遺物出土状態（西から）



1. 1区45号住居竈全景（北西から）



1区45号154A



1区45号154B



1区45号154C

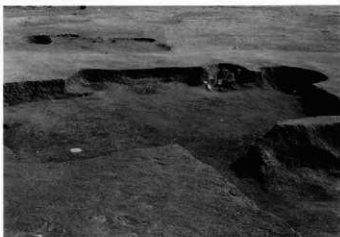


1区45号154D

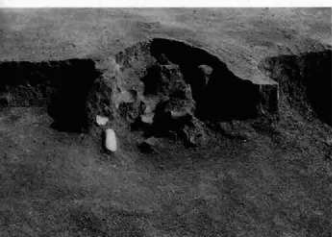
2. 同 出土遺物



3. 1区46号住居全景（北西から）



4. 同 竈全景（北西から）



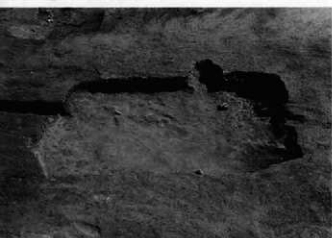
5. 同 竈全景（北西から）



1区46号S134



6. 同 出土遺物



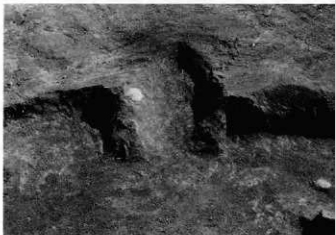
7. 1区53号住居全景（西から）



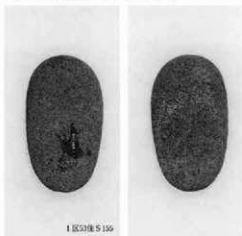
8. 同 竈全景（西から）



1. I区54号住居全景 (北西から)



2. 同 遺全景 (北西から)



3. I区53・54号住居出土遺物



4. I区56号住居全景 (西から)



5. 同 遺全景 (西から)



6. 同 出土遺物



1. 1区59号住居全景 (西から)



3. 1区62号住居全景 (西から)



5. 同 土層断面A-A' (南から)



6. 同 遺物出土状態 (1275・1277)



1 K5901549

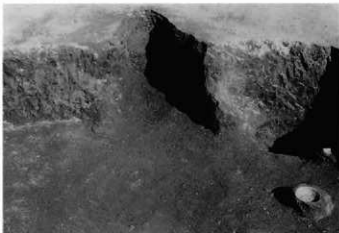


1 K5901547



1 K5901546

2. 同 出土遺物



4. 同 壙全景 (西から)



1 K6201275



1 K6201276



1 K6201277



1 K6201278



1 K6201280



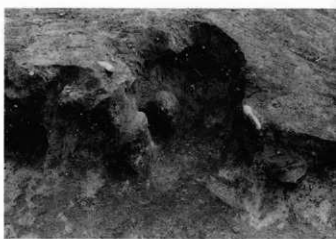
1 K6201280



7. 同 出土遺物



1. 1区67・73号住居全景（西から）



2. 1区67号住居全景（西から）



1区67住1504



1区67住1503



1区67住1505



1区67住1502



1区67住S161



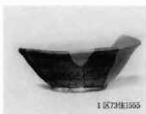
1区67住S162



3. 同 出土遺物



4. 1区73号住居全景（西から）

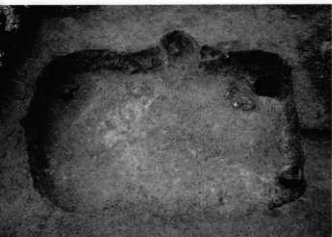


1区73住1505



1区73住1507

5. 同 出土遺物



1. 1区74号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 同 遺物出土状態 (1558・1559)



4. 同 遺物出土状態 (1556・1557)



1 DC74E1359



1 DC74E1357



1 DC74E1358



1 DC74E1356

5. 同 出土遺物



6. 1区調査風景



7. 1区調査風景



1. 1区5号土坑全景(東から)



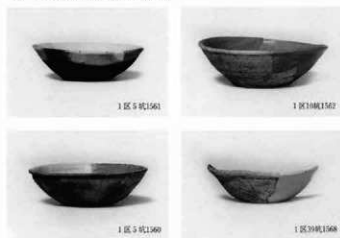
2. 同 土層断面(東から)



3. 1区39号土坑全景(西から)



4. 1区10号土坑(井戸)土層断面(西から)



5. 1区5・10・39号土坑出土遺物



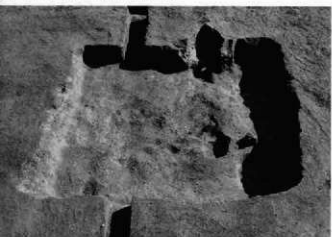
6. 1区51号土坑(井戸)全景(西から)



1. 2区2号住居全景 (南西から)



2. 同 竈全景 (南西から)



3. 2区5号住居全景 (西から)



4. 同 竈全景 (西から)



5. 同 土層断面A-A' (南西から)



2区5住S173



2区5住S164



2区5住S168



2区5住S163



2区5住S166



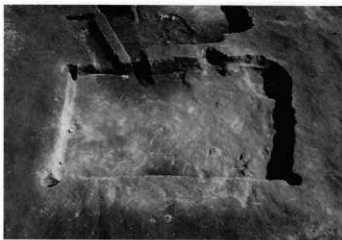
2区5住S167



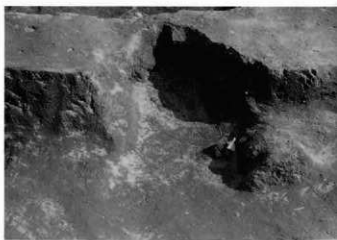
2区5住S160



6. 同 出土遺物



1. 2区8号住居全景(西から)



2. 同 竈全景(西から)



3. 同 遺物出土状態(S169・1577・西から)



4. 同 遺物出土状態(S1575・東から)



2区8住1577



2区8住1580



2区8住1575



2区8住S171



2区8住S170



2区8住S169



5. 同 出土遺物



1. 2区9号住居全景 (西から)



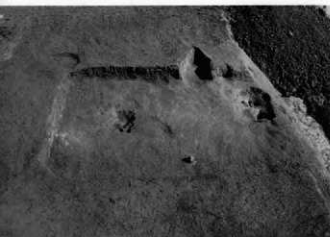
2. 同 窯全景 (西から)



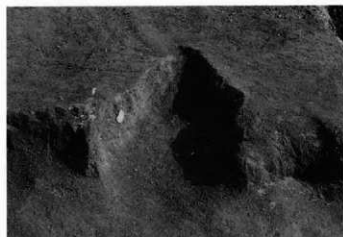
3. 2区10号住居全景 (南西から)



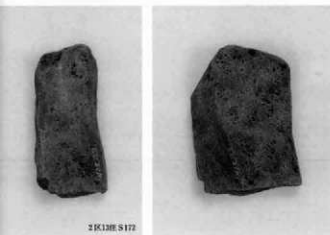
4. 同 出土遺物



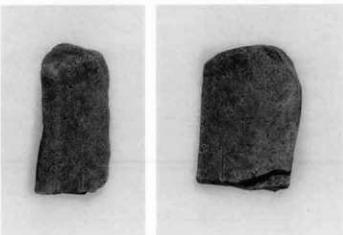
5. 2区13号住居全景 (西から)



6. 同 窯全景 (西から)



7. 同 出土遺物





1. 2区14号住居全景 (西から)



2. 同 覆全景 (西から)



2区14号S105



2区14号S106



2区14号S108



2区14号S107



2区14号S108



2区14号S174



2区14号S173



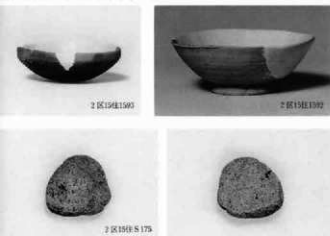
3. 同 出土遺物



1. 2区15号住居全景（西から）



2. 同 遺物出土状態（1592・北東から）



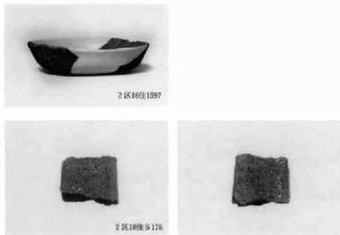
3. 同 出土遺物



4. 2区16号住居全景（東から）



5. 2区18号住居全景（西から）



6. 2区16・18号住居出土遺物



7. 2区21号住居全景（西から）



8. 同 窠全景（西から）



1. 2区25号住居全景 (北西から)



2. 同 竈全景 (北西から)



3. 同 出土遺物



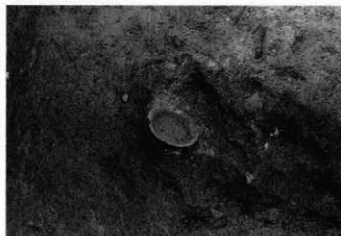
4. 2区27号住居全景 (西から)



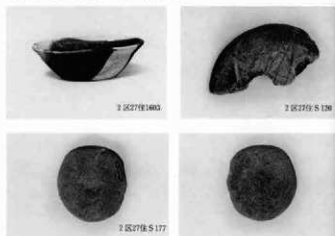
5. 同 竈全景 (西から)



6. 同 土層断面A-A' (西から)



7. 同 遺物出土状態 (1603)



8. 同 出土遺物



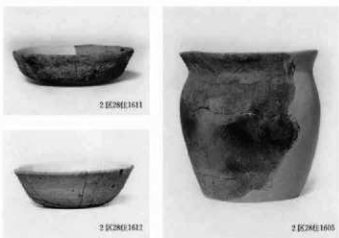
1. 2区28号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（1605・北から）



4. 同 出土遺物



5. 2区29号住居全景（西から）



6. 同 竈全景（西から）



7. 同 遺物出土状態（西から）



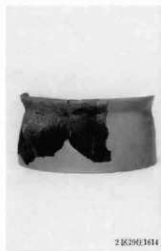
8. 同 遺物出土状態（1613・北から）



1. 2区29号住居遺物出土状態 (南西から)



2区29号1615



2区29号1614



2区29号1613



2区29号1607



2区29号1610



2区29号1606



2区29号1608



2区29号1609



2. 同 出土遺物



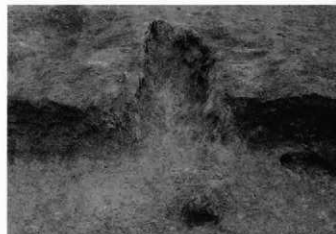
3. 2区35号住居全景 (西から)



4. 同 竈全景 (西から)



5. 2区40号住居全景 (西から)



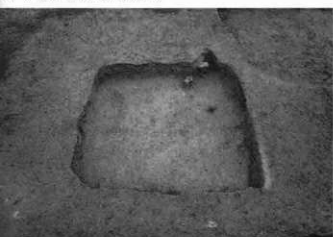
6. 同 竈全景 (西から)



1. 2区42号住居全景（西から）



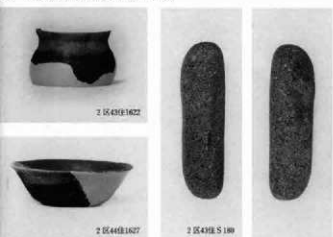
2. 同 竈全景（西から）



3. 2区43号住居全景（北西から）



4. 同 竈全景（北西から）



2区43E1622

2区44E1627

2区43E S 189

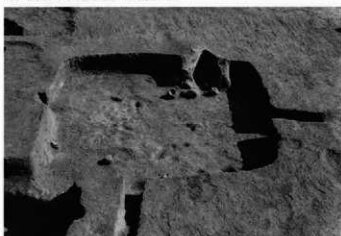
5. 2区43・44号住居出土遺物



6. 2区44号住居全景（北西から）



7. 同 竈全景（北西から）



8. 2区46号住居全景（西から）



1. 2区46号住居全景 (西から)



2. 同 出土遺物



3. 2区51号住居全景 (西から)



4. 同 全景 (西から)



5. 同 出土遺物



1. 2区58号住居全景（西から）



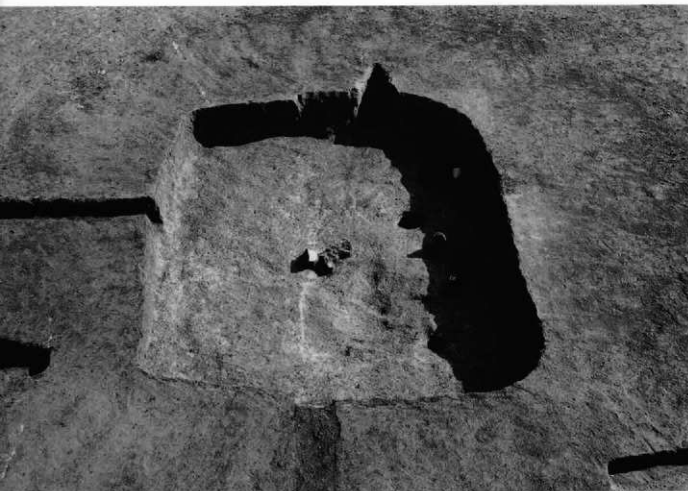
2. 2区61号住居全景（北西から）



3. 同 電全景（北西から）



4. 同 出土遺物



5. 2区66号住居全景（西から）



1. 2区66号住居全景(西から)



2. 同 中央部遺物出土状態(南西から)



3. 同 遺物出土状態(1297・北西から)



4. 同 遺物出土状態(1302・北西から)



2区66E1297



2区66E1298



2区66E1295



2区66E1296

5. 同 出土遺物



6. 2区70号住居全景(西から)



7. 同 遺物全景(西から)



1. 2区71号住居全景(西から)



2. 同 窟全景(西から)



2区71住1450

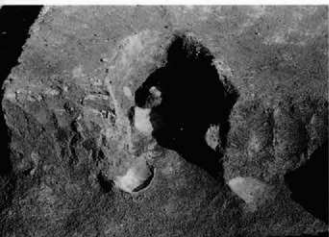


2区72住1451

3. 2区71・72号住居出土遺物



4. 2区72号住居全景(西から)



5. 同 窟全景(西から)



6. 同 遺物出土状態(1651・北西から)



7. 2区74号住居全景(東から)



2区74住1455



2区74住1453

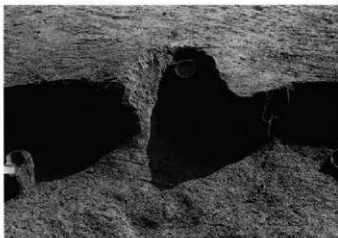


2区74住1454

8. 同 出土遺物



1. 2区75号住居全景 (北西から)



2. 同 竈全景 (北西から)



3. 同 遺物出土状態 (1306・1309・北西から)



4. 同 遺物出土状態 (1307・南から)



5. 同 出土遺物



6. 2区76号住居全景 (西から)



7. 同 竈全景 (西から)



1. 2区76号住居遺物出土状態（北西から）



2. 同 遺物出土状態（1660・西から）



3. 同 遺物出土状態（1659）



2 区76E1661



2 区76E1662

4. 同 出土遺物



5. 2区80号住居全景（北西から）



6. 同 竈全景（北西から）



2 区80E1670



1 区80E1671



2 区80E1669



2 区80E1668

7. 同 出土遺物



1. 2区86号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 同 遺物出土状態 (1676・南東から)



4. 同 遺物出土状態 (1691・北西から)



2区86E1691



2区86E1678



2区86E1675

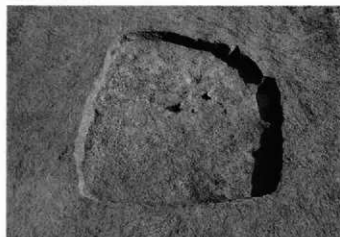


2区86E1672



2区86E1677

5. 同 出土遺物



6. 2区87号住居全景 (西から)



7. 同 遺物出土状態 (1680)



2区87E1680

8. 同 出土遺物



1. 2区92号住居全景（西から）



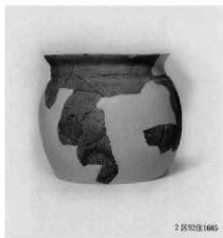
2. 同 竈全景（西から）



3. 同 遺物出土状態（1688）



4. 同 出土遺物



2 1692E1685



5. 2区93号住居全景（西から）



6. 同 外周ピット全景（西から）



7. 同 竈全景（西から）



8. 同 出土遺物

2 1692E1694



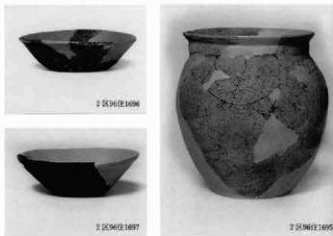
1. 2区96号住居全景 (北西から)



2. 同 竈全景 (北西から)



3. 同 遺物出土状態 (1697・南西から)



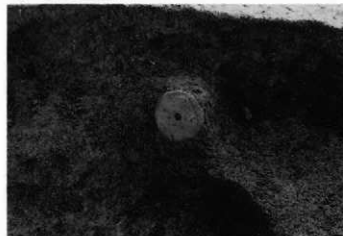
4. 同 出土遺物



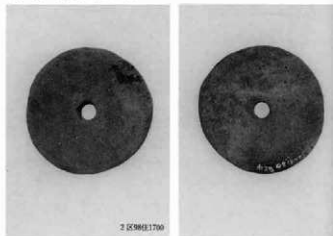
5. 2区98号住居全景 (西から)



6. 同 竈全景 (西から)



7. 同 遺物出土状態 (1700・北西から)



8. 同 出土遺物



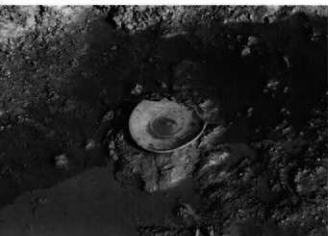
1. 2区99号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 同 遺物出土状態 (1710・南西から)



4. 同 遺物出土状態 (1711・南西から)



5. 同 遺物出土状態 (1708)



1. 2区99号住居遺物出土状況 (1707・北から)



2. 同 遺物出土状況 (1706・北から)



2 IS99E1711



2 IS99E1707



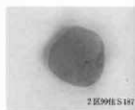
2 IS99E1708



2 IS99E1705



2 IS99E S 186



2 IS99E S 187

3. 同 出土遺物



4. 2区100号住居全景 (北西から)



5. 同 竈全景 (北西から)



1. 2区100号住居遺物出土状態 (1717)



2. 同 貯蔵穴全景 (北から)



2区100号S1720



2区100号S1717



2区100号S1722



2区100号S1718



2区100号S189



2区100号S190



2区100号S188



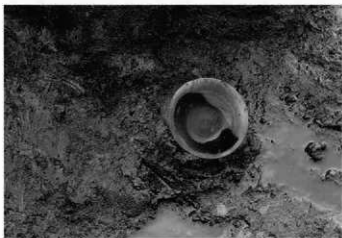
3. 同 出土遺物



4. 2区101号住居全景 (北から)



5. 同 壺全景 (西から)



1. 2区101号住居遺物出土状態 (1725)



2. 同 遺物出土状態 (1724)



2区101住1725

2区101住1724



2区103住1728

2区1号穴1733

3. 2区101・103号住居・1号整穴出土遺物



4. 2区103号住居全景 (南から)



5. 同 壺全景 (南から)



6. 2区1号整穴全景 (北西から)



7. 2区調査風景



8. 2区調査風景



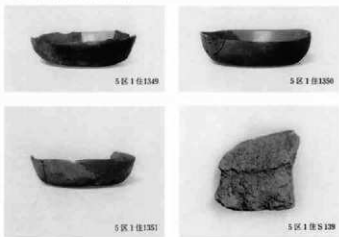
1. 5区1号住居全景（西から）



2. 同 竈全景（西から）



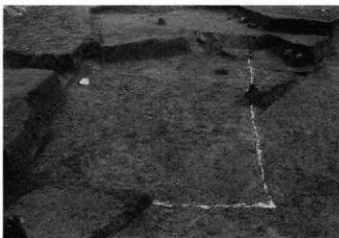
3. 同 遺物出土状態（北西から）



4. 同 出土遺物



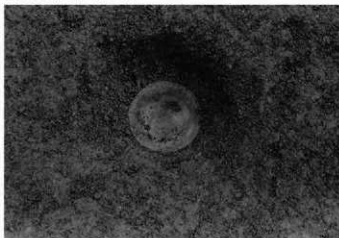
5. 5区6号住居全景（西から）



6. 同 礎全景（西から）



7. 同 竈全景（西から）



8. 同 遺物出土状態（1737）



1. 5区6号住居遺物出土状態 (1738)



5区6住1739



5区6住1737



5区6住1738

2. 同 出土遺物



3. 5区9号住居全景 (西から)



4. 同 壺全景 (西から)



5区9住1741



5区9住1744



5区9住1743



5区9住1742



5区9住1740

5. 同 出土遺物



6. 5区11号住居全景 (西から)



5区11住1747



5区11住1748

7. 同 出土遺物



1. 6区3号住居全景(西から)



2. 同 竈全景(西から)



3. 同 南東隅遺物出土状態(北西から)



4. 同 遺物出土状態(1751・北から)



5. 同 遺物出土状態(1755・北東から)



6区3住1755



6区3住1757



6区3住1756



6区3住1753



6区3住1732



6区3住1751



6区3住1750



6. 同 遺物出土状態(1758)

7. 同 出土遺物



1. 6区8号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



6区8住1771



6区8住1768



6区8住1766



6区8住1769



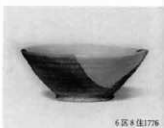
6区8住1767



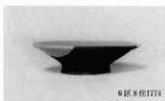
6区8住1772



6区8住1775



6区8住1765



6区8住1774



6区8住1778



6区8住1760



6区8住1782



6区8住1773



6区8住1779



6区8住1781



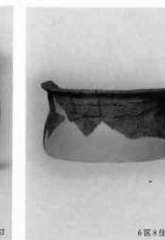
6区8住1745



6区8住1769



6区8住1762



6区8住1763



6区8住1764



6区8住1765

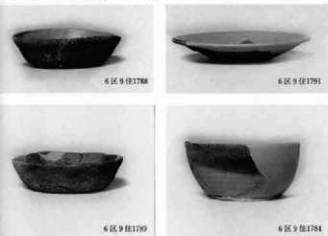
3. 同 出土遺物



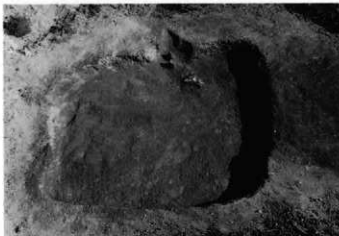
1. 6区9号住居全景 (西から)



2. 同 竈全景 (西から)



3. 同 出土遺物



4. 6区10号住居全景 (西から)



5. 同 竈全景 (西から)



6. 同 出土遺物



7. 6区15号住居全景 (西から)



8. 同 竈全景 (西から)



1. 7区1号住居全景 (北西から)



2. 同 竈全景 (北西から)



7区1出1900



7区1出1797



7区1出1799



4. 7区5号住居全景 (北西から)

3. 同 出土遺物



7区3出1807



7区5出1805



7区5出1804



7区5出1806

5. 同 出土遺物



6. 同 竈全景 (北西から)



7. 7区9号住居全景 (北西から)



1. 8区1・14号住居全景 (西から)



2. 8区1号住居全景 (西から)



3. 同 遺物出土状態



4. 同 遺物出土状態



5. 同 遺物出土状態



6. 同 遺物出土状態



8区1住1816



8区1住1912



8区1住2013



8区1住1814

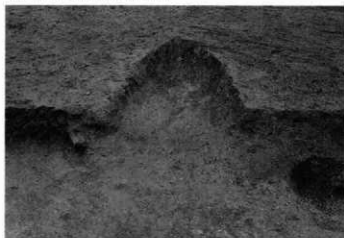
7. 同 出土遺物



1. 8区2号住居全景 (西から)



2. 8区3号住居全景 (西から)



3. 同 窟全景 (西から)



4. 同 遺物出土状態 (1822・1824・南から)



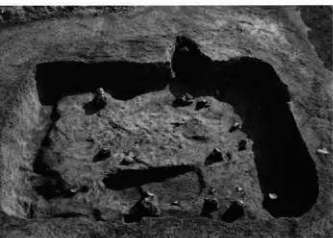
5. 8区8号住居全景 (西から)



6. 同 窟全景 (西から)



7. 同 出土遺物



1. 8区9号住居全景（北西から）



2. 同 竈全景（北西から）



3. 同 土層断面A-A'（南西から）



4. 同 遺物出土状態（1843・北東から）



8区9住1841



8区9住1843



8区9住1846



8区9住1843



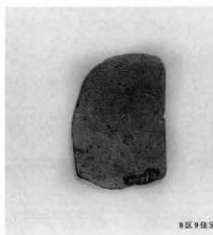
8区9住1830



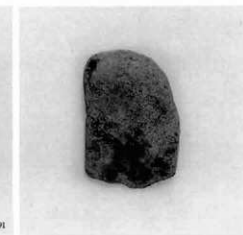
8区9住1835



5. 同 出土遺物



8区9住S191





1. 8区10号住居全景（北西から）



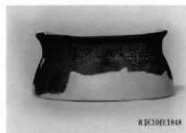
2. 同 竈全景（北西から）



3. 同 竈前遺物出土状態（北西から）

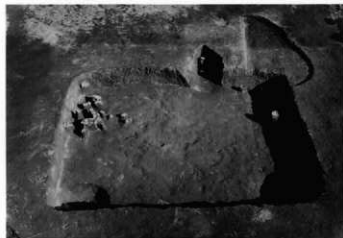


8区10号1801

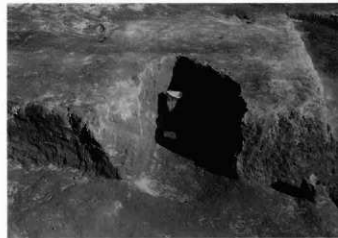


8区10号1804

4. 同 出土遺物



5. 8区12号住居全景（西から）



6. 同 竈全景（西から）



7. 同 遺物出土状態（1392・南西から）



8区12号1392

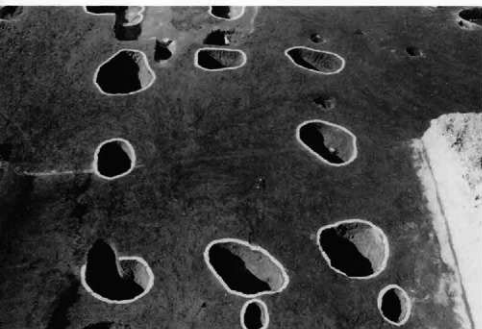


8区12号1394

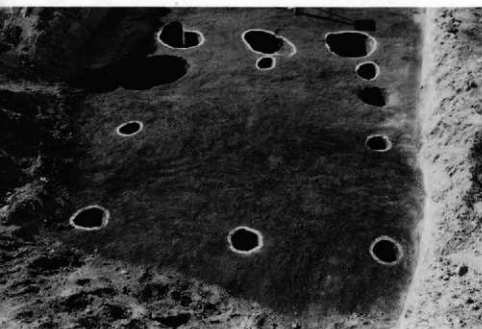
8. 同 出土遺物



1. 8区2号掘立柱建物跡全景(南から)



2. 8区3号掘立柱建物跡全景(東から)



3. 8区4号掘立柱建物跡全景(東から)



1. 9区1号住居全景 (西から)



2. 同 壙全景 (西から)



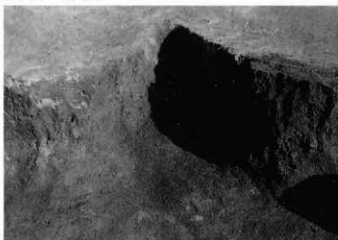
3. 9区2号住居全景 (西から)



4. 同 壙全景 (西から)



5. 9区4号住居全景 (西から)



6. 同 壙全景 (西から)



7. 9区5号住居全景 (西から)



8. 9区6号住居壙全景 (西から)



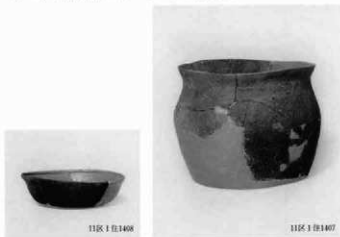
1. II区1号住居全景 (西から)



2. 同 土層断面A-A'・B-B' (西から)



3. 同 竈全景 (西から)



4. 同 出土遺物



5. II区2号住居全景 (西から)



1. 11区2号住居窟全景（西から）



2. 同 遺物出土状態（1410・1411・南西から）



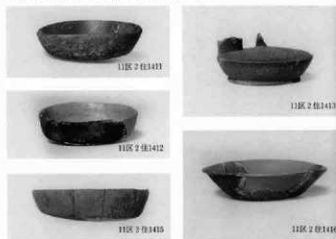
3. 同 遺物出土状態（1413・西から）



4. 同 遺物出土状態（1414・西から）



5. 同 遺物出土状態（北から）



6. 同 出土遺物



7. 11区の台地

報告書抄録

ふりがな	あらとかみのぼういせきIII
書名	荒砥上ノ坊遺跡III
副書名	歴史時代後半期の調査
巻次	(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第223集
シリーズ名	県営圃場整備事業荒砥北部地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	
編著者名	小島敦子・赤沼英男
編集機関	財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
所在地	〒377 群馬県勢多郡北橋村大字下箱田784-2 ☎0279-52-2511
発行年月日	1997年3月25日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 '''	東経 '''	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡					
荒砥上ノ坊	群馬県前橋市二之宮町・荒子町	102016	10005 -00061	36度 22分 10秒	137度 11分 20秒	19820701～ 1983012	42000	県営圃場整備事業荒砥北部地区にともなう事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
荒砥上ノ坊遺跡	集落遺跡	平安時代 後期	竪穴住居 100軒 土坑 4基 井戸 2基	土師器・須恵器 灰釉陶器・叢石 砥石・棒状礫 鉄製品・紡錘車 馬具	赤城山南麓地域の農耕集落遺跡。弥生時代末から集落が定着し、開析谷の水田耕作が始まった。古墳時代以降、歴史時代にも継続して集落が営まれた。9世紀後半の住居からは、線刻文字のある紡錘車が3個出土している。

群馬県埋蔵文化財調査事業団
発掘調査報告第223集

荒砥上ノ坊遺跡Ⅲ
歴史時代後半期の調査
〈本文・図版編〉

昭和57年度県営團地整備事業群馬県北部
地区に係る埋蔵文化財発掘調査報告書

平成9年3月20日 印刷
平成9年3月25日 発行

編集・発行／群馬県教育委員会
〒371 前橋市大手町1丁目1番1号
電話 (027) 223-1111(代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団
〒377 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2
電話 (0279) 52-2511(代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社